

2025 年度

青山学院大学審査学位論文

指導教員 高木 光太郎 教授

ワールドカフェにおける知識創発のメカニズムの解明
－対話における引用の機能－

Clarifying the mechanism of knowledge emergence in World
Cafés: The function of quotation in dialogue

青山学院大学大学院

社会情報学研究科

社会情報学専攻

田坂 逸朗

目 次

序 論	5
I 問題と目的	15
1.1 ワールドカフェの概要	16
1.2 ワールドカフェの普及の経緯とプログラム開発の背景	17
1.3 他花受粉概念	21
1.4 ワールドカフェ研究の動向	22
1.4.1 ワールドカフェの目的による弁別	23
1.4.2 学問領野, 対象フィールド	24
1.4.3 研究手法, そして, 相互行為分析は用いられてきたか	25
1.4.4 他花受粉は研究されてきたか	26
1.5 ワールドカフェ研究以外の関連研究にみるワールドカフェ	27
1.5.1 ワールドカフェ研究以外の関連研究の学問領野, 対象フィールド	27
1.5.2 ワールドカフェ研究以外の関連研究の研究手法	30
1.5.3 先行研究の概観から見えてきたこと	31
1.6 ワールドカフェへの批判	32
1.6.1 研究上のワールドカフェ批判	32
1.6.2 実践者からのワールドカフェ批判	33
1.7 先行研究の限界～逸話批判を超えて	34
II 新たなワールドカフェ研究へ～他花受粉と知識創発	36
2.1 ワールドカフェのプログラム	36
2.2 知識創発としてのワールドカフェ	39
2.3 「相互行為」としての他花受粉会話	42
2.4 本研究の枠組み	44
2.5 研究 1 のねらい～談話分析とオープンコーディング	52
2.6 研究 2 のねらい～Bakhtin の引用概念, および「創造的理解」と創発	56
III 調査フィールドと方法	60
3.1 2つの調査フィールド	60
3.2 調査フィールド 1: 北広島町・田原温泉再建ワールドカフェ	60

3.2.1	会合の形式とプログラム.....	61
3.2.2	カフェエチケット.....	63
3.2.3	たいせつな質問.....	64
3.3	調査フィールド2：いわき市・対話と学習のワールドカフェ.....	64
3.3.1	会合の形式とプログラム.....	65
3.3.2	カフェエチケット.....	67
3.3.3	たいせつな質問.....	67
3.4	データ収集とトランスクリプト.....	67
3.5	倫理的配慮.....	68
IV	研究1：他花受粉がもたらす変化.....	69
4.1	ラウンド進行と全体的な傾向.....	69
4.1.1	発話ターンの認定.....	69
4.1.2	ラウンド進行と全体的な発話数の傾向.....	70
4.2	分析1：発話のカテゴリの全体的な変化.....	71
4.2.1	ワールドカフェ分析のための発話カテゴリ.....	71
4.2.2	発話カテゴリに関する先行研究とワールドカフェ分析への特化.....	72
4.2.3	発話カテゴリの量的変化.....	79
4.3	分析2：応答パターンの変化.....	80
4.3.1	第1ラウンドの応答パターン.....	81
4.3.2	第4ラウンドの応答パターン.....	88
4.4	分析3：途中ラウンドに特徴的な発話カテゴリと応答パターン.....	94
4.4.1	前のテーブルでの体験を提供する発話.....	95
4.4.2	情報を訴求する発話.....	100
4.4.3	体験を提供する発話からその形跡を遡って追う.....	101
4.4.4	N以外の事例.....	111
4.5	分析4：体験を提供する発話が応答与える影響.....	116
4.6	分析5：体験提供の前置表現が曖昧になること.....	124
4.7	小 括.....	129
4.8	検証を試みる：いわき市・対話と学習のワールドカフェ.....	131
4.9	結 論.....	137

V 研究2：引用がもたらすもの	141
5.1 対話における引用～他者の言葉の伝達の「複数化」	142
5.2 分析1：引用の発話の形式	142
5.2.1 主題化，評価，要約，列挙.....	145
5.2.2 変形されて伝達された発話内容とその応答	149
5.2.3 引用の形式の拡張－体験的引用タイプ	150
5.2.4 単数引用，複数報告引用，半開放引用	152
5.3 分析2：宛名の曖昧化.....	160
5.4 「引用のモザイク」と宛名の曖昧化に関する小括	161
5.5 分析3：「創造的理解」と知識創発.....	163
5.6 結 論	170
VI 総合考察	174
6.1 「生きた引用」としての半開放引用	177
6.2 全員が媒介者である他花受粉的知識創発.....	179
6.3 即興の足場かけと「瞬間的な親近感」	181
6.4 「集合的な発見」とアコモデーション	182
6.5 「田原温泉再生を考える会」のその後	183
6.6 ワールドカフェ研究への示唆.....	185
6.7 ワールドカフェ実践への示唆.....	186
6.8 課題と展望	187
文 献	190

初出一覧

本論文を構成する諸章のうち、第Ⅳ・Ⅴ章は学術論文誌、および大学紀要に掲載された内容に加筆・修正を加えたものである。また、学会の大会で発表した内容についてもこれを一部援用した。

第Ⅳ章

田坂 逸朗 (2025). ワールドカフェにおける“席替え”を介した対話過程の変容
認知科学, 32(2), 212-230.

第Ⅴ章

田坂 逸朗 (2023). Bakhtin の対話理論における引用概念の実証的研究への援用
青山社会情報研究, 15, 21-35.

学会大会発表

田坂 逸朗 (2021, October 24). ワールドカフェの席替えが対話過程に与える
影響に関する研究——発話の傾向の変化に着目して [口頭発表] 日本
質的心理学会第 18 回大会 with ソウル 日本質的心理学会

田坂 逸朗 (2022, September 10). ワールドカフェの対話過程における“席替え”
の影響に関する研究 [オーガナイズド・セッション] 日本認知科学会
第 39 回大会 日本認知科学会

序 論

本研究の目的は、ワールドカフェにおける知識創発のメカニズムを実証的に記述し、あわせて、相互引用（互いの言葉の用いあい）が参加者間の創造的理解に与える影響を明らかにすることである。

ワールドカフェは、会話を中心とする会合のプログラムの一つである。世界各国のワールドカフェ・コミュニティによってその普及が図られており（Brown, 2015）、Brown（2015）によれば、2015 年当時の推計では 600 超とされる。組織開発領域のシンポジウムにおいて Brown & Isaacs（2005 香取・川口訳 2007）が 1995 年に対話セッションとして提示して以来、創造活動、教育、まちづくり、市民共同、公共政策形成などへと援用範囲が拡大した。現在では、ワールドカフェそのものを開催の意図とする“ワークショップ”としても位置づけられている。

近年、教育領域におけるワールドカフェの普及が進展しており、2022 年以降、わが国の高等学校国語の教科書に採用例がみられる。これらの採用は、従来のアクティブラーニング推奨としての「教育ワールドカフェ」とは異なり、組織運営や社会課題の解決の手法の 1 つとして対話の重要性を明示する記述を伴う点に特徴がある。この動向は普及拡大の一指標と位置づけられる。

世界で最初のワールドカフェ・セッションについては、Brown & Isaacs の著作『The World Café : Shaping our futures through conversations that matter』（2005 香取・川口訳 2007）に詳しい。いわば偶然的に生まれた試みであったという。「ホームステッド・カフェ」と名付けられたそのセッション（単位討議）は「知的資本のパイオニアたち（Intellectual Capital Pioneers）」（Global Leadership Network 主催）というシンポジウムの 2 日目のプログラム枠で、当初は中庭でのダイアログのセッションが予定されていた。しかし激しい雨のため会場は複数の室に分散し、個人宅であったことから会議机は用意できず、小さなカフェテーブルにフリップチャート用の白い紙をテーブルクロスとして即席で敷いた。テーブルごとの会話は弾み、相当時間が経過したとき、参加者の 1 人がこう提案したという。「ほかのテーブルでどんな会話が行われているか知りたい。1 人がホストとしてテーブルに残り、ほかのメンバーは別のテーブルに移動してみてもどうか。移動の際に、元のテーブルで生まれたアイデアの種を持ち込み、つなぎ合わせよう」。この呼びかけが、後にワールドカフェと呼ばれるデザインへと結晶した。著者らはこの経験を「瞬間的な親近感と集合的没頭の喚起」、「生きた知識の出現」に資する

「他花受粉 (cross-pollination)」等の概念で要約し、「カフェ的会話」が協働的な思考を経て深い洞察へと至る集団思考のデザインを提示した (Brown & Isaacs, 2005 香取・川口訳 2007).

この 24 名のシンポジウムでの出来事は、その後、マサチューセッツ工科大学組織学習センター (Center for Organizational Learning) を中心に、組織開発 (OD: Organization Development) に関する会合や「Reading Group Café」と呼ばれる読書会、「Retreat」とよばれる合宿形式の対話の場など、あるいは各国の公共セクター等を通じて広く紹介され導入事例が拡大し、国際的な普及が進展した。1990 年代前後の米国では、Appreciative Inquiry や Open Space Technology など、のちにホールシステム・アプローチと呼ばれる参加型の会議手法が台頭する中で、ワールドカフェは実施手順が比較的簡便で展開しやすい形式であったことから、実務の場で採用が広がったと報告されている (Prewitt, 2011 など).

この序論の前段では、次の論点を整理する。第 1 に、普及初期に広く紹介された定義、第 2 に、実践者による捉え方 (筆者の実践経験を含む)、第 3 に、プログラム開発時に示された要点、第 4 に、「他花受粉」概念および「創発 (emergence)」というタームの用法、第 5 に、他花受粉のしくみとしての「会話の途中でメンバーを入れ替える」とことと関連するナレッジ・ブローカーの概念である。これらを踏まえ、本研究の設計 (研究課題・方法) を定める。

まず、普及初期に提示された定義を確認する。当時、ワールドカフェは「重要な課題について協働的に考える能力を高める革新的な対話手法」と位置づけられ、「深い洞察に基づく創造性と共有知識を引き出す革新的な方法」などの説明が広く流布した。強調点は、組織における非公式な会話ネットワークの重要性、社会的学習の可視化、持続的な価値創出である。その文脈では、建設的な対話、新たな人間関係の構築、大規模な集合的学習、知識創造の触発といったタームが頻繁に用いられた。これらの叙述は理論的背景の提示には資するが、概念的説明にとどまる傾向があり、実証的根拠との対応は十分でなかった。当時は、価値観の再発見や未来創造を強調する意図のもとで対話を重視する潮流が形成され、従来型会議からの移行が志向された。筆者もこの動向に関与していた。

ワールドカフェの実践者はこれをどのように捉えているのか。ここでは筆者の実践経験を例に述べる。筆者もまた、2006 年以来ファシリテーターとしてワールドカフェに取り組んできた実践者の一人である。2006 年は、『ワールド・カフェ カフェ的会話が未来を創る』の訳者・香取一昭氏と特定非営利活動法人日本ファシリテーション協会に

よってわが国にワールドカフェが導入された節目の年であった。当時はビジネスパーソンの勉強会が盛んで、組織開発はもとより「開かれた組織」やオープンイノベーションの文脈とも相まって、その中で「対話の普及」が重要テーマ化した。こうした潮流の中で、組織改革のファシリテーターたちがワールドカフェのファシリテーターも担う流れを生んでいく。筆者においてもワールドカフェのセッションの企画や実施、創設や援用の依頼が増加した。

たとえば、福岡市の市民参加事業「アジアのリーダー都市・FUKUOKA！ プロジェクト」（福岡市，2011）では、市民対話のプロデューサーを務め、市の基本構想および総合計画策定に先立つ市民対話の場として 109 回のワールドカフェを主管し、のべ約 2600 名の参加者とともに 25 年後の市の姿を構想した。東日本大震災復興支援財団の複数の事業においてもワールドカフェを主管し、東日本大震災被災者（避難者）の意向を調査し、支援者との対話から有効な施策を立案する足がかりを得、さらに支援先の団体において要請に基づくワールドカフェのファシリテーターを務めた（2012-2025）。注目すべきは、意向調査に呼びかけられた出席者たちがその臨時の場での出会いを契機にワールドカフェを主催する団体を自発的に立ち上げ、現在も活動を継続している点である。民間セクターでも、電力事業者の企業グループの組織開発、鉄道事業者の企業グループのビジョン策定、酒類製造業者のビジョン浸透の大規模セッション、OA 機器製造業者の顧客との交流セッション等、多数のワールドカフェを実践してきた。筆者が担ってきた件数は、2025 年現在で 1200 を超える。

普及初期の定義にみられる「革新的な対話手法」「社会的学習」「価値観の再発見」といった語感、筆者の経験における実感とおおむね合致する。その実感は一樣ではないが共通して観察されるワールドカフェの特徴といってもよいと考える。たとえば、実践経験との整合として、次の観察的所見が得られる。（1）参加者は自己主張の相対化を経て、主題に関する多様な見方を受容する傾向を示す。（2）異なるセクターの参加者が混在する場でも、セッション全体を単一の集団として捉える志向が強まる。（3）シンプルなアイデアであっても採用されやすい状況が形成される。これらは合意形成の素地に関わる現象として解釈できる。この実感からは確かにワールドカフェが「重要な課題について協働的に考える能力を高める革新的な対話手法」であり得ること、（テーブルごとには）議事録を取ることをしないという「非公式な会話ネットワーク」の性質が奏功した可能性、「新たな人間関係」が構築や「社会的学習」の可視化が生起した可能性が示唆されるだろう。

少なくとも実践者の実感としては、これらの初期の定義は一定程度裏付けられる。確

かに福岡市「アジアのリーダー都市・FUKUOKA！プロジェクト」の一連のワールドカフェは「価値観の再発見」に資する側面を示し、東日本大震災復興支援財団の複数のワールドカフェは「未来創造」の契機となり、電力事業者や鉄道事業者、酒類製造業者の大規模セッションは「従来型の会議手法からの移行」を後押ししたと考えられる。実践者の実感からはそのような意義を感じたと導出することはできるだろう。ただしあくまで以上は実践者としての観察に基づく仮説であり、実証的検証を要する。実際の相互行為データに基づく検討は不足している。本研究は、ワールドカフェの実践の会話データに基づいてこの点を検証する。

次に、ワールドカフェのプログラム開発者の視点からの位置づけを確認する。本稿では、ワールドカフェが個人の単独思考や通常の会議における集団検討とは異なる実践形態であると仮定し、Brown（1997）が言及する3点（形式知、会話、「学習する組織（Learning Organization）」）を整理する。

形式知について、Brown（1997）は次のように述べる。「ワールドカフェにおける会話のプロセスは、形式知が社会化と内面化を通じて暗黙知へと変換されていく過程であり、これは Nonaka & Takeuchi（1994）が SECI モデルとして描いたプロセスに類似している」と述べている。SECI モデルは知識創造を促す枠組みであり、共同化（Socialization）／表出化（Externalization）／連結化（Combination）／内面化（Internalization）という4つのモードが循環するとされる。その循環を支えるものとして「場（Ba）」の設計が重要視される。「場」は対話の場、実践の場、仮想の場など複層的に設定される（野中・今野, 1998）。Brown（1997）は、とりわけ「知識の言語化」としての表出化に焦点を当てるべきだと強調する。

会話（conversation）については、Brown（1997）は次のように位置づけている。「会話は、人間がともに思考し、意味を生み出すための中核的なプロセスである。それは、暗黙のものを形式知へと転換し、含意を共有可能なものにする媒体である」。個々の営為により、「会話」を通じて暗黙知が形式知、さらに対話的性質によって再び暗黙知へ内化される循環が、ワールドカフェの1つのセッション内部でも生起し得る。

「学習する組織」については、ワールドカフェのアプローチが組織学習の知見に根ざすことが指摘される。Senge らの業績、すなわち組織を絶えず刷新し続ける生きたシステム（living system）として捉える立場から示唆を受けているという。ここでは、ワールドカフェは概念としての「学習する組織」を「実践」する手段として位置づけられる。

これらの Brown（1997）の議論を踏まえると、ワールドカフェは次のように位置づけることができる。すなわち、ワールドカフェとは、ある集団において「個人が単独でア

アイデアを練る」こととも、「会議などの場で集団的にアイデアを検討する」こととも異なる第三の実践形態である。それは、「非公式な」会話のネットワークを通じて、暗黙知が一時的に形式知として外化され、さらにそのネットワークの「対話的」な性質によって再び暗黙知へと内化されていく過程を特徴とする。加えて、このようなワールドカフェの実践は、組織（集団）を絶えず刷新し続ける「生きたシステム」として捉える「学習する組織」の理念を具現化する手段ともなる。

さらに、Brown & Isaacs (2005 香取・川口訳 2007)は、この「非公式なネットワーク」や「形式知を媒介として暗黙知が再び暗黙知へと変容する共創過程」、「生きたシステムとしての実践」といった現象を可能にする鍵概念として、「他花受粉」という比喻表現を提示している。

「他花受粉」を Brown & Isaacs (2005 香取・川口訳 2007)は、「異なる視点のつながりがもつ多様性と密度を意図的に強めることにより、生体システムがもつダイナミズムを活用し、創発を引き起こす」こととしている。そして、「ワールドカフェにおけるパターンで強調されているのは（中略）、双方向で行われる会話のラウンドごとに、参加者を文字通り移動させること」、すなわち「他のテーブルへの移動(move to other tables)」という手段であると強調する。実践知見としても、香取・大川（2011）は、「メンバーを変えながらダイアログを進めていくところにワールド・カフェの最大の特徴がある」と述べている。続けて、「各テーブルでの会話から生まれたアイデアが相互につながり関連づけられて新しいアイデアを生み出していく」とも述べている。すなわちワールドカフェは、会話の途中でメンバーを入れ替える設計が、異なる視点の接続を通じて創発に寄与するという理解である。

本稿では「他花受粉」を Brown & Isaacs (2005 香取・川口訳 2007)と同様に、比喻として用いるとともに、分析上は、メンバー入れ替え（席替え）を介して前のテーブルの談話要素（トピック、語句、評価、語りの引用）が持ち込まれ、新しいテーブルで持続・再文脈化される過程を操作的に指すこととする。原義（植物学）では他花受粉は、異個体間の受粉を指し、多様性の増大や媒介の必要性などを含意するが、本稿では媒介（席替え）と多様性の再結合に対応する側面に限定して比喻的に参照する。なお、本稿の分析では、席替え直後の発話の連鎖における引用の用いられ方、語句の再使用、トピックの再結合、および指示詞や主語の置換を主要指標として観察する。

Brown & Isaacs (2005 香取・川口訳 2007)は、行為としての他花受粉が「創発を引き起こす」と述べる。この点は本研究にとって重要である。本研究はワールドカフェ研究に位置づくが、他花受粉の論述に「創発」というタームが用いられている以上、創発概

念の整理は不可欠である。ここでいう創発は、まず Brown らの組織開発領域における用法を念頭に置く。ただし、「行為が創発を引き起こす」という観点は、認知科学におけるアプローチに照らしても、「他花受粉」分析の有効な手がかりとなる。

創発は認知科学において多面的に論じられてきた。三宅 (1994) は、創発を「個人にはない知的機能が集団の相互作用から生まれること」とであると端的に定義する。関連領域として、分散認知、集団による創造プロセス、集合知、知識生成などがあり、いずれも本稿でいう「他花受粉」に直接関連する。分散認知では、Hutchins (1995) が船舶航行の事例分析から、集団活動の中で個々人からは予測できない知的構造や手続きが生まれ、それが文化的実践として定着し、再び個人の技能として内面化される循環を指摘する。集団創造では、Sawyer (2009) が即興劇のグループ創作を対象フィールドとした研究で、メンバー誰一人も最終成果を想定していなかったときにこそ集団対話から一貫した物語や創造的アイデアが生まれることを示し、創造性を個人内部の閃きではなく「分散した創造性 (distributed creativity)」としての「協同的創発 (collaborative emergence)」と捉える。さらに社会的認知の観点から、鈴木 (2023) は、「知識は創発される」とし、「還元不能性」と「意図の不在」を要件として挙げる。とくに「意図の不在」に関しては「中枢の命令によらない要素同士の相互作用の集積によって、全体として特異なシステムが生み出される」ことが鍵であるとしている。

ワールドカフェにおける他花受粉の考え方は、これら認知科学の創発概念と通底する。「異なる視点が相互に関連づけられて」創発が生じうるという理解の背後には、「会話の途中でメンバーを入れ替えること」、すなわち「席替え」がある。席替えは、「中枢の命令によらない要素同士の相互作用の集積」を促し、かつその「相互作用」において「媒介者 (移動する成員)」が何を運ぶかが事前に定まらないという偶発性を伴う。こうした偶発性は「個々人からは予測できない」ものであり、「メンバー誰一人も最終成果を想定」できない状態からの組織化を導く。したがって、「参加者を文字通り移動させる」というデザインは「即興的な相互行為」を生起させる主要な契機であり、ワールドカフェにおける他花受粉は、席替えを契機とする「意図を含まぬ」偶発的で「即興的な相互行為」から創発を促す実践として位置づけられる。

「会話の途中でメンバーを入れ替え」、即興的に「異なる視点のつながり」を意図的に強めることに関する研究としては、ナレッジ・ブローカーに関する一群の研究を挙げることができる。

ナレッジ・ブローカー (Knowledge Broker) やバウンダリー・スパンナー (Boundary Spanner)、メディエーター (Mediator)、クロスポリネーター (Cross-pollinator) とい

った概念は、媒介者が知識の「構造的空隙」を埋めるべく知識を運ぶことを論じる。たとえば、「輸出入ビジネスのような創造性」がイノベーションの火付け役となるとの議論や、あるグループにとっては平凡なアイデアであっても別のグループでは価値ある洞察となりうるため知識を運ぶことに価値が生じるとの議論がある (Long et al., 2013 など)。

これらの理論群に共通するのは、「異なる視点のつながり」が固定的な役割によって担われている点である。ナレッジ・ブローカーは送り手として、それにあい対する被ナレッジ・ブローカーが設定されて、その様相や機能が論じられてきた。ゆえにワールドカフェの「メンバー入れ替え」とは前提がやや異なるものの、関連は大きい。Brown & Isaacs (2005 香取・川口訳 2007) には「創造的な結びつきを発見しようと共に耳を傾けているうちに、固定化した立場は、いつの間にか消えている」との記述もある。ワールドカフェにおける他花受粉の媒介者は全員である。全員が、ときには送り手 (ナレッジ・ブローカー) となり、ときには受け手 (被ナレッジ・ブローカー) となり、輻輳しつつ縦横無尽に他花受粉を行う。そこには階層構造も権限構造も役割の固定もない。したがって、他花受粉は特異な知識創発の形態であるといえる。含意的ではあるが、固定的な役割をもつナレッジ・ブローカーと固定的な役割をもたないナレッジ・ブローカーの差異については、本研究の最後に、特異な形態にあるナレッジ・ブローカーが組織化する他花受粉状態による創発として論じる。

ここまで、ワールドカフェ研究に先立つ諸点を検討した。まず、普及初期に広く紹介された定義を確認した。ついで、それに合致する実践者の“実感”、プログラム開発者の視点、そこから導かれた「他花受粉」概念と「創発」というタームの連関、およびナレッジ・ブローカー概念との連関の検討を行った。他花受粉を達成する「会話」という行為から知識創発へ至るメカニズム、互いの言葉を用いあうこと、創造的理解をどのように研究へ接続するか、これらの検討を踏まえ、以下では、研究のデザインを割り出す。

ワールドカフェの基幹概念としての他花受粉について、Brown らオリジネーターたちもその重要性を指摘するところであり、かつそれは実践者の感覚にも一致するものである。喩え語としての的確なタームであり、創発研究にも接続可能である。では、その比喩の基盤にある「会話」、他花受粉的会話、あるいはワールドカフェ的会話とでもいうべきものはどのようなものなのか。「会話の途中でメンバーを入れ替えること」によって増す「即興的な相互行為」とは何か。なぜそれによってアイデアの創発の可能性が高まるのか。これらを検討する研究は、以下の点からひもとくべきであると考え。それは、ワールドカフェ的会話とでもいうべきもの、「メンバーの入れ替え」がもたらす即

興的な「相互行為」への焦点化である。

相互行為は、認知科学においてそのメカニズムが多岐にわたって研究されてきた。しかしそういったメカニズムの研究はワールドカフェ研究では先行研究では相対的に乏しい。理念として創発を掲げ、かつ実践においても一定の成果が報告されているにもかかわらず、その創発のメカニズム自体はブラックボックスのままである。たとえば相互行為から創発が生まれるモデルについては、前掲の Sawyer も言及しており、これは実証研究に位置づけられる。学問領域が多分野にわたるワールドカフェ研究の成果は The World Café Community Foundation の研究リストなどに集約されており、2025 年現在は 75 編の研究が確認されるが（筆者の推計による）、実証研究的なメカニズム研究の蓄積は限定的で、本稿の検討では明確には確認できなかった。詳しくは第 I 章にて述べるが、先行するワールドカフェ研究は、事例研究や理論的考察が中心であり、ワールドカフェのプログラム全体を 1 つの単位として扱う研究が主流である。認知科学がそうしてきたような実証性をもってメカニズムを解明する研究は、ごく少数にとどまっており、このワールドカフェ普及の速度に鑑みても希求度が高いと考えられる。

ワールドカフェにおける相互行為は「会話」である。その「会話」について Brown & Isaacs (2005 香取・川口訳 2007) は、「会話することと行動することは別々の活動なのではなく（中略）会話は組織のプロセス全体の行動サイクルのすべての段階における中核プロセスである」と述べる。著者らは「会話」をくりかえり論じつつ、たびたびその文脈で対話（ダイアログ）にも言及する。「対話」の解説は Bohm (1996) の引用からひもといている。Bohm (1996 金井訳 2007) の対話論では、個と集団の関係性がしばしば引用される。たとえば、「集団全体に意味の流れが生じ、そこから出発の時点にはなかった新しいもの、創造的な新たな理解が生まれ出る。この共有された意味は、人々や社会を結びつける『接着剤』となる」、あるいは「対話への参加を通じて、共通の意識が生まれ、個々人は異なる意見を持ちながらも、その意見もまた集団に吸収され理解される」といった記述である。これらの記述に照らせば、ワールドカフェの会話は対話と同等の概念として捉えうる。すなわち、協調的な相互作用としての会話、創発に至る対話としての会話である。本稿は、この会話を相互行為として実証的に記述することによって、他花受粉がもたらす創発のメカニズムの解明に資すると考える。

対話研究でもうひとつ欠かせない視点を Bakhtin (1984, 桑野隆訳 1989) が提供している。対話論で Bohm と並んで引きあいに出されるのは以下のような Bakhtin の言説である。こうした対話概念は、Brown & Isaacs と Bohm と Bakhtin とを 1 つの理論的連関で接続するものである。いわく「真実は、個人の頭の中に生まれるのではなく、

真実を追求する人々の集団的な探求の過程において、彼らの対話的な相互作用を通じて生まれるものである」(Bakhtin, 1984, 桑野隆訳 1989)。これは対話主義 (dialogism) と呼ばれる。さらに Bakhtin (1929, 桑野訳 1989 ほか) は、次のようにも述べる。「具体的な発話を通してのみ言語は交通と接触し、その生き生きとした力につらぬかれ、現実となる」。また、「言語的創造の領域では『発せられた言葉』ではなく『組み合わせられた言葉』が支配的であり、言語活動全体は『他者の言葉』と『あたかも他者のものらしき言葉』の配列に過ぎない」。「言葉は常に他者との関係において意味を持つ」、あるいは「言語における言葉は常に半分が他人のものである」とも述べている (Bakhtin, 1981, 望月・鈴木訳 1990)。これを解説して桑野 (2020) は端的に「バフチンからすれば、引用は広義の〈対話〉でもあった」とも述べている。そして、「〈他者のことばの伝達〉の形式、すなわち、引用の形式への注目こそ、Bakhtin の対話理論を援用する領域の研究において重要である」と述べている (桑野, 2020)。

ここでいう「引用 (quotation)」は、単に引用符で囲まれた他者の言葉だけを指すのではなく、〈他者のことば〉を自分の発話の中に挿入するあらゆる行為を意味する。発話者の意図の有無にかかわらずである。Wertsch (1991, 田島他訳 2004) は「バフチン (Volosinov, 1973) が他人の言葉に特別な関心をよせているのは、他人の言葉を複数の声なんらかの形で互いに接触するアリーナとみることができるからである」と述べる。さらに桑野 (2020) は、Kristeva が「どのようなテキストもさまざまな引用のモザイクとして形成され、テキストはすべて、もうひとつの別なテキストの吸収と変形にほかならないということをバフチンが発見した」と述べていることを紹介している。

ワールドカフェの他花受粉のメカニズムに関する研究の焦点の1つは、こうした対話的な現象が実際のワールドカフェの会話の中に見いだされるのかという形跡の追跡と証拠の発見である。すなわち、Bakhtin (1929, 桑野訳 1989) のいう「具体的な発話の交通 (通い合い) という他者との関係を通して」の「意味」の新しい捉え直しがいかになされるかを実証するという命題である。解法は、〈他者のことばの伝達〉としての引用の形式を追うことにある。そこで検証される「別なテキストへ吸収や変形がなされる引用のモザイク」は、ワールドカフェにおける会話が協調的な相互作用を含みつつ、創発に至る対話へと変化することを明示するだろう。

本序論の前段で導いた他花受粉と創発の連関から、他花受粉を達成する「会話」という相互行為への焦点化が研究の要であることが特定された。加えて、この後段の議論から、Bakhtin (1929, 桑野訳 1989 ほか) の概念である〈他者のことばの伝達〉の形式、すなわち引用という行為への焦点化が重要であることが明らかになった。

本研究が解明したいのはワールドカフェの会話から知識創発に至るメカニズムである。とりわけ、ワールドカフェの論説が他花受粉と喩える、全員が全員のための媒介者となるような全方位的な相互作用がもたらす知識創発のメカニズムに注目する。ひいては、対話的な場における相互行為がいかにして何を達成するのかという知識創発の理解全般にも資するものと考える。

本研究は、集団の創造性および集団内部の対話に関する研究として、ワールドカフェの対話における知識創発のメカニズムを解明し、あわせて、引用しあうこと、すなわち互いの言葉を用いあうことが成員間の創造的理解にいかにかに寄与するか、その相互引用の発話の機能を検討するものである。具体的には、ワールドカフェの実践における対話場面を対象に、集団の創造性および相互行為のプロセスに着目しつつ、Bakhtin の対話理論における引用概念を用いて分析する。

I 問題と目的

序論では、ワールドカフェ、知識創発、引用といった研究の主題を提示した。ワールドカフェにおいて、その会話からいかにして知識創発がなされるのか、メカニズムの解明を目的とした問いを提示した。とりわけ、「他花受粉」と呼ばれる成員の入れ替えにともなう相互行為が、どのようにして創造的な理解や新たな知の生成を可能にするのかに注目するとした。また、認知科学の創発研究への貢献についても触れた。実践者の実感やプログラム開発者の視点についても議論した。そして、SECI モデルにおける知識変換の視点や、Bohm が提唱した対話の概念等に依拠しながらも、さらには Bakhtin (1984, 桑野隆訳 1989) の対話理論、なかでも「他者の言葉」の構成的役割を理論的手がかりとする点についても提示した。Bakhtin (1981, 望月・鈴木訳 1990) が述べる「言葉は常に半分が他人のものである」という視座に立つとき、ワールドカフェにおける会話の本質は極めて鮮明に浮かび上がってくる。それは「メンバーの入れ替え」によってもたらされる「誰かの言葉を別の文脈で再構成する」引用の連鎖が知の共創を可能にする契機となることを明示するであろうからである。その「引用のなされ方」の構図こそ、他花受粉という概念の核心である可能性が高い。加えて、これらの実証的なメカニズム研究こそ、ワールドカフェ研究としてはその普及の歩速にあわせるべく、急務であることも述べた。

こうした理論的背景と実践的関心を踏まえて、本章では、研究の視座をさらに明確にする。具体的な分析対象と方法を特定する次章の前段として、ワールドカフェ研究の問題点と本研究が新たなワールドカフェ研究となるべくの目的を示す。本研究が焦点を当てるのは、ワールドカフェの会話のなかで交わされる相互の引用の発話や視点の交差である。それらがどのように知識創発へとつながるのかを、相互行為的な観点から形而的に描き出すことを試みる。発話における引用の形式、発話されたタイミング、その意味理解の変容などを詳細に分析することで、ワールドカフェに固有の知識流通の構造、すなわち「全員が媒介者である」という全方位的で即興的な知の伝播の様相から、知識生成のその独特の具体的なメカニズムを解明していく。ひいては、ワールドカフェを単なる会合の手法として捉えるのではなく、創発の現象を可視化し理論化する対象フィールドとして見つめ直し、知識創発の、新たな認知科学的モデルの構築と再定位への示唆を試みる。

さらにいうなら、本研究は、会話がもたらす集団の創造性とは何かという命題に取り組もうとするものであり、引用、相互行為、創発というキーワードを架橋することで、

これまで見落とされてきた知の生成過程に光をあてようとするものである。

その試みに先立ち、本章の前半では、ワールドカフェとはどのような手法であり、どのような普及の経緯を経てきたのか、また、プログラム開発の背景にあったものについて、文献に基づきその概要を整理しておく。

1.1 ワールドカフェの概要

Brown & Isaacs (2005 香取・川口訳 2007)は、ワールドカフェは「実生活に関する課題や重要な戦略的課題、建設的な関係をつくり出すことや、協働学習、集合的な洞察などを促すために、ダイアログを行う目的で活用されるとき、特別な貢献ができる」と述べている。

ワールドカフェは形式化されたプログラムをもつ。その設計は「集合の知恵を視覚化して、行動の優先順位を特定する」ことに焦点化してなされている (Brown & Isaacs, 2005 香取・川口訳 2007)。標準的なプログラムは 20 名程度から数百名規模までの会議や会合が想定されており、出席依頼した成員全員を 4, 5 名ずつ小さなテーブルに小分けし、一つないし複数の共通の問いを投げかけ、対話を促進するような会話を奨励しつつ、短時間で成員を途中入れ替えするというものである。最後の成員入れ替えでは最初のテーブルに帰還して最初の成員に再会し、全員で集合的な発見のふりかえりを行い、全員参加のもとに成果を明示する。会話の途中でそのテーブルの成員が解体され、入れ替えられて「半ば保持された文脈での会話、半ば新しい文脈での会話」が行われ、そして最初のテーブル、最初の成員へ帰還することで、すなわち、解体、保持、新結合、再結合という事象が短時間に組織されることが、ワールドカフェの対話の特徴となっている。ワールドカフェは、会話自体が、「分かたれ、再統合される」実践である。

ワールドカフェは、ホールシステム・アプローチのひとつとしても数えられている。Brown & Isaacs が組織開発という言葉を発するとき、狭義にはそれは「対話型組織開発 (Dialogic Organization Development)」を指しており、なかでも、これまでワールドカフェ普及の流れではこのホールシステム・アプローチとしての側面が強調されてきた。のちに「診断型組織開発 (Diagnostic Organization Development)」と定義されることになる旧来の組織開発が、データ分析に基づいて専門家主導で問題を診断・解決するものであったのに対して、対話を軸とした当事者によるアプローチとして台頭してきたものを Bunker & Alban (1997) は、ホールシステム・アプローチと命名した。ホールシステム・アプローチのハンドブックをまとめた Holman et al. (2007) は、このアプ

ローチ群を「多数の組織的イニシアチブを効果的に織り込んで、従業員のエンゲージメント (engagement)、賛同、および結果を生み出す、適切に設計された、組織全体の变化への取り組み」と定義している。香取・大川 (2011) はホールシステム・アプローチを、「関係者が一堂に集まってさまざまな課題や、共通の未来について話しあう会話手法の総称」と定義して、その特徴を6つ挙げている。それは、1) ダイアログをベースにしている 2) 会話を通じて知識が生み出されるという考えを大切にしている 3) 関係者をできるだけ幅広く参加させようとする 4) 参加者の自主性・自律性を最大限に生かそうとする 5) ポジティブ発想が一貫して流れている 6) 全体脳を動員するの6点である。

この大規模会話手法の文脈で、Holman et al. (2007)はワールドカフェを、「重要な質問にまつわるダイナミックで戦略的な会話によるエンゲージメントによって、集合知の出現の条件を涵養する」プログラムであると概説している。エンゲージメントという語は、組織心理学では、心理状態、特性、行動など仕事に関わるポジティブで充実した状態の意味で用いられることが多いが、Holman et al. (2007)はエンゲージメントの語を、「全体システムを巻き込む参加」、関与、巻き込みという運動論的概念として用いている。会合、ミーティング、会議、話しあいとして一定の結論が求められるとき、ワールドカフェはその参加、関与、巻き込みの取りかかりを提供し、「集合知の出現の条件を涵養する」。そしてその条件が涵養されるとき、すでにある基準に照らして正解を案出することなくして、多様な利害関係者が一堂に会したその場での関わりあいから「集合の知恵」が生成されるという (Brown & Isaacs, 2005 香取・川口訳 2007)。Brown & Isaacs (2005 香取・川口訳 2007) は、組織やコミュニティを一つの「生きたシステム」とみなしつつ、ワールドカフェの本質を「全体を対象に創造的対話から集合知を育むことにある」と位置づけている。ひとつは、「創造的対話」によって全体が変化すること。ひとつは、関係者として参席する成員が自律性、当事者性をもつに至ること。ひとつは、エンゲージメント、賛同の成果として「集合知」が立ち現れることである。ゆえにその帰結として「行動の優先順位が特定」されることが、戦略的な課題解決や建設的な関係づくりを目指すダイアログへの「特別な貢献」となる。

1.2 ワールドカフェの普及の経緯とプログラム開発の背景

ワールドカフェは、その援用の分野と開催の目的において多様な広がりを見せている。世界で最初のワールドカフェ「ホームステッド・カフェ」以来、マサチューセッツ工科

大学組織学習センター（のちの SoL：Society for Learning organization）などの学習ネットワークを通じて、米国の組織開発分野を起点に世界へ普及した。2000 年代にはすでにシンポジウムのセッションのみならず、組織内の、あるいは組織間の会議・ミーティング、あるいは参加を希望する希望者に開かれた会合などに多く援用されている。とくにそのフラッグシップとなったのが組織開発の大規模カンファレンス「Pegasus Conference（正式名称は Systems Thinking in Action）」（Pegasus Communications 主催）である。Brown と Isaacs の提案を受けて、オープニングアクトとしてのワールドカフェが定着し、2000 年代前半からおよそ 10 年にわたって継続的に援用された。これは、基調講演の代わりをなしつつ、対話をもってオープニングとなし、会期のテーマ出しを行うというもので、このワールドカフェの用いられ方は、シンポジウムや大規模カンファレンスの形式として、そのロールモデルとなった。この 10 年間は、ワールドカフェが大規模な対話セッションの手法として普及した 10 年間でもあり、組織学習や組織開発の分野からさまざまな分野へ援用が拡張していった 10 年間でもあった。

わが国での開催が契機となった特異な伸展もある。シンポジウムから応用された「まちづくり」分野への援用、市民参画や市民共同への活用がそれである。2008 年から 2009 年にかけて開催された「イマジン・ヨコハマ（横浜市開港 150 周年記念都市ブランド共創プロジェクト）」が、ワールドカフェがまちづくりに援用されてゆく端緒となった。このプロジェクトでは多数行われた個々の市民ワークショップを牽引する旗頭の役割をワールドカフェが果たした。続く、札幌市、福岡市、京都市、神戸市など政令指定都市を中心に、まちづくり分野、市民参画や市民共同を旨とする大規模なワールドカフェが多数開催された。この流れは The World Café Community を通じて国際的に広く紹介され、世界的にも次第に、まちづくり、市民共同による公共政策形成や行政計画づくり、市民交流、産学官連携などの多分野連携へ援用されていく流れを生じさせた（香取，2015）。加えて、2010 年代に入ってから、内閣府や文部科学省などが市民啓発にワールドカフェを推奨する「教育ワールドカフェ」の系統も生まれている（内閣府，2012）。

教育ワールドカフェ（内閣府，2012）は、当事者性の喚起、とりわけ若者の社会参加の促進や公共政策形成参画への啓発を目的とした、一連のワールドカフェの援用の推奨である。さらには、中央教育審議会の提言（中央教育審議会，2012）からのアクティブラーニングの流れもあり、高校、大学を中心に学校現場へもワールドカフェは普及していった（森，2015）。

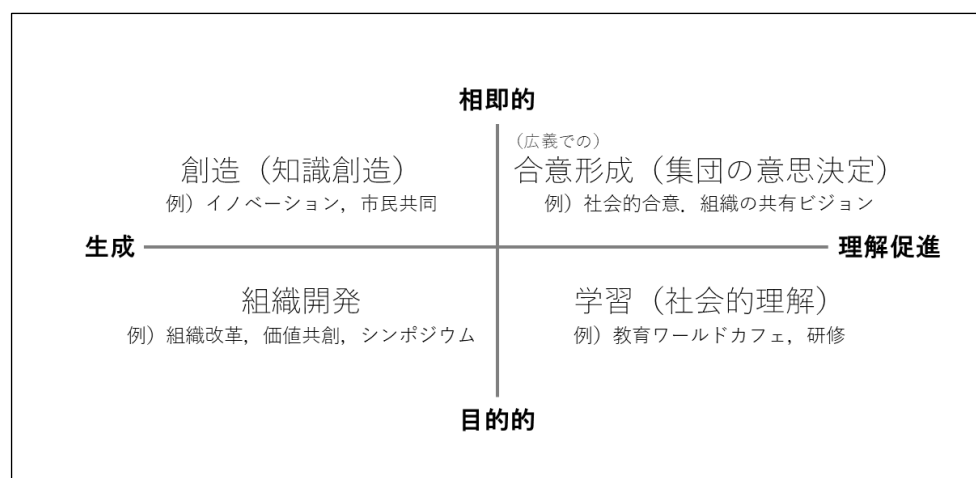
目的が多様化した例も多い。東京大学の卒業生と現役学生、教職員などが世代や分野を超えて集う集会として「東大ワールドカフェ」が 2011 年から現在までホームカミン

グデイで開催されている。これは交流が目的となっている。合意形成からの応用として共同の機運の醸成や対話そのものを目的とすることも目立つ。東日本大震災復興支援財団の活動では 2012 年から被災地支援の手法として定番化した。支援メニューの勘案から政策提言、また資金調達的设计までミーティングの形式として幅広く援用された。また、大規模開催に加えて、多数回の開催をシリーズ化する援用のあり方も開発されていた。三重県、佐賀県武雄市、資源エネルギー庁、いくつかの民間企業などでは地域をサーキット（巡回）する多数回開催の援用手法を定置させている。

わが国のワールドカフェ実践の第一人者・香取（2015）は、ワールドカフェが援用されるときの目的の、これらの多様化を整理して 4 つに大別している。4 つは、組織開発、創造、学習、合意形成である。これを、生成的であるか理解促進的であるかという軸と、目的であるか相即的であるかという軸の二軸にプロットすると図 1 のようにまとめられる（筆者による加筆）。ここでは、生成的という語を「新たな意味や関係を生む」の意で用いており、相即的という語を「相互に条件づけあう」の意で用いている。

図 1

ワールドカフェ援用の目的



組織開発は、目的かつ生成的で、ワールドカフェによる学習が成果をもたらすものである。組織改革のための組織内の対話セッションやシンポジウムの対話セッションがこれであり、他に例としては価値共創（value co-creation）や産学官連携といった多分野協働なども挙げられる。価値共創は、企業、行政、市民など複数主体の相互作用で価値を共につくる過程のことである。

創造は、生成的かつ相即的で、ワールドカフェによる知識創造が直接成果となるものである。市民共同として創案的に組成されるまちづくりプロジェクトや企業のイノベー

ションにおけるミーティング、アイデア創案のワークショップなどが挙げられる。

学習は、目的かつ理解促進的で、社会的理解を喚起しつつ理解のあり方が交換されることで成果がもたらされるものである。組織研修や集団内の学習活動がこれであり、ほかに教育におけるワールドカフェや当事者性喚起のための各種の啓発活動などが挙げられる。

合意形成は、この言葉をここでは広義に用いており、相即的かつ理解促進的で、ワールドカフェによる集団の意思決定で成果がもたらされるものである。まちづくりにおける市民参画や組織における共有ビジョンがこれであり、ほかに公共政策理解のための説明会に援用されるワールドカフェなどが挙げられる。ここでいう共有ビジョンは、Senge (1990)の組織学習論における概念で、構成員が自発的に望む将来像の共同的表象のことである。

組織開発や創造など「生成」的なプログラムとして開発されたワールドカフェが、その援用の範囲を広げ、「理解促進」のための手法としても有効であるとみなされ、目的が拡張していったとするなら、ひるがえって当初のワールドカフェ開発の経緯と意図をみておきたい。

ワールドカフェのプログラムの開発は、おもに組織開発や組織改革の文脈において行われてきた (Brown, 2015)。組織開発や組織改革における概念、たとえば、Senge (たとえば、Senge, 1990) が提唱する「学習する組織」論や Nonaka (たとえば、Nonaka & Takeuchi, 1994) が提唱する知識創造経営、Brown & Isaacs (たとえば、Brown & Isaacs, 1997) が提唱する会話型リーダーシップなどに依拠してプログラムが開発されてきた。

「学習する組織」論と呼応するのは、対話を通じて集団の知を創発させ、組織的な気づきと変容を促す点である。Senge の「チーム学習」の思想と同様、個人を超えた意味の生成が中心であり、組織開発の文脈で共有された理解がプログラム開発の基盤となっている。

知識創造経営と呼応するのは、「暗黙知から形式知への変換」(表出化)を対話によって促す点である。ワールドカフェが「視覚化」と呼ぶプロセスも、SECI モデルの「表出化」に類似しており、参加者が思考を言葉にし、あるいはテーブルクロスにその場書きをして共有する場面に現れている。

Brown 自身に取り組んでいた「会話型リーダーシップ」(Conversational Leadership)の文脈で「他花受粉」の概念を用いており、これが拡張されてワールド・カフェの中核的なメタファーとなった (Hurley & Brown, 2005)。その意味では、ワールドカフェは、参加者が相互に「会話を中核プロセスとして捉えるリーダーシップ」を発揮する場とも

いえる。Brown からみれば、会話型リーダーシップの理論構築に基づいて、その実践形態としてワールドカフェを開発したと読むことができる。

1.3 他花受粉概念

本節の目的は、他花受粉を本研究の焦点として再定義し、分析の土台を明確化することである。他花受粉は、ワールドカフェの一側面ではなく設計原理そのものである。Brown & Isaacs (2005/香取・川口訳 2007) は、小分けしたテーブルでの会話と会話ラウンドごとの成員の入れ替えによって「集合の知恵」がもたらされると述べ、「異なる視点のつながりがもつ多様性と密度を意図的に強めることにより、生体システムがもつダイナミズムを活用し、創発を引き起こす」という定義を与えている。その手段は、「双方向で行われる会話のラウンドごとに、参加者を文字通り移動させる」こと、すなわち“他のテーブルへの移動 (move to other tables)”であり、「会話の途中でメンバーを入れ替える」ことによって異なる視点が相互に関連づけられ、創発が引き起こされる対話 (ダイアログ、ダイアローグ) であると要約できる。

この他花受粉という比喩は、遺伝的多様性の促進や媒介者の存在を含意する。実践の現場では、「入れ替えられた」成員が媒介者となって、前のテーブルの談話要素 (トピック、語句、評価、語りの引用) を「会話の途中」の状態で花粉のように運び込み、それらが多様性を増しつつ密度を高められ、受粉-結実に擬せられる過程として創発が引き起こされると説明される。他花受粉はまさにワールドカフェの中核をなす概念である。

同趣旨の比喩は、ワールドカフェ以外でもホールシステム・アプローチの他手法でも確認される。たとえばオープンスペース・テクノロジー (Open Space Technology: OST) では、参加者が関心に応じて討議グループ間を移動することを奨励している (Owen, 1997)。Owen (1997) は、途中でグループを渡り歩く参加者を「蝶 (butterfly)」や「マルハナバチ (bumble-bee)」に喩えて、グループ間で花粉を運ぶようにアイデアを運び受粉 (知的交流) させる役割を果たすと説明している。フューチャー・サーチ (Future Search) においても、明確な語用はないものの、多様な利害関係者が一堂に介して大規模な対話を行う際に、成員に2つの配席パターンを準備して小分けにし、その2つの成員配席を組み替えながら会話を行うことを設計している。2つは、利害関係者ごとの同質グループと意図的に立場の異なる成員を混成した多様グループである。ここでも、「多様性が高まること」「媒介者を介したアイデアの受粉」を意図した「成員の入れ替え」を通じて多様性と媒介を意図した対話を促すことがなされる。

もっとも、他花受粉を単なるアイデア搬送として理解するなら、会話や対話を経ずとも実現可能である（付せん紙等による交換でも「運ぶ」こと自体は起こる）。しかし、ワールドカフェが人の媒介（移動）を中核に据えるとすれば、他花受粉の条件には会話の相互行為に根ざした、より精密な要件があるはずである。

遠目には「席替え」や「アイデアの持ち運び」が観察されるが、分析に真に必要なのは外観ではなく相互行為の微細な単位である。伝播の発話、応答の形跡、再文脈化の実際などを捉えることが不可欠である。

以上より、本研究はワールドカフェ的会話、とりわけ「メンバーの入れ替え」がもたらす即興的な相互行為に分析の焦点を据える。次節では先行研究の全体像を概観するが、本稿の調査範囲では、ワールドカフェ研究においては他花受粉（席替え×談話再結合）の実証的メカニズム研究の蓄積は限定的であったことを、あらかじめ付記しておく。

1.4 ワールドカフェ研究の動向

本節の目的は、領域横断的に展開してきたワールドカフェ研究の全体像を簡潔に俯瞰することである。ワールドカフェの研究は、開発の経緯同様、「学習する組織」論、知識創造経営、リーダーシップ論などの経営学領域、また教育学を中心に先駆的に進められてきた。これらの成果は The World Café Community Foundation の研究リストなどに集約されており、2025 年現在、筆者の推計では 75 編が確認される（The World Café Community Foundation, 2025）。これらはワールドカフェの進展や理論化に資するという意味で“ワールドカフェ研究”という領野であると位置づけられる。本節では、当該領野でワールドカフェがいかに研究されてきたかを概観する。

なお、本稿の調査範囲では、先行研究の主流は事例研究・理論研究であり、他花受粉（席替えを介する談話要素の再結合）に直結する実証的メカニズム研究の蓄積は限定的であった。以降のレビューは網羅性を優先して提示し、第Ⅱ章以降で他花受粉の操作的定義に沿った相互行為データの分析へ接続する。

概観は3段階に行う。最初に、俯瞰するために75編を、香取（2015）の「ワールドカフェの4つの目的」、組織開発、創造、学習、合意形成に弁別しつつ、研究がなされた学問領野、研究対象となったフィールドをみていく。次に同じように研究手法をみつ、相互行為分析が用いられている研究を精査する。最後に他花受粉の研究についてをみていく。なお、「ワールドカフェの4つの目的」の弁別では、1つの研究論文中に複数のフィールドを含むものもあり、また研究の目的とフィールドが同一でないものもある。

り、弁別は曖昧にならざるを得なかった。ただしおおまかな傾向をつかむことはできたはずである。

1.4.1 ワールドカフェの目的による弁別

組織開発を目的とするようなワールドカフェを扱った研究は、75 編中約 20 編とみなせた。たとえば、Bushe & Marshak (2014)は、対話的組織開発の理論枠組みを整理する中で、ワールドカフェをその代表的な組織改革のアプローチとして位置づけ、そこでは対話的マインドセットが重要となる点を強調している。Chang & Chen (2015)は、起業家たちによる戦略立案の対話の場を事例に、ワールドカフェがその影響を発揮するときには起業に関する戦略的な計画策定能力が向上するということの可能性を論じている。Fallon & Connaughton (2016)は、大学図書館のフロントラインサービスにおける新たなサービスを創案するワールドカフェを研究対象としつつ、結論としてワールドカフェはサービス変革を促進する有効な手法であると述べている。

創造を目的とするようなワールドカフェを扱った研究は、75 編中約 17 編とみなせる。たとえば、Recchia et al. (2022)は、地域コミュニティを対象とした健康促進と疾病予防について対話するヘルスプロモーションの場を事例に、参加者同士の対話を通じて、当該コミュニティ内部にもともと存在する知恵（community wisdom）が可視化され、健康施策の改善に向けた具体的なアイデア創出に貢献しうることを示している。また、持続可能性や環境分野でも、ワールドカフェを用いた市民参加型の対話の場が設計されており、公共の意思決定や環境プロジェクトの構想過程において、多様なステークホルダーが互いの経験や視点を持ち寄り、新たな取組案や協働の可能性を共創する手法として一定の有効性が報告されている。

学習を目的とするようなワールドカフェを扱った研究は、75 編中約 25 編とみなせる。たとえば、Lorenzetti et al. (2016)は、複数の教育・実践現場を例に取りながら、ワールドカフェは、変容的学習を促進するための有効な手法であると論じている。ここでいう変容的学習とは、自らの前提そのものを変えることを本質とする学習のことである（Mezirow, 1997）。Camacho et al. (2020)は、高等教育における PBL（問題解決型学習）の事例の研究で、ワールドカフェは、問題解決などの参加型アプローチにおいてその実施のプロセスへの参加を促進させることに有効であると論じている。とくに集合的意味形成を通じた集団文化の変化を促進しうると論じている。Al Yakin et al. (2021)は、大学の授業の事例研究で、ワールドカフェは、学生の動機づけと学習成果を向上させるために有効な手法となったと報告している。

合意形成を目的とするようなワールドカフェを扱った研究は、75 編中約 13 編とみなせる。たとえば、Silva & Guenther (2018)は、持続可能性パフォーマンスを測定するという研究課題の設定を対象として、ワールドカフェが、研究者と実務家の対話を通じて参加型・協働的な洞察を生成し、研究アジェンダを形成する手法として有用であることを示している。McGrath et al. (2023) は、プライマリ・ケア領域におけるコミュニティのアジェンダを明らかにすることを目的とした ワールドカフェを分析し、ワールドカフェが、多様なステークホルダー間の対話を促進しつつ、課題特定を柔軟に行える手法であると結論づけている。

目的による弁別では、その研究発表の年次から、ワールドカフェの目的が次第に拡張していくさまも読みとることができる。組織開発、および創造という目的のワールドカフェはその少なからずが 2000 年代から 2010 年代に集中しており、企業や教育機関で援用が盛んになっていくようすがわかる。教育目的のワールドカフェは 2010 年代中盤から増加しており、教育現場での学習法として援用されるのみならず、学生や市民の主体的な学びや対話的学習に寄与していくようすがわかる。合意形成を目的とするワールドカフェは 2010 年代後半から注目され、医療福祉分野や公共政策分野への導入が進められていくさまがみてとれる。

研究成果をみても年代の推移が潮流をなしている。2000 年代から 2010 年代に集中している組織開発、および創造が目的のワールドカフェに関する研究では、この手法が有効な手法であると結論づける論調が多くみられる。また、効能や効果、可能性を示したり、援用上の留意点を示したりする研究も特徴的である。2010 年代中盤から増加している教育目的のワールドカフェに関する研究では、どのような学習を促進させるのか、どのような学習成果を向上させるのか、成果の精緻な分析が進められている。2010 年代後半からの合意形成を目的とするワールドカフェに関する研究では、この手法が体系的に適用されることが望ましいというような提言型の結句が目立つ。

ワールドカフェ研究は、初期の理想的な、あるいは理念的な、理論枠組みを示し手段の有効性を強調するような提案型の研究から、援用する分野を拡張し、また詳細化するような、援用上の可能性や効果を示したり、社会における使い方を提言するような研究へと拡張を続けてきたといえる。

1.4.2 学問領野，対象フィールド

ワールドカフェ研究はどのような学問領域でなされているのか。The World Café Community アーカイブのワールドカフェ研究論文 75 編は、学問領域別にみると、経営

学，教育学，および公共政策論に大別される．経営学においては組織開発，組織改革，リーダーシップ開発，マネジメント，戦略立案などにおけるワールドカフェ活用に主眼が置かれている．教育学においては，教育現場においてワールドカフェを対話型学習やカリキュラムへ提置する提案が目立つ．公共政策論においては，政策形成や社会福祉への市民参加，市民参画，エンゲージメントの手法研究，もしくはコミュニティ支援に資するワールドカフェの援用事例が報告されている．

研究対象となっているフィールドはどのようなものであろうか．対象フィールド別にみると，民間企業や行政機関，公共団体などの職員研修や，学校や大学などの教育機関など，利害関係者が単一のフィールドを筆頭に，医療・福祉分野などの多職種連携の会議体，国際会議，および協会や委員会などの協働組織や協議体，連携体，そして住民参加を喚起する地域コミュニティや市民活動の臨時の場などが挙げられる．

1.4.3 研究手法，そして，相互行為分析は用いられてきたか

どのような研究手法が用いられているか．研究手法別にみると，単一もしくは複数の事例を取り上げ，質的にその影響や効果を分析する質的な事例研究，およびアクションリサーチとして，実践と研究を同時に行う社会実践の報告研究が大半である．少ないが，量的データと質的データの両方を用いる混合研究を謳うものもある．しかし相互行為分析など実証データを微細に分析した研究は見あたらなかった．ワールドカフェ全体が“1つ”であり，その内部で何が起きているかをデータ分析した研究はほぼ皆無であった．

ここまでの，香取（2015）の目的による整理，すなわち実践者の概観としてはワールドカフェ研究者の研究のあり方とその認識においておおむね合致しているといえる．そしてそれは，Brown & Isaacs（2005 香取・川口訳 2007）が2005年時点で挙げたワールドカフェが導入された現場からの目的の“拡張”として表現されているといえる．2005年時点で論述の対象としてBrown & Isaacs（2005 香取・川口訳 2007）が取りあげたフィールドは，17ある．この17の内訳は，企業や博物館，大学などの組織の，単一組織の内部での援用の事例が7事例，カンファレンスやフォーラム，協会やダイアログプログラムといった共創的な場，創造の場が8事例，大学の授業における演習など学習の場が2事例となっていた．これら，組織開発と創造の目的事例が目立つ論説から，しだいに学習や合意形成の場へと拡張していった流れを読みとることができる．加えて前出のような，学問分野別，フィールド別，研究手法別といった弁別からみるときのワールドカフェ研究の概観から見えることも興味深い．それは何か．その前に，2つのことを精査しておく．1つは他花受粉に関する研究についてと，もう1つはワールドカフェ研究

ではないものの、ワールドカフェが形式として用いられたフィールドが研究対象に含まれる先行研究についてである。この研究では、ワールドカフェそのものを研究するといった意図がなかったにもかかわらず一定の分析がそのフィールドに対してなされている。その分析から、ワールドカフェ研究への示唆を得たい。

1.4.4 他花受粉は研究されてきたか

ワールドカフェ全体を1つの営みとみて、そこから得られる成果などに着目する研究が大半の中で、ここでは以下の2点を検討する。1つは、明確な実証データ分析、相互行為分析ではないにせよ、遠目から席の移動や会話をおおまかにみるのではない研究はあったか、1つは、「他花受粉」を喩えの概念ではなく現象と捉えた研究はあったかという観点である。他花受粉という概念からは、ワールドカフェの実践上のヒントのみならず、研究上も得られるヒントであるはずだ。The World Café Communityのアーカイブのワールドカフェ研究群でもそれが重要な概念であると再三強調されている。たとえば、Fouché & Light (2011)はソーシャルワーク研究にワールドカフェを導入した先駆的な事例の研究において、知見交流の有用性は「他花受粉」の行為にあったと報告している。研究デザイン研究のLöhr et al. (2020)も、ワールドカフェの要諦は他花受粉にあるとして、データ収集にワールドカフェを援用する場合、できるだけ多くの参加者を得つつ、できるだけ多くの他花受粉が起きよう仕向けることが重要であると指摘している。ただしこれは、思弁論としてその有用性や要件を強調するにとどまるものであり、他花受粉の語用は比喻にとどまり、それを現象として捉えメカニズムをデータ分析的に検討した研究とはいえない。

ワールドカフェ研究ではこれまでメカニズムの解明的な研究は、ほとんど行われてこなかったといっても過言ではない。以下のような視点はもたれてこなかったということである。たとえば、他花受粉が「多様性と密度を」強める、それはどのようにしてか、主催者の意図はそうであるとして、成員による現象はどうなっているのか、「生体システムがもつダイナミズムを活用」するとはどんなダイナミズムなのか、「創発を引き起こす」その、引き起こされた創発の現象はどう読みとれるのか。これらを解明する「参加者を文字通り移動させること」からのメカニズム研究には、本来もっと期待が寄せられてもよいと考える。これらの研究上の欠落は早急に埋められるべきと考える。ワールドカフェをプログラム全体で捉えてその援用の成果を事後考察する事例の研究や、機能や効果の理念的・思弁的な議論、あるいはよきものとして社会への実装を訴える提言がほとんどである状況からは早急に脱却すべきであるとする。ワールドカフェという形

式がなぜ当該の効果をあげることができるのか、また、プログラム内で起きている微細な現象やそのメカニズムについてブラックボックスのままにしておくべきではないと主張しておく。

実際に他花受粉に喩えられる現象はどのように起きているのかという命題に沿う道は、実証研究である。そのワールドカフェ開催が何を志向するかではなく、実際のふるまいはどうなっているのか、その「行為」の研究である。「異なる視点が相互に関連づけられる」という他花受粉のふるまいや、「多様性と密度は高まって」いく変容、ダイナミズムの活用のされ方、それらには成員（テーブルのメンバー）の入れ換えが影響しているありさま、それによって引き起こされるという実際の創発の様相、「行為」の分析があきらかにするであろうものは多い。すなわち、他花受粉の実相とはいかなるものか、ということである。本研究では、そのメカニズム解明のために、ワールドカフェの行為の実証的な研究を志向し、これらの「行為の分析」がもたらすであろうもののうち可能な限りをあきらかにしたい。

1.5 ワールドカフェ研究以外の関連研究にみるワールドカフェ

ワールドカフェを研究するという意図が主たるものではない研究においてはワールドカフェはどのように論じられているだろうか。この概観は、本研究上に特異な意義を有している。ワールドカフェ研究を主たる意図とする研究には、ワールドカフェをよきものと捉えてその普及を願い、ワールドカフェ側から事象を読み解こうとしている可能性を排除できないという欠点があるからである。ワールドカフェを研究するという意図が主たるものではない研究は、その可能性は低いと見積もることができる。ゆえに、この、ワールドカフェ研究以外の関連研究がワールドカフェをどう捉えているかを、ここで精査しておきたい。これらの先行研究には次のような特徴があった。精査したのは40編ほどの学術論文である。

1.5.1 ワールドカフェ研究以外の関連研究の学問領野、対象フィールド

学問領域の別では、経営学、教育学、公共政策論といった、The World Café Community アーカイブのワールドカフェ研究論文75編と同様の領域に加えて、臨床研究や公衆衛生などの医学領域のものが目立った。研究対象となっているフィールドの別では、民間企業や行政機関など組織内部、利害関係者が単一のフィールドや、多職種連携や委員会などの協働組織、協議体、国際会議、連携体、地域コミュニティ、市民活動の臨時の場

など、The World Café Community アーカイブのワールドカフェ研究論文 75 編と同程のものが大半であったが、加えてパブリック・インボルブメントなど公共土木に関するものや、臨床研究の現場、オンライン・ワールドカフェに関する研究などもみられた。特筆すべきものもあった。たとえば、研究デザインや研究調査の分野である。研究報告のレビュー研究やアクションリサーチや、ワールドカフェ援用を批判的に検証する研究もあった。学問領域や対象フィールドは、ワールドカフェ研究もワールドカフェが対象として扱われている研究も大半同程であったが、研究手法の別でみるときの差異は顕著であった。みておくべき特徴的な研究を、以下に挙げておく。

Emlet & Moceris (2012)、および Bulsara et al. (2016)は、医学領域におけるワールドカフェ導入を事例に研究報告を行っている。Emlet & Moceris (2012)は、地域と高齢者との社会的つながりの重要性を訴求するために地域コミュニティの話し合いにワールドカフェを導入し、その会話における高齢者自身の語りを質的に分析した。結果、「高齢者に優しいコミュニティ」となるためには、「社会的互恵性」「有意義な交流」「制度的な整備」の3つが希求されていると特定した。Bulsara et al. (2016)は、高齢者の転倒リスクへの介入に関して受益者のニーズ把握を目的に、ワールドカフェ手法を用いた調査を行った。その結果、予期していなかった成果が得られた。それは、当事者である高齢者はリスク認識が低く、介入への抵抗があること、介入は専門家主体ではうまくいかないこと、高齢者相互の教えあいが奏功であること、高齢者自身が知識生成をすることがリードとなることであり、ニーズ把握と介入デザインがワールドカフェにおいては同時に行えたとしている。

Restall et al. (2016)と Yankeelov et al. (2019)の研究は公共政策の分野での研究として興味深い。Restall et al. (2016)は、政策立案者の求めに応じて、ヒト免疫不全ウイルス (HIV) 患者のリハビリテーション施策における優先順位の特定を、多様な利害関係者を招へいしたワールドカフェ・フォーラムで行ったことを報告している。事後の調査では「作業療法実践の実質性」「道具立ての有益性」「当事者意識の向上」「規範への肯定感の向上」といった点の評価が高かったことが示されたと報告し、これは政策立案が参加型アプローチによって行われることの価値を具体的に示すものであるとしている。Yankeelov et al. (2019)は、糖尿病を抱える患者の健康コミュニティの自立と当事者による戦略計画およびその進捗測定指標の策定を目的としてワールドカフェを行ったプロジェクトを報告している。当事者および各機関の代表者が垣根を越えて対話したワールドカフェによって、「知恵とリソースの結集」がなされ「暗黙知が顕在化」したことが当該地域の「コミュニティ独自の文化創出」に寄与し、「地域ぐるみの行動変容」が

促進され「具体的な共同アクション」が開始されたと述べている。結論として、「ワールドカフェには公衆衛生上の困難な課題に対して草の根の解決策を導く力がある」としている。

Pinto Pinho et al. (2023), および Paden et al. (2023) の研究を、教育学分野におけるワールドカフェ援用の事例報告として挙げておきたい。Pinto Pinho et al. (2023)は、高等教育における教授法として、ワールドカフェ手法もさることながら、それにアクティブラーニング専用のスペースとしてしつらえた空間 (TEAL 型教室) をダイナミックに組み合わせて用いることの重要性を指摘している。すなわち物理的環境とプロセスの組み合わせが学生の学習へのエンゲージメントを高めることを示している。Paden et al. (2023)の“Learning a Way of Thinking”の研究は、現在の看護と助産の教育者によるEU5か国の共同プロジェクトにワールドカフェが用いられた事例の報告である。臨床推論 (clinical reasoning) の教育と実践をどのように行うべきかがテーマであった。事後調査のデータを質的に分析した結果、「具体的に改善可能な学習領域」「各国共通の障壁と促進要因」「各国固有の障壁と促進要因」が得られたとしている。また、ワールドカフェに関して、「専門教育の場におけるワールドカフェの実力が証明された」とし、「多文化・多言語環境下でも効果的なブレインストーミングと経験知の共有が可能であることを示した点で意義深い」としている。

尾之上他 (2014), および中西・高階 (2017) を経営学 (組織開発) における研究事例として挙げる。尾之上他 (2014) は、教員研修へワールドカフェを導入した事例から、事後に受講者へアンケート調査を行い、その結果の分析から、ワールドカフェの効果として受講者が評価したものは3つあり、それは「リラックス価値」「メンバー入替え価値」「自由メモ書き価値」であると割り出せたとしている。中西・高階 (2017) は、症例検討の有用性を研究する目的で勤務薬剤師によるワールドカフェを実施した。その事後に、ワールドカフェが参加者にもたらした効果を統計的に検証している。その分析の結果、因子は「知識獲得」「思考深化」「発言機会」「視野拡大」の4つであるとしている。ただし参加者の満足度が高く、この分析結果を一般化してよいのか、教育効果の再現性が今後の課題であるとしている。

畑中・森田 (2015) は、公共事業におけるパブリック・インボルブメント (PI: 市民参画) の課題として、発言量の偏りや参加者の沈黙を挙げ、それを改善する手法としてのワールドカフェの導入を試みたと報告している。結果、少人数・席替え・カフェ的雰囲気が発言の促進と相互理解の深化に寄与することを確認したと述べている。一方で、結論を導かない対話形式ゆえに、意思決定との接続には別途設計が必要であることを指

摘している。

孫ほか (2015) は、ヘルスコミュニケーションを通じたワールドカフェ形式の場における参加者の学びは「変容的学習」「対話における経験」「テーマに関する学び」「動機づけ」であるとして、実用に際して実施のねらいを明確にすることを提案している。

Kinney & Kinney (2024) は、COVID-19 の影響で対面実施が困難となった状況下で、ワールドカフェをオンライン形式で実施した事例を報告している。大学の学生を対象に、学生の健康やウェルビーイングに関する対話を促進した。オンラインであっても対話的な知識生成が可能であることを示し、方法論的な学びを呼びかけている。

1.5.2 ワールドカフェ研究以外の関連研究の研究手法

研究デザインや研究調査の分野において、Löhr et al. (2020) は、ワールドカフェを研究プロジェクトにおける質的データ収集のための参加型手法として捉えなおそうとしている。半構造化インタビューやフォーカスグループといった質的データ収集手法と比較しつつ、ワールドカフェの長所と短所を議論している。結果、参加者からテーマを探索、検証することに適しており、研究デザインに組み込むことでサンプル数と参加水準の両面を向上できると報告している。

公衆衛生領域では、ワールドカフェを質的調査デザインとして組み込む研究も現れている。たとえば、Pignataro et al. (2025) は、イタリアの高校生を対象に、新型コロナウイルス感染症 (SARS-CoV-2) の学校におけるスクリーニング検査に対する受容度を把握する目的でワールドカフェを用い、生徒の態度や感情、情報ニーズなどに関する逐語データを質的に分析している。その結果、思春期の生徒が検査に向ける不安や不信感、家族や友人との関係性、学校への信頼感といった多面的な要素が浮かび上がり、ワールドカフェが学校現場における生徒の感情や考えを丁寧に掬い上げる参加型質的手法として有用であることが示されたと結論づけている。

ここまでみてきたことで、ワールドカフェが導入されたフィールドに関する研究をあわせても、ワールドカフェ研究においては、もはや組織開発などの経営学領域や授業手法研究などの教育学にとどまらず、公共政策形成やエンゲージメント、コミュニティ支援の手法として、あるいは臨床研究や公衆衛生などの医学領域へも援用されており、その事例報告には枚挙にいとまがないことがわかった。その拡張方向として、公共政策形成やエンゲージメント、公衆衛生といった分野の研究がこれから期待されるだろう。研究対象のフィールドも、その拡張方向として、利害関係者が単一の組織や多様な利害関係者によるフォーラムや協議体に加えて、より汎用な、地域コミュニティや市民活動の

臨時の場やパブリック・インボルブメントなどへの拡がりが期待されるだろう。

さらに特筆すべきは、研究手法への進張で、従来の、ワールドカフェの影響や効果を分析する質的な事例研究、およびアクションリサーチとして実践と研究を同時に行う実践報告研究に加えて、研究調査や臨床研究、研究デザインとしての手法研究にもおよんでいることがわかったという点である。研究デザイン自体への進張からするなら、ワールドカフェ内部での発言のあり方や相互行為などのメカニズム、もしくは、創造についてのメカニズムやファシリテーターのふるまいへ着目する研究もあわせて必須となっていくだろう。

1.5.3 先行研究の概観から見えてきたこと

他花受粉概念へ焦点化した研究の探索結果からいえること、およびここまで学問分野別、フィールド別、研究手法別といった弁別から概観して、ワールドカフェ研究について見えてきたことは4つある。1つめに、質的研究として事例の成功の意味づけや効果・効能の意義を強調するあまり、たとえばリーダーシップの重要性や対話のよさ、倫理性を、いうなれば思弁論的で当為論的な議論に帰着させる論説が多くみられたことが挙げられる。2つめに、対象フィールドやその事例の選び方として、当然ではあるが適正な実践者によって適正に用いられた手法として、効果がなかったという報告はなく、その事例にのみいえることである限定感が否めない点があったことが挙げられる。なかには、分析を通して、機能と効果はそれがワールドカフェがもたらしたもののなのか、その会合自体にあったのかが峻別できていないものもあった。取り組み自体が“よき取り組み”であるという前提に立ってしまうとそもそも批判的分析の志向をもつことができず、ワールドカフェの分析は曖昧にならざるを得ない。3つめにいえることは、事例による手法研究としては、実践知の共有に主眼が置かれているものもあり、運営術の読み解きとしてはどうしても文脈依存性が高くなってしまいう傾向もあった。その特異な事例からはたしてワールドカフェ全般にいえると敷衍してよいものかどうか読み方を迷うものもあった。最後に、プログラムを全体として捉えているものが大半で、その部分への焦点化はほぼみられなかった。これは、分析の枠組みがあいまいで、理論化の意義づけが薄いという研究アプローチにもつながっており、再構成・再現へのプロセスが見えてこないものが大半であった点を挙げておく。とくに、ワールドカフェのメカニズムの根幹をなすであろう他花受粉についてその内部の分析がほぼ皆無であることは大きな欠落である。これらの深刻な限界や欠落は、これからのワールドカフェ研究にとって重要な示唆である。

しかし例外的に、以下のような研究もあった。よき成功事例という意義や当為論的な議論、運営側からの読み解きに終わらせない、批判的分析の志向の研究である。

1.6 ワールドカフェへの批判

1.6.1 研究上のワールドカフェ批判

「創造的で革新的なアプローチ」「建設的な対話のプラットフォーム」といったその援用への評価が確立しつつあり、「対話を通じた集合知の創出」や「視野が拡大し共感性が増しモチベーションが向上する教育効果」に一定の成果はあるとされつつも、批判的な研究もなされている。Aldred (2011)は、これらのワールドカフェの評価や効果に関していくつかの指摘を行っている。それは3点あるという。すなわち、1つは、「参加者のポジティブな対話に重きを置くあまり、貧困や不平等といった構造的な問題を「認識の誤り」程度に矮小化してしまう」こと、1つは、「安易なエンパワーメント理念の押し付けによって参加者をスティグマ化してしまう恐れがある」こと、そしてもう1つは、「善意の対話さえすれば自ずとよい変化が生まれるという疑わしい前提が強化されてしまう」ということである。前出の Löhr et al. (2020) も、質的データ収集の有望な参加型手法として評価しつつ、参加者構成やファシリテーションの仕方によって偏りが生じうること、テーブルクロスや成果物などに残されたメモと口頭でのやりとりとの対応づけが難しく、データのトレース可能性や分析の体系性が損なわれるおそれがあること、さらに、場の雰囲気や「楽しい経験」としての側面が強調されるあまり、批判的・対立的な意見や少数者の声がじゅうぶんに引き出されない可能性があることなどいくつかの限界を指摘している。畑中・森田 (2015) は「ファシリテーターの育成と議論結果の活用法に課題が残っている」と述べている。Ropes & Douven (2020)はワールドカフェ研究は「逸話的な報告が多いわりには実証研究が乏しい」と概観している。

過度に「参加者のポジティブさに重きを置く」こと、「安易なエンパワーメント理念」を押し付けること、「善意の対話さえすればよいという疑わしい前提」の強化という Aldred (2011)の批判は、ワールドカフェのプログラムそのものに由来しているとみていい。「たいせつな質問」のみに依拠しつつあとは会話のままにすることで、「参加者のポジティブな対話に重きを置く」ことが強調されてしまい、構造的な問題に迫りにくい会話となる可能性があろう。「即興」性と開放性を担保しようとして対話を奨励することが、「安易なエンパワーメント理念の押し付け」となり「参加者をスティグマ化してしまう恐れ」があろう。「善意の対話さえすれば自ずとよい変化が生まれるという疑

わしい前提が強化されてしまう」のは、テーブルでの会話へ不介入であることがそれを助長している可能性がある。

しかし“実証”という点からこれらの議論をみるなら、ワールドカフェの会話の実践において、「参加者のポジティブな対話に重き」を置いたがゆえに構造的な問題に迫りにくい会話となる現象は、“ほんとうに実際に”みられるのか、あるいは、「安易なエンパワメント理念」の押しつけを参加者が感じそれへ対処したというような“具体のふるまい”がそこにみられるのか、あるいは、「善意の対話さえすればよいという疑わしい前提」を“参加者が感じとった現象そのもの”は立ち現れるのか、“実証的には”まだあきらかではないともいえる。

これらの批判もまた、メカニズムの解明に依拠しない思弁論的な見立ての議論であるとする。参加者の会話がどの程度対話的であるかという実相や“具体のふるまい”、“立ち現れる現象”の実証的な分析で、他花受粉のメカニズムが解明できたとしたらこの議論は変わるはずである。実際の会話をみていきながら、「たいせつな質問」が提示されたあとのふるまいや、対話的な「即興」性や開放性を体現したような会話、もしくは、「善意の対話」に終わらず変化（変容）に至った会話など、これらの現象から、矮小化した認識論やスティグマ化した縮こまりや変化（変容）のなさではない「知識創発」の証左が得られたとしたら、きっとそのときにやっと、この批判に応じることができるだろう。そのためにも、「知識創発」が引き起こされたその会話の実際を、相互行為として分析的にみていくことが、ワールドカフェ研究の新しい潮流には欠かせない。その「知識創発」が引き起こされるメカニズムの証左は、相互行為としての会話にみることができるとは必ずである。

1.6.2 実践者からのワールドカフェ批判

もうひとつ、研究領域ではないが実践者からの批判への応答も本研究の命題としたい。以下の批判は、実践者たちによる議論の中で取り沙汰されたものである。国際ファシリテーターズ協会日本支部が主催した2015年のシンポジウム「ワールド・カフェ20周年記念日本イベントーワールド・カフェが開く社会・組織・コミュニティの未来ー」に寄せられた実践上の批判的課題はおもに3つであった。「楽しいだけだと言われてしまう」「議論が深まらない」「合意形成に至らない」の3つである（国際ファシリテーターズ協会日本支部、2015）。これらの批判に応答するためにも「知識創発」が引き起こされる会話、相互行為を分析し、そのメカニズムを示さなければならない。一見「楽しいだけ」に見える会話で、その相互の応答としてどんな談話が進行しているのか、あるいは

は進行していないのかは実証的にあきらかにされるべきであろう。一見「議論が深まらない」ように見える会話で、談話を通してどんな変化が起きているのか、あるいは変化は起きているのかも、同様である。そして、いわゆる明示された決議としての合意形成ではないとしても、創発の成果を参加者が集合知とみなしたり、あるいは最終的に Brown & Isaacs (2005 香取・川口訳 2007) がいうような「行動の優先順位」が特定できて、それを合意形成の一種であるとみなすことができたりはするのか、しないのか、これも実証的な命題である。会話レベルの会話分析、あるいは談話レベルの談話分析といった相互行為の分析手法を用いて、これらの談話の進行やそれを通しての変化、あるいは、創発や集合知と呼べるような到達、集合的達成を検討することによってはじめて、これらの実践者からの批判に応答することができるようになるだろう。すなわちワールドカフェへの批判の大半は、ワールドカフェのメカニズムがブラックボックスのままであることによって生じている理解の揺らぎ、あるいは理解の担保のなさと捉えることができるのではないだろうか。そしてこれらの批判者こそがワールドカフェがどのように知識創発を達成するのか、その説明を求めているはずである。

1.7 先行研究の限界～逸話批判を超えて

「逸話的な報告」を超えるようなすぐれた考察が加えられた研究は少なくないにせよ、ここまでみてきたように先行研究の多くは、ワールドカフェをプログラム全体で捉えたうえでの議論、エビデンスとしての機能や効果の提示や理念的・思弁的な議論にとどまっている。いかに組織開発はなされるべきか、いかに教室を主体的な学びに基づくものに誘導していくか、地域住民にいかに当事者意識をもたせるか、これらはいわばワールドカフェを使う側、対話させる側に立つ論述のスタンスであり、主催意図に基づく分析群であろう。

社会へのワールドカフェの援用が広がるにつれ、その対象や希求は多様化していく流れにあり、理念と思弁で構成されるエビデンスでは、援用に誤謬が生まれる可能性も同時に拡大していく。ワールドカフェに招待された者、参加する者はどのようにワールドカフェを過ごしているのか、といったふるまいや、どのような行為によってワールドカフェが構成されているのか、といった相互性、他花受粉は必ず起きるのか、どうやって何が起きるのか、といったメカニズムへの焦点化、それらの分析が待たれていると考える。公共政策形成や臨床研究、研究デザインとしての手法となるとさらに、ワールドカフェ内部で起きていることがブラックボックスのままではその援用は立ちゆかなくな

る。

ここまでみてきたように、ワールドカフェは「創造的で革新的なアプローチ」として「集合知の創出」に資するとされる一方で、新しい知識の生成を目的とする援用が多数に上るにもかかわらず、Brown & Isaacs らオリジネーターや多くの実践者・研究者の報告も成果の示唆にとどまるものが多く、研究成果の蓄積は限定的である。すなわち、成果がいかに関わるのかというメカニズムに焦点化した研究、それがどのようなやりとりから成立するのかという相互行為の研究（ワールドカフェの内部で実際に何が起きているのか）は少ない。先行研究の限界はこの点にある。

新しいワールドカフェ研究の潮流として、次を命題とする。(1)「善意の対話」として「逸話」化しない、(2)「安易なエンパワーメント理念」を前提としない、(3)「参加者のポジティブさ」に過度に依拠しない運営のもとでの行為に着目する、(4)「意見の集約方法」および「議論結果の活用方法」に具体的示唆を与える研究である。これは「実証研究」であり、研究デザインとしての「データ収集のモデル」を提示しつつ、成果がどのように生まれ、どのようなやりとりから成立するのか、ワールドカフェの内部で何が起きているのかに迫るものとする。端的に言えば、分析的・メカニズム志向の研究こそが、社会実装が進み普及の速度が加速する現在、急務である。その指針として、本研究は相互行為に着目し、他花受粉を比喻ではなく現象として捉え直し、そのメカニズムを明らかにする。

ここで、先に確認した他花受粉概念に代表される創発的対話の特徴を踏まえ、本研究が取り組むべき課題とその理論的・実践的意義を明らかにする。とりわけ焦点を当てるのは、参加者どうしが互いの発言を引用しあい、再構成しながら新たな意味や理解を生成するプロセスである。ワールドカフェにおける創発は、単なるアイデアの交換ではなく、異なる視点の交差と相互参照による「知の生成」の過程であり、そこに本研究の核心がある。すなわち、参加者の移動や他花受粉の構造的効果は理論化が進む一方で、実際の会話において何が起き、言葉がいかに関わり、別文脈へ移植されるのかについては、詳細な検討を要する。

本研究は、ワールドカフェの知識創発の実相がいまだじゅうぶんに記述・分析されてはいない点に着目し、相互引用的な発言の機能と、それがいかに関わり、参加者相互の理解や知識創発をいかに支えるかを明らかにするものである。次章では、以上の問題意識に基づき、本研究の具体的な構成と方法を提示する。

II 新たなワールドカフェ研究へ ～他花受粉と知識創発

前章では、ワールドカフェの概要とプログラムの開発・普及の経緯を概観し、香取(2015)の目的の4分類を手がかりに先行研究の論点を整理した。そのうえで、他花受粉概念に新たな光を当てるといふ研究の視座を明確化した。ワールドカフェの特質をメカニズムの面から解明する本研究では、他花受粉を比喻ではなく現象としてとらえ、その実相としての相互行為、引用、創造的理解に焦点化して分析を行う。

さらには、他花受粉同様に重要と思われるワールドカフェ上の概念「集合的な発見」というタームにいかにして迫るか、その検討を企図する。これを本章で詳述する。「集合的な発見」の検討に際しては、付随して、集合知や集団のあり方、集団の創造性といった周辺概念にもふれておく。分析の具体的な方略としては、実証研究として創発の現象を把握するために「引用」の語り方に注目するのみならず、その機能について検討していくこととする。

本章では、他花受粉の操作的定義と研究課題を明確にし、後続の分析枠組み、相互引用の機能の分析へ接続する。まず、ワールドカフェのプログラムの構成を確認する。これは「他花受粉」を自己組織化する設計を理解し、後続の指標を解釈可能にするための前提である。つづいて、研究の枠組みとねらいを提示する。

2.1 ワールドカフェのプログラム

ワールドカフェは多数の実践者がそれを援用し多数のバリエーションをもつにいたっているが、プログラムの根幹は変わっていない。参加者全員を小さなテーブルに小分けし、共通の問いを投げかけ対話を促進するような会話を奨励し、短時間で成員を入れ替える。終盤では最初のテーブルに帰還させ、集合的な発見のふりかえりを行う。

他の対話セッション、ワークショップ、会議プログラムの形式と比較しても、ファシリテーターなど進行役の介入が少ないことも特徴のひとつである。時間や環境の管理は進行役によってなされるが、テーブルでの会話に関しては基本的には不介入とされる。

ワールドカフェの標準的なプログラムでは、参加者全員を4、5名ずつ小さなテーブルに小分けし会話を開始する。会話のきっかけとなる1つないし複数の共通の問いを全テーブルに投げかけ、対話を促進するような会話を奨励する。20～30分といった短時間で成員を全体的に途中入れ替えする。最後の成員入れ替えでは最初のテーブルに帰還

して最初の成員に再会する。そののち、全員で集合的な発見をふりかえる。

会の進行役（ファシリテーター）は「カフェホスト」とよばれ、リラックスできるような空間をしつらえたり、テーブルでの走り書きのために書き込み可能な紙製のテーブルクロスを準備したりと環境を整える役を担う。そして、「たいせつな質問」とよばれるいくつかのテーマの提示をして会話を見守るガイド役を務める。この標準的な設計に則り、以下、ワールドカフェの進行について詳細に記す。標準的なプログラムでは、1つのテーブルは4～5人で構成し、2～4回の成員の入れ替えを行う。2～4回の成員の入れ替えは、3～5ラウンドと数えられる。Lenzo (2015) は、そのなかでも「4 パーソン 4 ラウンド（1つのテーブルに4人で、4ラウンド）が望ましい」と提唱する（いっぽうで Lenzo (2015) は、それ以外の構成のバリエーションを拡げていくことも推奨している）。

参加者が着席したのち、プログラムの冒頭において、「カフェエチケット」とよばれる規範が示される。カフェエチケットのおもなものは、次の通りである（Brown & Isaacs, 2005, 香取・川口訳 2007）。

- ・あなたがたいせつに感じていることに焦点を当てましょう
- ・あなたの考えと経験に基づいて貢献しましょう
- ・理解するためによく聴きましょう
- ・アイデアをつなげましょう
- ・パターンや、洞察や、深い質問に、共に耳を澄ませましょう
- ・遊んでください！ いたずら書きをしてください！ 絵を描いてください！

カフェエチケットとともに、発言を秩序だったものにするために、発言を制御するトーキングオブジェクトが用いられたり、発言のルール（例えば、「発言を短くする」など）が示されたりすることもある。

標準的なプログラムの進行では、「たいせつな質問」がもっとも重要とされてきた。「たいせつな質問」は、全員に対して示される全ラウンドを通した会話のテーマである。質問への解答案を編み出すことのみに焦点化するのではなく、それを会話のきっかけとして、生成される相互の発言に耳を傾け、ときとして「たいせつな質問」が生み出す「さらにたいせつな質問」や「たいせつな質問の意味」を発見することを奨励することもある。テーブルごとに違う「たいせつな質問」を置くプログラムや、「たいせつな質問」をラウンドごとに示すプログラムなど工夫がなされることも少なくない。

ラウンドの切れ目でのテーブル間の移動、すなわち成員の組み替えは、日本語では“席

替え”とよばれることが多い。席替えに際しては、テーブルを動かない成員（テーブルホスト）1名を置く。昨今では、テーブルホストを置かずできるだけランダムな席替えとなるようにするプログラムや、各テーブルひとりだけが席の移動をするプログラムなどバリエーションが広がっている。

終わり方にも特徴がある。たとえば、一般的なグループワーク（協同学習）にみられるような発表はない。代わりに、テーブルでのラウンドのあと、全体セッションとよばれるふりかえりの場が設けられる。Brown & Isaacs (2005 香取・川口訳 2007) は、全体セッションの類型を3つ提示している。

- ・すべてのテーブルクロスを中央に集めて周りに集まって全員で会話する。あるいは、順番にふりかえりを発言する。場合によっては、それをグラフィック・レコーダーが、フリップチャートや壁面に描く
- ・参加者ひとりひとりが大きめの付箋に洞察の成果となる言葉をひとつずつ書き壁にすべて貼り、全体的な感想を述べあう（モンスター・スティッキー・ウォールとよばれる）
- ・テーブルクロスの書き込みを順次見て回る（ギャラリー・ツアーとよばれる）

以上が、ワールドカフェのプログラムの特徴として挙げられるものである。これらはすべて知識創発へ向けた設計と捉えられる。すなわち、参加者全員を小さなテーブルに「分散」すること、共通の質問という「特定の文脈」に依拠しつつ、小さなテーブルごとに「並列的に処理される」冗長性を確保すること、そして短時間で成員を入れ替えることにより、対話を促進する「即興」性と開放性を確保するしかけが組み込まれている。とくに、短時間で成員が入れ替えられることを介する談話要素の再結合は、操作的定義としての「他花受粉」に焦点化できるものとして、本稿が重要視するものである。さらに、テーブルでの会話に不介入という「中枢の命令によらない」状態の保持や、全員で集合的な発見をふりかえることによる全体ネットワークの再結線といった構成も、知識創発を促進する。要するに、これらの設計群は、他花受粉を自己組織化しつつ知識創発を駆動する枠組みである。

以下の節では、ワールドカフェに即した知識創発の理解のしかたを整理し、他花受粉（席替えや談話の再結合）との対応関係を明確化する。この概念の読み解きと援用を、後続のワールドカフェの相互行為分析の補助線とする。なお、プログラム上の主要な概念の1つである「集合的な発見」については第VI章 総合考察に集約して論じることとする。

2.2 知識創発としてのワールドカフェ

ワールドカフェにおける相互引用がどのようにして知識創発をもたらすのか。研究の枠組みを示すにあたってその前段で、創発の概念を整理しておく。

創発論の初期の体系的論述の一つとして Polanyi (1966 高橋訳 2003) を挙げることはできる。Polanyi (1966 高橋訳 2003) は創発 (emergence) を「新しい包括的存在を生み出す創造的なプロセス」であると位置づけ、「下位レベルでは明らかでなかった新しいプロセスを通じて、上位レベルが存在するようになること」と述べる。また、「上位レベルの現象は下位レベルから派生するが独自の性質をもつ」とも述べている。

創発は、認知科学においてもこれまで重要なテーマの1つとして扱われてきた。認知科学では、認知過程や知能の発達、知識の生成、個人内の動的現象から社会的相互作用による現象まで幅広く研究されるなかで、創発を、要素の相互作用によって刻々と創り出される現象とみなしてきた。たとえば、Hopper (1987) は、「文法は、使用される特定の文脈によって絶えず形を変えていくという創発的な現象である」とした。Smith & Thelen (2003) は、発達を「リアルタイムで起こる多くの分散化された局所的な相互作用の創発的産物であるとみなすことができる」と主張した。また、Gazzaniga (2018) は、「意識は、脳の多くの並列プロセスの創発的特性である」とした。創造的思考の研究では、創発はメタファーやアナロジーなど異なる概念の組み合わせが新しい洞察や新たな意味を生む過程として分析される現象として捉えられるとした (鈴木, 2003)。

認知プロセスの研究、相互作用による社会的認知の研究において鈴木(2023)は「知識は創発される」としている。そのうえで、「還元不能性」、および「意図の不在」という2つが「知識が創発される」ことの重要な要件であるとも述べている (鈴木, 2023)。とくに「意図の不在」に関しては、「中枢の命令によらない要素同士の相互作用の集積によって、全体として特異なシステムが生み出される」ことが鍵であるとしている (鈴木, 2023)。

まとめるなら、認知科学は創発を、「創造的で動的なプロセス」であって「還元不能かつ予期不能」であって「下位レベルから派生する以上の上位レベルの特性をもつもの」といった汎用の創発観からさらに一步踏み込んで、「分散化された局所的な相互作用によって刻々と創り出される現象」であって、「特定の文脈に依拠しつつも意図は不在で中枢の命令によらないもの」であって、「異なる概念の組み合わせが新しい洞察や新たな意味を生む参加型で並列的に処理される過程」といった創発観に特化していると捉え

ることができる。

Brown & Isaacs(2005 香取・川口訳 2007)は創発の概念をワールドカフェにおける他花受粉の定義に語用したのみであって、その委細を論じていたわけではない。そのために本研究において創発を論じるためには、再度ここで定義しなおしておく必要がある。それは、他花受粉の意図に沿うもので、認知科学における概念を援用しつつ、ワールドカフェの実証研究を行うことに資する定義としてである。ワールドカフェにおける創発とは、「相互作用によって異なる概念の組み合わせが生まれ、その交流以前にはなかった新たな知識が生成される」他花受粉の結果であると定義しておく。いいかえるなら、他花受粉は、ホールシステム・アプローチにいう「集合知」を生成するプロセスでありそのプロセスには創発という現象が含まれているということである。ワールドカフェの成果は、他花受粉という創発のプロセスによって「集合的な発見」としてもたらされる。

ワールドカフェ研究において前出の Fouché & Light (2011)や Löhr et al. (2020)が捉えようとした他花受粉の要諦に近い研究が別の研究領域にある。たとえば、Paulus & Nijstad (2003)は、集団の創造性研究において「しばしば創造的なアイデアは、集団内の文脈において、既存の知識要素と既存の知識要素との新しい組み合わせや再構成から生まれる」と述べている。集団の創造性は知識の相互作用における「新しい組み合わせや再編成」であるという。Fischer (2000)はグループダイナミクスの文脈で、「創造性は認知の分散性と、既存知識の再構成および再文脈化による産物であって、それは、実践共同体の中での知識の協働的な組み合わせによって生じる」としている。

さらには、前出の Sawyer (2007)は「即興の足場かけ」(improvisational scaffolding)の概念を提唱し、「即興が成功する場面では、参加者たちは互いのアイデアを受け入れ、即座にそれを発展させる。あらゆるアイデアが、次のアイデアへの跳躍台となる」と主張している。また、その営みの継続は「未完成なアイデアであっても受け入れ、発展させる支援的な環境を創り出す。そして、すべてのアイデアが次のアイデアの基盤となる構造が築かれる」として述べている。これらの、集団の創造性、知識の相互作用、既存知識の再文脈化、「即興の足場かけ」といった概念も、ワールドカフェの創発の検討とあい通ずる視座を与える。

創発という概念を足がかりにすると、ワールドカフェのメカニズムの研究は以下のような問いをもつことができる。すなわち、ワールドカフェの創発においては、新たな知識が生成される「相互作用によって異なる概念の組み合わせ」がなされる現象は、実際にみてとることができるのか、である。さらにはそれを細かくみていくには、以下の命題が立つ。知識生成は、「還元不能かつ予期不能」で「上位レベルの特性をもつもの」

の形成に至る現象として見いだすことができるのか、またそれは、「分散化された局所的な相互作用によって刻々と創り出される現象」なのか、あるいは、「特定の文脈に依拠しつつも意図は不在で中枢の命令によらないもの」なのか、また、「異なる概念の組み合わせが新しい洞察や新たな意味を生む」過程は「参加型で並列的に処理される」ものであるのか、といった命題群である。ワールドカフェのメカニズムの研究は「創発」の現象を追う研究である。

この「創発の現象」は、「知識創発」のプロセスとして以下のように捉えることができると考える。すなわち、成員相互の「発話の交通（通い合い）」によって、それまで明示化されていなかった知識や意味が可視化・構造化されていく点で、新たな意味を獲得するプロセスであると。ここでいう知識創発は、単なる情報交換ではない。それは「多様性」を内包した会話（対話）による知的資源の生成を意味している。のみならず、ワールドカフェは、創発研究にいう「分散化された局所的な相互作用によって刻々と創り出される」創発や、「特定の文脈に依拠しつつも意図は不在で中枢の命令によらない」創発、その「参加型で並列的に処理される」さまを実践として体現しているものである可能性が高い。

「知識は創発する」と述べる鈴木（2023）は、知識は受動的に蓄積されるものではなく、能動的な相互作用から生まれる現象であり、生きたシステムであると論じたうえで、この知識の創発的性質には次の4つの側面があると述べている。それは、その都度新しい表象や行動パターンが生成され、新たな解釈が生み出されるという生成性、一見無駄に思える並行過程や重複した表現が多数存在することになるという冗長性、局所的な要素間の相互作用が駆動するという局所的相互作用性、環境に対して開かれた系であるという開放性の4つである。Stacey（2001）も、組織における知識創造を、「ローカルな相互作用からその場で意味が立ち上がるプロセス」と捉え、あらかじめ与えられた青写真や計画やビジョンに還元できない創発的な側面を強調している。Sawyer（2003）は、「即興における創発」を分析し、グループの創造性はメンバー個々の才能以上に相互行為のダイナミクスに依存すると述べている。知識や意味の形成は、そのグループ内の（対話といった）相互行為そのものに埋め込まれた現象とみなすことができるものである。

さらに、局所的な相互作用から集団全体の知識がどのように生成されるかを探る研究が、組織開発や合意形成の分野にある。対話型組織開発を提唱する Bushe & Marshak（2015）は、より多様な声を引き出し、成員どうしの対話の質を変え、新たな発想を生むような問いかけを行うことで創発的な変化を導けるとする創発のプロセスを提示して

いる。野中・今野(1998)は、知識は単なる情報と異なり文脈から切り離せないとしたうえで、知識創造のための SECI モデルの各モード（共同化／表出化／連結化／内面化）を促進する具体の「場」を提供することで自己超越的な知識創発が起こりうることを、多数の事例から示している。合意形成の分野では、武居(2017)は、個人間の相互討議から集団的合意がどのように創発するかを、エージェント・ベース・モデル（ABM）理論として提示している。合意形成の場の設計においては、まず小さな単位での対話を積み重ね、その逐次的な相互作用ののち集団全体での討議に移ることで合意に達しやすくてきること、すなわち「局所的な創発効果が全体合意につながる」メカニズムを示している。意見ダイナミクスモデルと呼ばれるモデル（たとえば、Hegselmann & Krause, 2002 など）でも「局所的同調・相互作用の繰り返し」から最終的に、連結したネットワークで全員の意見が収束してコンセンサス（全会一致）が創発するメカニズムを示している。

ワールドカフェの知識創発は、「分散化された」小さな単位での局所的相互作用から連結された全体ネットワークへ向かうメカニズムによってもたらされる。「即興」とダイナミクスを伴い、新たな意味や知識が逐次的に生成される「その場」が生む創発である。「特定の文脈」に依拠しつつ、「並列的に処理される」冗長性を保ちつつ、開放性の空間で起きる創発である。これらの「分散」、小さな単位、「並列」、全体ネットワークへの連結といった諸事象は、「参加者を文字通り移動させる」他花受粉としてプログラムに意図的に設計されている。プログラムにおいては、開放性や非介入（中枢の命令によらない状態）の保持や、新たな発想を触発する問いかけの設計にも注意が払われている。

以上を踏まえ、以降では他花受粉を相互行為として捉え直し、席替えを介して談話要素が持ち込まれ再結合・再文脈化されるプロセスを、引用などの形跡に基づいて検討する。

2.3 「相互行為」としての他花受粉会話

他花受粉は、席替えを介して談話要素が持ち込まれ、新たなテーブルで再結合・再文脈化される過程である。ゆえに、その会話の実際を相互行為として観察することが鍵となる。では、Brown & Isaacs (2005 香取・川口訳 2007)は「会話」をどのように捉えているのか。彼らは、「わたしたちの未来についての物語やイメージは会話を通して浮かび上がってくる」と述べている。そしてこのときの「会話」とは、ワールドカフェによって、「通常の表面的な内容の会話」が「大切な会話」に変化したときのものであると

いう。そして「大切な会話」に変化する条件はそのふるまいが「対話的であることにほかならない」のだという。とすれば、本研究が着目すべきは、ワールドカフェにおける「会話の変化」を示す相互行為上の形跡である。具体的には、他のテーブルでの発話の引用、トピックの再結合、および指示詞や主語の置換といった他花受粉の証拠を抽出し、会話が対話的に変化したことを実証的に示す。ここに焦点化するときワールドカフェの実証研究の道が開かれる。

ワールドカフェのメカニズムに関する研究の中核は、この対話的な現象が実際のワールドカフェの会話の中に見いだされるのかを、形跡の追跡と証拠の発見によって検証することにある。すなわち、Bakhtin (1929, 桑野訳 1989) のような「意味」の新しい捉え直しは、どのようになされていくのかを実証するという命題である。かつ、それが「具体的な発話の交通（通い合い）という他者との関係を通して」生み出されたものであるのかを実証するという命題である。それらを志向するならば、「引用という〈他者のことばの伝達〉の形式」を追っていくことが解法となるであろう。そしてその〈他者のことばの伝達〉の実証は、ワールドカフェにおいて形成されているであろう「別なテキストへ吸収や変形がなされる引用のモザイク」をして、「協調による相互作用を含みつつ、創発に至るような対話的な会話へ変化する」ことを明示することになるだろう。

ワールドカフェのメカニズムが「協調による相互作用を含みつつ、創発に至る対話的な会話へ変化する」ことにあるのなら、研究の焦点は次の3点に絞られる。すなわち、(1)他花受粉(席替えを介する談話要素の再結合)、(2)知識創発(相互作用からの生成)、(3)会話(相互行為のプロセス)である。

他花受粉への焦点化からは、ワールドカフェの行為やしかけの実証的な研究ということが志向される。「参加者を文字通り移動させる」設計から生じる会話の応答の実際を追いながら、多様性と密度の高まり、異なる視点の連結、成員入れ替えの効果、さらに他花受粉が引用という〈他者のことばの伝達〉を伴うかを実証的に検証する。

知識創発への焦点化からは、認知科学における創発の概念を現象面から検証する研究ということが志向される。すなわち、還元不能・予期不能な上位特性の生成が、分散した局所相互作用と、特定の文脈への依拠／中枢命令の不在のもとで、異概念の組み合わせによる新たな洞察として並列的に進行するかを確かめる。

会話への焦点化が実際の分析の根幹をなす。「相互作用 (interaction)」を「相互行為 (interaction) のプロセス」として、具体的な発話の交通（通い合い）を分析することへの志向がそれである。これにより、表層的な会話から「大切な会話」への転化、行動としての会話の調整、および引用（他者のことばの伝達）による意味の再解釈を、形跡

に基づいて捉える。

以上の3つの焦点は、独立の各個研究ではなく、ひとつの総体として目的を果たす。この立場から、以下では先行研究への応答を示しつつ、分析設計を具体化していく。

他花受粉、創発、「集合的な発見」、会話に着目する全体性の研究、行為やしかけのデータ分析、現象の検証的研究、「集団の創造性」の研究、「相互行為のプロセス」の研究は、先行研究を精査した小括への応答でもある。ワールドカフェを用いる側・対話を促す側の理念的・思弁的議論が多い現状に対して、メカニズムを解明する研究の重要性は高い。ワールドカフェが「集合知の創出に効果を発揮する」とされる以上、内部で何が起きているのかに関する知見を明確化してこそ、ワールドカフェを「創造的で革新的なアプローチ」たり得るものとして位置づけられるだろう。

少なくとも Ropes & Douven (2020) が指摘する「逸話的な報告が多いわりには実証研究が乏しい」というワールドカフェ研究の概況を更新し得る成果が、本研究から提示されることが期待される。また Aldred (2011) が批判するような、「善意の対話」への「逸話」化、「安易なエンパワーメント理念の押しつけ」、「参加者のポジティブさ」への過度の依拠に対しても、実証的知見に基づく応答を示すことを目指しておく。

ワールドカフェの会話は、凝縮された対話である。会話の途中でテーブルのメンバーが入れ替えられ、半ば保持された文脈／半ば新しい文脈でのやりとりが進むという、「分かれたれ、再統合される」会話の実践であることは既述のとおりである。この対話過程を追う検証的研究、行為やしかけのデータ分析、「相互行為のプロセス」の研究は、「対話」研究の解像度を高める貢献となる。対話が「集合知」としての新たな知識を創発する過程、集団が創造性を発揮する過程、それらを包含する他花受粉の概念は、ワールドカフェを越えて援用可能な知見となり得る。本研究は、集団の創造性に関する研究であり、同時に集団内部の対話に関する研究でもある。対話の相互作用において、〈他者のことばの伝達〉に着目してその性質を明らかにするなら、その内部性・外部性の解像度を高め得る。さらに Brown & Isaacs (2005 香取・川口訳 2007) のいう「個人と集団の調和」や Bakhtin のいう「創造的な理解」(桑野, 2020) に関する考察の進展にも資する。この意味で、ワールドカフェは、対話・相互作用・集合知の生起過程を観察し得る有効な実験場である。

2.4 本研究の枠組み

前節までにおいて、以下の諸点を提示した。ワールドカフェのプログラムは「他花受

粉」を自己組織化するしかけの具体として理解可能である。また、知識創発に有効と考えられる「分散」、「文脈」、「並列的处理」、「即興」、「その場」の構成といった特質が備わっていることも示された。さらに、他花受粉の概念整理と分析に資すると思われる知識創発概念の検討から、ワールドカフェにおける創発は「相互作用によって異なる概念の組み合わせが生まれ、その交流以前にはなかった新たな知識が生成される」過程として、他花受粉の結果であると捉えうることを明らかにした。加えて、引用という相互行為、〈他者のことばの伝達〉によって「意味」の新しい捉え直しが生じ得るという視点も提示した。さらには、成員入れ替えによる発話や文脈の分散と統合、組み合わせ密度の高まりといった事象が、ワールドカフェの会話に立ち現れる可能性についても検討した。

〈他者のことばの伝達〉の発話の現れとその元の発話の形跡も、「分散化された」小さな単位での局所的相互作用が、連結された全体ネットワークへ向かう流れも、そして、「その場」で起きる「即興」とダイナミクスのありさまも、相互行為としてすべて確認されるはずである。新たな意味や知識が逐次的に自己超越的に生成されるようすも、依拠する「特定の文脈」と「並列的处理」の関係も、「中枢の命令によらない」空間のもつ開放性も、同じくすべて実際のワールドカフェの会話の実証的分析によってあきらかになるはずである。これらの、「その場」で起きている会話・談話、あるいはそれを通しての変化、さらには、それによる集合的達成も、いずれも相互行為として確認されるだろう。

相互行為 (Interaction) は Goffman (1967) を嚆矢の一つとされる研究領域である。「相互に直接そばにいる参加者どうしが、互いの行為に及ぼす影響の連鎖」と定義される相互行為は、日常生活において秩序を維持するための人々の営みである。人々の日常会話や対人接触の場面での役割や暗黙のルールなどを研究対象としている。分析手法としては会話分析が用いられることが多い。

会話分析 (Conversation Analysis) は日常会話の構造を詳細に記述・分析することを目的とした手法で、Sacks (1974 など) や Schegloff (1973 など) などによって確立された。収集された会話の録音・録画をもとに逐語的な書き起こしを行い、微細なやりとりまでの分析を重視する。人々が日常会話をどのような規則に従って共同で組織化しているかを明らかにするために、話者交替のタイミングやあいづち、重なり、間など会話の細部に焦点化して分析する。会話分析は、その厳密さをもって分析者の主観を排し参加者の示す行為に即して記述を行う点に特徴がある。Schegloff (1997 など) らが主張する、参加者が文脈の何に志向を向けているのか、明示的に共有されているもののみに基づいて

分析を行うべきであるという厳密さへの傾注は、会話分析における分析の一貫性を保つ上で重要な意義があるとされる。いっぽうで、談話分析の研究者たちは別のことにも価値を置く。

談話分析 (Discourse Analysis) は言語を文脈の中で捉え、その使われ方によって生み出される意味や社会的な作用を分析するための幅広いアプローチの総称である。Brown & Yule (1983)は「談話分析は、言語形式自体の記述に限定せず文脈の中で実際に用いられるときの自然な言語を対象とし、その言語が果たす社会における機能や目的にも注意を向けなければならない」としている。言語データの背景にある社会的・文化的文脈や発話の目的・効果にも目を向け、発話中の言葉遣いがどのような現実認識や社会関係をつくり出しているかを読み解いていくことが、分析者には求められる。Gee (1999)は言語の非中立性について「言語は常になんらかの視点から使用され、必ず特定の文脈の中で生起する」と述べている。Fairclough (1995)は言説に潜む権力関係や発話による正当化の機能についてあきらかにしている。van Dijk (1991)は認知モデルと談話理解の関係を研究し、「文脈とは外的な社会状況そのものではなく、参加者がその状況を精神的に定義する方法であり、この文脈モデルはエピソード記憶に保存され、参加者が適切に談話を生成し理解するための指針となる」と述べている。さらに続けて「文脈モデルは、話し手と聞き手のやりとりによって更新され続ける」と述べている。

会話分析が、参加者に明示的に共有されている文脈の何に志向を向けているかを分析するのに比して、談話分析は、文脈の中での使われ方によって変わる発話の目的や効果、認識や関係性も読み解きに含めたうえで、「その場で」生み出される意味や社会的な作用を分析する。談話分析は通例、会話分析よりも解釈学的で柔軟なスタンスをとる。

ワールドカフェの「知識創発」が引き起こされる相互行為の分析には、談話分析が適していると考えられる。文脈と意味のレベルでの分析を旨とし、発話が文脈の中でどのように意味を生み、社会文化的な現実やアイデンティティを構築するかという構成性に迫ろうとする趣旨は、「その場」で起きている会話、およびそれを通しての変化と集合的達成を分析するというワールドカフェの会話の実証的分析と親和性が高い。

まず、小さな単位に分けられ「分散化」されて行われる会話を逐語録に起こしつつ、その談話の局所的相互作用を検討する。その談話分析からは「その場」で起きる「即興」とダイナミクスのありさまが見えてくるだろう。これは小さなテーブルに小分けされて「並列的処理」がなされる談話の分析である。次に、ワールドカフェでの会話の、途中でテーブルの成員が入れ替えられることに着目しその遷移を検討する。いわゆる“席替え”は、文脈の断絶を含む。断絶もされ保持もされる「特定の文脈」と「並列的処理」の

関係がここで分析できよう。その混交し交差する文脈のようすに「中枢の命令によらない」空間のもつ開放性をみてとることもできるかもしれない。新たな意味や知識が逐次的に自己超越的に生成される現象もみられるかもしれない。さらには、連結された全体ネットワークへ向かう終盤の流れの中で、変化や集合的達成を捉える検討を行う。この変化や集合的達成によって創発が、組織開発、創造、学習、合意形成といったワールドカフェの開催目的に成果をもたらすことが確認できるかもしれない。これらのワールドカフェにおける「知識創発」の現象はこのように、談話分析によってひもとかれることが見込まれる。

談話分析による、文脈と意味のレベルでの分析から、相互行為が「その場で」生み出す意味や社会的な作用が形而的に検討できたとしたら、次にはそれらの作用が知識創発をどう達成するのか、発話や応答の遷移を談話から追いたい。これは談話という単位よりさらに大きな単位でみていくべきであると考ええる。実際のワールドカフェでは、席替えが行われることで半ば「保持された文脈での会話」と半ば「新しい文脈で会話」が並存する中で、〈他者のことばを伝達〉すること、すなわち互いの言葉を引用しあうことがたびたび行われている。この「発話の交通（通い合い）」における〈他者のことばの伝達〉が談話の「多様性と密度」を高めていくのではないかと考えられる。談話分析を用いてこの「発話の交通（通い合い）のプロセス」をあきらかにするのであれば、そこでは「多様性と密度」を高めることに影響する〈他者のことばを伝達〉、すなわち引用しあうことを分析するための分析の視座が必要となろう。さらには、Bakhtin (1981, 望月・鈴木訳 1990)のいう「いかなる発話も他者の言葉を半ば隠された形で含んでいる」ということの現象面での証左としてこの現象が捉えられ、かつ、引用が「創発の現象」になんらか関与していることが確認できるとしたら、ワールドカフェのメカニズム解明のみならず「発話の交通（通い合い）のプロセス」の分析に奏功なはずである。個々の談話において生み出される意味や社会的な作用が、さらには談話という単位を超えて対話全体として「知識創発」を起こすそのメカニズムの証左を見いだせるという奏功である。

〈他者のことばの伝達〉、すなわち互いの言葉を引用しあうことは対話全体の「知識創発」にはどう関係しているのか。どう影響しているのか。その分析のアプローチは、Bakhtin の対話理論における引用概念から導きたい。Bakhtin (1929, 桑野訳 1989) は〈発話の社会性〉として注目した「他者のことばにおける声の引用」を3つのパターンに大別して提示している。間接話法的引用、直接話法的引用、変形された引用の3つである。このタームの概説を Bakhtin (1929, 桑野訳 1989) の整理からまとめるなら以下

である。直接話法的引用は「物化され客観的定義づけが濃い影を投げかける伝達」で、「話し手が引用元の意向を忠実になぞらえる」引用である。間接話法的引用は、「他者のことばの分析的伝達」で、伝達と同時に「翻訳や注釈をとまなう移し」の引用である。変形された引用は、「印象に基づいて」他者のことばを「きわめて自由に解釈し、しばしばテーマや主調音を示す」引用である。変形された引用は文学理論や談話論では自由間接話法とも呼ばれる。また、〈他者のことばの伝達〉は社会言語学などでは「報告された語り」と呼ばれることもある。

直接話法的引用と間接話法的引用は、明示されている引用である。直接話法的引用は「忠実になぞらえる」引用であるため、そして、間接話法的引用は「翻訳や注釈をとまなう移し」の引用であるため、ある意味談話の中で発話者も応答者もそれを明示的な表出とみなすことができる。しかし変形された引用は「きわめて自由に」解釈されているため、発話者の主観的主張と区別がつきにくく、明示的ではない。ゆえに研究上の困難さをともなっている。この研究上の困難さについてはいくつかの指摘がある。例えば、文学理論研究では自由間接話法（変形された引用）は語り手の文体の中に人物の意識や語彙が埋め込まれ、「語り手の声」と「人物の声」が重なり合うため、「誰の言葉か」の帰属が判別しにくい話法として論じられてきた（Banfield, 1982 など）。日本語学・談話論研究でも溝上(2016)が自由間接話法（変形された引用）は「周辺文脈と切り離しては成立しないため単独での分析では不十分であり、大きな談話単位で捉える必要があるにもかかわらず、そのような研究は非常に少ない」と指摘している。社会言語学ではTannen (1989/2007)が会話中の「実際の〈報告された語り〉」の分析には、話し手が元の発話をどう脚色・再創造しているかという語用論的・参加枠組み上の難しさがある」と指摘している。さらにはこれが、「元の発話を忠実に再現するのではなく、話し手自身が状況に合わせて再構成したフィクションである」なら〈報告された語り(reported speech)〉というより〈構築された対話(constructed dialogue)〉と捉えるべきであると主張している。

この研究上の困難さは重要である。この研究上の困難さゆえ、言語社会学や談話論が間接話法的引用と直接話法的引用とに傾注してしまうなら、ワールドカフェの研究はフィールドの 1 つとして変形された引用の実践データを提供できるということに意義を見いだすことができる。ワールドカフェの談話での引用は、大きくは引用元がその対話集会の場面内にあった「その場」での引用と、対話の時間や空間外といった外部にあった引用とに大別されるであろう。このときの場面内での、いわば相即的な、互いの発言を元にした引用に限れば、変形されていたとしても、引用の形式が明示されていなくて

も、それを場面内にたどることが可能である。ここでは、「忠実になぞらえる」直接話法的引用、「注釈をともなう移しとなる」間接話法的引用に加えて分析対象のバリエーションを「きわめて自由に」再解釈する変形された引用へと、拡張することが可能なのである。

席替えという仕掛けがあることで、その談話における「言語的手がかりが希薄」であっても、「語り手の言葉遣い」以外に席替え前の談話をトレースすることができるので、「誰の言葉か」遡って判別・認定することが可能である。対話の時間や空間外といった外部には及ばないにせよ、対話場面内での「周辺文脈」を含む「大きな談話単位で捉える」分析が可能である。そして話し手が「元発話をどう脚色・再創造しているか」も「参加枠組み上」追うことができるので、これも分析が可能である。

むしろ「話し手自身が状況に合わせて再構成したフィクション」性をもつことは、純粹な引用論としては傍流となろうが、知識創発が仮にその再構成性・フィクション性にあるとしたら、あるいは、知識創発が〈構築された対話〉に由来するとしたら、その形跡の追跡による分析はきわめて有意義である。変形された引用を現象として捉えるには、ワールドカフェの談話はかっこうのフィールドとなる可能性をもっているのである。

Bakhtin (1929, 桑野訳 1989, ほか) の言及は、対話理論においては〈他者の言葉の伝達〉にはとどまらない。ほかに重要なタームとして「創造的理解」「対話的出会い」「宛名」といった概念を提示している。これらは「創発の現象」の理解、ひいては「集団の創造性」の理解の助けとなるもの、すなわち分析の趣旨としてよいものと思われる。

「忠実になぞらえ」たり「注釈をともなう移し」としたり「きわめて自由に」解釈したりしながら〈他者の言葉〉を明示的に、あるいは「半ば隠された形で含みながら」応答によって対話が進行していく。その応答の連鎖ののち、もはや「誰の言葉か判別が難しく」なった「大きな談話単位」への参加枠組みから、再構成・再創造された語りとして、あたかもフィクションのように新たな知識が生成される。「誰の言葉か」という局所性が薄まり、「分散化された」並列的な文脈が統合されるような「大きな談話単位」で再構成・再創造される〈構築された〉知識に関するタームが「創造的理解」「対話的出会い」「宛名」といった概念と結びついているとしたら、これもワールドカフェのメカニズム解明にとって重要な焦点となる。

「創造的理解」こそ Bakhtin の対話主義が凝縮されたタームであると桑野 (2020) は述べている。そして、Bakhtin (1970) の「最後のメッセージ」とされる一文を紹介している。

「ひとつの意味は、もうひとつの、『他者の』意味と出会い、触れあうことに

より、みずからの深みをあきらかにする。両者の間にいわば対話がはじまるのであり、対話がこれらの意味、これらの文化の閉鎖性と一面性を克服するのである。(中略) 対話的出会いにさいしては、両者は溶け合うこともなければ混じり合うこともなく、それぞれがみずからの統一性と開かれた全一性を保っているのだが、たがいに豊穡化する」(桑野, 2020, p.303)。

続けて、創造的理解を「つまり両者のあいだに新たな意味が生まれる」ことであると解説している(桑野, 2020)。付随して、創造的理解のために〈他者のことばの伝達〉へ注目することこそ、Bakhtin の対話理論を援用する領域の研究において重要であると指摘している。

「対話的出会い (dialogic encounter)」は、「自己が他者と出会う」という構図ではなく、「自己が他者によって開かれ、変容を迫られる」関係性であり、そこで初めて意味が生成されうるという構図である (Bakhtin, 1986)。これは、単なる情報交換や同調ではなく、相互の差異と応答責任を担保したまま成立する、倫理的かつ創造的な相互関係のことである。また、単なる「共同作業」ではなく、「他者によって自分が問い返される場」であるということを指している。対話によって、自己と他者が互いに変容可能な応答関係に入るのである。ワールドカフェにおける「対話的出会い」とはどんなものであろうか。ワールドカフェがもし「他者によって自分が問い返される場」であるのなら、現象としての発話ないし応答という形で、その特徴が談話の中に立ち現れるはずである。

「宛名 (addressee)」という概念は、言語行為はつねに「誰かに向けて語られて」おり、発話の意味や構成が、根本的にはこの想定に規定されているというものである (Bakhtin, 1986)。そもそも発話とは応答を志向する社会的行為であり、その構成と意味が「誰に向けられているか」に大きく左右されるということである。たとえば、権威的な他者を宛名として想定する発話は、自己正当化や過剰な合理化を含みやすく、逆に共感的聴き手を前提とする発話は、自己開示や矛盾のままの語りを許容しやすくなると推測される。そして「宛名」の構成によって対話そのものが偏向させられるメカニズムをもっている可能性がある。ワールドカフェの談話分析において、その場面でその発話がどんな「宛名」を想定しているかに無頓着なままでは、「分散化された」並列的な文脈が統合される「大きな談話」の再構成による知識創発の分析には迫ることができない。いっぽう Brown & Isaacs (2005 香取・川口訳 2007) の記述には「創造的な結びつきを発見しようと共に耳を傾けているうちに、固定化した立場は、いつの間にか消えている」というものもある。「宛名」という相手の想定には、自己の立場など発話者自身に關す

る想定も反映されるだろう。この自身の「固定化した立場」が宛名の発信元であるなら、ワールドカフェの談話において、席替えするなどした帰結として、はたして立場や「宛名」の表出がなくなる現象はみられるだろうか。Bakhtin (1986) は「宛名のない発話は独白である」とも述べている。Moen (2006) は教育実践に関する研究で、教師が宛名なく「唯一の客観的真実」を伝えようとしても伝わらず、むしろ聞き手である生徒たちとのやりとりでさまざまな文脈から立ち現れる複数の真実を認めるとき、すなわち語り手と聞き手と共同的な関係によって物語が紡がれるとき、理解が格段に進むという事例を報告している。ワールドカフェの談話分析においても「宛名」への注目は重要と思われる。かつ、可能ならばその変化（変容）を捉える分析を行えるよう目論みたい。

ワールドカフェの知識創発の現象に、「創造的理解」「対話的出会い」「宛名」といった概念の光をあてることによって、〈他者の言葉〉が「誰の言葉か判別が難しい」状態となり「大きな談話単位」へ昇華しつつ新しい知識が再構成される集合的達成は、また別の側面を浮かび上がらせる。まず「対話的出会い」という点からは、どうやって自己と他者が互いに変容可能な応答関係に入るのかを問うことができる。そして、「宛名」という点からは、「宛名」の構成や固定化した立場が「いつの間にか消えている」とはどういうことを問うことができる。それに「さまざまな文脈」はどう関与しているのか、さらには最終的に「創造的理解」という点からは、どうやって「両者のあいだに新たな意味が生まれ」たことをして、互いの豊穰化とみなすようになるのかを問うことができる。

これまで本研究においては、ワールドカフェの知識創発が引き起こされるメカニズムは、相互行為としての集合的達成を検討することから解明されると述べてきた。そのうえで強調しておきたいのは、ここまでの談話分析や Bakhtin 概念の検討は、いずれも「他花受粉」を実体として捉えるための準備であったという点である。分析の構成要素は次に絞られる。すなわち、席替えを介して談話要素が持ち込まれ再結合・再文脈化される過程（＝他花受粉）を対象に、「その場」の引用の出現と機能、発話の交通（通い合い）の連鎖、宛名の構成・変容、そして創造的理解に至る言語運用を実証的に追うことである。これらの諸点は、思弁論的な叙述を超えて他花受粉のメカニズムを検証可能にする観測枠であり、本研究が提示すべき「証拠の形」を定めるものである。

以上を踏まえて、本研究の目的を改めて定式化する。目的は、ワールドカフェにおける他花受粉のプロセスを知識創発へ至る過程として位置づけ、対話理論における引用概念を理論的な枠組みとしつつ、談話分析によりその実相を解明することである。これに対応して研究設計は2層化する。まず研究1では、席替えを単位とした全体過程を対象

に、ラウンド間での談話の変化と引用の出現・分布などを量的・過程的に把握する（マクロ視点）。研究 2 では、引用および宛名の揺れ、創造的理解の動態に着目し、発話列の精密追跡によって再文脈化と意味の再解釈のプロセスを明らかにする（ミクロ視点）。次節以降で、この研究 1／研究 2 のねらいと方法を順に示す。

2.5 研究 1 のねらい～談話分析とオープンコーディング

ワールドカフェの会話の典型的なものの 1 つを以下に示す。本研究において対象とした調査フィールドでの実際の会話である。

【断片例 01】「むつかしいですよねぇ」

-
- 1-4-1-093. M: 夜って、どうなんすか、夜に何かするってなると、やっぱ泊まりになる、泊まるとなると食べる、食べるとなるとなんかお酒、とか工夫したくなる。で、飲食店が、ないという。
1-4-1-094. N: 飲食ねえ、ちょっとねえ、むつかしいですよねぇ。
1-4-1-095. M: 食べない。
-

【断片例 02】「さっきおもしろかったの」

-
- 1-1-3-024. D: さっきおもしろかったの、なんかつくるときクラウドファンディングで 5 万だったら一生入り放題、とかにしたら、100 人集まったら 500 万、200 人集まったら、1000 万。なんか 5 万で一生入り放題ってなんか、ね、
1-1-3-025. N: そうだね。あーそうよ。
1-1-3-026. K: お得な感じっすよ。
1-1-3-027. D: ねお得な感じですよ。
1-1-3-028. N: さっきね出てました、結局はお金が問題、お金。どうしてお金集めるかっていうのがね、あれは確かに。うーん。
1-1-3-029. D: ね。うんうんうん。
-

【断片例 01】は序盤での会話、【断片例 02】は中盤での会話である。【断片例 01】では意見の主張がなされそれに応答する形で批判的な評価が発話されている。M の「なんかお酒、とか工夫したくなる。で、飲食店が、ない」（1-4-1-093）という発話に即応して N が「飲食ねえ、ちょっとねえ、むつかしいですよねぇ」（1-4-1-094）と応答している。【断片例 02】では、〈他者の言葉〉が報告的に伝達されている。〈他者の言葉〉の報告は中盤で現出する。これには協調的な応答がいくつか続いている。D が「さっきおもしろかったの」と報告する発話のうち「なんかつくるときクラウドファンディングで 5 万だったら一生入り放題、とかにしたら、100 人集まったら 500 万、200 人集まったら、1000 万。なんか 5 万で一生入り放題ってなんか、ね」はその前のラウンドでの会話の

やりとりを要約して引用したものである (1-1-3-024)。これに、N、Kの応答が続き、Dとのやりとりで発話数5にわたって連鎖が続いている (1-1-3-025, 1-1-3-026, 1-1-3-027, 1-1-3-028, 1-1-3-029)。協調的な応答が連鎖するという組織化において【断片例 01】と【断片例 02】は成員の参与のあり方が異なっている。序盤から中盤、あるいは終盤にかけて、いつどのような変容があったのか、個人的に変容したのか、時間がたてばワールドカフェのようなプログラムに抛らなくても変容するのか、序盤と終盤の途中で何が起きているのかをみていく必要がある。

【断片例 03】「あとね、ヨソではね」

-
- 1-4-4-009. N : あとね、ヨソではね、えーつとあの、まあやっぱりみんなが集まる食べるところもほしい、そしたらね、屋台をね、あの、施設の周りに。1台じゃやっぱり、ナンだから6台くらい屋台をつくって、そうそういろんな店そしたら週末だけでもそこ屋台、昼から夜までやるとかしたら、あー、あっこならちよと行ける、とかいう感じに、なるんじゃないか。屋台なら、要するに、建物建つ固定、じゃないから。ね。ただ、ただ冬がネックとか、冬はどうするっていう感じだったけど。
- 1-4-4-010. P : 建物をつくるという感じではない、感じでしたよ。
- 1-4-4-011. N : そうそうそうそう。
- 1-4-4-012. O : そういう感じになってきますよね。
- 1-4-4-013. P : 温泉はあるとしてもそれより、違った建物をドーンと建てるんじゃないくて、わりとこう、なんていうんですかね、人がやりた、ことをちゃんとできるような。
- 1-4-4-014. N : そうそう、うんうん。
-

【断片例 03】は終盤での会話である。〈他者の言葉〉の報告的な伝達が行われ、かつある種のまとめが行われている発話である。席替え前のテーブルでの体験が、そのトピックの引用で語られている。Nは、「あとね、ヨソではね」とこの発話の引用元を前置したのち、「みんなが集まる食べるところもほしい」「施設の周りに」「6台くらい」「屋台をつくって」「週末だけでも」「昼から夜まで」と〈他者の言葉〉を伝達したうえで、さらには「要するに、建物建つ固定、じゃないから」と要約して報告し、かつ、「冬はどうするっていう感じだったけど」と解釈を添えている (1-4-4-009)。この発話に連鎖して、別の成員が、別の席替え前のテーブルでの体験の語りが続けている。Pも「建物をつくるという感じではない、感じでしたよ」と発話し (1-4-4-010)、Oも「そういう感じになってきますよね」とまとめとしての発話が続けている (1-4-4-012)。これも連鎖は発話数5にわたって続いている。こういった席替え前のようすをお互いが報告しあいまとめられていく発話は、終盤に観察される。【断片例 01】から【断片例 02】への

変化に加えて、こういった【断片例 03】のような発話および応答もワールドカフェに特徴的な、かつ、典型的な行為である。

これらの行為、会話を、談話分析として詳細にみていくことでわかるのは、発話の応答のあり方と変化である。各テーブルという局所的な文脈が席替えによって、どう報告され提示され、トピック（話題）として扱われていくのか、それによって参加者の対話はどのように変化していくのか、新しい知識は創発されるのか。研究 1 では談話分析を用いて、この変化・変容と談話の遷移のありさま、および鍵となる発話のパターンを特定する。すなわち、変形された引用の証左と「発話の交通（通い合い）のプロセス」に、自己と他者が互いに変容可能な応答関係に入る「対話的出会い」のありさまを追う。なお本研究における「対話」の定義を述べておく。広義には Bakhtin (1929, 桑野訳 1989) は「生きることは対話に参加すること」とも述べているがここでは、Bakhtin (1929, 桑野訳 1989) の「複数の発言の連なりからなり、それぞれの発話は先行する発話への応答である」といった独白との対比からの論述にならない、ワールドカフェ研究の先行研究の文脈も考慮して、以下では対話を「各発言が前の発言に応じ、次の発言を誘発し連鎖する会話」と定義しておく。

Foucault を源流とする談話分析は、言語を遂行的(performative)で機能的(functional)なものとしてみる立場をとる (Rapley, 2017)。「ある文脈で言葉がどのように使われどのような特定のバージョン、アイデンティティ、意味などをつくりだしているか」に焦点化する。とりわけ、わたしたちの知識や行為は、互いに密接に関連し、「自然なものでもあらかじめ与えられたものでもないものとして、リフレクシブに特徴づけあっている」という点を重要視する。

そのため、ワールドカフェにおける諸現象が立ち現れる可能性の高いフィールドを選択し、その会合の全会話から特筆すべき談話の断片を摘出して談話分析を行う。ワールドカフェにおける諸現象が立ち現れる可能性の高いフィールドとは、ホールシステム・アプローチにいう「関係者が一堂に集まってさまざまな課題や、共通の未来について話しあう」場で、「エンゲージメント、賛同、もしくは結果」や「全体の変化」が求められた会合である。さらには開催前には「エンゲージメント」が備わっていないにもかかわらず「関係者をできるだけ幅広く参加させよう」とした場が望ましい。ここでは 2 つの調査フィールドを規定する。その 2 つはどちらも等価であるとして、一方で分析を行い、もう一方でその分析結果が再現されるかどうか検証を行う。

研究 1 の談話分析では具体的には、次の諸点をみていく。ラウンドの進行によって談話がどう変化しているか、またラウンドの進行を形式化する成員の途中組み替え（“席

替え”)は、その変化に関係しているのか、関係しているならそれはどんな影響を与えているのか。これらの諸点に焦点化して分析を行う。対話過程に影響を与えているのは、もちろん席替えのみではない。ワールドカフェの特徴全体がそれをなしている。「たいせつな質問」などのカフェホストのガイドや、時間の経過とともに成員どうしの親密度が増すこと、テーマに対して考察が深まること、あるいは場にしつらえられた利用可能なさまざまな人工物も影響を与えているであろう。ゆえに研究1では、はじめにワールドカフェのルールや特徴全体を包含したうえで、変化を捉える分析を行い、ラウンドが進行する序盤と終盤との発話の比較で、その変化を明確化する。そのうえで、その発話の変化のうち席替えが影響していると思われる現象に焦点化して分析を行う。

研究1は発話のコーディング（コード化）が要となる。談話分析では、発話を逐語録化してコード（概念ラベル）を付与（コーディング）しカテゴリ分けすることが分析結果の信頼性、妥当性を支える中核的手続きであると位置づけられている。これを、たとえば、Miles & Huberman (1994) は端的に、談話分析においては「コード化こそ分析である」と述べている。これは、分析対象に特化してコーディング体系を設計、調整することの重要性を意味しており、発話のどの側面に注目するかによって、得られる知見が異なるため、研究対象に即した独自のカテゴリ設定が不可欠となる。実際、談話研究において多種多様のコーディング体系が開発されており、交渉の場面や教育場面、医療コミュニケーションなどと分析対象別のコーディング体系が提置されている。既存の、いふなれば一律のコーディング体系を用いるのではなく、それぞれ分析対象の文脈や目的に合致させてコーディング体系を開発することが求められる。ワールドカフェの談話をコーディングしカテゴリ化するにあたって、既存の、複数が参与する対話の場面の分析で開発された発話カテゴリでは不十分と思われる。ゆえに、調査フィールドで得られた発話データをもとに、この研究1においてコーディング体系の開発を行う。この、ワールドカフェの談話分析に特化した発話のカテゴリの検討はワールドカフェ研究における重要課題の1つであることを強調しておく。

実際のコーディングにはオープンコーディングの手法を採用する。オープンコーディングは、データに基づいてコードを生成していく帰納法の分析手続きである。事前のコード体系を持たず、逐語録等の研究データを細かくみていきボトムアップにラベル付けしていく。談話データを扱いやすい単位に分解し、言語使用のパターンや言語的特徴を浮き彫りにするためのラベルの付与である。ただし、ワールドカフェの談話分析では、以下の点にも注意しておきたい。それは、ボトムアップのコーディングに際して、それがワールドカフェの談話に特徴的なものなのか、それとも小集団の相互行為全般にみら

れるものなのかを弁別しておかなければならないという点である。この弁別を検討するためには、コーディング作業の途中で既存の小集団の相互行為に関するオープンコーディングを用いた先行研究を参照しつつ洗練させていくということを視野に入れておく。たとえば、【断片例 03】のような席替え直後の「体験語り」は席替えに由来すると考えられるので、これをワールドカフェ特有の発話であるとして特化したコードを付与し、【断片例 01】のような会話序盤に主張をするような発話はおそらく小集団の相互行為ではたびたびみられる発話であろうと考え先行研究のコードを参照にしたコードを付与するといった具合である。研究 1 はこのコーディングから、ラウンドの進行によって談話がどう変化しているか、成員の途中組み替え（“席替え”）が与える全体的な変化への影響をみる分析に着手する。

2.6 研究 2 のねらい～Bakhtin の引用概念、および「創造的理解」と創発

ワールドカフェの対話における引用は独特である。とくに引用することを指示されていないにもかかわらず、席替えによって成員が入れ替えられると引用がさかんになされる。そして、いくつかの話題がもち込まれつつ、しかしそれによって談話がまったく刷新されるというわけではなく、いくつかの話題は継続しつつ文脈が交差する。文脈が異なっていた話題どうしが密接な状態で輻輳した談話となる。例を 1 つ以下に示す。本研究において対象とした調査フィールドでの実際の会話である。

【断片例 04】「わしが骨組みつくっちゃるけえ！ みたいな、ゆってましたねえ」

-
- 1-1-4-033. D : そうそう。さっきもあのう、屋台、をね、ごは テーブル 1
ん 6 店舗ぐらい週末屋台がバァーッてあつて、いろんなものが食べれて、夜とかライトアップしたらいいんじゃないか、みたいな、あのう、カナダでラーメン屋をしていたって男の子がおって、味噌ラーメンらしいんですけど、そしたらこっちのおっちゃんもわしが骨組みつくっちゃるけえ！ みたいな、ゆってましたねえ。
- 1-1-4-034. B : それやってもらおう。すごいね！
- 1-1-4-035. A : 誰かしらなんか得意な人が集まって、やるーみたいな。
- 1-1-4-036. D : 田舎の人なんでもね、できるけんね。
-

【断片例 04】は、トピックを正確に報告するというよりも、あるいは、主観を交えて評価を述べるというよりも、あたかもまだ余韻が残っているうちに見てきたことを言語

化するかのような“体験”の語りになっている。ふりかえり意味づけがされ体系の中におさめられた「経験 (experience)」というよりは、まだ未消化で余韻の残る「体験 (lived experience)」として発話されている。Dは「さっきも」と引用元の時制を前置して、「屋台」「6店舗ぐらい」「週末」「ライトアップ」「味噌ラーメン」という点を報告している。そして、「そしたらこっちのおっちゃん」が「わしが骨組みつくっちゃるけえ！」と他者が発言したことをこの部分のみ声色を真似ながら引用している(1-1-4-033)。「屋台」「6店舗ぐらい」「週末」「ライトアップ」「味噌ラーメン」すべて、変形されているが前のラウンドでのD以外の他者の発言の引用である。

日常会話における「引用」が研究されてきた領域としての、社会学、心理学、教育学、語用論などでは、直接話法的引用、間接話法的引用に加えて、「相互引用 (mutual quoting)」や「「その場」引用 (“on-the-spot” quotations)」と呼ばれるものなども研究対象となってきた (Sams, 2007)。ストーリーテリングにおいて直接話法的引用、間接話法的引用の発話がみられたり、あるいは日常会話の中に「その場」引用があったとしても、それらと比してワールドカフェの会話に特徴的な引用は、趣を異にする。ここで扱いたいワールドカフェの談話における引用発話は、体験の途中性を内包した、場面内での「その場」引用である。「その場」といっても目の前には引用元の成員はいず、しかしまったくの外部からもち込まれる引用でもない、「さっきの」場からの引用である。これが、談話に果たしている機能は重要であろう。そして知識創発にはこれが関係していると考えられる。また、Bakhtin (1986) のいう「発話はつねに誰かに向けている」という宛名はここではどうなっているのかもここでは検討できるだろう。ワールドカフェでの引用発話はまたその多くが、変形された引用である。教室談話やストーリーテリングのようなある程度の形式をもつ会話以外の日常会話においては実際には、直接話法的引用、間接話法的引用よりも変形された引用が多いと予想される。この変形された引用がもし日常会話の中で会話の外部からもち込まれることによってはや引用かどうか不明瞭になり、分析が難しいという状況があるのなら、ワールドカフェ談話における変形された引用の分析には、また別の意味で価値があろう。遡り引用元からの変形が調べられるというワールドカフェ談話の引用発話の分析はそういった意味でも意義をもつ。

研究2では、この体験を提供する引用発話が増えることによってもたらされる現象に焦点化して分析を行う。それを〈引用のモザイク〉と呼べるのかどうか、発話と応答のみならず、引用元での談話を遡って追いながら、知識創発との連関にまつわる検討を行う。具体的には、各ラウンドの会話からそれぞれ引用の形式のうち特徴的な断片を摘出して、そこにある〈互いの言葉を用いあう〉談話、すなわち「引用の談話」を分析しつ

つ、しかるのちのその分析を相互に関係づけ、「他者の」意味との出会い、発話の交通（通い合い）、他者の言葉との接触が〈引用のモザイク〉を形成するメカニズムを検討する。そして宛名をもつ構造とその遷移について、その内容を弁別し、また応答の連鎖のようすを分析する。さらにはその応答が「創造的理解」へ至る過程について検討する。

研究1の談話分析から、相即的な発話の応答と席替えによる文脈の交差のようすを捉えることができ、研究2の引用の分析によって、〈他者のことば〉の再構成過程とその創造的機能を解明することができると思う。これら2つの研究を組みあわせることによって、知識創発が、発話の変容と相互引用を通じてどのように達成されるのかを明らかにすることができるはずである。

最後にそれらの分析結果を踏まえて総合的な考察を行う。加えて、他花受粉のメカニズムの検討から得られた結果を足がかりに、「対話」の営みの新しい理解へと向かう示唆や集合知のあり方、ワールドカフェ実践への示唆、およびワールドカフェ研究への示唆、あるいは社会におけるワールドカフェ的なものの援用の提案を行う。

本論文の研究設計は2層で構成される。研究1（マクロ視点）では、席替えを単位とした全体過程を対象に、ラウンド間での談話の変化と引用の出現・分布を量的・過程的に把握し、他花受粉の作用点とタイミングを特定する。研究2（ミクロ視点）では、発話列の精密な追跡によって、〈他者のことばの伝達〉がどのような連鎖で再文脈化を生み、意味の再解釈に至るのかを記述する。これにより、他花受粉＝会話の内部で起こる再結合の機構を測定可能なかたちで提示する。

ここまでの検討は、他花受粉を比喻ではなく現象として捉え直すための理論的整地であった。すなわち、ワールドカフェの知識創発が、席替えを媒介とする談話要素の持ち込み・再結合・再文脈化（他花受粉）によって駆動されるという作業仮説を、相互行為の形跡に即して実証的に確かめる準備であった。以降の分析では、引用、語句の再使用やトピックの再結合、主語の置換（宛名の揺れ）といった観測可能な指標を用いて、会話が対話（Brownのいう「対話」）へ転化するプロセスと創造的理解の成立に迫る。

本研究は、集団の内部の対話についての研究であり、集団の創造性に関する研究である。集団的な創造性がワールドカフェにおいていかに生起するかを実証的に明らかにするものであり、その知見の活用範囲はワールドカフェにとどまらない。集団が実践する知識創発のメカニズムとして、さまざまな相互行為のプロセスに援用可能となるよう汎用化を目指す。そのために、引用すること、すなわち互いの言葉を用いあうことが参加者相互の創造的理解をもたらすさまについて、「他花受粉」の概念を単なる比喻ではなく、分析可能な現象であると再定義して、ワールドカフェにおける会話の具体を

知識創発の根幹に関わるものとして深掘りしていく。

「他花受粉」にいう「異なる視点の相互の関連づけ」、ホールシステム・アプローチにいう「全体が変化する」こと、それらによる知識生成の達成、それをもたらす創発、これらの概念が統合されるワールドカフェのメカニズムからは次の示唆も得られるはずである。それは、会話が対話へ変化していく鍵概念であり、秩序や意味共有の手続きを志向するような穏やかな対話から「集合知」を志向する創造的対話というべき対話への志向の変化であり、また、Brown & Isaacs (2005 香取・川口訳 2007) のいう「個人と集団の調和」や Bakhtin (1981, 望月・鈴木訳 1990) のいう〈他者のことばの伝達〉の内部性・外部性の解像度を上げることへの示唆である。その意味でも、ワールドカフェは生きた実験室であり、対話、相互作用、集合知の生きた標本である。

III 調査フィールドと方法

3.1 2つの調査フィールド

ワールドカフェの「知識創発」が引き起こされるメカニズムを解明することを目的に、その相互行為としての集合的達成を検討するための調査分析を行う。そのために、ワールドカフェにおける諸現象が立ち現れる可能性の高いフィールドを選定する。調査フィールドの選定ではホールシステム・アプローチ的な観点が重要となる。ふさわしいのは、「関係者が一堂に集まってさまざまな課題や、共通の未来について話しあう」場で、「エンゲージメント、賛同、もしくは結果」や「全体の変化」が求められた会合、対話集会、カンファレンスである。さらには開催前には「エンゲージメント」が備わっていないにもかかわらず「関係者をできるだけ幅広く参加させようと」する場が望ましい。

調査フィールドは2つ設定する。そのうちの一方で分析を行い、もう一方でその分析結果が同じように再現されるかどうかの検証を行う。ゆえに2つの調査フィールドは等価で、かつ目的の違うものが望ましい。ワールドカフェの目的とは、香取（2015）が整理した4つの目的である（組織開発、創造、学習、合意形成）。この4つの目的と見合いながら選定を行う。

3.2 調査フィールド1：北広島町・田原温泉再建ワールドカフェ

本研究が対象とする調査のフィールドの1つは、2020年6月に開催された広島県北広島町の「田原温泉再生を考える会」の第2回会合で援用されたワールドカフェである（調査フィールド1）。なお、以下は、主催者および参加者、関係者に掲載の許可を得て、地名および施設名、団体名を発話どおりに記述する。

「田原温泉再生を考える会」は、前年に休館となった地域の温泉観光施設「田原温泉5000年風呂」をめぐって対立が続くなかで開催された対話の場であった。北広島町「協働のまちづくり」事業の一環として、町役場からの協力も得られ、当該事業には直接関係はないが「協働のまちづくり」に関心をもつ町役場職員複数名も参席することとなった。参加者は、多様性を意図して人選され、招待の声かけがなされた。非公開で開催され、声かけのない者の参席はなされていない。地域住民、町役場職員、施設の元従業員、および地域活性化を目論む地域活動の担い手が集い、休館の是非を問いつつ、施設の再建策を模索する場となることが目論まれた。主催者からの要請でカフェホスト（ファシ

リテーター)は筆者が務めた。

そもそもこの施設自体が廃校となった旧小学校の木造校舎を活用したものであったので、存続には大規模改修を要するため多額の予算が必要で、休館や廃業に対して単純に賛成、単純に反対の意見ばかりではなかった。休館の即刻解除、営業再開を望む者から、魅力ある機能の拡充や民間事業者への売却、また、まったく違う用途への敷地活用を志向する者まで、立場や意見はさまざまであった。

主催は地域の NPO 法人 (NPO 法人 INE OASA) であった。対話を通して模索する場として全 3 回が予定されたうちの第 2 回として、第 1 回もワールドカフェ形式で行われていた。その第 1 回での成果であった「アクティブな温泉」という概念について、より広範な意見交換を行うことが目的となった。

このフィールドを選択した理由は、開催前には「エンゲージメント」が備わっていないにもかかわらず「関係者をできるだけ幅広く参加させようとした場」という研究の条件に適ったうえに、課題、将来像、結果といった点について一定の成果があったとされているからである (主催者の報告による)。ただし特定の意見や案に対して合意形成的な賛同が得られたわけではなく、参加者の満足度や達成感のようなものは、研究目的に照らす限りにおいては検討していない。香取 (2015) の目的の 4 分類でいうなら、この開催の目的は合意形成にあった。明確な合意案を目指す合意形成ではないが、地域にとっての深刻な課題を、共通の認識としてもち、打開策をこれから共同で思案していこうとの機運の醸成が目論まれていた。

3.2.1 会合の形式とプログラム

参加者は、人選され招待された者のみで、25 名であった (途中遅れて第 3 ラウンドから出席した 2 名を含む)。所要時間はワールドカフェのパートが約 90 分で、Lenzo (2015) の「4 パーソン 4 ラウンド」にそった、1 つのテーブルに 4 人掛け (1 テーブルのみ 5 人掛け) で、席替えを 3 度行い第 4 ラウンドで最初の成員を復元する、「4 ラウンド」のプログラムであった。

テーブル数は 6 テーブルで、原則通り全ラウンドを通してテーブルを動かない参加者 (テーブルホスト) を 1 名ずつ設定した。その 1 名は事前には設定せず、その場でのテーブルごとの互選とした。

プログラムと参加者の属性を図 2、および図 3 に示す。参加者の選定は、NPO 法人が行い、とくに休館の即時撤回を訴える町内会に対しては、町役場からの行政説明会との印象にならぬよう慎重な参加要請が行われた。

図 2

「田原温泉再生を考える会」プログラム

田原温泉再生を考える会（北広島町「協働のまちづくり事業」）	
調査場所：北広島町田原集会所	
調査日：2020 年 6 月 23 日 18:30～20:30	
参加者：地域住民，役場職員の招待のみ 25 名	
主催：特定非営利活動法人 INE OASA	
プログラム：ワールドカフェ	
*テーマ「アクティビティの供給拠点としての温泉施設について」	
*所要時間：約 90 分	*配置：4 名×6 テーブル（1 テーブルのみ 5 名）
18:30 趣旨説明，前回の成果の紹介，テーブル内自己紹介	
19:00 最初のテーブル（ 第1ラウンド ）（20 分）	
たいせつな質問 1：“アクティブ温泉（活動する温泉）” では何ができるか	
19:20 <休憩>	
19:30 席替えして（ 第2ラウンド ）（20 分）	
たいせつな質問 2：“アクティブ温泉（活動する温泉）” でやりたいこと	
19:50 席替えして（ 第3ラウンド ）（15 分）	
たいせつな質問 3：“アクティブ温泉（活動する温泉）” でやれそうなこと	
20:05 席替えして（ 第4ラウンド ）（最初のテーブルへ帰還）（15 分）	
たいせつな質問 4：この語らいでたいせつだと思えたこと	
20:20 全体セッション（各自がキーワードを書いて貼り出す）	
20:25 ファシリテーター総括	
20:30 終了	
*テーブルホストは席替え直前でのテーブルごとの互選とした	
*「カフェエチケット」は 3 点に絞った	
・（今思い浮かんだことに焦点化して）あたながたいせつに感じていることを言葉に しましょう	
・（否定せず）よく聴きましょう	
・いたずら書きをしてください！	
*テーブルには，紙製のテーブルクロスを敷き，水性マーカーを配置し，書き込み（落書き）を可能にした．他には，奨励されているようなテーブル装飾は行われていない	
*トーキングオブジェクトは用いていない	
*全体セッションはモンスター・スティッキー・ウォール形式であった．第 4 ラウンドの直後，参加者が各自でキーワードを摘出し書いたものを，一覧に掲示した．	

図 3

参加者の属性

テーブル 1	テーブル 2	テーブル 3
A 町役場職員	E 地域おこし協力隊	I 地域住民
B 町役場職員	F 陶芸家（地域在住）	J 地域住民（自治会長・集落支援員）
C 町役場職員（主催者）	G 交通会社経営（NPO 活動家）（主催者）	K 飲食店経営
D 大学研究員（NEDO 調査員）	H 地域住民（元行政職員）	L 酒蔵経営
	Y 酒店経営	
テーブル 4	テーブル 5	テーブル 6
M 交通会社社員	Q 地域協議会会長	U 地域住民
N 地域住民（元温泉施設従業員）	R 町役場支所職員	V 地域住民
O 飲食店店主（地域施設）	S 町役場支所職員	W 地域住民（自治会長）
P 建設コンサルタント会社技術者（NEDO 調査関係者）	T 飲食店店主	X 農家（NPO 活動家）

註) **D** の大学研究員（NEDO 調査員）は、本研究とは関係がない

テーブルには紙製のテーブルクロスが敷かれ、書き込み（落書き）用の水性マーカーが置かれ、道具として利用可能であった。テーブル装飾はとくに行われていない。トークリングオブジェクトも用いられていなかった（再生を考える「会議」として開催されたため、「ワークショップ」を連想させるような要素を極力排除する意図があった）。

会場が地域の集会所であったこともあって、テーブルと呼称しつつ、実際には座卓で座布団に座る和式の形態となっていた。

第 4 ラウンドのあとは、全体セッションとなった。全体セッションはモニター・スティッキー・ウォール形式であった。これは、第 4 ラウンドの直後、参加者が各自でキーワードを摘出し用紙に書いたものを、一覧に掲示する形式であった。次回第 3 回（最終回）へ引き継ぐキーワードの整理が主催者によって行われた。会合の目的が意見交換であって、アイデアの創案や合意形成ではなかったため、第 4 ラウンドや全体セッションでの「まとめ」や「合意確認」はとくになかった。

3.2.2 カフェエチケット

会合の開催目的やワールドカフェ形式で行うことの説明は、参加要請時に行われた。会場での冒頭の「カフェエチケット」の提示は 3 点に絞られていた。以下である。

- ・（今思い浮かんだことに焦点化して）あなたがたいせつに感じていることを言葉にしましょう
- ・（否定せず）よく聴きましょう
- ・いたずら書きをしてください！

3.2.3 たいせつな質問

Brown & Isaacs (2005 香取・川口訳 2007)の「ワールド・カフェ・ホスティング・ガイド」には、次のラウンドへのガイドが2つ提示されている。1つは「テーブル・ホストが前のラウンドでの会話の要点を伝え」「その後、新しく入ってきた旅人が、（その要点を元に）前のテーブルでの会話で出されたアイデアや結びつきを話す」というものである。もう1つは「そのラウンドにおいて、新たな質問を全員に知らせる」というものである。このガイドは、「たいせつな質問」を複数用意し、最初のラウンドとは違う質問を提示するというものである。ここではこの後者のガイドが行われた。このガイドのやり方は、香取・大川（2017）が提唱する「ラウンドごとに問いを変える」に準拠したものである。これは、「次第に焦点を絞った話し合いが行われるようにしようとする」もので、香取・大川（2017）は「特に参加者が具体的な行動に目を向けるようにしてほしいと考える場合」に有効であるとしている。

「たいせつな質問」は、ラウンドごとに4つ提示された。第1ラウンドが「“アクティブ温泉（活動する温泉）”では何ができるか」、第2ラウンドが「“アクティブ温泉（活動する温泉）”でやりたいこと」、第3ラウンドが「“アクティブ温泉（活動する温泉）”でやれそうなこと」、第4ラウンドが「この語らいでたいせつだと思ったこと」である。

3.3 調査フィールド2：いわき市・対話と学習のワールドカフェ

本研究が対象とする調査のフィールドのもう1つは、福島県いわき市の市民活動団体、未来会議事務局が開催した「対話と学習のワールドカフェ」である（調査フィールド2）。2011年の東日本大震災以来、地震に伴う原発事故被災地の福島県において、これまで「対話」の場の活動を行ってきた実務者たちによる学習会であった。未来会議は、東日本大震災の翌年に発足した被災者による市民活動団体で、被災地における対話の促進とその談話内容のアーカイブを目的として活動を行ってきた有志の集まりである。1つめの調査フィールド同様、主催者および参加者、関係者に、地名および施設名、団体

名の、発話どおりの記述の許可を得た。

2020 年 9 月 12 日に行われた約 120 分のワールドカフェに陪席し、参与観察を行った。参加者は招待された者のみの 17 名で、おもに対話の場を主催したりファシリテーターを務めたりする“対話の担い手”としての、NPO 活動家、自治体職員、学校教員、地域活動の担い手で構成されていた。カフェホスト（ファシリテーター）は香取一昭氏が務めた。

このフィールドを選択した理由は、もう 1 つの調査フィールドとは違った目的をもっていたからである。香取（2015）の目的の 4 分類でいうなら、この開催の目的は学習にあった。これまでの 2011 年からの 9 年間の「対話」の場の活動を行ってきた実務者として、活動や現在をどうふりかえるべきかといった省察的な学習の場であった。

3.3.1 会合の形式とプログラム

参加者は、人選され招待された者のみで、17 名であった。所要時間はワールドカフェのパートが約 120 分で、Lenzo（2015）の「4 パーソン 4 ラウンド」にそった、1 つのテーブルに 4 人掛けで、席替えを 3 度行い第 4 ラウンドで最初の成員を復元する、「4 ラウンド」のワールドカフェであった。

参加者の 17 名は、4 つのテーブルに分かれて着座したが、とくに席次はない自由席となっていた。1 つのテーブルのみ 5 名、3 つのテーブルは 4 人の構成であった。落書き用のテーブルクロス、筆記具の水性マーカーが備えられ、ワールドカフェプログラム開始前に「対話と学習」についての話題提供と、未来会議の活動趣旨ならびにこれまでの活動実績、およびワールドカフェプログラムの趣旨説明、簡単な全員自己紹介となるチェックインのプログラムが行われたのち、「たいせつな質問」の提示から、“ワールドカフェの会話”が開始された。

プログラムと参加者の属性を図 4、および図 5 に示す。席替えは 3 度行われ、第 1 ラウンドと第 4 ラウンドは同様の成員であった。

図 4

「対話と学習のワールドカフェ」プログラム

「対話と学習のワールドカフェ」	
調査場所：いわき市菩提院	
調査日：2020年9月12日 14:00～17:45	
参加者：対話の担い手，ファシリテーターなど招待のみ17名	
プログラム：ワールドカフェ	
*テーマ「私たちは今 対話を通じて何を実現しようとしているのだろうか？」	
*所要時間：約120分 *配置：4～5名×4テーブル	
15:00 インTRODクシヨン	
15:10 最初のテーブル（第1ラウンド）（20分）	
「たいせつな質問」1：あなたがこれまでに経験したなかで、「参加してよかった」と思ったのは，どんな対話の場でしたか？	
15:30 席替えして（第2ラウンド）（20分）	
「たいせつな質問」2：「参加してよかった」と思えたのは何故でしたか？何がそれを可能にしたのですか？	
15:50 席替えして（第3ラウンド）（20分）	
16:10 休憩（ギャラリーウォーク）	
16:20 席替えして（第4ラウンド）（最初のテーブルへ帰還）（20分）	
「たいせつな質問」3：あなたは，対話を通じてどんな未来を実現しようとお考えですか？	
16:40 ハーベスト（成果の貼り出し）	
16:55 チェックアウト&クロージング	
17:00 終了	
*席替えでは，1人だけ残り，ほかのメンバーは別のテーブルへ移動する．最後のラウンドでは元のテーブルへそれぞれが帰還する．	

図 5

参加者の属性

テーブル1	テーブル2	テーブル3
A 弁護士／ファシリテーター（主催者）	E 自治体職員（町役場）	I NPO 職員
B 住職（宗教）／ファシリテーター（主催者）	F 飲食サービス業（経営）	J 語り部（市民活動）
C 高等学校管理職（副校長）	G 自治体職員（市役所）（主催者）	K 高等学校教員
D 児童福祉事業（経営）	H NPO 職員	L 大学院生
テーブル4		
M 美術作家／ファシリテーター（主催者）		
N 学童保育指導員		
O 中学生		
P 精密機器メーカー社員		
Q 飲食サービス業（経営）		

註）A，B，Mのファシリテーターは属性としてであって，このワールドカフェにはファシリテーターとしては関わってはいない

3.3.2 カフェエチケット

会合の開催目的やワールドカフェ形式で行うことの説明は、参加要請時に行われた。会場での冒頭の「カフェエチケット」は6点が提示された。以下である。

- ・あなたがたいせつに感じていることに焦点を当てましょう
- ・あなたの考えと経験に基づいて貢献しましょう
- ・理解するためによく聴きましょう
- ・アイデアをつなげましょう
- ・パターンや、洞察や、深い質問に、共に耳を澄ませましょう
- ・遊んでください！ いたずら書きをしてください！ 絵を描いてください！

3.3.3 たいせつな質問

「たいせつな質問」は、Brown & Isaacs (2007) の「ワールド・カフェ・ホスティング・ガイド」のうち、ここでは「そのラウンドにおいて、新たな質問を全員に知らせる」というものが採用された。ガイドのやり方は、香取・大川 (2017) が提唱する「ラウンドごとに問いを変える」に準拠して、ラウンドごとに4つ提示された。第1ラウンドが「あなたがこれまでに経験したなかで、「参加してよかった」と思ったのは、どんな対話の場でしたか？」、第2ラウンドが「参加してよかった」と思ったのは何故でしたか？ 何がそれを可能にしたのですか？」、第4ラウンドが「あなたは、対話を通じてどんな未来を実現しようとお考えですか？」である。

3.4 データ収集とトランスクリプト

調査フィールド1では、カフェホスト（ファシリテーター）は、主催者からの要請で筆者が務めたが、ただし、アクションリサーチのような場への研究的な介入は調査の目的ではないため、研究的介入とならないよう配慮し、カフェホスト（ファシリテーター）に徹した。そのうえで、できる範囲で参与観察を行った。参与観察のようすはフィールドノートに記した。会場の、小分けされた6つのテーブルすべてにそれぞれに360° 全球型ビデオカメラとICレコーダを設置して、第1ラウンドから第4ラウンドまでのすべての過程を、3回の席替えを、席替え前、席替え後の個人が特定できるよう録画および録音した。後日、談話分析のためのトランスクリプト（逐語録）を書き起こした。

調査フィールド2では、筆者はワールドカフェ自体に参加せずに参与観察を行った。

参与観察のようすはフィールドノートに記した。会場の、小分けされた4つのテーブルすべてにそれぞれに360° 全球型ビデオカメラとICレコーダを設置して、第1ラウンドから第4ラウンドまでのすべての過程を、3回の席替えを、席替え前、席替え後の個人が特定できるよう録画および録音した。後日、談話分析のためのトランスクリプトを書き起こした。

調査フィールド1、調査フィールド2、ともにトランスクリプトは、会話の展開を発話内容から追う目的で、発話内容が把握できる範囲での書き起こしを行った。具体的な書き起こしの形式については、富田・丸野（2005）を参考にした。この形式の詳細については、第IV章で述べる。

3.5 倫理的配慮

本研究は、青山学院大学研究倫理審査委員会の「人を対象とする研究に関する研究」の倫理審査の承認を得て実施した。調査フィールド1、調査フィールド2ともに調査にあたっては、主催者および参加者に学術調査に関する了解を得た上で、倫理およびプライバシーにじゅうぶんに配慮し、かつ、原則データは公開可能という合意のもとにトランスクリプトなどの事後作業を行った。開催場所、開催関係団体等、枠組みとなる名称は公開するものの、参加者の実名は表出させないよう表記に配慮した。なお参加者等個人名は仮名（アルファベット記号）とし、発話中に引用される個人名も仮名とした。主催者および参加者、関係者の許可を得て、発言中の地名、施設名、団体名、商品名等は、実名に準ずるものとして略称や愛称も含めてその発話の通りとした。

IV 研究 1：他花受粉がもたらす変化

他花受粉がもたらす変化をいかに捉えるか。本研究では、他花受粉を、席替えを介して前テーブルの談話要素が持ち込まれ、新しいテーブルで再結合・再文脈化される過程であると操作的に定義する。研究 1 では、他花受粉の問題に関して談話分析を用いて、ワールドカフェの談話の遷移のありさま、全体的な変化・変容を分析しつつ、発話の役割、応答のパターン、引用の実相に焦点化して、知識生成に寄与する協調や創発の実証的な研究を行う。

分析対象は、調査フィールド 1 とした。調査フィールド 1 は合意形成を目的としたワールドカフェで、2020 年 6 月に開催された広島県北広島町の「田原温泉再生を考える会」の第 2 回会合で援用されたワールドカフェである。6 つのテーブルすべてのトランスクリプトをみていく。ここでは、鍵となる発話のパターン、および変形された引用の証左と「発話の交通（通い合い）のプロセス」に、自己と他者が互いに変容可能な応答関係に入る「対話的出会い」のありさまを追う。そのために、ラウンドの進行にそって、そのラウンドごとの発話の特徴と応答パターンの特徴を特定するためのコーディングおよびカテゴリ設定を行う。

カテゴリ設定を用いた発話過程の検討に入る前に、この調査フィールド 1「田原温泉再生を考える会」のワールドカフェにおける対話の全体的な特徴を把握することを目的として、ラウンドの進行に即した発話数の分析を行う。

4.1 ラウンド進行と全体的な傾向

発話数の分析では、ラウンドの進行の全体の変化の把握のために数的な推移をみる。なお本研究においては話者の順番交替ごとのターンを発話と定義し、分析の単位をその発話ターンとした。発話数は、発話ターンの個数として計数した。

4.1.1 発話ターンの認定

発話ターンは、順番交替にそって認定した。順番交替は、Sacks et al. (1974) によって定義された会話の基本構造である。会話参加者が一人ずつ、話し手と聞き手の役割を交替し発話を行うことを指す。後述する隣接対とともに、多くの研究がなされている。

本研究においては、1 人の話者が話し始めてから話し終えるまでの一区切りを 1 発話ターンとみなした。会話中音声として連続して発話されたものを 1 つとして、その話者の発言途中に他の会話参加者のうなづきやあいづちがあっても、発話が途切れない限り 1 つとした。他の会話参加者が発話したことにより一時中断された場合は、その前後の同一の話者による発話を異なる発話として扱った。短いフィラー（「えー」「いやあ」等）やあいづち発話（「うんうん」「はい」等）、笑い声は、明確に独立した発話と認められる場合、もしくは会話の中でその部分が間が空いて声が目立っている場合は 1 発話と認定した。同一話者による直前の発話の言い直しや語の反復はそれを別個には数えず、前の発話の一部とした。発話中に言いよどみがあっても、他の会話参加者の発話による中断がないかぎりこれもひとまとまりであるとして 1 発話と認定した。ただし長いポーズ、おおむね 2 秒以上の沈黙は発話の途切れとみなし、2 発話ターンに分けた。

4.1.2 ラウンド進行と全体的な発話数の傾向

ラウンドごとの発話数のまとめを表 1 に示す。

表 1

ラウンドごとの発話数

	第 1 ラウンド	第 2 ラウンド	第 3 ラウンド	第 4 ラウンド	合 計
テーブル 1	296	386	220	104	1006
テーブル 2	178	221	48	65	512
テーブル 3	83	77	156	26	342
テーブル 4	199	128	48	63	438
テーブル 5	124	285	145	48	602
テーブル 6	243	252	37	69	601
計	1123	1349	654	375	3501

総発話数は、3501 であった。全体のおおまかな傾向としては、会話が開始される第 1 ラウンドは発話数 1123 で、短い発言でテンポの速い応答が多く発話数が多い。途中のラウンド、第 2 ラウンドでそれはいったんさらに増し発話数 1349 となり、第 3 ラウンドと、最初のテーブルに帰還しての最終のラウンド、第 4 ラウンドでは発話数 654, 375 と、発話数は数として減少している。傾向としては、短い応答の応酬ではなくなり、長い発言が多くなり落ち着いた会話に変化している。

6 テーブルのうち、発話数が大きく異なっているテーブルもある。参与観察によると、テーブル 1 は、4 名中 3 名が同一組織の成員で親密度が高く、短いターンの応答が多かった。テーブル 3 は、意見の強い 1 名が長い発言を続ける傾向をもっていた。テーブルごとの発話数では大きなばらつきがあるが、第 4 ラウンドが第 1 ラウンドの約 3 分の 1

程度の発話数である点では、同じ傾向を有している。

では、発話の内容はどうであろうか。その内容と応答の変化をみていく。

4.2 分析1：発話のカテゴリの全体的な変化

4.2.1 ワールドカフェ分析のための発話カテゴリ

発話の内容と応答の変化をみていくために、発話カテゴリを設定する。発話ターンの1つ1つにコード（概念ラベル）を付与して検討しこのコードの体系、すなわちカテゴリ設定を一覧化する。談話の変化はそのカテゴリを分析しつつあきらかにしていく。

ワールドカフェの談話にはどのような特徴があるのだろうか。途中で成員が入れ替えられること、すなわち席替えされることは談話にどのような影響を与えるのだろうか。この変化を量的に把握するためには、2.7節や2.8節でみた断片のような発話や応答の、ラウンドごとの特徴とその変化を追える指標が必要となる。変化の指標となるコードの体系、すなわちカテゴリ設定は、通例、分析対象に特化して設計・調整される。発話のどの側面に注目するかによって、得られる知見が異なってくるからである。では、ワールドカフェの分析に特化した独自のカテゴリ設定とはどのようなものか。あらかじめ設定された一律の設定をあてはめることなく、調査フィールドから得られたトランスクリプトを元に開発を行う。ここではコード化（コーディング）はオープンコーディングの手法で帰納法的に行っていく。ただし、それがワールドカフェの談話に特徴的なものなのか、それとも小集団の相互行為全般にみられるものなのかを弁別しておかなければならないため、コーディング作業の途中で既存の小集団の相互行為に関するオープンコーディングを用いた先行研究を参照することも行う。

また、ホールシステム・アプローチとしてのワールドカフェの援用には趣旨やねらいがあり、談話はそれに沿うことが多いと考えられる。ワールドカフェ談話の分析では、ワールドカフェにおいて目論まれる「多様性と密度を高めるダイナミズム」、「アイデア相互の関連づけ」、「創発」、「集合知の生成」、「全体の変化」、「行動の特定」といった概念との関連もみておく。

ワールドカフェの談話は、序盤と中盤と終盤で異なる特徴を有している。序盤となる第1ラウンドは、邂逅のラウンドである。多くは主張が提示され、もしくは立場や役割が強調され、場合によっては他意見に対して即時に評価を表明したりすることが散見される。ときにはあたかもこのラウンドで会話が終了するかのようには手早く結論づけられることもある。中盤となる第2ラウンドや第3ラウンドでは、率直に質問しあったり互

いに情報を求めあうようすがしばしば観察される。また、他のテーブルで聞いた話、語らった話を体験として提供し、再度その話題がテーブルの移動後にも継続されることを望むような話題の提示も行われる。終盤となる第4ラウンドでは、少なからず、協調してアイデアどうしを連結させたり、高次化した新しい概念を提示することがなされている。

調査フィールド1は、どうであろうか。ラウンドごとに6つのテーブルから無作為に1テーブルを摘出して、その談話を調べ、そのラウンドに典型的と思われるものを概念化した。たとえば、第1ラウンドに特徴的なのは、話題の取りかかりをつくろうとする主張の提示、何を話すべきだろうかという疑問の提示、立場を表明しつつ意見を述べる役割の提示、直前の発話に対して即評価を返す発話や短絡的な結論の申し述べが散見され、これらにそれぞれのコードを仮に付与した。第2ラウンド・第3ラウンドの中盤に特徴的なのは、席替え直後の「前のテーブルでは」という体験語りと、前のテーブルでは疑問で終わった話題の、解をもつかもしれない参加者との出会いによって、その疑問を率直にぶつけてみるという情報訴求の投げかけなどである。これらにも仮のコードを付与した。この中盤から終盤にかけてはもうひとつ特徴的なものとして、応答の連鎖が長く続くことが挙げられる。この協調的な応答の連鎖にも仮のコードを付与した。さらには、メタ認知というべきか俯瞰思考というべきか、高次化した達観を述べることが確認された。これらは少なくはあるが、これにも仮のコードを付与した。

これらの仮のコードを検討するために、コーディングの先行研究、とりわけ小集団における相互行為を研究対象とした研究を参照した。先行研究の知見として援用できるものは援用し、ワールドカフェの特性を考えられるもの、それらに収めるべきではないと考えられるものは、ワールドカフェに特化的なコードとして、そのまま残した。最終的には、全発話ターンについて改めてカテゴリに分類することを試みた。そしてこれがワールドカフェの談話分析をする上での、変化をみて取ることのできる指標、すなわちカテゴリ設定であると結論づけた。以下に順を追って詳述するため、まずその参照した先行研究を示す。

4.2.2 発話カテゴリに関する先行研究とワールドカフェ分析への特化

ワールドカフェの談話分析に特化したコーディングを精緻化するために、小集団の相互行為に関する先行研究にみられるコーディング例を参照する。

協同問題解決における談話の生成パターンの分析のために富田・丸野（2005）は、分析の単位を会話ターンとし、各会話ターンがどの発話カテゴリに当てはまるかを判定し

ている。コード化には、発話機能コーディング・スキーマが用いられている。集計されたカテゴリは、“葛藤的発話（反論／疑問／問題）”，“協調的発話（換言／解釈／確認）”，“質問”，“同意”，“説明”である。

遠山・白水（2018）は、協調問題解決過程の対話データを用いた分析で、先行発話から見たときの後続発話の特徴を用いて、成功的な対話と失敗的な対話の基準を定めた。この対話分析の基準における「対話の特徴」は、“特徴 A（主張：自分の考えを述べる）”，“特徴 B（疑問：疑問を発する）”，“特徴 C（批判：批判をする）”，“特徴 D（話者交代：交代しながら考えを述べ合う）”，“特徴 E（発言を遠慮する）”，“特徴 F（答を急ぐ）”としている。そして、特徴 A～D を「肯定的な特徴」、特徴 E～F を「否定的な特徴」と分類している。

片桐他（2015）は、会話コミュニケーションによる相互信頼感形成に関する研究において、相互信頼感構築過程は、特定の論点の下での関心擦り合わせと提案交換の二つを基本単位とする過程として捉えることができるとしている（会話を通じた信頼感構築過程の共関心モデル）。このモデルに沿って 8 つの対話行為を分類しアノテーション付与分析を行い、しかるのちに、会話進行の大域的構造の分析を行っている。関心擦り合わせの対話行為の 8 つは、“関心招請”，“関心導入”，“関心正評価”，“関心負評価”，“関心修正”，“提案招請”，“提案提示”，“提案受諾”，“提案拒絶”，“提案修正”である。さらに、プロセスとして想起されるものとして，“漸進的擦り合わせ”，“提案の漸進的修正”の 2 つを加えている。

藤本・大坊（2007b）は、小集団による会話の展開に及ぼす会話者の発話行動傾向の研究で、会話中に表出された発話単位で、会話展開に関するコーディング・システムを用いて特定している。しかるのちに、その量的な偏りをもとに会話展開パターンの分析を行っている。会話展開に関するコーディングは、“トピックの開始”，“情報追加・発展”，“具体化・詳細”，“抽象化・要約”，“無関心”の 5 つである。

また、同じく藤本・大坊（2007a）は、小集団コミュニケーションにおける話者の叙述パターンの研究で、話者としての役割を特定する目的で、発話データから会話行動パターンを抽出している。抽出された分類は、“情報”，“コメント”，“投掛（指示）”，“投掛（質問）”，“応答”，“反射”の 6 通りである。

先行研究にみられるコーディング例では、遠山・白水（2018）の“特徴 A（主張：自分の考えを述べる）”や“特徴 F（答を急ぐ）”，富田・丸野（2005）の“協調的発話（換言／解釈／確認）”など参考となったのものも多い。しかし、ワールドカフェ分析があくまで変化を捉えるという趣旨であるなら、たとえば、藤本・大坊（2007a）の“情報”

“コメント”や遠山・白水(2018)の“特徴D(話者交代:交代しながら考えを述べ合う)”では曖昧で分析に向かない。また、大半は、この談話が全体で1つのトピックを扱っており、文脈が輻輳するワールドカフェでは平板すぎるきらいもある。さらには、トピックが収束する方向へ向けてコーディングが順序よく整理されているが、ワールドカフェでは収束もするかどうかはわからない。そこで、ワールドカフェの談話分析に特化したコーディングとするためには、順序よく推移しないことも想定しつつ、ある種の厳密さを優先し、とくに成員の入れ替え(席替え)がもたらす発話に着目することとした。具体的には、藤本・大坊(2007b)の会話展開パターンのためのコーディングの“トピックの開始”、“情報追加・発展”、“具体化・詳細”、“抽象化・要約”という展開を軸に、先行研究の発話の分類を6つにまとめつつ、これに、このワールドカフェの談話において特徴的な2つを加え、発話カテゴリは8つとした(表2)。

表2

発話のカテゴリ名と参照した先行研究

発話機能コーディング・スキーマ	協調問題解決過程の「対話の特徴」	会話を通じた信頼感構築過程の共関心モデル	会話展開に関するコーディング・システム	小集団コミュニケーションにおける話者の会話行動パターン分類	ワールドカフェ談話分析のカテゴリ
富田・丸野(2000)	遠山・白水(2018)	片桐他(2015)	藤本・大坊(2007b)	藤本・大坊(2007a)	筆者
説明	特徴A(主張:自分の考えを述べる)	関心招請／関心導入／提案拒否	トピックの開始	情報／投掛(指示)	主張提示
(ワールドカフェ談話の分析のための追加)					役割強調
葛藤の発話(反論／疑問／問題)	特徴B(疑問:疑問を発する)／特徴C(批判:批判をする)	関心負評価			即時批判
	特徴F(答を急ぐ)	提案受諾		反射	短絡結論
質問			情報追加・発展	投掛(質問)	情報訴求
(ワールドカフェ談話の分析のための追加)					体験提供
協調的発話(換言／解釈／確認)	特徴D(話者交代:交代しながら考えを述べ合う)	関心正評価／関心修正／提案修正／漸進的擦り合わせ	具体化・詳細	コメント／応答	協調連鎖
		提案招請／提案提示／提案の漸進的修正	抽象化・要約		高次化
同意	特徴E(発言を遠慮する)		無関心		その他

註) ワールドカフェ談話の分析のために本稿で提案する発話のカテゴリ名に、参照した各先行研究のカテゴリを並べて対照させた。

【主張提示】は、発話機能コーディング・スキーマの“説明”（富田・丸野，2005）や、協調問題解決過程の「対話の特徴」の“特徴 A（主張：自分の考えを述べる）”（遠山・白水，2018），会話展開に関するコーディング・システムの“トピックの開始”（藤本・大坊，2007b）などを参照したもので、おもに個人的な主張を先行させて意見を提示する発話を分類した。これは、ワールドカフェによらず一般に小集団の談話でも生成される発話である。

【役割強調】は、ワールドカフェの序盤にみられる発話で、ワールドカフェの分析のためにこれを加えた。親密でない、多様な利害関係者が集うとき、かつ、それが臨時的集団であるとき、往々にして表れるもので、意見内容よりも役割や立場を根拠にして論の確からしさを主張する発話である。ワールドカフェの「全体が変化する」ホールシステム・アプローチとしての側面に着目する意図から、この発話の量の増減に注目した。ラウンドの進行による変化をみるという分析の目的から、ワールドカフェ序盤に特徴的な発話、終盤に特徴的な発話を量的に捉えやすくした。

【即時批判】は、発話機能コーディング・スキーマの“葛藤的発話（反論／疑問／問題）”（富田・丸野，2005）や、会話を通じた信頼感構築過程の共関心モデルにおける対話行為の“関心負評価”，“提案拒否”（片桐他，2015）などを参照し、かつ、本研究で即時性を付加し、他意見に対してすぐさま批判を返す発話を分類した。これは、一般に小集団の談話も生成される発話であるが、ワールドカフェでは序盤に集中して生成されるという特徴がある発話である。

【短絡結論】は、協調問題解決過程の「対話の特徴」の“特徴 F（答を急ぐ）”（遠山・白水，2018）や、小集団コミュニケーションにおける話者の会話行動パターン分類の“反射”（藤本・大坊，2007a）を参照したもので、発話の趣旨をじゅうぶんに展開して説明せず手早く結論づける発話を分類した。これは、一般に小集団の談話でも生成される発話であるが、ワールドカフェでは序盤に集中して生成されるという特徴がある発話である。

【情報訴求】は、会話展開に関するコーディング・システムの“情報追加・発展”（藤本・大坊，2007b）や、小集団コミュニケーションにおける話者の会話行動パターン分類の“投掛（質問）”（藤本・大坊，2007a）などを参照したもので、質疑や投げかけ、もしくはその応答によって客観的な情報を求める、あるいは共有を促す発話を分類した。ワールドカフェでは中盤に集中して生成されるという特徴がある発話である。

【体験提供】は、ワールドカフェの席替え後にみられる発話で、新たに得た情報（ア

アイデアなど)を、得た体験として共有し提供する発話である。今しがた得たものを、その内容のみならず談話のようすごと伝えるような発話である。ワールドカフェにおいては、「アイデア相互の関連づけ」(香取・大川, 2011)が目論まれることから、この「体験提供」を加えた。【役割強調】同様、ワールドカフェ序盤に特徴的な発話、終盤に特徴的な発話を量的に捉えやすくした。

【協調連鎖】は、発話機能コーディング・スキーマの“協調的発話(換言／解釈／確認)”(富田・丸野, 2005)や、会話を通じた信頼感構築過程の共関心モデルにおける対話行為の“関心正評価”, “漸進的擦り合わせ”(片桐他, 2015)などを参照したもので、他の発話を肯定してアイデアを追加したり進展させたりする未終結の発話を分類した。これは、一般に小集団の談話も生成される発話であるが、ワールドカフェでは中盤から終盤にかけてに集中して生成されるという特徴がある発話である。

【高次化】は、会話を通じた信頼感構築過程の共関心モデルにおける対話行為の“提案招請”, “提案提示”, “提案の漸進的修正”(片桐他, 2015)や、会話展開に関するコーディング・システムの“抽象化・要約”(藤本・大坊, 2007b)を参照したもので、談話前には得られていなかったことを明示、もしくは暗示しつつ、概念の新しい形成に言及し談話を終結させようとする発話を分類した。これは、一般的な小集団の談話でも生成される発話であるが、ワールドカフェでは中盤から終盤に集中して生成されるという特徴がある発話である。

これらのワールドカフェの発話のカテゴリの定義と例を表3に示す。

これらの8つの発話のカテゴリの設定を用いて、量的な変化と応答の変化をみていく。そのため、仮の設定であったこのカテゴリに、発話3501全量を再度適用し判定を行った。判定にあたっては、発話の1つ1つを、前後の文脈に照らしながら1つの発話カテゴリに分類した。複数の発話カテゴリを含むと思われる発話も、後続の発話から意味を付与していずれかの発話カテゴリに分類した。コーディングは筆者がすべての発話データに対して行った。研究協力者の大学院生1名が確認を行ったが、とくに訂正の必要はなかった。発話カテゴリの判定例を表4に示す。

表 3

ワールドカフェの発話のカテゴリ

カテゴリ	定 義	例
主張提示	個人的な主張を先行させて意見を提示する発話	1-1-1-44. C : サウナつきのビアガーデン. ぼく的には, サウナしたい.
役割強調	意見内容よりも役割や立場を根拠にして論の確からしさを主張する発話	1-4-1-054. N : ボイラーがね, ネックです. もうね, 漏れ漏れだったんです. 元従業員なんです.
即時批判	他意見に対してすぐさま批判を返す発話	1-5-1-104. R : でも, 宿泊施設というのはなかなかむづかしいと思うんよね, 常に. 厳しいものが.
短絡結論	発話の趣旨をじゅうぶんに展開して説明せず手早く結論づける発話	1-4-1-120. M : いちばん重要なことはやっぱこう地元の人が, それをなんか, それを誇りに思っているっていうところがやっぱり.
情報訴求	質疑や投げかけ, もしくはその応答により客観的な情報を求める, あるいは共有を促す発話	1-1-3-017. K : どんちゃん騒ぎしよったんすか? 知りたい, どんな感じだったんか.
体験提供	新たに得た情報 (アイデア) を, 得た体験として共有し提供する発話	1-6-3-035. S : いちばんはじめんここにいたんは, ここに近いんだけど, 要は, この地域全体を, この野菜なら農家なんだから, 地域全体をまあ, 青空市場みたいな感じにしてから (中略) っという話も出よった. で, 次のところ行ったとこは, このクラウドファンディング.
協調連鎖	他の発話を肯定してアイデアを追加したり進展させたりする未終結の発話	1-1-3-141. D : そう. 屋根をつけんといけん. でもそれこそあの, テントみたいな簡易的なちよっとおしやれに. ※注: この発話中の「それこそあの」は, 直前の発話にあったキャンプ場のテントのことを指しており, この発話は, 川床に屋根を付けるならそれに, 前出のテントというアイデアをあわせることを結合させて提案している
高次化	談話前には得られていなかったことを明示, もしくは暗示しつつ, 概念の新しい形成に言及する発話	1-3-3-156. J : いやおれ, だけん, 「そうはゆうても」ゆうって思うたときに, 「そうはゆうても」ゆうのは, だけん自分にあてはめたときね, なかなかいかんけ「そうはゆうても」ゆう話, それを, はよ手放してね, できる人に向けて渡すようなね. ※注: J 自身がたびたび「そうはゆうても」「それは難しい」と他者 (できる人=実行可能な人) のアイデアを否定する発話を産出していたが, この発話に至って, 「そうはゆうても」という傾向自体を, 自分こそが手放さなければならない, と自戒的に俯瞰した発話を産出している
その他	本題に入る前の確認などの調整や字面の疑問など, 1~8 に含まれない, 論の展開への反映が軽微であった発話	1-6-2-055. P : 「陶芸」は, どんな字だっけ?

(註) 例の頭番号は, トランスクリプトの整理番号 (調査フィールド番号-テーブル番号-ラウンド-発話)

表 4

ワールドカフェの発話のカテゴリの補足（判定の例）

カテゴリ	判定の例
主張提示	・直前の他の発話者の発話に関連させず、新しいトピックを提示するもの ・「たとえば」と置きつつ例示ではなくはじまることもある ・前出したトピックに、「さっきのあれじゃないけど」と再提示するものもある ・利己的な自己主張を意味するものではない
役割強調	・その立場や役割、経験者、当事者であることを明示するもの ・「わたしそれ、関わっとりますから」と、応答で明示されるものも役割強調に分類した ・発話者自身のことでなくても、「マスター、ちなみに、じゃあ営業的には？」と、他者に、役割に基づく発言を求めるものもある
即時批判	・「むづかしいね」といった、すぐさま批判を場に提示するもので、この発話でそのトピックが終結することが多い ・「たいへんなんですよ、あれは」や、「ゼッタイ金にならん」といった、直前の発話者の発話を否定、批判、反問するもの ・「いや、今はもうそういうふうにしていかないとダメでしょ」といった同調しつつ批判を述べるものもある
短絡結論	・そのトピックでの発話数がまだ少ない段階で、その少ない情報から一般化、抽象化する発話で、この発話でそのトピックが終結することが多い ・「若い人はとくにお金落としたがらん人が多い」といった、一面的な結論づけで、ときには（終結せず）反論のきっかけとなっているものもある
情報訴求	・「いつ頃ですか？」といった年次、距離、温度、価格などを質問するものなどがこれにあたる ・「知りたいです」「やっぱりそうなん？」といった短い応答であっても、それが後継してトピックとなるときは、情報を訴求したものであると判定した ・「お客さんは来てたんですか？」へ対して「最後はそうでもなかったなあ」といった隣接ペアが産出されるときは、両方とも情報訴求と判定した
体験提供	・「いちばんはじめとこ」のような、前のテーブルやラウンドでの談話であることを前置して（もしくは後置して）発言をはじめるもの ・すべての体験提供発話が明示されているわけではない。前置表現が曖昧なものでも「太陽熱が、こういうコイルが、みたいな一瞬テクニカルな話に行き、まあでもあとおもしろいのは」といった、順序立てて体験を提供するものや「あたしがうまく説明できるかどうか人の意見なんですけどでも」といった前置もある ・席替え後に「さっきも言うたんじゃけど」と話者自身が席替え前にした発言と同じ内容を発話するものは、体験提供と判定せず、主張提示とした
協調連鎖	・それが挙げられるならこれも挙げられる、と追加する発話で、直前の発言を受けて、協調的に「しかも」「それやったら」「そういうのって」と、連鎖していく応答で、短く、あるいは長く応答が続くもの ・「そのお金でさっきのを運用すればいい」と二つのトピックを重ねるような発話もたびたびみられた ・「ここの拠点の温泉でなんか」という発話者の発話を受けて、次の発話者が「やってくれる、みたいな」と他者開始修復として応答する接続もたびたびみられた
高次化	・「なんかいろいろ話して僕が、思いついたんですが」といった、思いついた経緯を前置する発話も少なからずあった。この場合、ここで開かれているワールドカフェに関わりなく、以前からの「思いついたこと」ではなく、ここで開かれているワールドカフェの時間内に「思いついたこと」とであるとみてとれたもののみを高次化した ・「なんかほんとに地域人には死活問題ですよ」といった、単純な抽象化ではない、談話の形跡を（その発話者がついた別のテーブルに）追い、それがここで開かれているワールドカフェの談話に基づく判断できたものを判定した ・「なんかそういう流れですね」といった曖昧な肯定も含めた
その他	・「そうですね」「なるほど」「いっすね」といったあいづちに類するものや、「ほんとに？」といった明確には質問とはいえないような軽い受け応えをその他とした ・少なからぬものが、「Eさんは、呉出身だ言わはなかったか？」「実は女鹿平って前住んだった所」といった来歴や、「今、の管理組合の組合長は？」といった近況の確認など、挿話

話題としてそのトピックへの反映が軽微なものを、前後の文脈から判断して判定した
・トピックからするなら、軽微であるが、機能としてはコミュニケーション上重要な役割を
果たしていると思われるが、この分析をもとらせぬよう、その他とした

4.2.3 発話カテゴリの量的変化

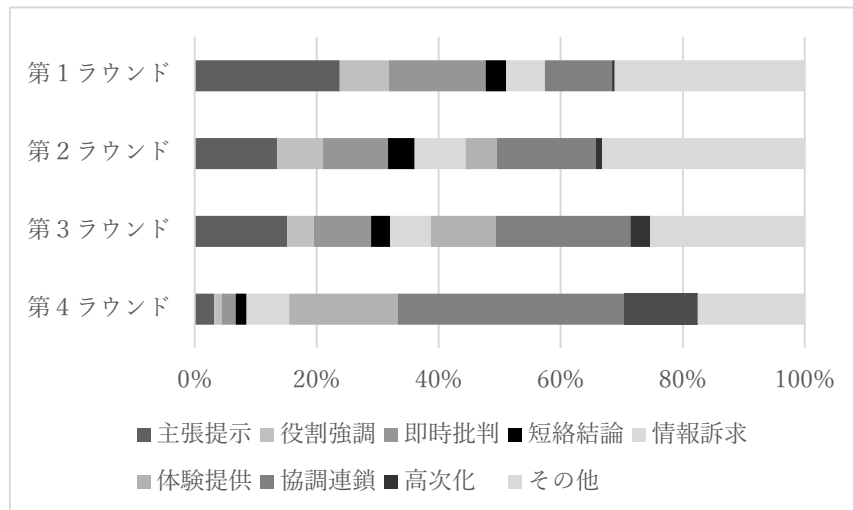
次に、ラウンドごとの発話のカテゴリをみていく。富田・丸野（2005）は、協同問題解決における談話の分析にあたって、発話を会話ターンごとに発話カテゴリに当てはめ、回数を集計し生起頻度を算出している。しかるのちに、それと談話のパターンの連関から思考進展過程の分析をしている。発話の変化を量でみて、しかるのちにそれを足がかりに談話の変化をみるというこの分析手法を範として、以下の分析を行った（表5、および図6）。

発話のカテゴリの割合からみるなら、【主張提示】は第1ラウンドに顕著である。【役割強調】と【即時批判】、および【短絡結論】は第4ラウンドで減少している。【情報訴求】はおしなべて発話されている。【体験提供】と【協調連鎖】、および【高次化】はラウンドを経るごとに増加している。

表5
ラウンドごとの発話カテゴリの傾向

発話カテゴリ	第1ラウンド	途中ラウンド		第4ラウンド
		第2ラウンド	第3ラウンド	
主張提示	253 22.5%	174 12.9%	97 14.8%	11 2.9%
役割強調	86 7.7%	96 7.1%	28 4.3%	4 1.1%
即時批判	171 15.2%	137 13.3%	60 10.4%	8 2.1%
短絡結論	36 3.2%	56 4.2%	20 3.1%	6 1.6%
情報訴求	68 6.1%	107 7.9%	43 6.6%	24 6.4%
体験提供	2 0.2%	66 4.9%	68 10.4%	61 16.3%
協調連鎖	118 10.5%	208 15.6%	141 21.6%	127 33.9%
高次化	5 0.4%	14 1.0%	21 3.2%	41 10.9%
その他	334 29.7%	426 31.6%	162 24.8%	60 16.0%
計	1123 100.0%	1349 100.0%	654 100.0%	375 100.0%

図 6
発話カテゴリの傾向の変化



これらは、先行研究を支持している。大きな流れとして、富田・丸野（2005）のいう「葛藤的発話→協調的発話」の展開、片桐他（2015）のいう「関心擦り合わせ→提案交換」の展開、藤本・大坊（2007b）のいう「トピックの開始→具体化・詳細→抽象化・要約」の展開におおむね合致している。

ラウンドを経る変化は、以下のようにまとめられる。第1ラウンドでは、主張や役割が提示され、直前の発話を即時に評価する即応の発話も多いものが、第2ラウンドと第3ラウンドでは、それ以前のラウンドでの談話の体験を提供してアイデアや情報などを共有する発話が目立つようになっていく。第4ラウンドでは、さらにその傾向が強まる。かつ、俯瞰した高次の概念に至る発話もたびたびみられる。

4.3 分析2：応答パターンの変化

発話カテゴリの量的な検討であきらかになったことは、発話の傾向がラウンドごとに変化していることである。とくに【役割強調】、【即時批判】、および【短絡結論】は、ラウンドを経るごとに段階的に減少し、【体験提供】と【協調連鎖】、および【高次化】は、ラウンドを経るごとに段階的に増加している。【情報訴求】は、ラウンドに変化なく一定の発話量がある。この、第1ラウンドに多い、【主張提示】や【役割強調】、【即時批

判】、【短絡結論】の発話や、第4ラウンドに多い、【体験提供】、【協調連鎖】、【高次化】の発話は、では、どのような応答を組織化しているのだろうか。

分析1では、発話カテゴリの量的検討で、発話の傾向がラウンドごとに変化していることがわかった。この結果を受けて、分析2ではラウンドごとに談話の応答パターンに注目し、発話がどのような連鎖を構成して談話を組み立てているのかを記述する。発話が特定の組みあわせで応答されるとき、それはどのような談話の単位を形づくるのか。隣接対を最小単位としつつ、それよりも少し大きな連鎖を視野に入れて検討する。隣接対は、質問と回答、挨拶と挨拶の返しなどの発話の一对を指す、Schegloff & Sacks (1973) を嚆矢とする概念である。

本研究では、複数の隣接対で構成される(談話の中で焦点化された)ひとかたまりの話題をトピックとみなす。談話分析ではザトラウスキー(1993)が話段という語を用いるが、同様の概念である。トピックはワールドカフェにおける談話を構成する要素であり、分析2ではこのトピックを分析の単位とする。なお本研究では、トピックを「特定の参照対象やテーマに対する連続的な発話群で、相互行為上の焦点化が維持されているもの」と定義し、その開始から終結までを1単位として分析する。終結が生じた次の発話は新たなトピックの開始となる。このトピックの内部では一定の順序で繰り返し出現する発話の応答の組合せが産出されている。この応答のパターンは隣接対の接続として現れる。

トピックを構成する一連の応答を分析すると、ラウンドごとにいくつかの特徴的なパターンが観察された。

4.3.1 第1ラウンドの応答パターン

発話は即応的に連鎖するが、いくつかの連鎖で、ある特定の展開パターンをくり返し形成している。そのトピックが、それ以前のトピックと関連して、ないしは関連せずに、開始され、連鎖し、終結するその一連がまとまりとして現れるとき、そこに応答パターンが確認される。その展開のパターンにはどのような形があり、どれくらいの回数出現するのか。以下では、第1ラウンドにおけるテーブルでの相互行為の、その展開パターンの記述を試みる。

第1ラウンドでは、この応答の展開パターンに、次の6つの型が確認された。Ⅰ主張-批判パターン、Ⅱ役割-主張パターン、Ⅲ役割-終結パターン、Ⅳ主張-短絡パターン、Ⅴ主張-協調パターン、Ⅵ情報-協調パターンの6つである(図7)。

- I 主張-批判パターン**は、**主張提示**の発話に即応的に**即時批判**の発話が連鎖する展開パターンで、この評価をもって当該トピックが終結する展開。
- II 役割-主張パターン**は、トピックの冒頭で**役割強調**の発話がなされ、それに応答するかたちで**主張提示**の発話が連鎖する展開。
- III 役割-終結パターン**は、トピックの終盤で**役割強調**の発話が産出され、それが終結の鍵となって連鎖を終結させる展開。
- IV 主張-短絡パターン**は、**主張提示**の発話に続いて**短絡結論**の発話が連鎖し、多くはその結論への同調を経てトピックが終結する展開。
- V 主張-協調パターン**は、**主張提示**の発話をきっかけに**協調連鎖**が開始され、短く、もしくは長く連続する展開。
- VI 情報-協調パターン**は、**情報訴求**の発話をきっかけに**協調連鎖**が開始され、短く、もしくは長く連続する展開。

図 7

応答の 6 つの展開パターン

I 主張-批判パターン	1 主張提示	—	3 即時批判	— トピックの終結
II 役割-主張パターン	2 役割強調	—	1 主張提示	— トピックの終結
III 役割-終結パターン	2 役割強調	—		トピックの終結
IV 主張-短絡パターン	1 主張提示	—	4 短絡結論	— トピックの終結
V 主張-協調パターン	1 主張提示	—	7 協調連鎖	— トピックの継続
VI 情報-協調パターン	5 情報訴求	—	7 協調連鎖	— トピックの継続

第 1 ラウンドにみられた 6 つの応答の展開パターンの、テーブルごとの出現数を以下に示す (表 6)。

以下、テーブル 4 を事例に、テーブルでの談話から断片を摘出しながら、展開パターンを例示する。

表 6

応答の展開パターンの出現数（第 1 ラウンド）

	テーブル 1	テーブル 2	テーブル 3	テーブル 4	テーブル 5	テーブル 6	計
I 主張-批判 パターン	－	3	－	4	1	4	12
II 役割-主張 パターン	1	－	2	3	－	－	6
III 役割-終結 パターン	－	－	1	1	－	－	2
IV 主張-短絡 パターン	1	－	－	3	－	5	9
V 主張-協調 パターン	2	－	－	1	1	3	7
VI 情報-協調 パターン	－	－	－	1	－	－	1

まず、I 主張-批判パターンの代表的なものを以下に示す。

【断片 01】 I 主張-批判パターンその 1

- 1-4-1-088. N : うーん。だからねあの、神楽とね、まあそこ体育館あったから、神楽とあれして、そのあと、ホテル見て 8 時頃から。
 1-4-1-089. M : あー神楽ね、いいけどなあ、神楽。
 1-4-1-090. N : 前はね、まあでも神楽はちょっとね難しいけどね、もう。
 1-4-1-091. P : むづかしいっていうのは、人が、いない？
 1-4-1-092. N : うんうん。だって夜から、ま例えば、ちょっとした、飲食も、ほしいし…。

【断片 02】 I 主張-批判パターンその 2

- 1-4-1-093. M : 夜って、どうなんすか、夜に何かするってなると、やっぱ泊まりになる、泊まるとなると食べる、食べるとなるとなんかお酒、とか工夫したくなる。で、飲食店が、ないという。
 1-4-1-094. N : 飲食ねえ、ちょっとねえ、むづかしいですよねえ。
 1-4-1-095. M : 食べない。

【断片 03】 I 主張-批判パターンその 3

- 1-4-1-096. N : 泊まる、泊まるゆうのはね、たぶんもう宿泊は無理。だけど、例えば、こないだ、G さんも言うとおっちゃったけどあのう、空き家、空き家がねまあこの辺もねけっこうね、あるから。あるからまあ、そうだろうねえ、空き家利用。
 1-4-1-097. P : あいいうすね。
 1-4-1-098. N : ただね、難しいよね、それは。

ここでは、第 1 ラウンドの「たいせつな質問」, 「“アクティブ温泉（活動する温泉）”って何でしょう」に沿って、テーブル 4 の 4 名が会話している。4 名は、M 交通会社社員、N 地域住民（元温泉施設従業員）、O 飲食店店主（地域施設）、P 建設コンサルタント会社技術者（NEDO 調査関係者）で、ここまでの談話で、“アクティブ温泉”という新

たな形態について、川遊び、キャンプ、自転車での周辺周遊観光、史跡めぐりといったアイデアが創出された流れから、Nの「神楽」の発話となった。【断片 01】は、Nによって、かつての地域行事としての「神楽」競演会というアイデアが、個人的な意見として提置されたあとMによって賛意が示され拡張の機会が生まれるが、N自身によって即時的に評価（否定）されている。続く【断片 02】【断片 03】でも、主張が示され即時的に批判（否定）が述べられている。

I 主張-批判パターンの相互行為では、たびたび、その後にそのトピックは産出されなくなる。このテーブルのこのラウンドでもこれ以降、神楽、飲食（飲食サービス）、宿泊（宿泊施設）に関してはトピックとならなかった。

次に、II 役割-主張パターンの代表的なものを以下の断片に示す。

【断片 04】II 役割-主張パターン

-
- 1-4-1-020. M: ぼく…わたし大朝交通…で働いているというのと、あの大朝駅が、あるんですけど、「わさ〜る」というショッピングセンターと、保健センターとかまあ役場が、複合しているというよう
な大朝の、中心地みたいな、大朝駅を、これから、自転車で活用するって、いうふうに、役場と動いているので、
- 1-4-1-021. N: そうですね、あの、休みのたんびに、すごい自転車が、
- 1-4-1-022. M: ああなんか見られたことがありますか。
- 1-4-1-023. N: このまま温泉停まってる、こともあったりするんで、あれもそういう、活動の一環だったのかしら。ここの、駐車場にね、いっぱい自転車が停まって何事？って、違うかな？
- 1-4-1-024. M: そうですね、それはまたまた別のかもしれない。それ最近？
- 1-4-1-025. N: 最近。だから、まあテングシデの、なんか歩いとったんかな、と。あ、「テングシデ」も含めてほしいですね。
-

【断片 04】でNは、地域在住という立場から、Mのいう町役場主体の自転車活用事業についても連関をもっていることを強調しようとしているが、その実施はまだこれから「休みのたんびに、すごい自転車」の数があってもそれはその事業ではないことを知ると、一転してそれに関連して、「要望」的な主張を提置している。役割としてMを町役場事業の関係者とみて、自転車による周遊の推進に「テングシデ」も含めてほしい」と要望して（1-4-1-025）トピックを終えている。

次に、III 役割-終結パターンの代表的なものを以下の断片に示す。

【断片 05】Ⅲ役割-終結パターン

- 1-4-1-049. M: あれはなんとかならんやったんですかね, やっぱり.
1-4-1-050. N: ねー. ボイラーがね, ネックです. であれはね, 予算が要するにね, 取れなかったんです. うん, そう.
1-4-1-051. P: ボイラー, なんか新しいの入ったんじゃないんですか?
1-4-1-052. N: いつ? 最近?
1-4-1-053. P: けっこう, 新しいんじゃないですか? ボイラー. そんなことはない?
1-4-1-054. N: もうね, 漏れ漏れだったんです. 元従業員なんです.
1-4-1-055. P: あ! そうなんですか.
1-4-1-056. N: でね, あの, 漏れ漏れだったんです. だからもう,
1-4-1-057. M: 漏れるっていうのは?
1-4-1-058. N: 漏れるっていうのは, 要するに,
1-4-1-059. P: 重油のボイラーですよ.
1-4-1-060. N: うん. 重油のボイラーだから. もう温泉がね止まらなかったりとか. あそこ一応貯めるようになってんだけど, それからまあ漏れてたりとか.
1-4-1-061. M: タンクとか?
1-4-1-062. N: タンクももう, はじめっからだもんね.
1-4-1-063. M: …あのタンクが貯水タンク?
1-4-1-064. N: そうそうそうそう.
1-4-1-065. M: ずっと湧き出るといっているのではないのですよね?
1-4-1-066. N: だから湧き出るのをたぶん貯めてたような感じなのかな. ま詳しくはあのへんのことは専門の人がいたから, ハハハ, あんまり詳しくは, もとにかく, わたしたちもいかにお客さんに来てもらうか, そればかり, だったもんね. フフフ.

Pは、町役場とその連携する大学が進める再生エネルギー活用の調査事業の関係者（再生エネルギーコンサルタント）で、この旧施設の設備状況にも詳しいが、成員のNも「元従業員」で詳しいと役割（立場）を強調する。ボイラー（正確にはバコティンヒーター）は閉鎖当時新品ではなかったものの換装はされており、老朽化の原因ではなかった（事後取材のフィールドノートによる）。結局この談話では、ボイラーがネックだったのか貯湯タンクがネックだったのか正確な情報の特定には至らず（専門家であるPに正確な情報の提供を求めるといって「役割を譲ること」はされず）、【断片 05】のNは、1-4-1-066で、実は専門的なことには詳しくはなく（「詳しくはあのへんのことは専門の人がいたから」「あんまり詳しくは」ない「わたしたち」）、集客が主目だったと主張内容を変えている。一貫して「立場」からの見解を提示する連鎖が続いたのち、このNの役割強調の発話でこのトピックは終結している。

次に、Ⅳ主張-短絡パターンの代表的なものを以下の断片に示す。

【断片 06】Ⅳ主張-短絡パターン

- 1-4-1-117. N: まあ地元も、まあね、もちろん協力しないといけないけど、まあ、例えば、例えばあのう、例えば稲刈り体験とか田植え体験とか、芋掘りとか、そんなのを含めて、もし地元が協力したら、ですね。
- 1-4-1-118. M: これを、活動するにあたっていちばん重要なことってやっぱり地元の人たちが、いちばん、
- 1-4-1-119. N: 地元の協力ですよ。ハハ。じゃあ。
- 1-4-1-120. M: そうですね、こう、どこも今…、よく、里山とかで、すごい田舎が観光でにぎわってるところとかがある、のを成功したやついちばんの、理由じゃないですけどいちばん重要なことはやっぱりこの地元の人が、それをなんかそれを誇りに思っているところがあるやつ、単に、
- 1-4-1-121. N: そうですね、「誇り」。地元の誇り。
(中略)
- 1-4-1-124. M: 誇り…というかまあただ単に、自分のまちは、いいところがいっぱいあるよみたいな。
- 1-4-1-125. N: そうねえ。それにねえ、それに、気づかなきゃいけないよね、地元の人が。ハハハ

【断片 06】ではNが、トピックを変えて提置した「稲刈り体験とか田植え体験とか、芋掘りとか」(1-4-1-117)というアイデア(主張)に応じて、即時にそれを抽象概念化し「いちばん重要なこと」を、Nは「地元の協力」(1-4-1-119)と発話し、Mは「地元の誇り」に思うような「いいところ」(1-4-1-120, 1-4-1-124)の認知であると結句している。概念が一定のまとまりを得たことで、このトピックの発話は終結している。

次に、Ⅴ主張-協調パターンの代表的なものを以下の断片に示す。

【断片 07】Ⅴ主張-協調パターン

- 1-4-1-138. O: あ、あのう、ぼく今あそこランチつくっています。ごはん。
- 1-4-1-139. N: そうというのがやっぱり欲しいかもしれませんね。
- 1-4-1-140. O: その程度なんで。ごはんつくぐらい、なんですけど、ぼくは。
- 1-4-1-141. M: 人が来るようなとき、料理をふるまう。
- 1-4-1-142. O: あそういうの、付けて、やったりしてもいいんじゃないですか、そういうの、キャンプとか。なんかもう「手ぶらでキャンプ」とか。
- 1-4-1-143. N: 「手ぶらでキャンプ」がいいよねえ。
- 1-4-1-144. M: キャンプ出張キッチン。
- 1-4-1-145. O: そうそうそう。そういうのとかって、いっすよね。
- 1-4-1-146. M: 「手ぶらキャンプ」
- 1-4-1-147. N: それは例えば食材はあの、自分で探してくるとか。
- 1-4-1-148. M: あー！ いいいい。自分で採る！
- 1-4-1-149. O: あー、いいじゃない。
- 1-4-1-150. M: 全部じゃなくても、なんか、
- 1-4-1-151. N: 地元で。お肉はまああるにしてもね、あの、どっかの、
- 1-4-1-152. M: どっかの農家に、

1-4-1-153. N : 農家に行って.

【断片 07】ではOが、トピックを変えて提置した、別の地域施設で「ランチ」をつくっている事例から出た「手ぶらでキャンプ」(1-4-1-142)という主張(アイデア)に、Nは「それは例えば食材は」自分で探してくる、とアイデアを連鎖させたことをきっかけに(1-4-1-147)、O、N、Mの協調的な応答が開始され、7 発話にわたって連鎖している。V主張-協調パターンは、I～IVの、「終結」に向かう展開パターンとは違って、継続する展開パターンである。

最後に、VI情報-協調パターンの代表的なものを以下の断片に示す。

【断片 08】 VI情報-協調パターン

- 1-4-1-074. N : だから川はね、活かしてもらいたいよね、どうしてもね。ここは代々、
1-4-1-075. P : 「活かしたい」。…ホテルとか、出るんですね？ ホテル。
1-4-1-076. N : あ、出ます。出ますよ。
1-4-1-077. P : なんか、きょうも見えるかもしれんって言ってましたけど。
1-4-1-078. N : あもう、そうですね。ちよくちよく見えます。まああんまりたくさんじゃないけどね。そう、毎年やってたんです、ホテル祭り。あんまり出んだったけど。だって、時期がね、ちょっとずれたりとか、ね、雨が降ったあととかだったらよく出るけど。
1-4-1-079. M : 「ホテル祭り」
(中略)
1-4-1-087. M : ホテル。うーん、ホテル、見学ツアー。まあ夜ここで、キャンプしてホテル。
-

【断片 08】では、Pが「川」からの連想で「ホテル」を想起しそれをたずねている(1-4-1-075)。Pは北広島町の観光資源に詳しくなく、この質問は、町役場の貸し自転車による周遊観光事業を進めるM、別の地域施設に入店する飲食店を運営するO、地域在住で当該施設の元従業員Nの3人全員に向けられたものだったが、これにはNが応答している。この応答をきっかけに、協調的な発話が5 発話にわたって連鎖している。

第1 ラウンドの発話は、特定の展開パターンで相互行為を形成している。その6つは、I 主張-批判パターン、II 役割-主張パターン、III 役割-終結パターン、IV 主張-短絡パターン、V 主張-協調パターン、VI 情報-協調パターンである。トピックの継続には、主張提示と協調連鎖と情報訴求が関連しており(II 役割-主張パターン、V 主張-協調パターン、VI 情報-協調パターン)、トピックの終結には、即時批判と役割強調および短絡結論が(I 主張-批判パターン、III 役割-終結パターン、IV 主張-短絡パターン)が関係している。

発話単位でみる談話は、ときとして、主張に主張が連鎖したり、即時批判が連鎖して話題が続かなかったり、あるいは大きく話題が逸れたり（いわゆる“脱線”したり）、相互行為として組織されたものにならないこともあるが、ここでみてきたような応答の展開パターンがあるとき、あるまとまった典型を創出している。

第1ラウンドで顕著であったのは、Ⅰ主張-批判パターン、Ⅳ主張-短絡パターン、Ⅱ役割-主張パターンというトピックが終結する展開のパターンである。Ⅰ主張-批判パターンは12例あり、Ⅱ役割-主張パターンは6例あり、Ⅳ主張-短絡パターンは9例あった。また、7例ではあるが、トピックがある程度続く展開のパターンとしてⅤ主張-協調パターンもみられた。

ではこれらの展開パターンは、第4ラウンドではどうなっているだろうか。次に、第4ラウンドの応答の展開パターンを検討する。

4.3.2 第4ラウンドの応答パターン

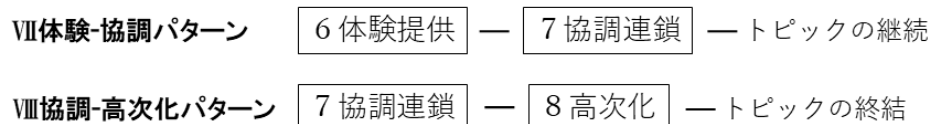
第4ラウンドでは、第1ラウンドの6つの応答パターンに加えて、次の2つの応答パターンが観察された。Ⅶ体験-協調パターン、Ⅷ協調-高次化パターンの2つである（図8）。

Ⅶ体験-協調パターンは、**体験提供**の発話をきっかけに**協調連鎖**が開始される展開パターンで、短く、もしくは長く、この連鎖が連続する。

Ⅷ協調-高次化パターンは、トピックの終盤で**協調連鎖**の発話から、より概念を**高次化**させて終結する展開パターンで、トピックというより談話全体の終結に近い。

図8

応答の追加の2つの展開パターン



第4ラウンドにみられた2つの応答の展開パターンの、各テーブルごとの出現数を以下に示す（表7）。

表 7

応答の展開パターンの出現数（第 4 ラウンド）

	テーブル 1	テーブル 2	テーブル 3	テーブル 4	テーブル 5	テーブル 6	計
I 主張-批判 パターン	-	-	-	-	-	-	-
II 役割-主張 パターン	-	-	-	-	-	-	-
III 役割-終結 パターン	-	-	-	-	-	-	-
IV 主張-短絡 パターン	-	-	-	-	-	1	1
V 主張-協調 パターン	-	1	-	1	-	-	2
VI 情報-協調 パターン	1	1	-	1	-	-	3
VII 体験-協調 パターン	4	-	1	2	2	3	12
VIII 協調-高次 化パターン	2	-	1	2	1	2	8

第 1 ラウンドでは I 主張-批判パターン（12 例）、II 役割-主張パターン（6 例）、IV 主張-短絡パターン（9 例）、V 主張-協調パターン（7 例）の出現に特徴があったが（表 6）、第 4 ラウンドは、比して VII 体験-協調パターン（12 例）、VIII 協調-高次化パターン（8 例）の出現に特徴があった。

以下、テーブル 4 を事例に、テーブルでの談話から断片を摘出しながら、展開パターンを例示する。

まず、VII 体験-協調パターンの代表的なものを以下に示す。

【断片 09】VII 体験-協調パターンその 1

- 1-4-4-009. N : あとね、ヨソではね、えーつとあの、まあやっぱりみんなが集まる食べる場所もほしい、そしたらね、屋台をね、あの、施設の周りに。1 台じゃやっぱり、ナンだから 6 台くらい屋台をつくって、そうそういろんな店そしたら週末だけでもそこ屋台、昼から夜までやるとかしたら、あー、あそこならちょと行ける、とかいう感じに、なるんじゃないか。屋台なら、要するに、建物建つ固定、じゃないから。ね。ただ、ただ冬がネックとか、冬はどうするっていう感じだったけど。
- 1-4-4-010. P : 建物をつくるという感じではない、感じてしたよ。
- 1-4-4-011. N : そうそうそうそう。
- 1-4-4-012. O : そういう感じになってきてますよね。
- 1-4-4-013. P : 温泉はあるとしてもそれより、違った建物をドーンと建てるんじゃないくて、わりとこう、なんていうんですかね、人がやりたい、ことをちゃんとできるような。
- 1-4-4-014. N : そうそう、うんうん。

【断片 10】Ⅶ体験-協調パターンその2

- 1-4-4-015. P: たとえば芝生をドーンと敷いとくだけっていうような。そこに屋台をもってきたりとか、テントを敷いたりとか、そんなカタチ…。
- 1-4-4-016. M: あー。もう更地にする。
- 1-4-4-017. N: そしたらまあ食材は大きな冷蔵庫でも、ちゃんと置いとけば週末に来て、今だからそれは毎週来てもいいし、いろんな、ね、ラーメン、とかおでんとかだけじゃなくて、いろんな人がたとえばサンドイッチとかホットドッグとか、ね、あれもおもしろいかもわからん。あと、いちばん向こうではね、クラウドファンディングとかね、一人5万円集めて一生入り放題にして、たら100人なら(笑)ちょっとね1年で500万。それで金を、集めようとかいって。
- 1-4-4-018. M: そうね、クラウドファンディングで。
-

【断片 09】では、Nが、このテーブルの第1ラウンドでは創出されなかったアイデア(週末屋台、建物は再建しない)を、席替えして出向いた途中のテーブルで、体験として受得して、「ヨソではね、」ともち帰って提供している(1-4-4-009)。Nに続いてPやOも、異なる席替えをし体験の経路が異なるものの、同程のトピックがあったと賛意を示し発話が協調的に連鎖している(1-4-4-010, 1-4-4-012, 1-4-4-013)。【断片 10】では、もち帰られた体験の提供を足がかりに協調的な連鎖が連続し、体験したアイデアが合成的に列挙(「芝生広場」、「更地化」、「共用冷蔵庫」、「クラウドファンディング」)されている。ここでは、体験提供の叙述に、「あと、ヨソでは～～っていう感じだった」(N, 1-4-4-009)、「あと、いちばん向こうでは～～とかいって」(N, 1-4-4-017)という表現の形式が用いられている。協調連鎖も、「たとえば」(P, 1-4-4-015)、「あー。もう」(M, 1-4-4-016)、「そしたら」(N, 1-4-4-017)と接続する短い連鎖となって現れている。

次に、Ⅷ協調-高次化パターンの代表的なものを以下の断片に示す。

【断片 11】Ⅷ協調-高次化パターン

- 1-4-4-059. O: なんかそういう、流れでまあ、
- 1-4-4-060. M: ドライブシアター、的な。キャンプシアターみたいな。て、いう、ところはまあ、とっかかりで、人を呼ぶ、
- 1-4-4-061. N: 宿泊施設なんやから、そうよね、キャンプで。キャンプでいけるんなら。ふうん。えー、
- 1-4-4-062. O: ま、という話で。
- 1-4-4-063. N: お金をかけてできることって、そういうことか。
-

このテーブル4の第4ラウンドには、第1ラウンドでは話題にされなかった「資金調達」や「更地化(建物の除却)」といったトピックがもち帰られ、他テーブルでの話題、

「クラウドファンディング」,「セレブを呼ぶ／セレブの友だちをつくる（インバウンド）」,「株式」といったような「お金」をめぐるアイデアが発話されている．第1ラウンドの話題の中心であった,「川の活用」,「史跡めぐり」,「地元の農業」など「今あるものを活かす」という文脈から,「資金を調達」し「更地」にして集客イベントを行うことが「新しい温泉」である,その例の1つが「巨大スクリーン」と「キャンプ」を核とする集客イベントであるとの合成的なトピックが話題化され,【断片 11】で, Nの「って, ということか」(1-4-4-063) という全体的な達観に至っている．

第1ラウンドではⅠ主張-批判パターン(12例),Ⅱ役割-主張パターン(6例),Ⅳ主張-短絡パターン(9例),Ⅴ主張-協調パターン(7例)の出現に特徴があったが(表6),第4ラウンドは,比してⅦ体験-協調パターン(12例),Ⅷ協調-高次化パターン(8例)の出現に特徴があった．

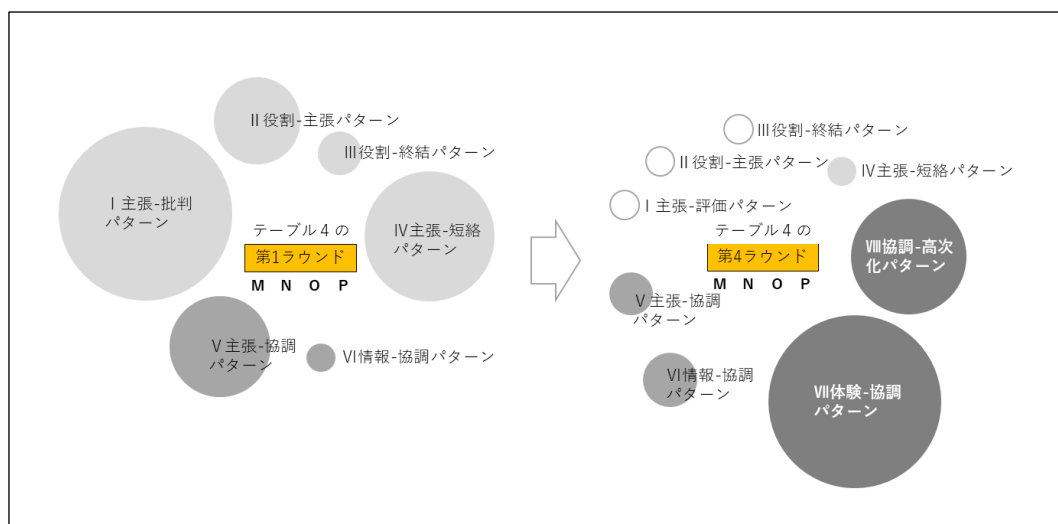
発話の連鎖によって構成される応答の展開パターンは,第1ラウンドの展開パターンにあった6つの展開パターンすべてにおいて変化している．とくに,第1ラウンドに特徴的であったⅠ主張-批判パターン,Ⅱ役割-主張パターン,Ⅳ主張-短絡パターン,Ⅴ主張-協調パターンの応答は第4ラウンドでは減少している．そして,第4ラウンドにおいて新たにⅦ体験-協調パターン,Ⅷ協調-高次化パターンの2つの応答が生成されている．図9は,応答の展開パターンの変化を図化したものである．図は表6および表7に基づいた模式図で,円の大きさは各展開パターンの出現数を表している．グレーの濃淡で,各展開パターンをわかりやすく色分けした．おもに第1ラウンドに生成されるⅠ主張-批判パターン,Ⅱ役割-主張パターン,Ⅲ役割-終結パターン,Ⅳ主張-短絡パターンは淡いグレーとした．第1ラウンド,第4ラウンドともに生成されるⅤ主張-協調パターン,Ⅵ情報-協調パターンはグレーとした．第4ラウンドでみられたⅦ体験-協調パターン,Ⅷ協調-高次化パターンは濃いグレーとした．

減少した4つの展開パターン,Ⅰ主張-批判パターン,Ⅱ役割-主張パターン,Ⅳ主張-短絡パターン,Ⅴ主張-協調パターンのその減少は,その構成要素の主張提示,役割強調,即時批判,短絡結論の発話の減少に歩を一にし,出現し増加した2つの展開パターンの出現と増加は,体験提供の発話の出現と高次化の発話の増加と歩を一にしている．第4ラウンドではみられなかったⅢ役割-終結パターンも同じように,その構成要素の役割強調の発話の減少と同程とみてとることができる．Ⅵ情報-協調パターンの応答は,第1ラウンドが1例,第4ラウンドが3例と数は少ないものの増加している．発話単位では,ラウンドごとの発話数に占める割合が第1ラウンド6.1%から第4ラウンド6.4%

と変わらないにもかかわらず、展開パターンとして増加しているのは、第1ラウンドでは情報の取得がそのみでトピックを終えている談話も多く、それが第4ラウンドでは連鎖的に組織化されているという違いによるものである。

図 9

応答の展開パターンの変化（模式図）



第4ラウンドに特徴的なのは、VII体験-協調パターンで、これをきっかけにある程度トピックが継続するという展開のパターンである。体験提供の発話が複数なされて協調連鎖に連なることもあった。このパターンは第2ラウンド以降に現れ、第4ラウンドでは12例みられた。加えて、VIII協調-高次化パターンでトピックが終結するという展開のパターンが、同じく第1ラウンドではみられなかったものが、第4ラウンドでは8例みられた。

第1ラウンドは、主張提示や役割強調が牽引する応答が特徴的であるが、第4ラウンドは、情報訴求や体験提供が牽引する応答と高次化に至る応答に特徴があることがわかった。また、I主張-批判パターン、II役割-主張パターン、III役割-終結パターン、IV主張-短絡パターン、V主張-協調パターンといった第1ラウンドに特徴的な応答がそのテーブル内で生成された発話のみから構成されているのに比して、第4ラウンドに特徴的な応答パターンであるVII体験-協調パターンは、協調のきっかけが他の複数のテーブルでの体験となっている点が、第1ラウンドの展開パターンと大きく異なる。さらには、VIII協調-高次化パターンにも間接的には他テーブルでの体験が関連しており、第4ラウンドにおけるV主張-協調パターン、VI情報-協調パターンには他テーブルの影響を受け

ているとみることができる。

【断片 12】は、第 4 ラウンドの VI 情報-協調パターンに“他テーブルでの体験”が含まれている例である。“他テーブルでの体験”にまつわる情報が訴求され、それに続いて応答が協調的に連鎖している。

【断片 12】“他テーブルでの経験”からの VI 情報-協調パターン

- 1-4-4-034. N : さっきの、巨大スクリーンは、え、建てる？
1-4-4-035. M : 巨大スクリーンというのはまあ例えば、プロジェクターだった
ら、白い壁、とか、でっかい壁が、あれば、
1-4-4-036. N : あればいいと、それ壁？
1-4-4-037. P : なんか、ほんとに風、なかなか風、風っていうの悩ましいの、
ありますけど、
1-4-4-038. N : ああん？
1-4-4-039. P : 風は、受けちゃうとあれですけど、布をドーンと張るだけでも、
しっかりしたスクリーンになる。
1-4-4-040. M : うーん。そうですねそこの、校舎の壁面、使って。
1-4-4-041. N : 校舎でしょう？ だから今の建物はその、置いたままの話よね、
これ。
1-4-4-042. M : そうですね。うーん。なんかそういうふうな、なんか、
1-4-4-043. O : 別になくしても、別にね、ちょっとそういう、木がパーッと、
基礎があって、そういうような、棒が立つようなスクリーンに
して、それに白い布を張れば、そんなでかい建物をつくる、
1-4-4-044. M : はい、白い布だけ張れば、はい、そうですね、建物をつくる、
1-4-4-045. N : あー、必要はないよね。
1-4-4-046. M : その、映せる、面があれば、
1-4-4-047. O : 面があれば、平らな、壁があれば。だから校舎をなくして、全
部ここを芝生にして、みたいな、も、可能。
1-4-4-048. M : 可能。
1-4-4-049. O : …校舎を使わなくても、できる。
-

この【断片 12】では、N がテーブルの落書きにあった「巨大スクリーン」に着目しこれを話題にし、「巨大スクリーン」イベントの実施経験をもつ M に、その実際の設備についての経験の情報提供を求めている。M の経験は既存の建物の壁面を利用したものであったがそれでは、この前出のトピックの「現状の建物は除却し更地から再生する」ということに矛盾することになる。ここに至って P や O が他のアイデアを協調的に連鎖させている（芝生広場に自立の木柱で白布スクリーンを実現させるアイデア）。席替えした 3 名のいなかったラウンドでのテーブル 4（N、O、P にとっての“他テーブル”）のアイデアへの着目からそれに関する具体的な情報の提供が求められ、それが協調的に連鎖している。この矛盾を創造的に乗り越える連鎖は、ひとつの「創発」である。第 1 ラウンドの主張に即時批判や短絡結論が連鎖する展開パターンとは軌を異にする「創発」の展開である。

ここまでみてきたテーブル4以外のテーブルも、第4ラウンドのⅦ体験-協調パターン、Ⅷ協調-高次化パターンは特徴的で、テーブル2を除き類似の傾向がみられた(表7)。

発話単位でのカテゴリの量的な変化のみならず、それを談話単位でみたときの展開のパターンも、各ラウンドに特徴があり、かつ、ラウンドを経て量的に変化している。第1ラウンドは、Ⅰ主張-批判パターンやⅣ主張-短絡パターンが特徴的であり、第4ラウンドはⅦ体験-協調パターンやⅧ協調-高次化パターンが特徴的であった。

分析2では、第1ラウンドと第4ラウンドの談話の変化を、その発話が構成する、典型的な応答の展開パターンから検討し、それぞれのラウンドの特徴となる応答のなされ方を特定した。第1ラウンドでみられた応答の展開パターンでは、主張提示や役割強調から即時批判や短絡結論へ至るといった、トピックを終結させる展開パターンが目立っているが、第4ラウンドでは、体験提供や情報訴求から協調連鎖が増加するような、あるいはそこからさらに高次化へと至るような、共同的な相互行為の展開パターンが目立っている。とくに、Ⅶ体験-協調パターンをはじめとするいくつかの展開パターンに“他テーブルでの体験”を直接間接に創発のきっかけにしているといった特徴も顕著であった。この、“他テーブルでの体験”からの影響という点には注目する必要がある。

そこで、次段、分析3では、“他テーブルでの体験”としての途中ラウンド、すなわち第2ラウンドおよび第3ラウンドに、成員の“席替え”の経路を追い、その発話と応答を分析する。

4.4 分析3：途中ラウンドに特徴的な発話カテゴリと応答パターン

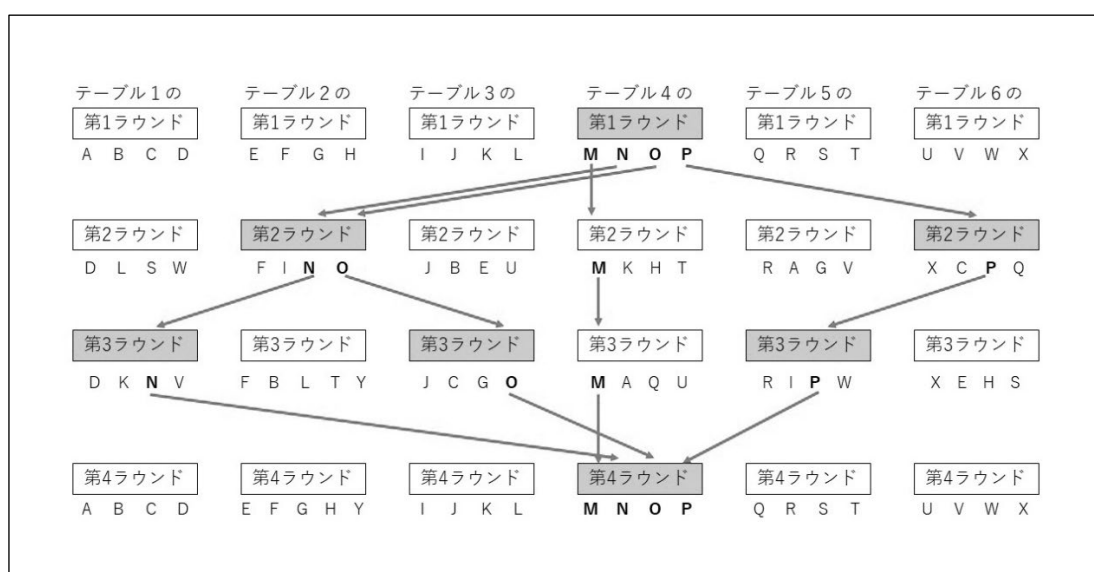
第1ラウンドと第4ラウンドの談話には明らかな違い、変化があり、その発話が構成する応答の展開パターンにも、それぞれのラウンドに特徴がみられた。とくに、直接間接の協調のきっかけとなった“他テーブルでの体験”は、Ⅶ体験-協調パターンをはじめとする少なからぬ応答の展開パターンの、開始のきっかけとなっていた。分析3ではゆえに、“他テーブルでの体験”としての途中ラウンドに、特定の成員の“席替え”の経路を追い、その発話と応答を検討する。

第1ラウンドでは割合的に少なかった協調連鎖の発話が第4ラウンドでは目立つという、この相互行為上の変化は、はたして他テーブルへの移動、すなわち“席替え”をして渡り歩くことによってもたらされたものなのか、“席替え”の影響ではなく時間を経ることによってもたらされたものなのか、これは慎重に検討する必要がある。分析2で着目したテーブル4の成員の“席替え”の経路を追うにあたっては、途中ラウンド、すなわ

ち第2ラウンドおよび第3ラウンドでの相互行為を、情報訴求の発話と体験提供の発話を含む応答に着目して検討し、途中ラウンドならではのあり方を摘出したのち、それが席の移動によるものかどうかを検討する。テーブル4の成員のうち“席替え”をしてテーブルのソトに出た3名、N、O、Pのうち、Nに着目しその経路を追って、Nが“席替え”した2つのテーブル、第2ラウンドのテーブル2、第3ラウンドのテーブル1の談話から、Nを含む、体験提供と情報訴求の、発話と応答をみていく（図10）。

図10

N、O、Pの席替えの経路



註) 席替えした移動について、例としてテーブル4を矢印で図示している。

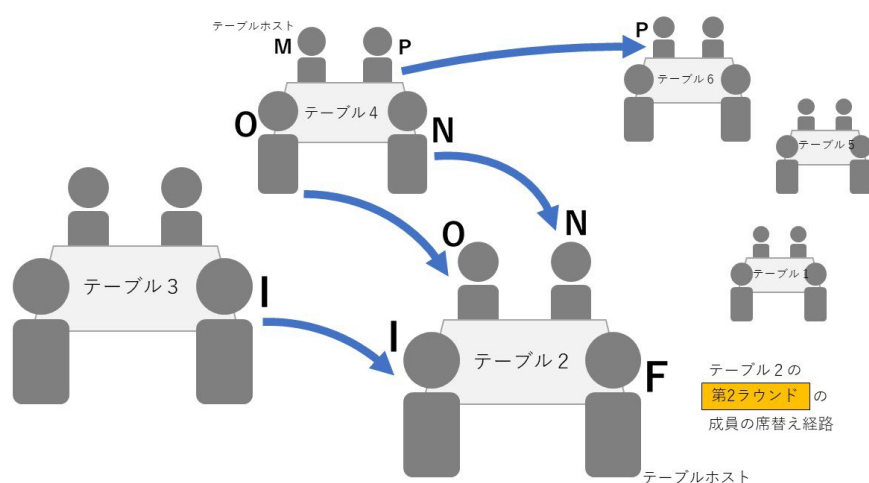
4.4.1 前のテーブルでの体験を提供する発話

テーブル4のNは、第2ラウンドは、第1ラウンドのそのテーブル4からテーブル2へ席を移動している。テーブルの成員には、1名を残して3名が散り散りに席を離れ他のテーブルへ着座するようファシリテーターから投げかけがなされたが、席に残る一人の成員（ワールドカフェではこの役割を「テーブルホスト」と呼称している）をどうやって決めるのかの決め方はとくに提示されなかった。テーブル4では、他のテーブルを体験したいと望む成員が多く、Mが残る役を買って出た。M以外の3名、N、O、Pはそれぞれ、テーブル2、テーブル2、テーブル6へ移動している。新しいテーブルでは、新しい成員で、新しい「たいせつな質問」で、新しい対話が始まる。第2ラウンドの「たいせつな質問」は「“アクティブ温泉（活動する温泉）”で何がやりたいですか」であった（図2）。成員は、テーブル2に残っていたF陶芸家（地域在住）、テーブル3から移

動してきた I 地域住民，そしてテーブル 4 から移動してきた N 地域住民（元温泉施設従業員）と O 飲食店店主（地域施設）となった（図 11）。N と O が第 2 ラウンドでも同席となったが，これは席替えの遅れによる空き席のなさと思われるが，ファシリテーターはとくにこの二人を他席へ移動させる調整は行わなかった。

図 11

テーブル 2 第 2 ラウンド成員の席替え経路



着座直後は，成員どうしの挨拶が行われたり，テーブルクロスの落書きを眺めわたす時間をもたれたりする。テーブル 2 では，「たいせつな質問」の「“アクティブ温泉（活動する温泉）” で何がやりたいですか」という話題に入る前に，成員による自主的な導入で，それぞれのテーブルでどんな会話がなされたか，相互の開示を促す発話がなされた。これによって体験提供の発話が産出されている。

【断片 13】 N および I の体験提供（第 2 ラウンド）

1-2-2-007. I : … どのような話になりました？

1-2-2-008. N : ウチのほうはね，えーつとねえ，主要するにあの地元がちゃんと協力せにやいけん。ま地元が例えば，キャンプなんかもしたらいい，いい，川があるからねせつかく。そしたら，あの例えば，野菜は，この地域で調達してくるとかハッハハハ，まあ肉は別にしても，それぞれの家行って，まあ米とか，ハッハハハ，まあそれからあとはまあそのう，えーつと…，農家体験？ あのを，田植えとか，芋掘りとか，野菜の収穫なんかもいっしょに含めて，川遊びして。ゆうたら何でも。まあ農園もあるけどね。

1-2-2-009. I : そうやね，おもしろい話したのはね，要するに，コレなんよ。

1-2-2-010. N : そりゃそうよ。いちばん大事なことよ。ハハハ。

- 1-2-2-011. I : それをどうするんかいうものを,
1-2-2-012. N : うん, だから, だから, ま農家体験なんかは, …まああの, で
きるじゃないその, 協力さえあれば,
1-2-2-013. I : うん,
1-2-2-014. N : 地域の.
1-2-2-015. I : お金を, もらうの?
1-2-2-016. N : いやもらうもらわんじゃなしに, まあそれ, うんまあ,
1-2-2-017. I : いやいや, それ, いや, ものすごい,
1-2-2-018. N : 資源かな.
-

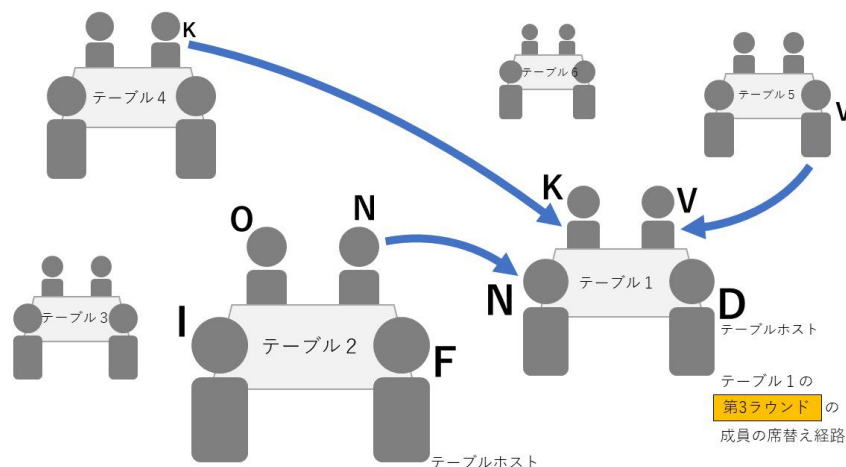
【断片 13】では, テーブル 2 に N と I がまずそれぞれ, テーブル 4 でのトピックと
テーブル 3 のトピックを体験提供している. N から, 「地元の協力」「キャンプ」「食材
の地域内調達」「農家体験」「川遊び」といった(第 1 ラウンドでの体験であった)アイ
デアが提示され(1-2-2-008), I から「コレ」というアイデアが提供されている(1-2-
2-009). 「コレ」はここでは「お金」を指す. I はテーブルクロスの落書きの記載(I を
含まない成員によって第 1 ラウンドで書かれていた)を指し示して提供しており, 同時
にこのテーブル 2 でのアイデアを連関させる意味ももっていたといえる. テーブル 2 の
テーブルクロスには, 「外国人狙いの儲け」「セレブの友だちをつくる」「お金を落とし
たくなる遊び」といった「お金」がたびたび話題となった落書きの形跡があった. I は,
N への応答で「そうやね」と呼応しており(1-2-2-009), 続く 1-2-2-015 でも「お金」
を発話していることから, 自身が提供した「お金」の話題に N の話題を連結させようと
している意図がみてとれるがこれはこの断片では達成されないままにこのトピックは
終結している. この断片の直後 I が話題を変えていることから, この連鎖は「連鎖」に
は至らなかったとみなすことができる. また, N も I も, 「ウチのほうはね」「おもしろ
い話したのは」を発話するにあたって「要するに」と切り出す形式を取っている(1-
2-2-008, 1-2-2-009). たびたび産出される体験提供がすべてⅦ体験-協調パターンを構
築するわけではないが, この「体験提供を経験する“体験”」は成員にとっては, 第 2 ラ
ウンドおよび第 3 ラウンドを構成する重要な“体験”となっている.

N はまた, 第 3 ラウンドではテーブル 1 に席替えをする. ファシリテーターのガイド
で, テーブルホストはそのままテーブルに残り, 第 2 ラウンドで席を移動した成員が再
び第 3 ラウンドでも席を移動する. 第 2 ラウンド同様, 「たいせつな質問」が提示され
るが, 第 3 ラウンドの「たいせつな質問」は「あなたにとってこの語らいでもっとたい
せつだと思えたことはなんでしょうか」であった(図 2). テーブル 1 の成員は, テー
ブル 1 に残っていた D 大学研究員(NEDO 調査員), テーブル 3 からテーブル 4 を経てテ
ーブル 1 に来た K 飲食店経営, テーブル 4 からテーブル 2 を経てテーブル 1 に来た N 地
域住民(元温泉施設従業員), テーブル 6 からテーブル 5 を経てテーブル 1 に来た V 地

域住民となった（図 12）。

図 12

テーブル 1 第 3 ラウンド成員の席替え経路)



【断片 14】 Nの体験提供（第 3 ラウンド）

- 1-1-3-030. N : そうそうこれ、これも出ましたね、あたしんところ最初は、もし「キャンプ」するんだったら、まあ食材は地元で調達してくると、ほいじゃけだけんあの掘らしてもらうとか、あの穫らしてもらうとかいうのしたらまあ、今後ともねまあ、それをじゃけん自転車で、まわりながら、あのう、ちょっとうん、例えばちょうど植える時期ならまあ野菜も植えてみるとか、ねえ、稲刈り時期ならみんなでそこに向かってみるとか、
- 1-1-3-031. D : うんうんはいはいそうですね、そうですねうんうん、いやいいですよ。なんかそういうことしたいと思うんですよそういうの。
- 1-1-3-032. N : そうなの。わたしひとりじゃとってもできないけど。
- 1-1-3-033. K : ハハハハハハ。
- 1-1-3-034. N : 地元のほう、でやってくれるんならいい。やってくれたら助かるから案外まあでも、そうそう「農業体験」だから、こん時に農家を感じる時にうん、だから今年は、ほとんどたぶんまあ民泊ももうないだろうって今も言ってたんだけど、Fくんたちとあのう、
- 1-1-3-035. D : うんうんうん。うんうんうん。え今まで受け入れてたんですか？民泊。うんうんうんうん。
- 1-1-3-036. N : うんそうそう。あー、せっかくのこの川、川をね、活かして。活かした、こともしたらいいけど。
- 1-1-3-037. D : そうですね。うんうんうん。

【断片 14】で、Nは、この第 3 ラウンドでも体験を提供しているが、ここでは、第 2

ラウンドでの体験提供がおもに第1ラウンドのN自身が発話したアイデア「キャンプ」「地元の協力」「農業体験」「川の活用」であったアイデア群に加えて、第1ラウンドでのOの発話に産出された「食材の地元調達」、Mの発話に産出された「自転車」、席替えた第2ラウンドでのFのアイデアであった「民泊」（Nは第1ラウンドでは「宿泊」を否定的に評価していた）を取り入れて、提供している（1-1-3-030, 1-1-3-034, 1-1-3-036）。ここでも、この「民泊」にDの好意的な反応があったにもかかわらず、より具体的な情報の訴求、あるいは協調の連鎖に進展することはなく、この断片の直後、N自身によって話題が変えられている。また、Nの体験提供は、「これ、これも出ましたね」とテーブルクロスの落書きを指さしながら行われており、体験の提供のしやすさが、このテーブル1において類似の話題が前出していることが類推できる“落書き”によってもたらされていると思われる（1-1-3-030）。ゆえに、Dが示す賛意（「そうですね」「いいですね」、1-1-3-031）は、NとDのやりとりであることに加えて、テーブル1とテーブル4のやりとりであるとみなすこともできる。

第2ラウンドおよび第3ラウンドという途中ラウンドでは、「たいせつな質問」の内容に関わらず体験提供が発話されている。しかし、それが必ずしも第4ラウンドにあるような体験-協調パターンを構成するわけではないことがみてとれる。第4ラウンドのような協調連鎖の頻出には至らないものの、第1ラウンドにあった主張提示や役割強調が体験提供に置き換わっていることがうかがえる。

さらに応答をみるならば、次のことがみてとれる。第4ラウンドでのNの体験提供がⅦ体験-協調パターンを構成していることから（【断片 09】）、第2ラウンド、第3ラウンド、第4ラウンドとテーブルを移動するたびに（テーブル成員が更新され、第4ラウンドで再集合するまでに）、談話の「展開」は段階を経て変化している。第2ラウンドの談話は、体験提供はしたものの他の成員と相互の主張提示に近い形となり即時批判も産出している展開である。比して第3ラウンドの談話は、体験提供が即時批判にこそ連鎖はしなかったものの協調連鎖には至らなかった展開である。第4ラウンドの談話は、体験提供から協調連鎖に接続したⅦ体験-協調パターンを構成した展開である。このように談話の「展開」は段階を経て変化している。体験提供は、その発話自体よりむしろ、応答として、それを受けた成員がどうふるまったかで内容への向きあい方が決定されてゆくものであるといえる。

4.4.2 情報を訴求する発話

情報訴求の発話は、各ラウンドで発話数が増減しても、一定の割合を保って産出されている（表5）。第1ラウンドの主張提示や役割強調、即時批判が減少するなか、第4ラウンドのVI情報-協調パターンへ寄与する、主張提示や役割強調、即時批判から遊離した、純粋な疑問の解消としての「単独の」情報訴求の発話が第2ラウンドおよび第3ラウンドにみられる。

【断片 15】 Nの情報訴求（第2ラウンド）

- 1-2-2-151. N：(略) だから毎日開けてらっしゃる？
1-2-2-152. O：今は、週末しか、金土日、にしかやってないですけど。
1-2-2-153. N：あーやっぱりそうね。
1-2-2-154. O：で、テイクアウトをやってるんですけど。でもテイクアウトだと、やっぱりその、まあ見て、モノもこう手にとって見れるし、それを買うか買わないか、で車で食べれるし、なんか、そういう部分では、あなんか意外とこう、んまああったかいもん出して食べてほしいという気持ちは強かったんですけど、実際はぜんぜん、そのお客さんは、求めてないといえども求めてないです。
(後略)

【断片 16】 Nの情報訴求（第3ラウンド）

- 1-1-3-015. K：どんちゃん騒ぎしよったんすか？
1-1-3-016. N：うんまあ。うーん。
1-1-3-017. K：知りたい知りたい。どんな感じだったんか。
1-1-3-018. D：ね、盛り上がった？ え、お客さんは来てたんです？
1-1-3-019. N：うーんと最後はそうでもなかったなあ。
1-1-3-020. D：おー。まあねえだって飲めん、もんねえ。
1-1-3-021. N：まねえ。で、泊まりでないよね。泊まり。泊まるお客さまで、
1-1-3-022. D：そうね、そうねハンドルキーパーがおらんと。
1-1-3-023. N：へーすごいね、あ「民泊」ねなるほどね。

【断片 15】は、Nが質問した事例で、これを含み第2ラウンドで1回、第3ラウンドで3回、Nは情報を訴求する質問をしている。Nの「毎日開けてらっしゃる？」という発問(1-2-2-151)に、Oが「今は、週末しか、金土日、にしかやってない」と応答し(1-2-2-152)、Nが「あーやっぱりそうね」と連鎖している(1-2-2-153)。Oがもともとの談話の文脈であった「テイクアウト」に関する発話に戻ってこのトピックを終えている(1-2-2-154)。【断片 16】は、Nが質問を受けた事例で、これを含み第2ラウンドで3回、第3ラウンドで6回、Nは情報を訴求する質問を受けている。それらでは、そのあとに短いが創発的な考察が接続している。旧田原温泉に入店した飲食店で開催されていた「ビアガーデン」のようすについて、まずKとDが矢継ぎ早に「どんちゃん騒ぎしよ

ったんすか？」(1-1-3-015),「盛り上がった?」「お客さんは来てたんです?」(1-1-3-018)と発問し、Nは「最後はそうでもなかった」(1-1-3-019)と応答している。そのあとDの「だって飲めん、もんねえ」という共感的な連鎖を皮切りに(1-1-3-020),DとNによって、「泊まり」(1-1-3-021),「ハンドルキーパー」(1-1-3-022)という単語が発せられ、Nがテーブルクロスにあった落書きを発見した「「民泊」ねなるほどね」という発話によってこの連鎖を終えている(1-1-3-023)。短いがこの発話の連鎖は、情報訴求から協調連鎖に進展したVI情報-協調パターンの生成である。また、【断片 16】はテーブル 1 の第 1 ラウンドにあった「ビアガーデン」というアイデアを受けたものであり、分析 2 でみた【断片 12】と同じく、体験提供が情報訴求に結びついている例である。体験提供は、情報訴求を喚起するともいえる。

体験提供の発話同様にここでも、応答をみるならば、第 4 ラウンドでのNの情報訴求は(【断片 12】),VI情報-協調パターンを構成していることからするなら、第 2 ラウンド、第 3 ラウンド、第 4 ラウンドとテーブルを移動するたびに(テーブル成員が更新され、第 4 ラウンドで再合流するまでに)、第 2 ラウンドが、情報訴求にまつわる短い単独の展開、第 3 ラウンドが、情報訴求から短い協調連鎖に至った展開、第 4 ラウンドが、情報訴求から協調連鎖に接続しVI情報-協調パターンを構成した展開、といったふうに段階を経て「展開」が変化していることがみてとれる。

4.4.3 体験を提供する発話からその形跡を遡って追う

第 2 ラウンドでは、第 1 ラウンドの体験が提供され、あるいは、その体験が情報訴求に関与している。第 3 ラウンドでは、第 1 ラウンド、第 2 ラウンドの体験が提供され、あるいは、その体験が情報訴求に関与している。そして、第 4 ラウンドでは、第 2 ラウンドか第 3 ラウンド、もしくは両方の体験が提供され、あるいは、その体験が情報訴求に関与している。第 4 ラウンドでの体験の提供につながる体験は、第 2 ラウンド、第 3 ラウンドにその形跡があるはずである。ここでは、第 4 ラウンドでNが体験として提供したアイデアが、どこで体験されたものか、その形跡を遡って追う。

例えば、Nは第 4 ラウンドで「セレブを呼ぶ」ことに関する発話を行っている(1-4-4-019)(【断片 17】)。

【断片 17】Nの体験提供（「セレブの友だちをつくる」）

1-4-4-019. N: だってけきよく, あとはもうひとつ, けきよく何するにしてもお金がネックだから, あのうえっとセレブを, セレブを呼ぶ. 呼び込み. 白人は, あんまりこのへんじゃお金落とさない, やっぱり中国人とか (笑) 呼んだらいいとかいう話だけど.

Nが第4ラウンドで体験提供した「セレブを呼ぶ」(1-4-4-019)の体験の形跡が, 第2ラウンドのテーブル2にある (【断片 18】).

【断片 18】Nの体験提供につながる体験 (F「セレブの友だちをつくる」)

1-2-2-027. F: ぼくらんここでは, セレブの友だちをまずはつくるところから始めてそれをお金に変えたいと.
1-2-2-028. N: ハハハ.
1-2-2-029. I: ああんなるほどね.
1-2-2-030. F: どう考えてもぼくらの, 意見ではありますけど貧乏人が寄ってたかってもお金にはならないのでという話で.
(中略)
1-2-2-034. N: セレブの友だちはどうやって見つけたらいい?
1-2-2-035. F: それに関しては誰もが黙りましたね.
1-2-2-036. O: ハハハハハハ!
1-2-2-037. I: アハハハハ
1-2-2-038. O: 誰も知らん.
1-2-2-039. F: 知らないからねえ.
1-2-2-040. N: 知らない!

【断片 18】の第2ラウンドのテーブル2のFの発話「セレブの友だちをつくる」(1-2-2-027)を含む談話がそれにあたる. この発話自体, Fの前のラウンドの体験(第1ラウンドのテーブル2のGの発話による)の提供からもたらされたものであるが, ここでNがこのアイデアに出会っている.

また同じく, Nは第4ラウンドで「屋台」に関する発話を行っている (1-4-4-009) (【断片 09】) (再掲).

【断片 09】(再掲) Nの体験提供 (「屋台」)

1-4-4-009. N: あとね, ヨソではね, えーつとあの, まあやっぱりみんなが集まる食べるところもほしい, そしたらね, 屋台をね, あの, 施設の周りに. 1台じゃやっぱり, ナンだから6台くらい屋台をつくって, そうそういろんな店そしたら週末だけでもそこ屋台, 昼から夜までやるとかしたら, あー, あっこならちょと行ける, とかいう感じに, なるんじゃないか. 屋台なら, 要するに, 建物建つ固定, じゃないから. ね. ただ, ただ冬がネックとか, 冬はどうするっていう感じだったけど.

- 1-4-4-010. P : 建物をつくるという感じではない, 感じでしたよ.
1-4-4-011. N : そうそうそうそう.
1-4-4-012. O : そういう感じになってきてますよね.
1-4-4-013. P : 温泉はあるとしてもそれより, 違った建物をドーンと建てるんじゃないくて, わりところ, なんていうんですかね, 人がやりたい, ことをちゃんとできるような.
1-4-4-014. N : そうそう, うんうん.
-

Nが第4ラウンドで体験提供した, この「屋台」(1-4-4-009)の体験の形跡は, 第3ラウンドのテーブル1にある (【断片 19】).

【断片 19】 Nの体験提供につながる体験 (K「屋台」)

- 1-1-3-040. K : (略) だけえ, ま普通に, ね, あの温泉においしいごはん, っていうのはまあゼツタイいいなと, 思ったんですけどやっぱ, 1本だと弱いな, って. だけえ, 僕ん中では, 僕屋台, が大好きなんで,
1-1-3-041. D : あ屋台いい! 屋台いい! 屋台いい.
1-1-3-042. N : あー. いーじゃんいーじゃん!
(中略)
1-1-3-068. K : で, 調理自体はその屋台でやるって, やれば, そんなにこう莫大な資金はかけなくても, いける.
1-1-3-069. N : あー. あーすごい発想!
-

【断片 19】の第3ラウンドのテーブル1のKの発話「屋台」(1-1-3-040)を含む談話がそれにあたる. この発話はKがこの第3ラウンドで主張提示したものである. これらの体験をNはテーブル4にもち帰り, 第4ラウンドで体験提供として発話している.

これらを含んで第4ラウンドでNが体験として提供したアイデアは6つある. 「テント小屋」, 「屋台」, 「共用冷蔵庫」, 「クラウドファンディング」, 「セレブを呼ぶ」, 「株式」である. および他の成員の体験の提供に賛意を示したアイデアは2つある. 「水着混浴」, 「更地」である. 第4ラウンドでNが体験として提供したすべてのアイデアの形跡を遡っておく.

【断片 20】においてNは, 「テント小屋」(1-4-4-007), 「屋台」(1-4-4-009)のアイデアを発話している.

【断片 20】第 4 ラウンドでの N のアイデアの発話・1

- 1-4-4-007. N : ありましたね. あの, だけどそんなにね, お金をかけないで, テントだけみたいな感じにして, (笑) 混浴.
- 1-4-4-008. O : 秘境温泉. 秘境混浴.
- 1-4-4-009. N : あとね, ヨソではね, えーつとあの, まあやっぱりみんなが集まる食べるところもほしい, そしたらね, 屋台をね, あの, 施設の周りに. 1 台じゃやっぱり, ナンだから 6 台くらい屋台をつくって, そうそういろんな店そしたら週末だけでもそこ屋台, 昼から夜までやるとかしたら, あー, あっこならちょと行ける, とかいう感じに, なるんじゃないか. 屋台なら, ようするに, 建物建つ固定, じゃないから. ね. ただ, ただ冬がネックとか, 冬はどうするっていう感じだったけど.
-

【断片 21】において, 「共用冷蔵庫」と「クラウドファンディング」(1-4-4-017), 「セレブを呼ぶ」(1-4-4-019), 「株式」(1-4-4-021) のアイデアを発話している.

【断片 21】第 4 ラウンドでの N のアイデアの発話・2

- 1-4-4-017. N : そしたらまあ食材は大きな冷蔵庫でも, ちゃんと置いとけば週末に来て, 今だからそれは毎週来てもいいし, いろんな, ね, ラーメン, とかおでんとかだけじゃなくて, いろんな人がたとえばサンドイッチとかホットドッグとか, ね, あれもおもしろいかもわからん. あと, いちばん向こうではね, クラウドファンディングとかね, 一人 5 万円集めて一生入り放題にして, たら 100 人なら (笑) ちょっとね 1 年で 500 万. それで金を, 集めようとかいって.
- 1-4-4-018. M : そうね, クラウドファンディングで.
- 1-4-4-019. N : だってけきよく, あとはもうひとつ, けきよく何するにしてもお金がネックだから, あのうえっとセレブを, セレブを呼ぶ. 呼び込み. 白人は, あんまりこのへんじゃお金落とさない, やっぱり中国人とか (笑) 呼んだらいいとかいう話だけど.
- 1-4-4-020. M : インバウンドですよ. 今インバウンド, 狙うには今国内の旅行者を呼び込んでからの, ですね. どうしてもね. うーん.
- 1-4-4-021. N : あとはね, 株式. 一人まあたとえば 5 万ずつ出して株式にして, で, ま, 600 万集めてどうやら, と. 確かにお金はネックですよ. ね. どうやって集めるか.
-

【断片 22】において, 「水着混浴」(1-4-4-005), 【断片 23】において「更地」(1-4-4-016) という他の成員の体験の提供に賛意を示している (1-4-4-030).

【断片 22】第 4 ラウンドでのアイデアへの N の賛意・1

- 1-4-4-005. M: ここには書いてないけど, ちょっと, 水着で入れる混浴温泉みたいな.
- 1-4-4-006. O: あーそれ言うてましたね. サウナも.
- 1-4-4-007. N: ありましたね. あの, だけどそんなにね, お金をかけないで, テントだけみたいな感じにして, (笑) 混浴.
- 1-4-4-008. O: 秘境温泉. 秘境混浴.
(中略)
- 1-4-4-029. P: 役場にこう, 任せっきりになるのも, あれですね.
- 1-4-4-030. N: ああ. …そうですねえ, まあ, とりあえずその, 温泉:::, ま, まず更地にして, なんかだから建物でなくだからそれで, もうテントだけにして, 混浴で水着で入れるようにする. あでもやっぱり, 冬がね, なんか,
-

【断片 23】第 4 ラウンドでのアイデアへの N の賛意・2

- 1-4-4-010. P: 建物をつくるという感じではない, 感じでしたよ.
- 1-4-4-011. N: そうそうそうそう.
- 1-4-4-012. O: そういう感じになってきてますよね.
(中略)
- 1-4-4-015. P: たとえば芝生をドーンと敷いとくだけっていうような. そこに屋台をもってきたりとか, テントを敷いたりとか, そんなカタチ:::.
- 1-4-4-016. M: あー. もう更地にする.
(中略)
- 1-4-4-029. P: 役場にこう, 任せっきりになるのも, あれですね.
- 1-4-4-030. N: ああ. …そうですねえ, まあ, とりあえずその, 温泉:::, ま, まず更地にして, なんかだから建物でなくだからそれで, もうテントだけにして, 混浴で水着で入れるようにする. あでもやっぱり, 冬がね, なんか,
-

これらの 6 つのアイデア, 2 つの賛意の元となった談話の形跡はすべて第 2 ラウンド第 3 ラウンドに追うことができた.

「セレブを呼ぶ」, 「株式」は, 第 2 ラウンドのテーブル 2 に形跡があった. 【断片 24】において, F が「セレブを呼ぶ」ということを話題にしている (1-2-2-027). 同じトピックの中で I が「株式」(1-2-2-031) を話題にしている.

【断片 24】N の体験提供や賛意につながる第 2 ラウンドでの体験・1

- 1-2-2-026. N: あ, はいじゃ, 金, 金の話が出たんと.
- 1-2-2-027. F: ぼくらんところでは, セレブの友だちをまずはつくるところからはじめてそれをお金に変えたいと.
- 1-2-2-028. N: ハハハ.
- 1-2-2-029. I: ああなるほどね.
- 1-2-2-030. F: どう考えてもぼくらの, 意見ではありますけど貧乏人が寄ってたかってもお金にはならないのでという話で, G さんの的にはや

っぱりこう、田原温泉にそのつなげていく温泉行きバス確保したい、していきたいんだという結論でした。

- 1-2-2-031. I : いや、ネックはねやっぱり金だと思うんじゃ。金よほいじゃけわしが思うのは、株式、株式をね発行して、例えば、田原温泉ぜひしたいんなら、いったん一口1万円で5株、買えとかねいうようなことをやって、株をやって、あと、企業へ、こうあのう宣伝するけ、田原温泉で宣伝するけえ、20 万ずつ寄付せえやゆうて、あの大朝の企業とかね、20 万ずつまあ例えばあのう、そこのフクミツ酒造が、20 万出すとか、そこの、
- 1-2-2-032. O : そしたら大朝観光開発とか、
- 1-2-2-033. I : 大朝観光も、寄付せえとか言うて、30 万ずつ出せとか言って、はじめ600 万ぐらい集めて、ほいで、それで、日曜日だけやりますと、いう感じにして、それで合わせてこういうのもあるし、こういうのがなんもあるし、こういう、のをいろいろ考えて、あそこじゃグランドゴルフもできますよみたいな。やっぱり、金::がないとねそれぞれこそ、貧乏人がね一生懸命集まってもねそりゃ、
- 1-2-2-034. N : セレブの友だちはどうやって見つけたらいい？
- 1-2-2-035. F : それに関しては誰も黙りましたね。
- 1-2-2-036. O : ハハハハハハハ！
- 1-2-2-037. I : アハハハハ
- 1-2-2-038. O : 誰も知らん。
-

「更地」、「クラウドファンディング」、「屋台」、「共用冷蔵庫」、「テント小屋」、「水着混浴」は第3ラウンドのテーブル1に形跡があった。【断片25】において、Dが「更地」ということを話題にしている(1-1-3-152)。これはNが「建物がなくて更地」というテーブルクロスの落書きを見つけそれについて問いかけた(1-1-3-151)ものに応えたものである。この断片においては、「テント小屋」もDによって話題となっている(1-1-3-154)。また、Vによって「水着混浴」も話題となっている(1-1-3-158)。

【断片25】Nの体験提供や賛意につながる第3ラウンドでの体験・1

- 1-1-3-151. N : 「建物がなくて更地」ってどういうこと？
- 1-1-3-152. D : あだから、ま1回更地にしたがいんじゃないの、
- 1-1-3-153. N : ああああ、ああああ、うんうん。
- 1-1-3-154. D : っていう話とか、建物つくるけえ維持管理費がみたいなるけえ、まそのテントとか、その屋台とか、極力建物をつくらないほうがまあいいんじゃないかっていう、
- 1-1-3-155. N : 露天温泉になる。ハハハ。
- 1-1-3-156. K : アッハッハッハ。まあでもそれはそれでいいしね。
- 1-1-3-157. D : そうそう掘っ建て。掘っ建て小屋。そうそうそうそう。ハハハ。
- 1-1-3-158. V : 水着着てのうそういう感じで。
- 1-1-3-159. D : そうそうそう。それはそれで人気になるかもしれないですよ。
- 1-1-3-160. N : そうかー。
- 1-1-3-161. D : そう。露天風呂がバーンってあるみたいな、ね。
- 1-1-3-162. N : まあ確かにね、建物、まあそのう、あれがほんとにネックなんだね。ボイラーがハアダメになってたんやね。ボイラーも、
-

【断片 26】において、Dが「クラウドファンディング」ということを話題にしている (1-1-3-024).

【断片 26】Nの体験提供や賛意につながる第3ラウンドでの体験・2

- 1-1-3-024. D : さっきおもしろかったの、なんかつくるときクラウドファンディングで5万だったら一生入り放題、とかにしたら、100人集まったら500万、200人集まったら、1000万。なんか5万で一生入り放題ってなんか、ね、
- 1-1-3-025. N : そうだね。あーそうよ。
- 1-1-3-026. K : お得な感じっすよ。
- 1-1-3-027. D : ねお得な感じですよ。
- 1-1-3-028. N : さっきね出てました、結局はお金が問題、お金。どうしてお金集めるかっていうのがね、あれは確かに。うーん。
- 1-1-3-029. D : ね。うんうんうん。

【断片 27】において、Kが「屋台」ということを話題にしている (1-1-3-040).

【断片 27】Nの体験提供や賛意につながる第3ラウンドでの体験・3

- 1-1-3-039. D : えどうですか、ラーメン屋さんには。ハハハ。
- 1-1-3-040. K : うんラーメン屋さん的には。までも、そうっすね、僕当初千代田温泉、で、ラーメンを出したかったんですよ。で、話が来たら、この、千代田温泉はもう決まっているから、田原温泉どう？みたいな感じで最初、来たんすよ。だけえ、ま普通に、ね、あの温泉においしいごはん、ていうのはまあゼツタイいいなど、思ったんですけどやっぱ、一本だと弱いな、って。だけえ、僕ん中では、僕屋台、が大好きなんで、
- 1-1-3-041. D : あ屋台いい！屋台いい！屋台いい。
- 1-1-3-042. N : あー。いーじゃんいーじゃん！
- 1-1-3-043. K : だけえ、ま、飲まんでも、雰囲気で酔えるっていうのが僕すごい好き。んでお酒、嫌いじゃないすけど、そんな飲まんのんすよ。
- 1-1-3-044. D : ハイハイハイ。
- 1-1-3-045. K : うん。なんかそういうワイワイした雰囲気が僕大好きなんすよ、みんながすごい幸せそうに楽しそうにやっていると。だけえそういう場所：が、こうま、毎日は無理でも週末だけでも、
- 1-1-3-046. N : そうそうそうそう！
- 1-1-3-047. K : だけえ、僕からしたら、常にお祭り、毎週、お祭りみたいな。屋台が、常に常設で、そうっすね、ませめて6店舗ぐらい。いろんなのが、こうしっかりしたやつあのお、簡易用じゃなくて、やつ、だけつくって、
- 1-1-3-048. D : ハイハイハイ。
- 1-1-3-049. N : あーそうね、そしたら、そうね！

【断片 28】において、Kが「共用冷蔵庫」についての話題を発話している（1-1-3-066）。これは、建物を利活用せず屋台を新設するならば常設ではないため、厨房機器やとくに冷蔵庫等をどうするのかというトピックの中で発話されたものである。

【断片 28】Nの体験提供や賛意につながる第3ラウンドでの体験・3

- 1-1-3-066. K：でもみんなが、共同で使えるやつを1個用意しといて、やれば、
1-1-3-067. N：うんうんそうそうそう、置いとけば、食材はそこに、取っとけばいい。
1-1-3-068. K：で、調理自体はその屋台でやるって、やれば、そんなにこう莫大な資金はかけなくても、いける。
1-1-3-069. N：あー。あーすごい発想！
1-1-3-070. D：ねえ屋台いいすね！屋台いい。
1-1-3-071. N：えー。
1-1-3-072. K：ま昼間は昼間で楽しい、夜は夜でちょっと、いい感じライトアップして、かっこいい感じにしたら、すごいいいなと思うんで。
1-1-3-073. D：うんうん、いい、いい。
1-1-3-074. K：そしたら問題は冬場っすね。
1-1-3-075. N：そうねっ。

途中ラウンドで体験的であったにもかかわらず（Nも盛んに談話に参加していたにもかかわらず）、第4ラウンドで提供していないトピックも4つ確認された。第3ラウンドのテーブル1において話題化された「テイクアウト」、「ビアガーデン」、「プラネタリウム」、「川の図書館」がそれである。これらの断片を示しておく。

第3ラウンドのテーブル1で、Nはこれらのトピックを体験しているが、のちのラウンドでとくには体験提供していない。たとえば、【断片 29】においてNは、Dの発話に始まる「テイクアウト」（1-1-3-105）という話題に接している。

【断片 29】Nの体験提供につながらなかった第3ラウンドでの体験

- 1-1-3-103. D：うん。だからなんかイケたのが平日は、その、町内のほら「かあちゃん餃子」とかあるじゃないですか、だけ移動販売とかまうーバーイーツとかで、そっちからね取り寄せられるとか、
1-1-3-104. N：あー。
1-1-3-105. D：で、人が少ないのに店構えるのがリスク高いけん、じゃまあ平日はその、テイクアウトみたいなものを町内の、お店やさんからしたら。
1-1-3-106. N：そうねあの、テイクアウトがさっきの…、
1-1-3-107. D：オオツカさん？
1-1-3-108. N：からしろ館の人のあれ、テイクアウトのあれけっこう出たって言いよったね。
1-1-3-109. D：からしろ館のね、ねえサンドイッチ今されてて金土日週末とか、

1-1-3-110. K : へえー.
1-1-3-111. N : 食べたことある？
1-1-3-112. D : ありますあります. すごいボリュームあってねおいしかった.
1-1-3-113. N : へえー.

【断片 30】においてNは、KとDの発話に始まる「ビアガーデン」(1-1-3-006, 1-1-3-007) という話題に接している.

【断片 30】Nの体験提供につながらなかった第3ラウンドでの体験

1-1-3-001. N : まあここすごいね.
1-1-3-002. D : 絵がうまいでしょう.
1-1-3-003. N : そうですね. 誰? これ. 誰?
1-1-3-004. D : これね, あの, 役場の, 役場のね女の子, あのあの青いマスクしてる女の子.
1-1-3-005. N : かわいい. すごい.
1-1-3-006. K : 「ビアガーデン」.
1-1-3-007. D : はい, 「ビアガーデン」.
1-1-3-008. K : へえ. これはなんか今までいっさい出てこんかった.
1-1-3-009. D : え? そうですか?
1-1-3-010. N : 出てこなかったね, わたしも. わたしのテーブルもそうだった.
1-1-3-011. D : ほんと? ほんと? でもなんかやったことあるでしょ? 田原温泉やってたんでしょ? ビアガーデン.
1-1-3-012. N : しとった. したけどね, したけど, ハハ, 人手がなくてたいへんでした. そりゃあ中でビールを, 運んで. ねえ.
1-1-3-013. D : あー. あ, 中で?
1-1-3-014. N : いやいや. ね外でやるから中からビールを運ばにやいけんし, 料理もそうだし. 料理とか,

【断片 31】においてNは、テーブルクロスの上の落書きにあった「プラネタリウム」を指し、自ら話題化している (1-1-3-038).

【断片 31】Nの体験提供につながらなかった第3ラウンドでの体験

1-1-3-038. N : あーこの「プラネタリウム」ってのもねなるほどねいややっぱ若い人の考えだね. エッへへへへ. うん.
1-1-3-039. D : アハハハ.

【断片 32】においてNは、Kの発話に始まる「川の図書館」(1-1-3-133) という話題に接している.

【断片 32】Nの体験提供につながらなかった第3ラウンドでの体験

- 1-1-3-132. D: へえー。まあ、でも今大朝の資源回収しててけっこう本捨てる人おるけえ、そっからいい本取ってきたら、ね、あるかもしれない。
- 1-1-3-133. K: ふふふん。うんなんか、図書館じゃないけどあそこ行ったらすごい本がいっぱいあるとかでもなんか、みんながこうアクティブにやりたい、ていう、ふうには僕は思わないです。けっこうインドアだけど静かな山奥で、なんかゆっくり本も読めるし温泉も入れるし、みたいなのが好きな人もきっとおるはずだから。
- 1-1-3-134. N: 何もないのがいいいう人もね。あー。
- 1-1-3-135. D: 確かに。そうそうなんかそんな話で、夏とか暑い時にまあ屋根さえあれば、川とかに足をつけながら本とか読むのって、
- 1-1-3-136. K: おー最高それ、
- 1-1-3-137. D: めっちゃよくないですか？ ね。すごい川の水冷たいから、たぶん気持ちいいですよ。途中でビールとか飲みながらね最高ですね。
- 1-1-3-138. K: 最高ハハハ。

すべてが機械的に伝達されるわけではないともいえる。なんらかの峻別の意思に基づいて、能動的に体験は提供される。“他のテーブル”から、その前のラウンドで得られた体験を、そのラウンドでそのテーブルで提供するときには、二三の例外を除いて概ね、体験提供の形式が取られている。その例外では、主張提示の形式で発話されている。前ラウンドでの談話の体験は、体験として伝達されるか、あるいは主張として提示されるか、伝達されないかである。

ラウンドを重ねるごとに、テーブルのメンバーが入れ替えられ、そのたびに体験提供と情報訴求の機会が生まれている。その発話の応答をみるなら、体験提供に即して第2ラウンドでは即時批判を産出し、第3ラウンドでは即時批判を産出はしないものの連鎖は短く、第4ラウンドでは協調連鎖に接続したVII体験-協調パターンを構成するといった、段階的な変化を見い出すことができる。情報訴求に即しても第2ラウンドでは情報訴求は短い単独の展開が多いが、第3ラウンドでは情報訴求から短い協調連鎖に至る展開があり、第4ラウンドでは情報訴求から協調連鎖に接続しVI情報-協調パターンを構成するといった、段階的な変化を同じく見い出すことができる。体験提供および情報訴求は、その発話とそれを受けたメンバーによって構成された相互行為として、ラウンドごとに段階的に変化している。

4.4.4 N以外の事例

途中ラウンドでの発話と応答の特徴について、ここまでみてきたN以外の事例もみておく。Nには当該施設の元従業員という属性があったが、それ以外では、突出して発言が多いわけでもなく、主張から協調への変化が特段に大きいわけでもなく、談話への関わり方は標準的であったといえる。同じように標準的な例としてN以外の事例について、前のテーブルの体験を提供する発話、情報を訴求する発話、体験提供につながる発話の体験のそれぞれを順に挙げる。まず、Nに類似の事例を挙げ、次に、類似していない事例を挙げる。

【断片 33】～【断片 38】は、第2ラウンド、第3ラウンドでの情報訴求の発話と体験提供の発話、およびそれらを含む応答のN以外の事例である。

体験提供の発話の事例として、第2ラウンドのテーブル6の例、【断片 33】、【断片 34】を挙げる。【断片 33】ではXの発話に連鎖してQが体験を提供している。【断片 34】ではQの発話に連鎖してPが体験を提供している。

【断片 33】 Qの体験提供（「周辺施設との連携」）

-
- 1-6-2-002. X: まずやっぱり、あの温泉復活がまあ第一だよってこと、
で、えーま最低限の、温泉施設でいんじゃないの？ ま建物要らないよ。要はハードよりもソフトのほうが。ソフトを充実していきます、何でもかんでもここでできないので、えーま周辺の施設とかと連携させます、で行く。あとは民泊とか、古民家民泊とか、たぶんほうぼう借りながら、でいんじゃないの？っていう。
（略）あと、ま、コロナの関係、で、キャンプ場ってすごい流行ってるんです。いやまあ外にいてことはすごい安全なことだみたいな、出てきて、キャンプ場っていうのはいっしょに考えられる、キャンプっておもしろいのかって。ここでもキャンプできる。
（中略）
- 1-6-2-007. Q: 周辺の施設…の連携いうんで、今あのお話しよったんじゃないけど、朝枝のグランドゴルフ場がある、
- 1-6-2-008. X: 朝枝？ 朝枝。
- 1-6-2-009. Q: 朝枝にグランドゴルフ場があるんよ。あっこなんかほぼほぼ使われてないんよ。でもう地元が…、そのう、指定管理をはずしてくれいってから言いよる。（後略）
-

第2ラウンドのテーブル6で、テーブル5からテーブル6へ席替えしたQが体験を提供している。テーブル6の成員は、テーブルホストX農家、C町役場職員（主催者）、P建設コンサルタント会社技術者（NEDO 調査）、Q地域協議会会長となった。Xがテーブルホストとしてまず冒頭紹介したその体験提供（1-6-2-002）の「周辺施設との連携」に対応する連鎖として、1-6-2-007 を発話を産出している。

【断片 34】 P の体験提供（「食材の地元調達」）

- 1-6-2-016. Q : 市民農園ある。で、そこで野菜なんかみんなでつくってここにもって来て、あのう、まあ、キャンプするならそんまんま、キャンプ場でそこからすぐ使えてあとの近辺の、農家の人、野菜を提供してもらってそれを調理する。山のも元手いらん。
- 1-6-2-017. P : それわたしのグループでも出ました。なんか手ぶらでできるキャンプって流行ってるけど、手ぶらではできるけど野菜はこう、ここでこの町で調達して、
- 1-6-2-018. Q : だって野菜なんかねゼツタイ、もいですがおいしい、キュウリにしてもナスビにしても。アクが出たらねえ、あんまりじょうずじゃないけえちいといかんけど、であんまり市内のスーパーでからデパートでも、地下の食品売場やらその日の野菜じゃない。
- 1-6-2-019. X : 今の、あの野菜、収穫みたいなのと、農家の手伝いみたいなのも、もしかしたらプランができるかもしれない。
- 1-6-2-020. Q : 農家体験、体験。
- 1-6-2-021. X : 体験プランがね。うん。おもしろいです。困ってる農家なんで。ハハハ。イケてます。
-

続いて、テーブル 4 からやってきた P も、体験を提供している。偶然、Q の発話内容（1-6-2-016）と P の体験が一致し、ここで提供している（1-6-2-017）。この一連の応答は、Ⅶ体験-協調パターンを構成している。

情報訴求の発話の事例では、【断片 35】、【断片 36】を挙げる。【断片 35】では、第 2 ラウンドのテーブル 1 で、L が情報を訴求し、W が応答し協調連鎖の応答が始まっている。【断片 36】では、第 2 ラウンドのテーブル 6 の協調連鎖の途中で、Q が情報を訴求し C が応答している。

【断片 35】 L の情報訴求（「原泉の温度」）

- 1-1-2-055. L : J さんに聞いたんですが、原泉温度が 27℃くらいなんですね。6, 7?
- 1-1-2-056. W : 20…5, 6℃で、上あがったらまた、下がるんね。
- 1-1-2-057. D : へえー。
- 1-1-2-058. W : だから、あの、原泉を、生きとるうちに、利用せないかん、ゼツタイに。
- 1-1-2-059. L : 26℃ったらほんとあのう、ね、夏場だったらちょうど気持ちいいぐらいだと思うんですね。
- 1-1-2-060. D : 冷泉で。
- 1-1-2-061. W : だからえっと沸かさんでもええ。冷泉じゃけね。
-

第 2 ラウンドのテーブル 1 で、テーブル 3 からテーブル 1 へ席替えした L が情報を訴求している。テーブル 1 の成員は、テーブルホスト D 大学研究員（NEDO 調査員）、L 酒

蔵経営，S 役場支所職員，W 地域住民（町内会長）となった。L は第 1 ラウンドで話題に上がった原泉温度（テーブル 3 において J が情報を提供）について，このテーブルに話題としてもち込み（体験提供），重ねて事情に詳しい W に質問している（1-1-2-055）。W はそれに応答し（1-1-2-056）その上で，D が連鎖した「冷泉」の発話に呼応して（1-1-2-060），温泉施設再建の文脈であったにもかかわらず，W も「えっと（注：方言・たくさん）沸さんでええ」と冷泉での活用も受容している（1-1-2-061）。情報訴求から短いが協調連鎖が起きている。

【断片 36】C の情報訴求（「テントサウナ」）

-
- 1-6-2-217. C : あのう，テントサウナとかって最近あるじゃない。テントサウナが，
1-6-2-218. X : はいはいはいはい，はい，あー湯来のほうで，
1-6-2-219. C : 湯来のほうでやってるやつ，あれ！
1-6-2-220. X : あれねあれ，あれ。
1-6-2-221. C : そう，そう。で，僕たちのもうサウナは，ニュージャパンみたいなやつじゃけど，ハハ，
1-6-2-222. Q : それは，どのくらい，どのくらいあれ寒いん，だろ？ あの耐久性。
1-6-2-223. C : だからあれ見たらね，テントも張ってあってね中でストーブ焚いてね水着でこうおってあったから，草擦られて，熱そうで外出て川にパチャーン入って，でまた，体冷やしてでこうってそのテントの中入って，
1-6-2-224. Q : それ，湯来でやりよる？
1-6-2-225. X : 湯来でやってます。
1-6-2-226. C : 川なんだったらここでも，できる。まずその，
1-6-2-227. Q : まどこでもできるわそれは。
1-6-2-228. C : やややだけん，だけんやってるん。
-

第 2 ラウンドのテーブル 6 の成員は，テーブルホスト X 農家，C 町役場職員（主催者），P 建設コンサルタント会社技術者（NEDO 調査），Q 地域協議会会長となった。C がテーブル 1 からもち込んだアイデア「テントサウナ（「湯来リバーサウナ」）」についてその経験を，Q が質問し（1-6-2-222，1-6-2-224），経験のある C と，情報を知っている X が応答している。

体験提供につながる発話の体験に関する追加の事例では，【断片 37】を挙げる。ここでは，第 4 ラウンドのテーブル 4 で P が体験提供した体験は，第 2 ラウンドのテーブル 6 の談話にその形跡があるとみてとることができる。

【断片 37】Pの体験提供につながる体験（C「建物をつくらない」）

- 1-6-2-186. C：やけ誰かさっき言った、だったら建物いらんのんじゃない？ってまたまさにそうかなと思って、
1-6-2-187. P：あんまりつくりすぎないほうが、
1-6-2-188. X：そう。建物があるばかりに例えば金がないなったけどどうしようとか、次の再建計画をどうしようとかかって、
1-6-2-189. P：自分でその、やりたいことをこう自分で考えて、やる自由度を、つくってあげて、
1-6-2-190. C：そうそうそうそう。だけ、ちょっと話を、あの飛躍するんだけど、あのあの広島市の被服支廠のモンダイがあるじゃないすか、（後略）
-

【断片 37】のCの「建物いらない」は、このテーブル6の、第1ラウンドで呈された話題で、カフェホストXによって第2ラウンドに体験提供され、このラウンドでは複数回話題として提示されている。その応答の1つが【断片 37】で、ここでは連鎖にPも加わっている。このあと、Pは、第4ラウンドのテーブル4で、この体験を、成員Nの発話を補完しながら提供している。

【断片 09】（再掲）Pの体験提供（「建物をつくらない」）

- 1-4-4-009. N：あとね、ヨソではね、えーつとあの、まあやっぱりみんなが集まる食べるところもほしい、そしたらね、屋台をね、あの、施設の周りに。1台じゃやっぱり、ナンだから6台くらい屋台をつくって、そうそういろんな店そしたら週末だけでもそこ屋台、昼から夜までやるとかしたら、あー、あっこならちよと行ける、とかいう感じに、なるんじゃないか。屋台なら、要するに、建物建つ固定、じゃないから。ね。ただ、ただ冬がネックとか、冬はどうするっていう感じだったけど。
1-4-4-010. P：建物をつくるという感じではない、感じてしたよ。
1-4-4-011. N：そうそうそうそう。
1-4-4-012. O：そういう感じになってきてますよね。
1-4-4-013. P：温泉はあるとしてもそれより、違った建物をドーンと建てるんじゃないくて、わりとこう、なんていうんですかね、人がやりたい、ことをちゃんとできるような。
1-4-4-014. N：そうそう、うんうん。
-

ただし、体験提供が必ずよい応答を受け連鎖を生む起点になるとは限らない。以下は、体験提供と情報訴求の発話応答で、逸脱し発話者の意図が伝わらなかった事例である。

【断片 38】Bの体験提供とJの応答（「スナバ」）

- 1-3-2-030. E：その「スナバ」のイメージっていうものは、その、あの運営側がじゃこういうことやりますって提案するだけでなくって参加者といっしょにその都度その都度、
1-3-2-031. B：そうですそうです。あのう、やりたい人が、来て、何かしてる、で自分も混ざりたいと思ったら混ざる、でまた別の人が違う遊

びをしてる、これいっしょにやったら楽しんじゃないと思っ
たら、その人たち同士が、ちょっといっしょに遊ぼうやっという感
じで、砂遊びする、楽しく遊び終わったら楽しかったねって片付
ける。っていうイメージ。フフフ。

1-3-2-032. J : あのう、否定するわけでもなんでもないんだけど、そのへんのこ
と、ハハハ、実はもうやってきた。

1-3-2-033. B : あ。あこういった、ああこの、うーん、

1-3-2-034. J : あそこあのう、どうじゃけ野菜つくるのは、某市民農園、なんか
植えてやってみた。川遊びなんかも、年間4回ぐらいね地元イベ
ント、組んで、春は山菜、の天ぷらやったりして、夏は、ヤマメ、
をこうてきてからね、つかみ獲りしたりして、秋はまあ神楽を、
暮れの年越しをやったり、してたんでまあ、で、ここでもできる、
ことはねだいたい、こうやってくるのはきた。でも、トータルで、
あのうこういった、温泉施設があっちこっちできたのと、から、
こういったとこへ、こういちばん来てたのがねやっぱし夏は、海
水浴の帰りにね、浜田に行ってから、そのう、海に入るじゃろ、
で、サッと塩のあとのぶん、いきなり塩を落とそうと思ったら、
風呂に入る、

1-3-2-035 B : あーやっぱお風呂。

成員が、テーブルホスト J 地域住民（町内会長・集落支援員）、B 町役場職員、E 地
域おこし協力隊（新任）、U 地域住民となった第2ラウンドのテーブル3で、テーブル
1から席替えしたBが体験を提供している。【断片38】では、B発話の途中でEが応答
したりと協調的な流れになりかけた中で、Jが「否定するわけでもなんでもないんだ
けど、そのへんのこと、実はもうやってきた（1-3-2-032）とBとEのやりとりを修正して
いる。結果、トピックは「スナバ（自由なアクティビティ広場）」にはならず、「やっぱ
お風呂」に後戻りしている（1-3-2-035）。この、“他テーブルにテーブル1の第1ラ
ウンドでの体験を提供した”体験を、【断片39】では、Bは第4ラウンドで元のテーブルに
帰還して「なんか夢みたいなことばっか言ってごめんなさいみたいな」（1-1-4-009）と
報告するのみで、以降もこの第2ラウンドのテーブル3での談話内容は、体験提供して
いない。

【断片39】Bの第4ラウンドでの発話（「夢みたいなこと」）

1-1-4-003. B : みんな、大人になって帰ってきたよ。

1-1-4-004. D : マジ！ マジ、何があったの？ 旅先で。

1-1-4-005. C : なんかつけた気がする。

1-1-4-006. D : 確かに。疲れてるよ。

1-1-4-007. B : なんか、うん。なんか。

1-1-4-008. C : 浦島太郎。

1-1-4-009. B : なんか夢、夢みたいなことばっか言ってごめんなさいみたいな。

1-1-4-010. D : 現実を突きつけられてた？

1-1-4-011. B : なんかほんとに地域の人には死活問題ですよねとか、やっぱ世の
中、金ですよ。

1-1-4-012. D : あーあーあーあー。あー。

体験提供が談話の起点にならなかった事例は、この1例限りである。体験提供は、それがいったんは即時批判や短絡結論を応答させることはあっても、主張提示に続くそれとは違い、ほぼまとまったトピックや談話の構成の起点になっている。

分析3では、“他テーブルでの体験”としての途中ラウンドに、特定の成員の“席替え”の経路を追い、その発話と応答を検討した。席を移動したテーブルで、前のテーブルの体験を提供したり、情報を訴求したり、されたりしながら、その体験そのものが次のテーブルへの体験の提供の準備となる。Nの事例は、第2ラウンド、第3ラウンドでそれぞれ、この、体験提供-情報訴求-体験提供準備を構成している典型的な事例である。N以外のQやPにおいても同様の展開がみられた。ラウンドを重ねテーブルを移動するたびに生まれる体験提供と情報訴求の機会に、その発話に始まる応答の展開は、段階的に変化している。

次節、分析4では、これまでの途中ラウンドの分析から、体験提供発話のひとつひとつの語用表現に着目して、発話の変化、応答の変化が、第2ラウンド、第3ラウンド、第4ラウンドと積み上がっていく変化の段階を検討する。

4.5 分析4：体験を提供する発話が与える影響

ラウンドの進行がもたらす展開パターンの変化には、体験提供を含むトピックが影響している。席替え前のテーブルで会話した体験を席替え後のテーブルに提供する【体験提供】は、談話に対してどんな役割をもつのか。ここでは、体験提供発話のことばの用いられ方を検討する。

発話の傾向の変化、応答の変化が、ラウンドの遷移、席替えに即して段階的に起きているとしたら、途中ラウンドにはその変化の段階的な積み上がりの形跡があるのではないだろうか。分析4では、応答の展開の起点となる談話冒頭の体験提供発話の表現に着目して、第2ラウンド、第3ラウンド、第4ラウンドと変化していく段階的変化の形跡を検討する。

第2ラウンド、第3ラウンド、第4ラウンド、いずれもラウンドの冒頭では体験提供の発話がなされているが、その語用表現には違いがある。前出の断片から拾うなら、第2ラウンドでは、【断片13】のNは「ウチのほうはね、えーっとねえ、ま要するに～」(1-2-2-008)と発話し、Iは「おもしろい話したのはね、要するに、～」(1-2-2-009)と発話している。【断片18】のFは「ぼくらんところでは、～」(1-2-2-027)、【断片33】のQは「～いうんで、今あのお話しよったんじゃけど、」(1-6-2-007)、【断片34】のP

は「それわたしのグループでも出ました．～」(1-6-2-017), 【断片 35】のLは「Jさんに聞いたんですが,～」(1-1-2-055), と, その語用表現にはいくつかのバリエーションがみられる.

「ウチのほう」「ぼくらとこ」「わたしのグループ」は, 成員性を強調しながら話者が誰であったかを表現しているし, 「Jさんに聞いたんですが」は前テーブルを集合体とは捉えずそこから個を取り出してその体験の元となった話者を, 特定して表現している. 「今話しよった」は体験を時制で捉えて時間を表現している. あるいは端的に「話しした」と報告するものもあるなど, この表現にはその提供者がその体験をどう捉えたかが反映されている.

あるいは, 第3ラウンド【断片 14】のNの「そうそうこれ, これも出ましたね, あたしんところ最初は.～」(1-1-3-030), N「～って今も言ってたんだけど, Fくんたちと」(1-1-3-034), 第4ラウンド【断片 09】のNの「あとね, ヨソではね,～」(1-4-4-009), 【断片 10】のNの「あと, いちばん向こうではね,～」(1-4-4-017)と, 第3ラウンド, 第4ラウンドでは, 第2ラウンドのような, ウチとここ, わたしのグループとこのテーブル, 今しがたと今, というような二項の対比ではなくなり, 体験の参照元が複数化している. 「あたしんところ最初は」「今も言ってたんだけど」と時間表現の語用によって, 第1ラウンドと第2ラウンドを呼称し分けていたり, 「いちばん向こう」と場所柄を空間的に指し示したり, 「ヨソ」という表現で「ウチ」以外をまとめたりしている.

このように体験提供に際して前置もしくは後置された語用で, その参照元が明示的に表現されるとき, ではその表現の形式は, はたしてラウンドごとに「段階的に」変化しているのか, ここでは, その語用を摘出して検討を行う.

全4ラウンドの体験提供の発話に関連する語用例は全数で87例あった. これらは, 4つのカテゴリに分類される(表8). 時間表現, 空間表現, 話者表現, 曖昧表現の4つである.

時間表現は、「最初」「今」「前のテーブル」など時間や順序に着目して体験元を過去として表現している。

空間表現は、「うち」「このテーブル」「いちばん向こう」など場所や境界に着目して体験元を表現している。

話者表現は、「ぼくら」「わたしたちのグループ」など話者に着目して体験元を表現している。自陣を表現するタイプ（「ぼくら」など）と、特定の人物を表現するタイプ（「Jさん」など）の2つがある。

曖昧表現は、限定性を省略して体験元を表現している。全体を表現するタイプ（「みんな」など）と、たんに「話した」「言っていた」「そういう感じになった」と表現するタイプの2つがある。「書いてある」とテーブルクロス落書きを直接参照するものもここに含んでおく。

表 8
体験提供表現のカテゴリ

コード	定 義	語用の例
時間表現	時間や順序に着目した体験提供の前置もしくは後置.	「最初」「今」「前のテーブル」など
空間表現	場所や境界に着目した体験提供の前置もしくは後置.	「うち」「このテーブル」「いちばん向こう」など
話者表現	話者に着目した体験提供の前置もしくは後置. 2つのタイプがある. － 自陣表現タイプ （「ぼくら」など） － 特定人物タイプ （「Jさん」など）	「ぼくら」「わたしたちのグループ」「Jさん」など
曖昧表現	体験元の限定性を省略した体験提供の表現. テーブルクロス落書きを直接参照するものも含む. 2つのタイプがある. － 「みんな」タイプ － 「話した」タイプ － 落書きの参照	「みんな」「話した」「言っていた」「そういう感じになった」「書いてある」など

体験提供表現 87 例はラウンドごとにはそれぞれ、第 2 ラウンド 31 例、第 3 ラウンド 26 例、第 4 ラウンド 30 例あった（表 9）。ラウンドを通しての総数では、時間表現は 13 例、空間表現は 25 例、話者表現は 26 例、曖昧表現は 23 例あった。

表 9

各ラウンドの体験提供表現

カテゴリ	タイプ	第2ラウンド	第3ラウンド	第4ラウンド	小計	計
1 時間表現		3	9	1	13	13
2 空間表現 (時間と同時に表現している2例を含む)		11	8	6	25	25
3 話者表現 (時間と同時に表現している1例を含む)	自陣表現	8	5	1	14	26
	特定人物	5	3	4	12	
4 曖昧表現	「みんな」	1	0	5	6	23
	「話した」	3	0	8	11	
	落書きの参照	0	1	5	6	
計		31	26	30	87	87

時間表現の13例には、1ターンの発話に「最初の席で」と「先ほどのところ」(1-6-3-006)、「いちばんはじめんところ」と「次のところ」(1-6-3-035)と、2カ所の表現を含む2例が含まれる。

体験提供表現・複数の表現を含む時間表現の例

1-6-3-006. E: まず、～つてのが最初の席でも、先ほどのところでも出ました
やっぱり

(第3ラウンド・テーブル6)

1-6-3-035. S: いちばんはじめんところにいたんは、ここに近いんだけど、要は、
～(中略)つという話も出よった。で、次のところ行ったとこは、
この～

(第4ラウンド・テーブル1)

空間表現の25例には、「回りましたけどどっちも」(1-5-3-008)、「回ったところ」(1-6-4-008)というまとめ表現をした2例も含まれる。

体験提供表現・まとめの表現を含む空間表現の例

1-5-3-008. P: 回りましたけどどっちも、～つていう言葉が出てた

(第3ラウンド・テーブル5)

1-6-4-008. W: だいたい、だいたい回ったところもやっぱりけっこうだいが同
なしようなどこ出る。ほいでね～ようなことけっこう、盛ん
に言いよったね。

(第4ラウンド・テーブル6)

なお、1 ターンの発話に時間表現と空間表現の両方を含むなどしている体験提供表現の判定の例を示す。「さっきね向こうで」(1-6-2-073)、「さっきあっちのテーブルで」(1-6-2-215) という時間表現を伴って前置する複合表現の 2 例もこの空間表現に含めた。

体験提供表現・複合表現を空間表現とした判定例

1-6-2-073. C : さっきね向こうで話したんだけど、例えばね～

(第 2 ラウンド・テーブル 6)

1-6-2-215. C : あとねさっきあっちのテーブルで言ったけど、～

(第 2 ラウンド・テーブル 6)

話者表現の 26 例には、「自分が言っていたのは」(1-1-2-173)、「いろいろ話して僕が」(1-3-4-011) という 2 例の自分自身の表現も(「わたしたち」という自陣タイプとは区別して)、「特定の人物」に含めた。また、「さっきわたしのグループで」(1-6-2-051)、「今ちらっと聞いた話では、～ていうふうに S さんから聞いて」(1-4-2-018) という時間表現を伴って前置する複合表現の 2 例もこの話者表現に含めた。

体験提供表現・複合表現を話者表現とした判定例

1-1-2-173. L : まあと自分が先ほどの、テーブルで言っていたのは例えば、～

(第 2 ラウンド・テーブル 6)

1-3-4-011. K : いや、これはもうなんかいろいろ話して僕が、思いついたんですけど、～

(第 4 ラウンド・テーブル 3)

体験提供の参照元の表現は、ラウンドごとに傾向をもつ。

時間表現は、第 3 ラウンドに多くみられ (9 例)、第 4 ラウンドでは少ない (1 例)。

空間表現は、第 2 ラウンドに多くみられ (11 例)、第 4 ラウンドでは少ない (6 例)。

話者表現のうち自陣表現タイプ(「ぼくら」)は、第 2 ラウンドにみられるが (8 例)、第 4 ラウンドでは少ない (1 例)。特定人物タイプは第 2 ラウンド (5 例)、第 3 ラウンド (3 例)、第 4 ラウンドであまり変化はみられない (4 例)。

曖昧表現は、「みんな」タイプ (5 例)、「話しした」タイプ (8 例)、落書きの参照、ともに第 4 ラウンドで増加する (5 例)。

第 3 ラウンドで表現が時間表現と空間表現に集中する点、第 2 ラウンドの話者表現と空間表現が、第 4 ラウンドの曖昧表現に置き換わるように変化する点が特徴的である。

時間表現では、直前のラウンドを「さっき」(1-1-3-028)と表現したり「今」(1-2-3-010)と表現したりして、体験を現ラウンドに、即時性をもった報告として提供している。参照元が複数化した第3ラウンド、第4ラウンドでは、「いちばんはじめんところ」と「次のところ」(1-6-3-035)と表現し分けるといった工夫もみられた。

体験提供表現・1 時間表現の例

1-6-2-040. X:それは、 <u>前のテーブル</u> でも盛んに言っていました	(第2ラウンド・テーブル6)
1-1-3-028. N: <u>さっき</u> ね出てました、～っていうのがね、あれは確かに	(第3ラウンド・テーブル1)
1-2-3-010. B: <u>今</u> ね地元はずっとおっつの方とかは～、っていう熱い思いを <u>今</u> 聞いていたところでした	(第3ラウンド・テーブル2)
1-6-3-035. S: <u>いちばんはじめんところ</u> にいたんは、ここに近いんだけど、要は、～、(中略)っという話も出よった。で、 <u>次のところ</u> 行ったところは、この～	(第3ラウンド・テーブル6)

空間表現では、「ここ」(1-6-3-001)、「あっち」(1-6-2-215)、「向こう」(1-3-2-039)といった距離感を表現したり、「隣のテーブル」(1-2-3-007)、「ひとつ右の席」(1-4-2-022)といった空間配置を精密に表現したり、「ヨソ」(1-5-4-011)という境界を示したりしながら、体験を現ラウンドに空間の広がりとして報告している。参照元が複数化した第3ラウンド、第4ラウンドでは、「回りました」(1-5-3-008)といったまとめの表現や、「いちばん向こう」(1-4-4-017)といった比較の表現もみられた。

体験提供表現・2 空間表現の例

1-6-3-001. X:まずはまあ <u>ここ</u> で話した、ことを、言いますと、この、いちばん最初は～っちゅうことで、	(第3ラウンド・テーブル6)
1-6-2-215. C:あとねさっき <u>あっち</u> のテーブルで言ったけど、あれやりたいな、～	(第2ラウンド・テーブル6)
1-3-2-039. U:現実問題として <u>向こう</u> で出たのも、～とかまあ	(第2ラウンド・テーブル3)

1-2-3-007. L: 隣のテーブルで言ってたのはね、～

(第3ラウンド・テーブル2)

1-4-2-022. T: ひとつ右側の席で、ずっと言っていました

(第2ラウンド・テーブル4)

1-5-4-011. S: ほんなんだったらヨソであつたんは、～っていうのは出よつたかな

(第4ラウンド・テーブル5)

1-5-3-008. P: 回りましたけどどっちも、～っていう言葉が出た

(第3ラウンド・テーブル5)

1-4-4-017. N: あと、いちばん向こうではね、～とかね

(第4ラウンド・テーブル4)

話者表現の自陣表現タイプでは、班やグループに近い実感として「わしら」(1-2-2-021), 「わたしのグループ」(1-6-2-017), 「ウチ」(1-2-2-008) のように語用し、体験を主観的に提供している。特定人物タイプの表現では、テーブルやグループという単位ではなく、その体験の中にある個の発話としてそれを捉えて、引用して提供している。

体験提供表現・3話者表現・自陣表現タイプの例

1-2-2-021 I: わしらが考えたのは～

(第2ラウンド・テーブル2)

1-6-2-017 P: それわたしのグループでも出ました。～

(第2ラウンド・テーブル6)

1-2-2-008 N: ウチのほうはね、まあ要するに～

(第2ラウンド・テーブル2)

体験提供表現・3話者表現・特定人物タイプの例

1-4-2-018. T: 今、ちらっと聞いた話では、～というふうにSさんから聞いて

(第2ラウンド・テーブル4)

1-4-3-014. M: あと二番目に来た人からの意見では、～かと

(第3ラウンド・テーブル4)

1-2-4-015. F: そんな感じでしたよ、後半の人たちは、うん

(第4ラウンド・テーブル2)

曖昧表現は第4ラウンドに特徴的な表現であるが、「みんな」タイプ、「話した」タイプ、ともに体験元を限定せず曖昧にして、会場全体を集合的に表現しながら、体験を提供している。

体験提供表現・4 曖昧表現・「みんな」タイプの例

1-1-4-021. C: できるかどうかでみんな興味関心あった新しいっていったら～
ていうのが楽しいんじゃないかと

(第4ラウンド・テーブル1)

1-5-4-030. R: たら、～っていう話とかは、みんなうちやったですよ。

(第4ラウンド・テーブル5)

1-5-4-046. Q: 結局、ここにある～っていうのはみんな言いよる

(第4ラウンド・テーブル5)

体験提供表現・4 曖昧表現・「話した」タイプの例

1-3-4-002. L: 言ってたのがやっぱ～いうふうな話がいろいろあったので確かにそれはその通りだなあと、いうところでした

(第4ラウンド・テーブル3)

1-3-4-005. I: ～いう話があって、なるほどなあいうて、そこは気づかんだったんだけど、

(第4ラウンド・テーブル3)

1-4-4-006. O: あーそれ言うてましたね、～も

(第4ラウンド・テーブル4)

体験提供表現・4 曖昧表現・落書きの参照の例

1-4-4-004 P: ～て書いてある

(第4ラウンド・テーブル4)

1-5-4-034 R: 書いてあるよ、ほら！

(第4ラウンド・テーブル5)

1-6-4-068 V: ～は、ここにもここにも書いてとる

(第4ラウンド・テーブル6)

体験提供で用いられるその体験元を指し示す表現の傾向の、そのラウンドごとの変化をたどるなら、席替えを行った第2ラウンドの体験提供では、主として「あっち」「向

この「テーブル」「ここ」といった空間の概念と「わたしのテーブル」といった自陣を表す成員性（自陣）の概念が活用されて表現され、第3ラウンドの体験提供では、空間概念に加えて「さっき」「前の」といった時間概念が活用されて表現されている。最初のテーブルに帰還する第4ラウンドでは、これらの話者・空間・時間の指示表現が減少し、「みんな」言っていました、その「話しました」といった曖昧で包括的な表現が増加する。すなわち、体験提供表現はラウンドの進行に伴い、話者・空間表現 → 時間表現 → 包括的な曖昧表現へと段階的に変化している。この推移自体、他花受粉に伴う参照枠の再編（再結合・再文脈化）の過程の言語的反映である。

席替えは明確に変化をもたらしている。その変化は、席替えを行わなければ生起しにくかったであろう体験提供の発話の、その表現に表れている。この表れをたどるとき、席替えがどのような変化をもたらすのかをみてとることができる。体験提供の表現が、話者表現を取るとき、また空間表現を取るとき、ついで時間表現を取るとき、最終的に包括的な曖昧表現へ移行するとき、その段階的変化がもし応答に影響を与えているならば、その段階的推移こそが、席替えがもたらす変化のメカニズムを明らかにするはずである。

次段では、体験提供の前置表現が、直後の応答にどのような影響を与えているかについて検討する。

4.6 分析5：体験提供の前置表現が曖昧になること

体験提供では、その体験元をどのように表現するのか。体験提供の前置表現には4つのカテゴリが活用されており、かつ、ラウンドの遷移にあわせて段階的に変化していることがわかった。では、その体験提供の前置表現は、どんな影響を与えその直後にどんな応答を産出させているのか、どの表現がこういった応答を組織化していくのか、体験提供の前置表現の4つのそれぞれをみていく。

体験提供は、その発話のあとに、特定のカテゴリの発話を応答させている。そこには傾向はみいだせるだろうか。以下にまず総数を示す（表10）。体験提供の発話の直後の応答となる発話とはどのような発話であったか、9つの発話カテゴリの分類に従って傾向をみていく。

表 10

体験提供に応答した発話の傾向

発話カテゴリ	第2ラウンド	第3ラウンド	第4ラウンド	計
1 主張提示	7	0	1	8
2 役割強調	1	0	0	1
3 即時批判	6	1	1	8
4 短絡結論	3	1	0	4
5 情報訴求	1	2	0	3
6 体験提供	6	13	14	33
7 協調連鎖	6	9	10	25
8 高次化	0	0	2	2
9 その他	1	0	2	3
計	31	26	30	87

体験提供の発話で前置表現が用いられた 87 例について、その体験提供の発話に
 応答した発話に着目し、まず、発話カテゴリ別にラウンドごとの全体の傾向を
 みる。第2ラウンドでは、体験提供発話のあとには主張提示や即時批判が
 応答されることが多く、第3ラウンド、第4ラウンドでは、体験提供に
 体験提供が連鎖したり、協調連鎖が応答されたりすることが多い。これら
 と、体験提供表現の時間表現、空間表現、話者表現、曖昧表現のラ
 ウンドごとの傾向を重ねながら、体験提供表現が直後の応答に与える影
 響についてみていく。

以下の4つの表は、それぞれ体験提供表現ごとに、応答した発話カテ
 ゴリを集計したものである（表 11、表 12、表 13、表 14）。

表 11

体験提供現・時間表現への応答

発話カテゴリ	第2ラウンド	第3ラウンド	第4ラウンド	計
1 主張提示	－	－	－	－
2 役割強調	－	－	－	－
3 即時批判	－	－	－	－
4 短絡結論	1	1	－	2
5 情報訴求	－	1	－	1
6 体験提供	1	4	－	5
7 協調連鎖	－	3	1	4
8 高次化	－	－	－	－
9 その他	1	－	－	1
計	3	9	1	13

表 12

体験提供表現・空間表現への応答

発話カテゴリ	第2ラウンド	第3ラウンド	第4ラウンド	計
1 主張提示	2	—	—	2
2 役割強調	1	—	—	1
3 即時批判	3	1	1	5
4 短絡結論	—	—	—	—
5 情報訴求	—	—	—	—
6 体験提供	2	6	3	11
7 協調連鎖	3	1	2	6
8 高次化	—	—	—	—
9 その他	—	—	—	—
計	11	8	6	25

表 13

体験提供表現・話者表現への応答

発話カテゴリ	第2ラウンド	第3ラウンド	第4ラウンド	計
1 主張提示	5	—	1	6
2 役割強調	—	—	—	—
3 即時批判	2	—	—	2
4 短絡結論	1	—	—	1
5 情報訴求	1	1	—	2
6 体験提供	1	3	3	7
7 協調連鎖	3	4	1	8
8 高次化	—	—	—	—
9 その他	—	—	—	—
計	13	8	5	26

表 14

体験提供表現・曖昧表現への応答

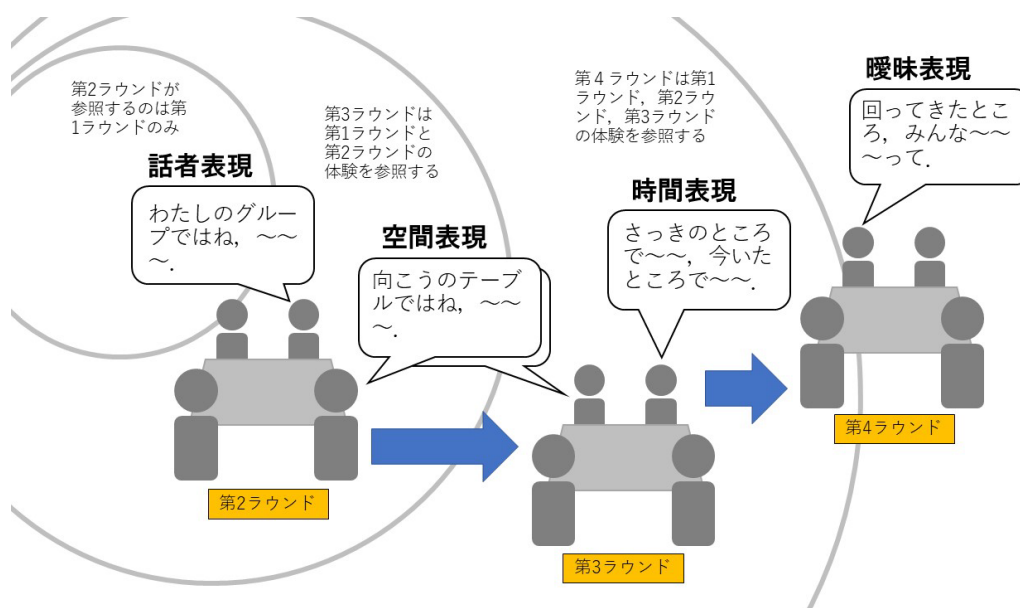
発話カテゴリ	第2ラウンド	第3ラウンド	第4ラウンド	計
1 主張提示	—	—	—	—
2 役割強調	—	—	—	—
3 即時批判	1	—	—	1
4 短絡結論	1	—	—	1
5 情報訴求	—	—	—	—
6 体験提供	2	—	8	10
7 協調連鎖	—	1	6	7
8 高次化	—	—	2	2
9 その他	—	—	2	2
計	4	1	18	23

体験提供の時間表現は、体験提供と協調連鎖の応答につながっている。空間表現は、即時批判と体験提供の応答につながっている。話者表現は、主張提示と協調連鎖の応答

につながっている。曖昧表現は、体験提供と協調連鎖の応答につながっている。時間を表現したり曖昧な表現にすることは、そのあとに体験提供と協調連鎖を連鎖しやすくする。いっぽう、限定性をもつ空間表現は即時批判につながることも多々あり、話者表現は主張提示につながるが多い。ラウンド傾向に照らすと以下のことがいえる。

第2ラウンドでは、体験提供に空間表現が用いられるとき、即時批判につながる傾向があり、話者表現が用いられるとき、主張提示につながる傾向がある。第3ラウンドでは、体験提供に用いられる時間表現、空間表現ともに、同じように、体験提供につながる傾向がある。第4ラウンドでは、曖昧表現で体験提供が包括的に発話され、同じく体験提供と協調連鎖につながる傾向をもつ。ラウンドの変化は、時間とともに徐々に変化するのではなく、そのラウンドの開始にあたって冒頭で発話される体験提供が、どのような志向で前ラウンドの体験を提供するか、かつそれにどのような応答が合わさるかによって、応答の変化として、段階的に遷移している（図13）。

図13
体験提供表現の変化



例を示しておく。第2ラウンド、第3ラウンド、第4ラウンドと変化していくNの体験提供表現と、Pの体験提供表現である。

体験提供表現・Nのラウンド遷移による変化

1-2-2-008. N: ウチのほうはね、まあ要するに～

(第2ラウンド・話者表現)

1-1-3-028. N: さっきね出てました、～っていうのがね、あれは確かに

(第3ラウンド・時間表現)

1-4-4-009. N: あとね、ヨソではね、～っていう感じだったけど

(第4ラウンド・空間表現)

体験提供表現・Pのラウンド遷移による変化

1-6-2-017. P: それわたしのグループでも出ました。～

(第2ラウンド・話者表現)

1-5-3-008. P: 回りましたけどどっちも、～っていう言葉が出た

(第3ラウンド・空間表現)

1-4-4-010. P: ～という感じではない、感じでしたよ

(第4ラウンド・曖昧表現)

「ウチ」や「わたしのグループ」という語用は、主張提示をテーブル単位で行為化している。第1ラウンドで多かった主張提示が、席替えによる第2ラウンドの開始で、あたかもテーブル版の主張提示となっているかたちとみてとれる。第2ラウンドで話者表現が多く、あるいは空間表現も、「あっち」を「ここ」と比較する意味で同程の機能を発揮するこのとき、ゆえに、主張提示が引き起こすのと同じ構造で即時批判や短絡結論を応答させる。第3ラウンドでは、もはや「ウチ」「わたしのグループ」を名乗る志向は薄れ、話者でも空間でもない時間の区分として、たんに過去であるとして「さっき」と語用されたり、2つのテーブルをまとめて「回りました」と表現されたりする。意図せずともこのことによって、主張提示とは形式の違うもの、伝達性、客観性が増した印象のものとなる。第4ラウンドでは、途中の（仮の）伝達ではなく、第1ラウンドの成員に対して（最終的な）ラウンド遷移の報告となるので、体験が包括的な表現となる。この表現の変化は、テーブルを移動することによって加算されてゆく体験の参照元の数的な増加によるところが大きいとみていい。第2ラウンドでは、参照元が1つであり、それまで着座していた「ウチ」のテーブルしかないが、これが第3ラウンドでは、参照元が2つとなり「さっき」と「今」のような複数化も成り立つ。第4ラウンドではさらに、最初の第1ラウンドを合わせるなら参照元が3つとなり、「回ってきた」「みんな」とここにいるオリジナルの成員というみなしかたをしている可能性が高い。

体験提供に対しての応答では、第2ラウンドでは主張提示の応答が多くみられたが、第3ラウンド以降では体験提供に続く体験提供の連続や協調連鎖の応答が多くみられた。また、区切られたラウンドごとに席替えがなされることで、談話が「体験の提供」として引用されつつ運ばれ、かつ、参照元が曖昧化している。引用は引用を喚起し、成員間で体験の提供が連鎖して増加してゆく。

このように席替えによって談話には、他テーブルの体験の増加によって、視点を変え、位置取りを変える機会を提供し、かつその視点や位置取りを変えることによって、主張提示と即時批判の二項間の関係を遠ざける機会が与えられている。席替えしなければ固定してしまいかねない主張と評価の関係を、伝達や報告によって客観化し、創発のための要素として扱いやすい「提供」を行う環境が提示されている。

4.7 小 括

研究1のここまですら明らかになったのは、席替え（成員の途中入れ替え）が発話カテゴリと応答パターンに段階的な変化をもたらし、序盤の【主張提示／役割強調】から終盤の【体験提供／協調連鎖／高次化】へと収束する過程が確認できた、という点である。

他花受粉をいかに捉えるか。研究1では、ラウンドの進行によって発話がどう変化しているか、またラウンドの進行を形式化する席替えが発話と応答にいかなる関与をもつかという切り口から、調査フィールド1を対象に5つの分析を行った。

分析1では、ワールドカフェに即した発話カテゴリを設定し、ラウンドの進行から発話カテゴリの変化および応答パターンの変化を捉える分析を行い、席替えによる変化をあきらかにした。結果、発話のカテゴリの傾向がラウンドを重ねるごとに変化することがあきらかになった。序盤のラウンドでは【主張提示】や【役割強調】など対立的・即時的な発話が目立ついっぽう、ラウンドが進むにつれて【体験提供】や【協調連鎖】、【高次化】といった、協調的で抽象度の高い発話が増加する傾向がみられた。

分析2では、発話単位を越える応答パターンを検討し、ラウンドの変化を追った。結果、第1ラウンドでは主張や役割の強調に対する批判や短絡的な結論が多く、議論の終結を促す展開が支配的だったのに対し、第4ラウンドでは体験や情報をもとにした協調的な応答や高次化した発話が連鎖する進展が顕著であることがあきらかになった。とりわけ、他テーブルでの体験の提供が協調的な応答のきっかけとなる展開が終盤で多く観察された。ここに他花受粉の実相をみることができた。

分析3では、途中ラウンド（第2・第3ラウンド）の席替えの経路を追い、発話内容

の変化を詳細に検討した。その結果、体験提供や情報訴求がラウンドごとに段階的に変化し、発話の応答も即時的なものから協調的なものへと変容する過程が示された。成員が前テーブルでの体験を提供することで、発話内容の進展・再構成が起きていることがわかった。

分析4では、発話の傾向の変化として顕著であった「体験を提供する発話」に焦点化して分析を行った。ラウンドの進行がもたらす変化に影響している体験提供を含む談話についてその前置表現の役割とことばの用いられ方を検討した。結果、体験提供の前置表現が指し示す空間的・時間的・話者的な引用元が、ラウンドを経ることで曖昧かつ包括的な表現へと変化しており、この曖昧化が協調的な応答の創発的性格を促進する鍵となっている可能性が示唆された。

分析5では、体験提供の前置表現が、直後の応答に与える影響を精査した。結果、空間表現は即時批判を、話者表現は主張提示を、時間表現や曖昧表現は協調連鎖を導く傾向があり、表現形式の変化が談話の展開を方向づけていることがあきらかになった。

実際のワールドカフェの談話の分析で可視化されたのは、他花受粉は席替えによって生じる体験の提供と文脈の共有を契機として、それが発話の語用的特徴を変化させ、応答の様式を協調的・創発的に再構成するというプロセスである。他花受粉が会話の多様性と密度を高めアイデアの新しい組み合わせに至るには、発話の構成と語用の変化、さらには応答のありようが変容する事象を伴っていることがわかった。主張提示—即時批判という二項の近接をいったん離し、体験を「提供」へと客観化して扱いやすくする装置こそが席替えである。さらには、他のテーブルに起源をもつ談話要素を携えて最初のテーブルに戻る過程が、発話をして再結合・再文脈化の対象へと変位させ、その後の協調的応答と高次化を呼び込む。いいかえるなら、体験提供の前置表現が話者・空間→時間→包括へと推移することは、参照枠の広がりや責任の個人化から共有化への移行を言語的に可視化している。

これは次の2つのことが他花受粉の成立要件であることを示唆している。1つは、ワールドカフェの前半では参加者が自身の主張・立場や自他の意見の違いに固執しやすい傾向にあったのに対して、後半では協調や高次化といった、他者の意見を尊重したり複数の意見を積極的に関連づけたりする柔軟な傾向がみられるようになったという変化である。いうなれば【短絡終結志向】から【協調連鎖志向】への移行ともいえるべき変化がみてとれる。もう1つは、柔軟になっていく変化のきっかけのひとつが、席替えに伴って必要となる体験提供発話であるということである。別のテーブルのトピックの体験を提供するこの体験提供発話は、成員相互に連鎖し増加するとともに、その引用元を表

す前置表現を曖昧化させていく。参加者は席替えによる体験提供発話を通して、曖昧さと寛容さを増していく。役割や立場が固定して対抗的に主張をくり返すだけではたとえアイデアが多様化したところで他花受粉は起きない可能性が高い。

ワールドカフェの各テーブルという局所的な文脈（トピック）は、席替えによって他のテーブルへと運ばれ、異なる文脈同士が交差する場となる。そこでは、体験の提供として提示される発話展開パターンが鍵となって、体験の即時性や即興性への傾注が促進される。個としての主張や役割の強調は次第に弱まり、「並列」から「全体」への統合的な変容が生じていく。他花受粉はこの、創発を引き起こす直前の“前段階”を組織化している。それは、「発話の交通（通い合い）」から、自己と他者が互いに変容可能な応答関係に入る「対話的出会い」の組織化ともなっている。この意味において、他花受粉は変容を促進する対話空間を構築し、その可能性を開いているのである。

4.8 検証を試みる：いわき市・対話と学習のワールドカフェ

ここまでの分析結果に即して、同様の結果がみられるかどうか、検証的に調査フィールド2を検討する。調査フィールド1で分析に用いた発話のカテゴリ、応答の展開パターン、体験提供表現の分析指標を用いて、調査フィールド2の発話のカテゴリの傾向、応答の展開パターンの変化、およびラウンドの変化と体験提供発話、およびその表現の応答関係について同様にみていく。調査フィールド2は福島県いわき市の市民活動団体、未来会議事務局が開催した「対話と学習のワールドカフェ」である。

調査フィールド2の第1ラウンドから第4ラウンドまでの、全4テーブル4ラウンドの発話数はターンごとにカウントして985であった（表15）。

表 15

調査フィールド2・ラウンドごとの発話ターン数

	第1ラウンド	第2ラウンド	第3ラウンド	第4ラウンド	合計
テーブル1	162	54	77	114	407
テーブル2	54	17	56	32	159
テーブル3	69	33	22	94	218
テーブル4	82	45	25	49	201
計	367	149	180	289	985

発話の傾向のラウンドごとの変化をみるなら、その割合は、第1ラウンドでは、【主張提示】、【役割強調】、【即時批判】が多く、第1ラウンドと第4ラウンドの比較では、

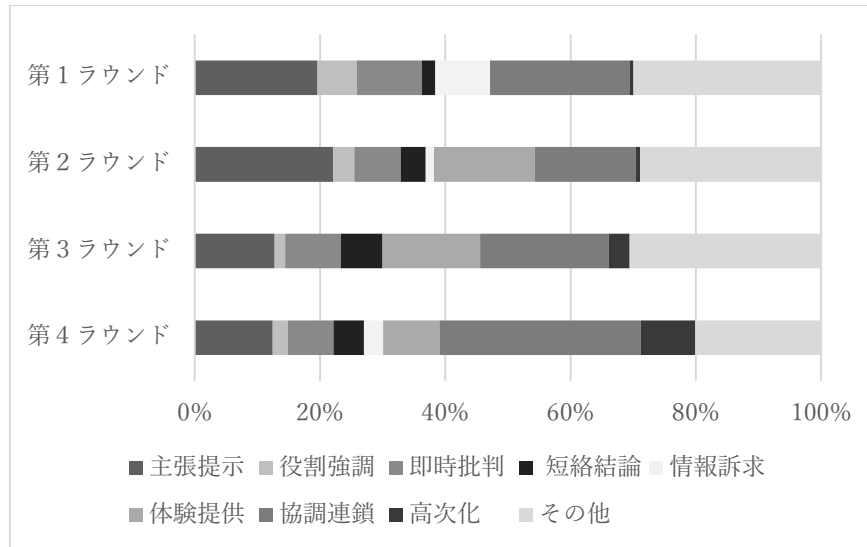
第4ラウンドにおいて【体験提供】と【協調連鎖】が増加し、たびたび【高次化】の発話が産出されるなど、おおむね調査フィールド1同様の変化がみられた（表16）。ここでは調査フィールド1同様、その他は分析には加えていない。第2ラウンドで【主張提示】が増加し、第4ラウンドで【体験提供】が減少するという差異はあったものの、第1ラウンドから第4ラウンドに向かうにつれ協調的なやりとりが増えるといったような全体的な流れは同じであった。協調連鎖が第1ラウンドから一定数あることについては、その検討を後述する。

表 16
調査フィールド2・ラウンドの発話の傾向

発話カテゴリ	第1ラウンド	途中ラウンド		第4ラウンド
		第2ラウンド	第3ラウンド	
1 主張提示	72 19.6%	33 22.1%	23 12.8%	36 12.5%
2 役割強調	23 6.3%	5 3.4%	3 1.7%	7 2.4%
3 即時批判	38 10.4%	11 7.4%	16 8.9%	21 7.3%
4 短絡結論	8 2.2%	6 4.0%	12 6.7%	14 4.8%
5 情報訴求	32 8.7%	2 1.3%	0 0.0%	9 3.1%
6 体験提供	0 0.0%	24 16.1%	28 15.6%	26 9.0%
7 協調連鎖	82 22.3%	24 16.1%	37 20.6%	93 32.2%
8 高次化	2 0.5%	1 0.7%	6 3.3%	25 8.7%
9 その他	110 30.0%	43 28.9%	55 30.6%	58 20.1%
計	367 100.0%	149 100.0%	180 100.0%	289 100.0%

図 14

調査フィールド 2・発話カテゴリーの傾向の変化



応答の展開パターンでは、第 1 ラウンド、第 4 ラウンドともに、調査フィールド 1 と同様の結果が得られた (表 17, 表 18)。第 1 ラウンドで V 主張-協調パターンが多くみられる、第 4 ラウンドの VIII 協調-高次化パターンが突出して多かった等の差異はあったものの、大きな流れは同程であった。

表 17

調査フィールド 2・応答の展開パターンの出現数 (第 1 ラウンド)

	テーブル 1	テーブル 2	テーブル 3	テーブル 4	計
I 主張-批判 パターン	1	1	2	3	7
II 役割-主張 パターン	-	-	-	-	-
III 役割-終結 パターン	-	-	-	-	-
IV 主張-短絡 パターン	-	-	1	1	2
V 主張-協調 パターン	1	2	1	3	7
VI 情報-協調 パターン	-	-	-	-	-

表 18

調査フィールド 2・応答の展開パターンの出現数（第 4 ラウンド）

	テーブル 1	テーブル 2	テーブル 3	テーブル 4	計
I 主張-批判 パターン	-	-	1	-	1
II 役割-主張 パターン	-	-	-	-	-
III 役割-終結 パターン	-	-	-	-	-
IV 主張-短絡 パターン	-	-	1	1	2
V 主張-協調 パターン	-	-	-	-	-
VI 情報-協調 パターン	-	-	-	-	-
VII 体験-協調 パターン	-	2	1	1	4
VIII 協調-高次 化パターン	5	3	1	1	10

VII 体験-協調パターンと関係する体験提供の発話に関する表現も、全 4 ラウンドで 49 例あり（表 19）、ラウンドの遷移に伴う表現の変化も、第 2 ラウンドに話者表現が多く、第 3 ラウンドで時間表現、空間表現、第 4 ラウンドでは曖昧表現が増えるといった、大きな傾向は、調査フィールド 1 に同程であった。ただし相違点もあり、調査フィールド 1 では、第 2 ラウンドに話者表現とともに空間表現が多くみられたが、調査フィールド 2 では、話者表現とともに多かったのは時間表現であった。また調査フィールド 2 では、ゼスチャーとしてテーブルの落書きを指し示す動きは多々あり落書きはじゅうぶんに活用されていたものの、調査フィールド 1 にあったような発話での語用としては、「書いてある」というような落書きに関する表現は少なかった。

表 19

調査フィールド 2・各ラウンドの体験提供表現

カテゴリ	タイプ	第 2 ラウンド	第 3 ラウンド	第 4 ラウンド	小計	計
1 時間表現		4	6	2	12	12
2 空間表現 (時間と同時に表現している 2 例を含む)		2	6	3	11	11
3 話者表現 (時間と同時に表現している 1 例を含む)	自陣表現	6	3	－	9	17
	特定人物	4	4	－	8	
4 曖昧表現	「みんな」	1	－	1	2	9
	「話した」	－	－	5	5	
	落書きの参照	2	－	－	2	
計		19	19	11	49	49

体験提供表現が発話者の位置取りを、話者表現から、時間表現、空間表現へ、そしてみんなと「話した」、「みんな」が話していたという曖昧表現へ移行することにあわせて、その表現に応答する発話の傾向も、調査フィールド 1 と概ね同様の結果が得られた。ただし相違点もあり、調査フィールド 1 同様の、体験提供表現が表現によって応答される発話カテゴリが、従属的に選択されていく全体傾向に加えて、ラウンド通しておしなべて、体験提供と協調連鎖を応答させる傾向もあった。

表 20

調査フィールド 2・体験提供に応答した発話の傾向

発話カテゴリ	第 2 ラウンド	第 3 ラウンド	第 4 ラウンド	計
1 主張提示	3	4	－	7
2 役割強調	－	－	－	－
3 即時批判	3	3	1	7
4 短絡結論	－	1	－	1
5 情報訴求	1	－	－	1
6 体験提供	7	7	7	21
7 協調連鎖	5	4	3	12
8 高次化	－	－	－	－
9 その他	－	－	－	－
計	19	19	11	49

この節では、分析 5 までの分析結果と同様のことがみられるか、調査フィールド 2 を検証的に検討した。調査フィールド 1 で分析した発話のカテゴリ、相互行為の展開パタ

ーン、ラウンドごとの体験提供発話、その表現および応答関係について調査フィールド2においても同様の結果が得られた。とくに、2つの調査フィールドが同じ傾向を示したことが強く示唆していることがある。ワールドカフェの進行に合わせて減少する発話カテゴリとして、主張提示や役割強調、即時批判や短絡結論があり、増加する発話カテゴリとして情報訴求、体験提供、協調連鎖、高次化があること。その発話が複数で構成する応答の展開パターンは、第1ラウンドでは終結させる展開パターンが多く、第4ラウンドでは継続させる展開パターンが多いこと。第2ラウンド以降は、席替え直後の体験提供の発話が談話全体に強く影響しており、その体験提供発話はラウンドごとに、体験元を表現する話者表現、空間表現、時間表現から、曖昧表現へと変化し、この変化が応答する発話に、相互行為として影響を与えていること。その応答関係では、第2ラウンドすなわち席替え1回目に多くみられる話者表現と空間表現は、主張提示や即時批判の応答を喚起し、第3ラウンドすなわち席替え2回目の空間表現と時間表現は、同程の体験提供と協調連鎖を喚起し、最後の席替えの第4ラウンドにおける曖昧表現は、協調連鎖を喚起することに特徴があること。これらは、調査フィールド1と同様、即座に“席替え”の直接効果であるとはいえないものの、全体的にそれを示唆している。

目的も参加者構成も違う2つの調査フィールドから、ひとつの傾向が取り出せた分析結果ではあったが、あきらかな相違点もあった。調査フィールドは2つとも、実践の場であり、開催に明確な目的があり、その目的に照らしての距離感や当事者性、あるいは保有する専門性や情報に参加者各々大きな差がある中での開催であった。ワールドカフェ形式が導入されるにはまさに好例であったが、分析上の差異もまた注目に値するものである。

調査フィールド1は、廃止された地域施設の今後を行政と地域で話しあうといった、目の前の課題、顕在化した問題について多様な参加者で話しあう場であったが、調査フィールド2は、実務者たちが意見交換をし相互に学習を行う「対話」そのものを目的とした場であった。調査フィールド1には、それまでの「対話」といった形態に縁遠い参加者も少なくなかったが、調査フィールド2は、そもそもが「対話」の重要性にも難しさにも一定の認識のある参加者で構成されていた。調査フィールド1は、ある意味合意形成の場でもあり、意見が「みんな違ってみんないい」ということはなく、“1つの未来”をどう模索するか一意性が重要になってくるような場であったが、調査フィールド2は、参加者がもつそれぞれの多様なバックボーンやフィールドを題材に、その開示性を高めながらそれぞれが高次化していくような、ひとりひとりの行動指針を模索するような場であった。

この相違は以下の点に表れている。例えば、調査フィールド1に比して調査フィールド2は総じて、一人の発話が長かった。開示的な発話が話しきって完了するよう、聞き手が調整していたともいえる。また、調査フィールド2は、第4ラウンドでも主張提示が一定量みられた。これは、調査フィールド1の合意形成性に比して、調査フィールド2においては参加者の少なからずが自身の行動指針に関するまとめの発話をしている傾向もあり、この主張提示には多くの場合、賛意が応答されていた。また、同じ展開パターンでも違いがあり、例えば、V主張-協調パターンは、調査フィールド1は、協調連鎖がある程度連続して即時批判が産出されトピックが短く終結する事例が目立ったが、調査フィールド2は、展開パターンの途中で即時批判が産出されても、しかしなお他の成員の発話で協調連鎖が継続されトピックが長く保持される事例が多々みられた。VII体験-協調パターンでもその性質に差異があり、第4ラウンドにおいて、調査フィールド1では、体験提供に協調連鎖や体験提供が連鎖するとき、単純に前ラウンドまでの談話の体験が発話され、その体験に対しての協調連鎖の発話が続くといった構成であったが、調査フィールド2では、同様の、体験提供に協調連鎖や体験提供が連鎖する流れの中でも、その協調に、第1ラウンドで発話されるような、成員の個人的な経験が想起的にひもとかれ、前ラウンドでの「他者の発話の体験」とともに、それまでの発話になかった新たな「個人的経験」が追加されることが少なからずあり、体験提供の触発性が、「他者の発話の体験」以上に拡張していることがうかがえた。

こういった異なる調査フィールドをまたいで差異および同程を浮かび上がらせる指標としても、発話のカテゴリ、応答の展開パターン、体験提供発話表現およびその応答関係の各分析視座は有効であったといえる。

4.9 結論

本研究の結果は、他花受粉が席替えを媒介とする体験提供と「引用」の連鎖によって談話を再構成し、多様性と密度を増す過程であることを示している。とくに、前テーブルで形成された出来事・語句・評価の枠組みが現テーブルの話題枠に重なり、談話が再配置されることに伴って応答の協調化・高次化が生起することを実証的に示している。

他花受粉は、「誰かの言葉を別の文脈で再構成する」引用の連鎖によって組織化される。研究1の結果は、この第II章、第III章で提示した点を支持している。他花受粉は、入れ替わる成員という媒介者が〈他者のことば〉としてアイデアや語りを別のテーブルに運び込み、そのテーブルの「多様性と密度」を高め文脈の再構成を媒介する談話ムー

ブ (discourse move) である。ここでいう談話ムーブとは、談話分析の用語で、特定のコミュニケーション目的を担い、談話の展開を方向づける機能的単位を指す (Swales, 1990)。すなわち、他のテーブル起源の談話要素の持ち込みと再結合により、発話の役割と応答連鎖を組み替える働きを指す。加えて、〈他者の言葉の伝達〉がここでは単なる情報の移送にとどまらず、かつ、その運び込まれたテーブルにおいては相即的な賛意や評価や解釈にとどまらず、トピック・視点・テーマや興味関心が、前のテーブルでの出来事・語句・評価の枠組みを帯びたまま、いわば文脈ごと運び込まれる。この「文脈の交差」によって、元あった文脈は強く大きく揺さぶられ、会話のリフレーミング (reframing) や再構成が喚起される。ここでいう「文脈の交差」とは、その前テーブルの談話の枠組み (出来事・語句・評価) と現テーブルの談話の枠組みが重なりあうことを指す。リフレーミングは創造性研究の Hargadon & Bechky (2006) によると「問題の定義や前提を組み替え、行き詰まりに新たな見通しを与える働き」と定義されている。元あった文脈が排除されるのでもなく、もち込まれた文脈といまここにある文脈がゆるやかに包括されながら、会話のリフレーミングや再構成が喚起されるのである。成員の入れ替えによって生じる「文脈の交差」や組み合わせの密度の高まり、そのすべてが他花受粉としてのワールドカフェの特徴を体現している。

研究1の5つの分析から、成員入れ替えによって局所的な文脈が交差すること、およびそれにとまって発話と応答が構造的に変化するという他花受粉の、現象としての様相が確認できた。とくに「分散化された」「中枢の命令によらない」「並列的处理」というテーブルの小分けがもたらす性質から、体験提供発話が文脈交差の鍵となっていることが明らかになった。具体的には、成員の入れ替えによって、発話のカテゴリや応答パターンが段階的に変化し、柔軟で協調的な応答が増加すること、他テーブルでの体験が語られることで、この「体験の再配列」を通じて文脈が自由に交差すること、体験提供発話の前置表現に着目するなら、その前置表現が曖昧な表現へと変化することで、参加者が「全体のネットワーク」を認知することが明示された。

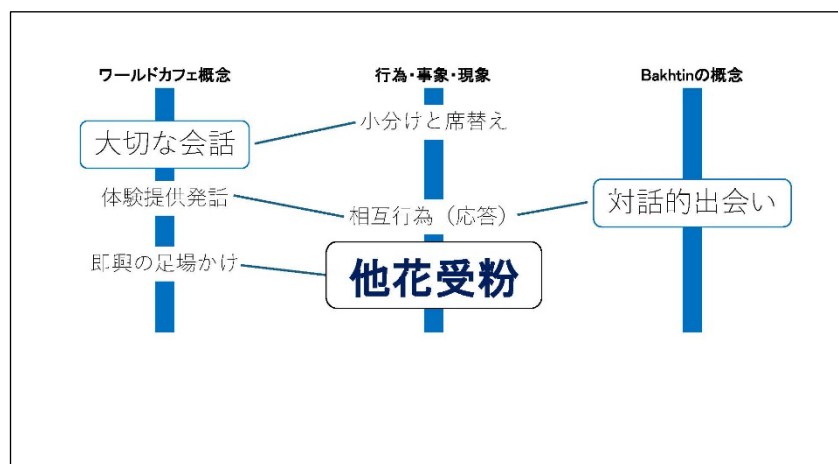
特筆すべきは語用上の前置表現の変化である。これが「発話の交通 (通い合い)」を盛んにし、個人の主張が並行している状態から「全体のネットワーク」へ統合されることへの変容を促進するメカニズムとして機能している点である。おしなべて、それぞれの発話は、ラウンドの進行を通して焦点や構造を変化させ、会話の相互行為のありようそのものが「変容していく過程」としてみてとることができた。

ワールドカフェにおける他花受粉とは、発話の内容や形式がラウンドを通して動的に変化し、対話的応答を媒介として「対話的出会い」へと至る準備段階を組織する営みである。他花受粉による「多様性と密度の高まり」、すなわち複層的な文脈の交差は、単

線的な引用としての〈他者のことばの伝達〉のみならず、複数の文脈が並行して行き交う自由な交通（行き交い）として、会話を寛容なものにしていく。それを、「今の語り」を体験として「その場」で引用する体験提供が鍵となって促進していく。Brown & Isaacs (2005 香取・川口訳 2007)のいう「通常の表面的な内容の会話」が「大切な会話」に変化するということは、まさに文脈の交差が生み出す寛容さの出現であり、Bakhtin のいう「対話的な出会い」（桑野，2020）が現前する瞬間にほかならない。

序論から第Ⅱ章までに提示した主要なタームのうち、前出の研究1に関連するものを図化する（図15）。

図 15
研究1の主要なターム



行為・事象・現象からたどると、各概念のつながりが視覚化される。まずワールドカフェとして「小分け」されたテーブルでの会話が始まる。それはワールドカフェ概念でいう「大切な会話」をめがけたものだが、テーブルでの発話と応答の相互行為が、「席替え」によって体験提供発話を多く産出するものに変化していくことでそれを体現していく。他花受粉によって、会話の要素が多様化し密度が高まることで、それは「対話的出会い」となり、かつ、その相互行為自体が相互の「即興の足場かけ」となりさらに他花受粉を進行させてゆく。

では、他花受粉という相互行為は結局何をもたらしているのか。この図にさらにワールドカフェ概念としては他花受粉が連関していく、「知識創発」や「集合的な発見」といったタームと接続させたい。そして、他花受粉は「引用のモザイク」なのかを検討したい。ワールドカフェの対話の変化、柔軟になっていく変化や前置表現の曖昧化は知識創発とどのような連関をもつのであろうか。次章、研究2では、引用すること、すなわ

ち互いの言葉を用いあうことが参加者相互の創造的理解をどうもたらすのか、その引用の発話の機能について検討する。

V 研究2：引用がもたらすもの

研究1では、ワールドカフェにおける他花受粉を、「誰かの言葉を別の文脈で再構成する」引用の連鎖として捉え、成員の入れ替えによって生じる文脈の交差を、それにもなう発話と応答の変化からそのメカニズムを分析した。成員の入れ替わりごとに〈他者のことば〉が体験提供のかたちで語られ、視点や背景の違うトピックがもち込まれ文脈が揺さぶられる。他花受粉はこうした文脈交差の連鎖を通じて、会話の「多様性と密度」を高めていく。なかでも、体験提供発話の前置表現には注目すべきで、この語用表現は、元の〈他者のことば〉に出会った体験を空間的に捉えたり時間的に捉えたり陣営や話者のものと捉えたりしつつ、終盤では次第にそれを曖昧な引用元のものとして表出する表現へと移行していく。この変化は、参加者の発話と応答を協調的かつ創造的なものへと変容させつつ、全体のネットワークを意識させる志向をもたらしていく。

他花受粉が、この曖昧かつ寛容の状態をして相互の「即興の足場かけ」となり、そこから創発を引き起こしていくというのであれば、その文脈の交差からの「その場」引用の相互行為を、さらに精緻にみていきたい。研究2では、Bakhtinのいう「対話的な出会い」のその先として、「引用のモザイク」、「宛名」、「創造的理解」の概念を手がかりに、引用がもたらす機能、知識創発へと至るメカニズムを検討していく。体験を提供する引用発話が増える〈引用のモザイク〉は、相互の「即興の足場かけ」として知識創発をどう引き起こすのだろうか。発話、応答パターン、語用表現のみならず、引用元での談話を遡って追いながら、他花受粉と知識創発との連関にまつわる検討を行う。

ここでいう「引用」は、単なる情報の伝達ではない。〈他者の言葉〉の引用であること自体が意図や意味を含み、特定の宛名に向けられており、「リフレクシブに」特徴づけることを求めて行為化されている。体験提供発話がつ引用の“形式”はそれらの特徴づけをめがけて選択されている。また、引用したからといってすぐに引用された内容が受けとめられたり理解されたりするのではないうえに、その過程によって対話を喚起する度合いに違いもある。

次節の分析1では、他花受粉の現象のうち、体験提供発話が増えることによってもたらされる〈引用のモザイク〉に焦点化して検討を行う。各ラウンドの会話からそれぞれ断片を摘出し、そこにある〈互いの言葉を用いあう〉談話、すなわち「引用の談話」の相互の連関、引用関係を分析しつつその発話の特徴を検討する。

なお、研究2では、研究1で摘出した体験提供の発話87例を元に検討する。引用は、その対話の場の内部で産出されるものに限らず、その場に外部からもち込まれる引用も

ある。ここでは、引用を「対象となる対話場面において、その対話の場面の中で、他者が過去に発話した内容について言及する」引用、いうなれば「対話場面内引用」に限定して検討を行う。かつ、同時多発的にたまたま複数のテーブルで話題に上ったものと引用による話題とも厳密に区別する。その発話者が、対象となる対話場面において、以前にその内容に関する談話を体験し、かつ、発話の文脈を切り出して自身の発話に埋め込んでいるものを扱う。他者の発話のみならず、自身の発話の自身による引用も含む。これらの引用では、以前の発話とその引用の発話が、それを示す指示的な言葉で結びついていると仮定して、引用された元の発話を具体的に特定できる形で俎上に上げているものに限定して例解する。

5.1 対話における引用～他者の言葉の伝達の「複数化」

体験提供の前置表現は、そこで提示される引用がいまこの場、この集会の中で生成されたもの、いまここでの会話によって産出されたものであることを明示している。前置表現をもつ体験提供発話によって提示されたものが創発を引き起こしているのならその創発の引き起こされ方はいかなるありさまなのか。この節では、体験提供発話 87 例を対象として、引用の形式、構文の構造ともいべき発話のスタイルについて検討していく。

まず、引用の発話の形式について弁別を試みる。体験提供発話は、終盤に向かって、体験の元、すなわち引用の元が複数化していくことから、1つのターンの〈他者の言葉の伝達〉のなかに、複数の引用をふくむようになっていく。そこでは、組み合わせられて「複数化」し、報告を多様化する発話が多くみられるという変形の進行が起きているともいえる。どのような文脈において複数が列挙されるのか、列挙する引用にはそれぞれの特徴があるのか、引用の形式について検討することを目的に、分析のための弁別を試みる。

5.2 分析 1：引用の発話の形式

体験提供発話のうち引用であることが同定できるものの形式の、それを特徴づける分析に先立って、Bakhtin (1929, 桑野訳 1989) が〈発話の社会性〉として注目した〈他者の発話の伝達〉の形式にみられる先行研究をみておく。なお、「他者の言葉」、「他者

のことば」,「他者の発話」と表記に揺れがあるがこれは,その概念に関する本論文における引用の際の,元の訳書に由来するもので,表記は可能な限り引用元に揃えている。指し示す概念は同じものである。Bakhtin (1929, 桑野訳 1989) の〈他者の発話の伝達〉の形式は,具体的な言葉の現実として,たびたび「他者のことばにおける声の引用」と言い換えられている。そして,この3つのパターン,間接話法,直接話法,変形は「他者のことばの能動的知覚の傾向」を提示しているとしており (Bakhtin, 1929, 桑野訳 1989), Wertsch (1991) などその研究を援用した研究者たちもこの3つのパターンによる分析を引き継いできた。

Bakhtin (1929 桑野訳 1989) は,間接話法,直接話法,およびその変形というパターンを,他者のことばの能動的知覚の傾向として提示した。その目的は,他者の言葉の伝達という現象がもつ問題を,言語学にとどまらず,社会学的方向に展開することにあったという。Kristeva (1969 原田訳 1983) は,文芸評論の立場から, Bakhtin の諸理論を物語の構造論的研究として,また記号論的な進展のために,「物語のなかの言葉の分類」として分析した。Todorov (1981 大谷訳 2001) は,哲学の領域から,「他者の言説に『出会う』場」,「形式」,「変化しうる程度」の問題を省察するために, Bakhtin の「間接話法,直接話法,およびその変形というパターン」を「表象される言説」として再整理している。桑野 (2020) は,思想研究の文脈において,「二声的な言葉」こそが Bakhtin の〈引用論〉の前提であるとして,「ドストエフスキイにおける言葉(文体論のみ)」における論述を「言葉の分類図式」として紹介している。Wertsch (1991 田島他訳 2004) は,〈権威的な言葉〉と〈内的説得力のある言葉〉の問題を論じたうえで,〈他者の言葉論〉を,「ある声が他の声と接触し互いに活性化し合う,権威性の度合い」として解説している。これらを一覧にまとめると表 12 のようになる。(田坂, 2023 に加筆)

しかし実際のワールドカフェの談話においては,〈他者の発話の伝達〉はおもには,「変形」されて引用されている例が顕著である。かつ,直接話法的引用や間接話法的引用ではほぼみられない協調連鎖が,変形された引用では産出されている。すなわち,「きわめて自由に解釈し」,「引用する声が引用される声へ侵入」して「能動的」に「テーマや主調音を示す」引用が大半であり,そしてそれが協調連鎖を多く産出している。

表 21

〈他者の言葉〉論

Bakhtin (1929 桑野訳 1989)	Kristeva (1969 原田訳 1983)	Todorov (1981 大谷訳 2001)	桑野 (2020)	Wertsch (1991 田島他訳 2004)
〔パターンと変形〕	〔物語のなかの言葉の分類〕	〔表象される言説〕	〔他者の言葉を志向する言葉〕	〔報告の発話の基本的な方法〕
直接話法 : 物化され、客観的定義づけがことばの上に移る	第一のカテゴリ―「 直接話法 (文体的統一)」（模倣、反復）	モノフォニー的（単声的）： 直接話法	(1) 一方向の二声の言葉（ 直接話法 ）（文体模倣、語り手による語り）	1) 直接話法 ：引用する声と引用される声の間に声の接触はみられない
間接話法 : 伝達するだけでなく、同時に他者の発話を分析する	第二のカテゴリ―「対立するものの並存」（パロディ）	ディフォニー的（二声的）：受動的（様式化、パロディー）	(2) 多方向な二声の言葉（パロディ的な語り）	2) 間接話法 ：引用する声と引用される声の間に接触と相互活性化が認められる
変形 （印象主義的変形）：他者のことばをきわめて自由に解釈し、それを縮めたり、しばしばテーマや主調音を示す	第三のカテゴリ―「 変形 」（隠れた内面の論争、自伝、告白、対話での応酬、見せかけの対話）	ディフォニー的（二声的）：能動的（自由間接法（変異（ヴァリアシオン））（隠されたまたは大っぴらな論争）	(3) 能動的タイプ（投影された他者の言葉）（隠された内的論争、自伝や告白、他者の言葉を意識するあらゆる言葉、対話の応答、隠された対話）	3) 分析的なカテゴリ―への 変形 ：引用する声が引用される声へ侵入する

なお、以下の弁別は次に述べるような方略に沿って行う。Bakhtin (1929, 桑野訳 1989) は、「あらゆる発話は社会的な出来事である」と述べている。また、「いかなる発話も他者の言葉を半ば隠された形で含んでいる」（Bakhtin, 1981, 望月・鈴木訳 1990）とも述べている。これらの論述に依拠しつつも、ここでは Bakhtin (1929, 桑野訳 1989) が狭義として示した「他者のことばにおける声の引用の3つのパターン」のタームに沿って弁別を行う。あらゆる発話に〈他者の言葉〉が含まれているという包括的な議論も重要ではあるが、ワールドカフェ研究においては、その「含まれよう」の明示的な部分に焦点化し、いかに引用されているかをあきらかにすることに意義をみいだしたいからである。本研究においては、包括的な概念としての Bakhtin (1929, 桑野訳 1989) の3つの引用の定義を、操作的定義として扱う。ここでいう操作的定義とは、測定的な意味ではなく、分析カテゴリを実際の発話上で同定するための明示的な基準を指す。具体的には、発話中に他者の発話を再現する表現、もしくは他者の発言内容に言及する表現を含む場合に限定してそれを操作的定義上の引用と見なし、Bakhtin (1929, 桑野訳 1989) の3つの引用の定義に準拠しつつ弁別する。操作的定義とすることでその談話の文脈上の曖昧なものがそぎ落とされてしまうことへはじゅうぶんに留意したうえで、発話の弁

別を行う。これらの弁別、およびそれに基づく発話例の計数により、他花受粉における引用のスタイルの分析を有効にする。

87 例の体験提供発話例のうち、「引用」ではない 6 例を除き、体験提供発話でない「引用」の例 7 例を加え 88 例とした分類では、以下である。

表 22

Bakhtin の「他者の言葉の伝達」に基づく分類

カテゴリ	第 2 ラウンド	第 3 ラウンド	第 4 ラウンド	計
直接話法的引用	1	1	1	3
間接話法的引用	11	7	3	21
変形	23	21	20	64
計	35	29	24	88

「現状のコンテキストの弱化をとまなう直接話法的引用」(Wertsch,1991)ではなく、「〈体験〉そのものに〈体験の写し〉を共存させる間接話法的引用」(Wertsch,1991)でもなく、変形された引用が多く用いられるということは、対話の過程の何を表しているのだろうか。そして、引用でありながら、引用者自身の声を前面に出すことが自由に行える「変形」の引用は、対話にどのような影響を与えているのか。

談話分析における〈他者の言葉の伝達〉、すなわち引用についての先行研究は、〈他者の言葉の伝達〉が受け手の認知プロセスにどのような影響を与えるか (van Dijk, 2019 など) や、引用が談話中にどのような機能を果たすか (立川, 2014 など) に主眼が置かれている。直接話法的引用と間接話法的引用の弁別について言及したものもあるが (Clark & Gerrig, 1990 など)、変形された引用を主たる対象として分析した研究はみあたらない。ここでは、引用そのものよりも、それがどのような応答を呼び、対話内容に影響を与えているか、ワールドカフェにおける体験提供の引用で顕著な「変形された引用」に注目する。

5.2.1 主題化、評価、要約、列挙

体験提供発話、すなわち〈他者の言葉の伝達〉発話 88 例のうち、64 例を占めるのは変形された引用である。変形された引用では、「他者のことばを自由に解釈し」ながらも、その変形のなされ方にはある種の類型がある。64 例の引用の変形の例を、その発話内容から類型に弁別する。ここではとくに言葉の用いられ方に着目し、前後の会話の文脈も考慮しつつ、文脈における機能をもとに弁別する。発話内容からみた特徴の抽出ののちに、それぞれの類型の応答を検討する。

変形された引用では、言葉の用いられ方に特徴があり、それらはいくつかの類型に収まる。「要するに」とまとめたり、引用に続けて「それができるかどうかはわからん」と否定的な評価や解釈を追加したり、「あとは」、「それから」と列挙して結合させたり、といった例がみられる。

変形された引用において際立った特徴を示すものは次の4つである。

【主題化】 前テーブルまでの複数の談話から有意のトピックをひとつ摘出して引用している。結果、現在の文脈に、過去の文脈から今選択したそのトピックを選択して摘出し提議し強調する機能を果たしている。「...ようなことを盛んに言いよった」と言い添えるなどして、それがトピックとすることの蓋然性をもつ点を示すことも少なくない。

【評価】 前テーブルまでの複数の談話から有意のトピックをひとつ摘出して引用し、それに評価や解釈を追加している。「いちばん盛り上がったのは」などと自身が賛同していることを示す用い方が多い。まれに「…はできんよ」といった批判を加えることもある。さらには「これには G さんたちも乗ってきたんですけど」などと言い添え、現在のテーブルにいない人物による賛同も追加して、より確からしさを増そうとする“権威付け”の傾向を含むこともある。

【要約】 前テーブルまでの複数の談話からトピックを具体的に摘出するのではなく、複数を参照しながら、発話者自身のまとめを端的に示している。「要するに」と要約したり、「おおまかには」、「とにかく」と俯瞰視してまとめたりしている。

【列挙】 前テーブルまでの複数の談話からトピックを複数摘出して、1つの発話で複数の体験を引用して列挙している。一つの発話中に「...の話と」、「...みたいな意見とか」、「...みたいな意見」といったぐあいに列挙しつつ、ときにはそれらを結合させたり、統合したりもしている。

直接話法的引用や間接話法的引用では、このような類型の拡がりはみられない。この類型をもとに弁別するなら、直接話法的引用の3例はすべて「主題化」である。間接話法的引用の21例も、4例の「列挙」を除き、17例が「主題化」である。

次に、主題化、評価、要約、列挙の機能を果たす変形の引用のうち、特徴的な例をみていく。

【断片 40】変形された引用：主題化

1-6-2-215. C : あとねさっきあっちのテーブルで言ったけど, テーブル6
あれやりたいな, サウナサウナ.

【断片 41】変形された引用：評価

1-2-2-206 I : いやあの, さっきもあつたんだけど, あのう田 テーブル2
原温泉をしたりあの, あっこの, あの, 建物で
きたの維持するのけっこう, 田原は, しんどか
ったみたいなこと言いよっちゃったけえやっ
ぱり, 田原だけに負担を負わしちやいけんけ
え, 田原は田原でそのそれぞれいやいや負担
じゃないという, 年に4回も, ねくたびれたみ
たいなこともあるかと,

【断片 42】変形された引用：要約

1-6-4-008 W : だいたい, だいたい回ったところもやっぱりけ テーブル6
っこうだいぶ同なしょうなどこ出とる. ほい
でねあっこのね, 毎回あの, シェフを呼んで,
シェフを呼んで地元のいろんな料理をやらし
て地元の料理を提供するようなことけっこ
う, 盛んに言いよったね.

【断片 43】変形された引用：列挙

1-4-4-009. N : あとね, ヨソではね, えーつとあの, まあやっ テーブル4
ぱりみんなが集まる食べる場所もほしい,
そしたらね, 屋台をね, あの, 施設の周りに.
1 台じゃやっぱり, ナンだから 6 台くらい屋台
をつくって, そうそういろんな店そしたら週
末だけでもそこ屋台, 昼から夜までやるとか
したら, 「あー, あっこのならちよと行ける, と
かいう感じに, なるんじゃないか」屋台なら,
ようするに, 建物建つ固定, じゃないから. ね.
ただ, ただ冬がネックとか, 冬はどうするって
いう感じだったけど.

【断片 40】は主題化の変形の例である。引用は「サウナ」の部分だけであり、それが「さっきあっちのテーブル」で言われていたものであることを示したうえで、引用者自身の「あれやりたいな」という摘出の意図を述べている。

【断片 41】は評価の変形の例である。前テーブルで語られた過去の経緯を「できた建物を維持することがしんどかった」みたいなことと「現状年 4 回のこの施設を利用し

た年中行事の開催負担ですでにくたびれている」ということを引用するその中間に、自身のこのトピックに関する「やっぱり田原地区だけに負担を負わせてはならないし、その田原地区に『それは負担ではない』などと言わせてはならない」という実感、評価を挿入している。どこまでが元の引用で、どこが自身の考えを足したものが曖昧な形式で、その自身の考えの挿入がなされている。しかしこのターン全体としては、「さっきもあったんだけど...言いよっちゃったけえ...みたいなこともあるかと」と引用の形式が取られている。

【断片 42】は要約の変形の例である。「出張シェフを呼んで料理を提供すること」が「けっこう、盛んに言」われていたと引用する前に、「だいたい回ったところもやっぱりけっこうだいたいぶ同なしようなとこ出とる」とおおまかな報告を前置きしている。この前置きによって、「出張シェフを呼んで料理を提供すること」が「回ったところ」すべてで「けっこうだいたいぶ同なしような」トピックであったことを示しつつ、席替えして3つのテーブルで会話したその体験の要約、総括であることを提示している。

【断片 43】は列挙の変形の例である。Nが体験した第2ラウンドでの「みんなが集まる食べるところもほしい」から、第3ラウンドの「施設の周りに屋台」、「屋台は6台くらいつくる」、「週末だけ昼夜やる」というこれまで会話に参加して得た体験を列挙している。実際の会話はこの順番で産出されたわけではなかったが、理解したトピックの連なりとして結合させて提示している。

引用が変形されるにあたって、主題化、評価、要約、列挙のそれぞれにその数的な変化はあるのか、64例のラウンドごとの分布は以下のようにになっている。

表 23
変形された引用の4つ類型

カテゴリ	第2ラウンド	第3ラウンド	第4ラウンド	計
主題化	5	4	4	13
評価	11	8	2	21
要約	2	6	7	15
列挙	5	3	7	15
計	23	21	20	64

1つのトピックが引用される主題化と、複数のトピックが並列に引用される列挙は、コンスタントに出現している。引用に自身の考えを追加する評価の変形は第2ラウンドに多くみられるものの、以降減少している。逆に、まとめとして伝える要約の引用は第

2 ラウンドには少なく、以降増加している。要約が「多く」のものを端的に表現し変えること、列挙を「多く」を並べる表現と捉えるなら、おもに単数を扱う「主題化」、「評価」が減少し、多くを扱う「要約」、「列挙」が増加しているともいえる。

これは、研究 1 の、ラウンドを経るごとに体験提供の前置表現が曖昧化し、全体として談話が寛容になる傾向の変化と軌を同一にしている。

この引用の発話に続く応答はどうであろうか。次節では、「列挙」を例にその応答の量的な変化をみる。

5.2.2 変形されて伝達された発話内容とその応答

前出の断片の発話に続く応答のターン数を比較すると、おおまかな影響の差が見えてくる。

【断片 40】の主題化の変形の例では、トピックとして主題化したこの発話のあと、この例では応答が 6 ターン続いている。【断片 41】の評価の変形の例では、この発話のあと、この例では応答が 7 ターン続いている。【断片 42】の要約の変形の例では、この発話のあと、この例では応答が 4 ターン続いている。【断片 43】の列挙の変形の例では、この発話のあと、この例では応答が 19 ターン続いている。これらは、それぞれの他の例でもおおむね同一の傾向を示している。

変形された引用のなかでも、「列挙」では、その応答が協調的に連鎖して多数生成される。引用が対話を促進するというときの引用とは、直接話法的引用や間接話法的引用に比べるなら突出して変形された引用に拠ることが大きい。かつ、その変形のなされ方も、要約されたり列挙されたりといった、多くの引用元を扱うときにこそ、協調的な連鎖が喚起されている。

さらに【断片 43】にはもう一つの特徴的な構造がある。引用者が引用元のトピックの複数を結合させて提示したうえで、そのまま続けて発言を続けている。そこでは、「屋台なら、ようするに建物建つ固定じゃないからね」と自身の総括を言い添えたうえで、「ただ冬がネックとか、冬はどうするっていう感じだったけど」と総括に余る部分について補足している。この表現は、発言全体の肯定とも否定とも取れる、引用が引用で終わらず、途中から現在の文脈が開始され、談話を促すような構造をもっている。

この「列挙」のなかでもとくに特徴的な、補足の構造をもついくつかの発話例は、直接話法的引用、間接話法的引用、変形された引用といった〈他者の言葉の伝達〉の形式の分類から検討することができたものであると同時に、引用以外の性質をあわせもっている。それは、体験提供の前置表現で発話が開始されていながら、そのターンの終端は、

過去の発話の引用で完了させず、現在の文脈に続けていく終端、現在の文脈に切れ目なく接続させる終端となっている。過去の引用と現在の談話が切れ目なく接続しているという意味では、引用が引用として独立していない、完結していない発話である、いわば、半終止の引用ともいうべき構造を有している発話である。そして引用として閉じていない残りは次の談話へと「開かれている」。これは、「半開放」の引用とでもいうべき構文である。この造語にいう「半」とは、引用が完全には閉じられず、あくまで引用の枠を部分的に保持しているという点を示している。そしてその半ば開かれた枠は補足や応答によって現在の談話へ溶け込んでいく。この、引用が引用として閉じられない構造は、席替えを重ねてから登場する他花受粉の談話にみられる特徴的な構文として、その発話の検討が希求されるものであると考える。引用として開始され「半開放」の状態である現在の文脈に引き継がれるこの発話の構造の検討を、次節で行う。

5.2.3 引用の形式の拡張—体験的引用タイプ

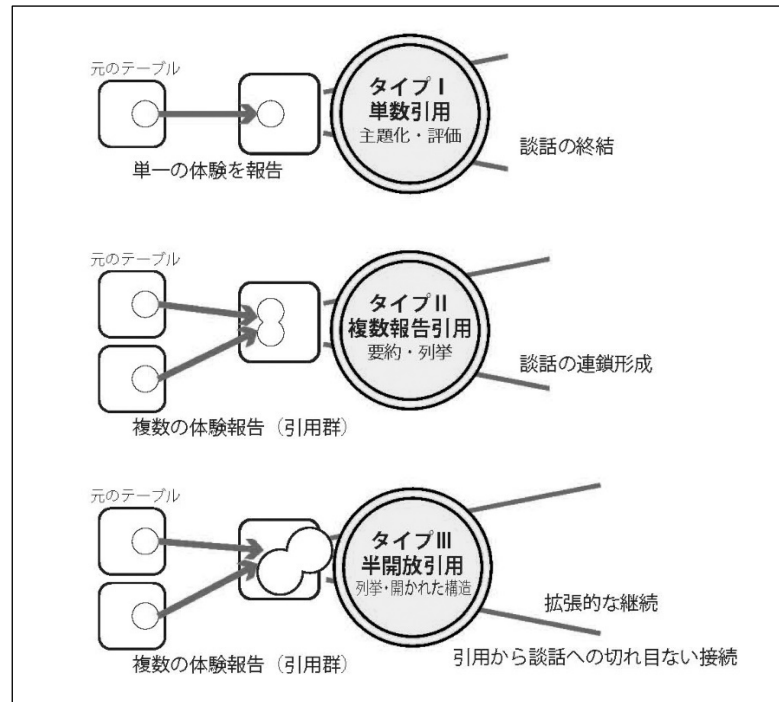
体験提供発話は引用のそれぞれの形式をもつ。その発話での引用の扱われ方に着目し、まずこの構造を次の3つに弁別することから検討を開始する（図16）。

【**体験的引用タイプⅠ・単数引用**】は、単数の体験を報告する引用で、提示された引用を、話題として推奨する意思を示す。応答はおおむねその話題にそってなされる。また、別の発話者が別の体験提供を行うという水平的な別話題の提示となることもある。変形された引用における類型の検討では「主題化」、および「評価」がこれにあたる。

【**体験的引用タイプⅡ・複数報告引用**】は、複数の体験を報告する引用で、列挙によって報告の役割をより強くする。提示された複数の報告は、いわば母群としての「引用群」をなし、そこから応答によって話題が選択され談話としてのまとまりを産出する。また、隣接して別の発話者が別の体験提供を行い、報告の連鎖となることもある。変形された引用における類型の検討では「要約」、および「列挙」がこれにあたる。

【**体験的引用タイプⅢ・半開放引用**】は、複数の報告され、かつ開かれた引用で、列挙によって報告の役割をなしたうえで、その報告を終止させず拡張させる。引用を閉じず開いたまま過去の引用から現在の談話に切れ目なく接続する。応答され、ほぼその接続のまま談話が継続する。変形された引用における類型の検討における「列挙」でたびたびみられる。

図 16
体験的引用の 3 つのタイプ



さらに参考として、断片の検討においては、次の 2 つを列記する。

【(参考) 引用ではない体験提供】は、体験を示す前置表現のある発話ではあるものの、具体的な引用をとまわず、体験の全体像のみ表現される。

【(参考) 体験的でない引用】は、タイプⅢのような拡張はみられず、事実の提示で終止する。体験的ではなく、すなわち体験を示す前置表現なく、かつそれを引用であると同定できる発話は限られているが、前テーブルの状況からあきらかにそうであるとみなされるものを例示する。

この体験的引用タイプ、すなわち体験提供発話の引用の拡張のされ方にそって実際の談話を分析する。はじめに、型それぞれの典型例を示す。そして、その発話とその引用元との連関について検討する。そののち、その発話での引用の扱われ方が応答に与える影響と体験的引用タイプⅢが多く現れるラウンド終盤の傾向をみてる。

5.2.4 単数引用、複数報告引用、半開放引用

まず体験的引用タイプのそれぞれに典型的な例を示す。

【断片 44】体験的引用タイプⅠ・単数引用

-
- 1-5-4-011. S : ほんなんだったらヨソであつたんは、ドラム缶風呂とかみたいなののいんじゃないのっていうのは出よったかな。 テーブル5
- 1-5-4-012. R : だけそんな，そんな自分らで木もあるしそういうのしてもみたいなのとか，あとはやっぱりあの，料理のはいいねとかって出張シェフの話いいのと，それぞれのプロがいっぱいおるんでここ，プロってかできる，秀でた人，そういう人，呼んで，あれこれするのもいんじゃないかとか。（略）みたいな意見。
-

【断片 44】は，体験的引用タイプⅠ・単数引用の例である。テーブル5のSは「ヨソであつた」トピックとして，「ドラム缶風呂とかみたいなのがいい」ということ引用している（1-5-4-011）。応答するRは，そのトピックに関する発言を短くし，同じターンの中で「あとはやっぱり」と別のトピック，「出張シェフ」の話題に切り替えている（1-5-4-012）。単数の体験の引用で，変形がなされてはいるが，応答のあり方は直接話法的引用のそれに近いもになっている。

【断片 45】体験的引用タイプⅡ・複数報告引用

-
- 1-1-4-033. D : そうそう。さっきもあのう，屋台，をね，ごはん6店舗ぐらい週末屋台がバァーッてあって，いろんなものが食べれて，夜とかライトアップしたらいんじゃないか，みたいな，あのう，カナダでラーメン屋をしていたって男の子がおって，味噌ラーメンらしいんですけど，そしたらこっちのおっちゃんもわしが骨組みつくっちゃるけえ！ みたいな，ゆってましたねえ。 テーブル1
- 1-1-4-034. B : それやってもらおう。すごいね！
- 1-1-4-035. A : 誰かしらなんか得意な人が集まって。やるーみ
たいな。
- 1-1-4-036. D : 田舎の人なんでもね，できるけんね。
-

【断片 45】は，体験的引用タイプⅡ・複数報告引用の例である。テーブル1のDは，前テーブルで統合された複数のアイデア，「屋台」「週末」「ライトアップ」「ラーメン」「骨組みの手づくり」を列挙して，引用している（1-1-4-033）。BやAが協調的に応答している（1-1-4-034，1-1-4-035）。列挙によってなされた引用はそれ自体が報告という

役割を果たしており、応答は盛んで談話としてはまとまりがあるが、この談話は、Dの「田舎の人なんでもね、できるけんね」で終わっている（1-1-4-036）。応答のあり方は間接話法的引用のそれや変形のそれに近いものになっている。

【断片 46】体験的引用タイプⅢ・半開放引用

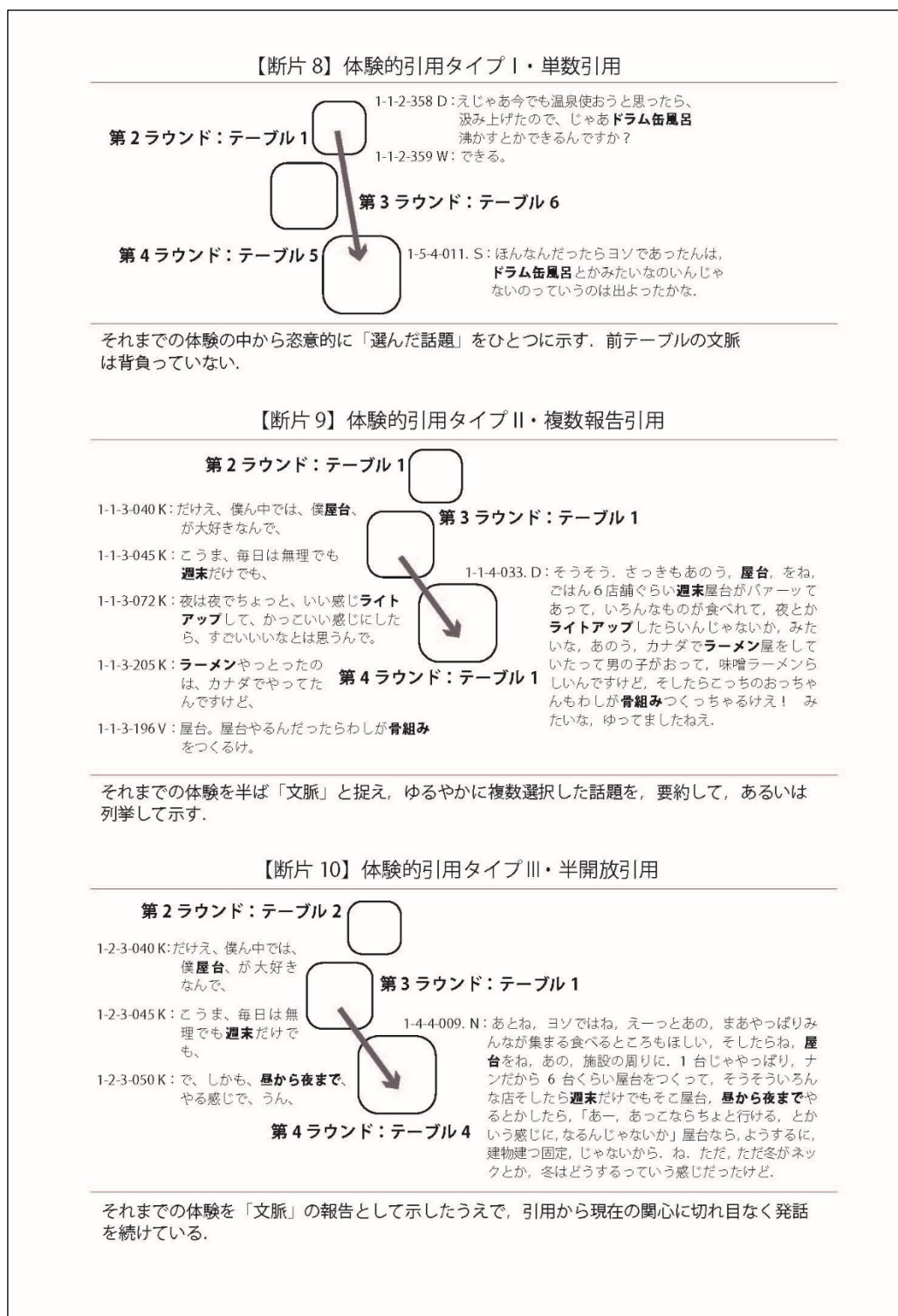
-
- 1-4-4-009. N : あとね、ヨソではね、えーつとあの、まあやつ テーブル4
ぱりみんなが集まる食べるところもほしい、
そしたらね、屋台をね、あの、施設の周りに。
1台じゃやっぱり、ナンだから6台くらい屋台
をつくって、そうそういろんな店そしたら週
末だけでもそこ屋台、昼から夜までやるとか
したら、「あー、あっこならちよと行ける、と
かいう感じに、なるんじゃないか」屋台なら、
ようするに、建物建つ固定、じゃないから。ね。
ただ、ただ冬がネックとか、冬はどうするって
いう感じだったけど。
- 1-4-4-010. P : 建物をつくるという感じではない、感じでした
よ。
- 1-4-4-011. N : そうそうそうそう。
- 1-4-4-012. O : そういう感じになってきてますよね。
- 1-4-4-013. P : 温泉はあるとしてもそれより、違った建物をド
ーンと建てるんじゃないくて、わりとこう、なん
ていうんですかね、人がやりたい、ことをちゃ
んとできるような。
- 1-4-4-014. N : そうそう、うんうん。
- 1-4-4-015. P : たとえば芝生をドーンと敷いとくだけっていう
ような。そこに屋台をもってきたりとか、テント
を敷いたりとか、そんなカタチ…。
- 1-4-4-016. M : あー。もう更地にする。
-

【断片 46】は、体験的引用タイプⅢ・半開放引用の例である。テーブル4のNは「ヨソではね」と前置して、前テーブルで統合された複数のアイデア、「屋台」「週末だけ」「昼から夜まで」を列挙して引用している（1-4-4-009）。続けて、「ようするに」と「建物建つ固定、じゃない」という解釈を追加もしている。そのうえでさらに、「ただ、ただ冬がネックとか、冬はどうするっていう感じだったけど」と、引用で終わらないターンとして、次の発話者に応答を促すような形式を取っている。応答するP、N、O、Mは、このトピックに関して「建物をつくる感じではない」（1-4-4-010）、「やりたい人がやりたいことをできるスペース」（1-4-4-013）、「芝生」「テント」（1-4-4-015）、「更地」（1-4-4-016）と連鎖的に発言している。複数化し、かつ開かれた体験提供は、引用を閉じず開いたまま過去の引用から現在の談話に切れ目なく接続している。この半開放引用のあとは談話が比較的長く継続する。

この3つの断片を模式化すると図17のように示される。

図17

体験的引用の断片の模式図



【断片 47】（参考）引用ではない体験提供

-
- 1-1-4-003. B : みんな、大人になって帰ってきたよ。 テーブル1
1-1-4-004. D : マジ！ マジ、何があったの？ 旅先で。
1-1-4-005. C : なんかつけた気がする。
1-1-4-006. D : 確かに。疲れてるよ。
1-1-4-007. B : なんか、うん。なんか。
1-1-4-008. C : 浦島太郎。
1-1-4-009. B : なんか夢、夢みたいなことばっか言ってごめん
なさいみたいな。
1-1-4-010. D : 現実を突きつけられてた？
1-1-4-011. B : なんかほんとに地域の人には死活問題ですよ
とか、やっぱ世の中、金ですよ。
1-1-4-012. D : あーあーあーあー。あー。
-

【断片 47】は、引用ではない体験提供の例である。参考として示す。テーブル 1 の B は体験に関して感想を述べている。「大人になって帰ってきた」(1-1-4-003)、「夢み
たいなことばっか言ってごめんなさいみたいな」(1-1-4-009)、「ほんとに地域の人には
死活問題」,「やっぱ世の中、金」(1-1-4-011), これらは、引用を用いていない雑感や達
観、体験の全体像の示しである。体験提供発話のなかには、引用ではないものも少な
からずみられた。

【断片 48】（参考）体験的でない引用

-
- 1-6-2-217. C : あのう、テントサウナとかつて最近あるじゃな テーブル6
い。 テントサウナが、
1-6-2-218. X : はいはいはいはい、はい、あー湯来のほうで、
1-6-2-219. C : 湯来のほうでやってるやつ、あれ！
1-6-2-220. X : あれねあれ、あれ。
1-6-2-221. C : そう、そう。で、僕たちのもうサウナは、ニュ
ージャパンみたいなやつじゃけど、ハハ、
1-6-2-222. Q : それは、どのくらい、どのくらいあれ寒いん、
だろ？ あの耐久性。
1-6-2-223. C : だからあれ見たらね、テントも張ってあってね
中でストーブ焚いてね水着でこうおってあっ
たから、草擦られて、熱そうで外出て川にパチ
ャーン入って、でまた、体冷やしてでこうって
そのテントの中入って、
1-6-2-224. Q : それ、湯来でやりよる？
1-6-2-225. X : 湯来でやってます。
1-6-2-226. Q : まどこでもできるわそれは。
-

【断片 48】は、体験的でない引用の例である。参考として示す。テーブル 6 の C は体験提供ではない発話として、つまり主張提示として「テントサウナ」を発話する。このあとの別のテーブルでの発話から C はこの湯来（ゆき：地名）のテントサウナのことを情報として知っているのみであることが推測されるが、ここでも、このワールドカフェで発話されたものではない情報としてここに提示している。X は協調し同調しているが、Q は C に質疑応答を求め、最後には「どこでもできるわそれは」という発話でトピックを終結させている。体験的でない引用は、主張としてトピックの起点をなすが、短い応答で終わることがほとんどである。

体験的引用タイプ I・単数引用は、発話者がそれまでの体験の中から恣意的に選択した「選んだ話題」をひとつに示す。その話題に強い関心を持ち、その話題のそのテーブルでの展開を意図するものの示しである。前テーブルの文脈を背負うものではなく、その意味では、おもには間接話法的な引用でもあるが、主題化、評価の追加といった変形が加えられつつ行われる。

体験的引用タイプ II・複数報告引用は、発話者がそれまでの体験を半ば「文脈」として捉え、ゆるやかに複数選択した話題を、要約して、あるいは列挙して示す。聞き手はその示された中から選択可能ともなる。前テーブルの文脈や複数の文脈の合成が自由に並べられており、応答するものの自由も同時に担保している。忠実に間接話法として列挙されているものもあれば、変形され結合されたり俯瞰化されているものもある。これに続く応答では、選択的にこの中から話題が継続していくこともあり、また、この発話をもって報告として終結することもある。

体験的引用タイプ III・半開放引用は、発話者がそれまでの体験を「文脈」として報告したうえで、さらにその報告を終止させず、引用から現在の関心に切れ目なく発話を続けることで、場に談話を開いている。変形された引用がさらには「拡張された引用」ともいうべき、引用が引用で完結しないこと、「終わらない」ことを提示している。引用し報告するだけでは対話が終わらないことが引用者にも聞き手にも自明である。

「引用ではない体験提供」、「体験的でない引用」を参考にするならば、附带的に以下もいうことができる。「引用ではない体験提供」は、体験的引用タイプ II・複数報告引用やタイプ III・半開放引用に近い形で、その応答を協調的に連鎖させるはたらきをもつ。たとえば、場に引用への傾注を継続させ、「開放的に」他の引用を喚起する。しかしいっぽうで、事実の提示として主張や結論として扱われる可能性も高く、協調連鎖は続くが長くはない。

体験的引用タイプ I・単数引用は、話題の 1 つへの傾注から話題そのものを単体とし

て引用しているが、体験的引用タイプⅡ・複数報告引用および体験的引用タイプⅢ・半開放引用では、話題を複数化させることで「これまで」の「文脈」への傾注が感じられる。とくに、体験的引用タイプⅢ・半開放引用は、事実の提示としての主張の強さや結論性を弱めていることもあり、協調連鎖が長く続く。

席替えによる「文脈」の交差は、その発話とその引用元との連関からみると、引用が変形されるとき、もしくは引用元が複数化するとき、さらには半開放の引用で拡張が希求されるときに顕著となるということができよう。

体験的引用タイプの出現のラウンドによる変化を表 23 に示す。

表 24
体験的引用タイプ出現のラウンドによる変化

カテゴリ	第2ラウンド	第3ラウンド	第4ラウンド	計
1 単数引用	24	16	8	48
2 複数報告引用	9	11	10	30
3 半開放引用	1	2	5	8
計	34	29	23	86
4 (参考) 引用ではない体験提供	2	1	5	8
5 (参考) 体験提供ではない引用	1	1	0	2

体験的引用タイプⅡ・複数報告引用、および体験的引用タイプⅢ・半開放引用については、その判定の例を示しておく。

「列挙」の変形された引用は、たとえば【断片 45】の「みたいな、ゆってましたねえ」(1-1-4-033)といったように、報告の終端で発話を終わらせている。これは、体験的引用タイプⅡ・複数報告引用とした。変形された引用の「列挙」の多くがこれである。

体験的引用タイプⅢ・半開放引用と判定したものは、この発話の終わり方ではなく、報告の終わりが曖昧で、応答を促すような終端となっているものである。たとえば【断片 46】は、「あとね、ヨソではね」と発話の始まりに引用を予告しておきながら、その列挙の終盤で引用の終わりを告げることなく「ただ、ただ冬がネックとか、冬はどうするっていう感じだったけど」(1-4-4-009)といったような発話の終端となっている。以下に、他の体験的引用タイプⅢ・半開放引用の判定例を示す。

体験的引用タイプⅢ・半開放引用の判定例

1-6-3-006. E : えっと…まずその、「拠点としての田原温泉」って…のが最初の席でもえー、先ほどのところでも出ましたやっぱり。えーっと、最初の席Gさんおったんですけれど、まGさんとくに、それをかなり自認してらっしゃるみたいで、まあ自分の解釈ですけれど、ま要するに外から来た人のための玄関口がどっかにはいるだろう、と考えてらっしゃるのではないかなと。で、えー田原温泉はまあそういう形で使っていけばいいだろうと。そこで先ほどあったような、先ほどあったようなこのいろんなアクティビティ、を、その田原温泉を中心にして、繋げていけたらいいんじゃないのか。外から人がまずここに来る、そっからその、他んところにアクティビティ紹介する、まガイドを付けるでもいいですけど。

(第3ラウンド・テーブル6)

1-3-4-002. L : うんまああのう、言ってたのがやっぱだからねまずはそのう、うん具体的に…ねその、まずはそのう、スタートラインにもまあ、ね当然立ってないわけだけでもまあ、建物的にけっこうもうねあのう、古いね、あの校舎のところ、まずはあれをその、もどっちにしろあれはね直すのはあれはお金もかかるしどっちにしろあれはまず、ね、なくさなきゃならない方向ですからまずそれがなくなることによってあの場所でなにができるかと、もうちょっとその具体的ないろんなことができるんじゃないかと、まずはその、スタートラインに、立つために何ができるかっていうですね。そのためにどうやってあれを崩すかとかどうやってまあ、そのためのお金を集めるかという。であそこがなくなることによってここがこういう何があったらいかなあってという話が、できるので、まそういう意味じゃほんとにまずはスタートラインに立つためのいろんな、活動がね、もっと具体的にできればと、いうふうな話がいろいろと、あったので確かにそれはその通りだなあと。

(第4ラウンド・テーブル3)

1-3-4-005. I : …あそこをまあ、あのう、いわゆるあの、温泉以外の、施設ありますよね、あれを壊さなきゃけっこうその維持費がいるいう話があって、まあそれを、やらないけんのじゃけど。それとまあ、たんにね温泉をどうするかという話やなしに、温泉を含んだ、大朝なり、ね、北広島なり、山県の地域づくりをどうするんかみたいなところから。あのう、たんに温泉をつくろうみたいなこと、儲けましょう、ただだったら、1年間で回っていろいろ600万とかばあって集めて、3000万やって、人も来んかって次の年は300万なって、3年目でゼロになってあーあいう話になるけえ、やっぱり、それはやっぱり、どういうふうに、この地域でやっていくかいう、そんなかでやらないと、あくまでも、ポリシーがないと。…やったらやったがやっぱり、入り来んかった、あーやっぱ赤字になったつぶれたみたいなことではおんなじじゃから…。なるほどなあいうて、そこは気づかんだったんだけど、それを崩さにや今マイナスなんで、ゼロか思うたら、マイナスだったという話で。マイナスをとりあえずゼロにせにゃいけん、いうときにまた金が要るんで、

(第4ラウンド・テーブル3)

Eは、この第3ラウンドのテーブル6であった「拠点としての田原温泉」のトピックで直前の発話に連鎖して同系の話題が別のテーブルでもあったことを示している。「最初の席でも、先ほどのところでも」と体験提供の前置表現を用いつつ引用して列挙したのち、「そこで先ほどあったような」とこのテーブルの談話に接続している(1-6-3-006)。

Lは、「言ってたのが」と体験提供の前置表現を用いつつ引用して列挙したのち、それを結句で結ばず、続けて「そういう意味じゃほんとにまずはスタートラインに立つためのいろんな、活動がね、もっと具体的にできればと、いうふうな話がいろいろと、あったので確かにそれはその通りだなあと」と発話している(1-3-4-002)。

Iは、「いう話があって」体験提供を用いつつ引用して列挙したのち、それを結句で結ばず、続けて「そこは気づかんだっただけけれど、それを崩さなきゃ今マイナスなんで、ゼロか思うたら、マイナスだったという話で、マイナスをとりあえずゼロにせにゃいけない、いうときにまた金が必要なんで」と発話している(1-3-4-005)。「ゆってましたねえ」という報告の終止ではない、「半開放」の発話の終端は多くはないが、特徴的である。

体験的引用タイプⅠ・単数引用は、席替えの序盤に多い。体験的引用タイプⅡ・複数報告引用は一定の数産出されている。体験的引用タイプⅢ・半開放引用は終盤に多い。さらには、体験的引用タイプⅢ・半開放引用は、前テーブルでその話題の談話が活性化していたであろう形跡が、文脈の引用のその引用元の談話において散見される。

席替え回数が少なく話題の引用元が選択肢として少ない序盤では、単数の引用が多く、席替え回数が増え話題の引用元が選択肢として多くなる終盤では、一つの発話に複数の引用を詰めて報告をおこなう産出が増える。その複数の詰め方も、単純な列挙に加えて報告で終わらずそのターンの中で話題を振るような半開放引用がしだいに増えていく。

ラウンドが進行することで、体験的引用のタイプが単引用から報告引用になり、さらに拡張的な引用になるその過程が、引用元の曖昧化や寛容さの増加と連関しているとすると、それは「宛名」の曖昧化を含んでいる可能性がある。次節では、半開放や曖昧化、寛容さの増加に関して「宛名」の概念を援用する分析を行う。

5.3 分析 2：宛名の曖昧化

体験的引用のタイプが単引用から報告引用になり、さらに拡張的な引用になるその過程には「宛名」の曖昧化が含まれるものと捉え直して、引用元の曖昧化や寛容さの増加を再度分析する。Bakhtin (1986) が提示した「宛名 (addressee)」という概念は、言語行為はつねに「誰かに向けて語られて」おり、発話の意味や構成が、根本的にはこの想定に規定されているというものである。発話そのものが応答を志向する社会的行為であり、その構成と意味が「誰に向けられているか」に大きく左右されている。かつ、発話はつねに話し手と聞き手の双方によって形づくられるとしており、これを、「発話は、誰のものであるかということと、誰のためのものであるかということを含む二面的な行為である」とも述べている (Bakhtin, 1929, 桑野訳 1989)。この「誰に向けられているか」という概念、すなわち「宛名」に関して、体験的引用のタイプごとにその特徴をみいだしたい。引用元の曖昧化は、場が曖昧さを許すということを含んでおり、「宛名」を明確に意図する状況とは一線を画しているからである。

たとえば前出の【断片 44】における S の発話に注目してみると、ビデオの画像と前後の発言の内容から、S の発言が向かう先は、直前の発話者である R であるとみてとれる。R もそれに応え即座に発言している。体験的引用タイプ I・単数引用は、「宛名」が（テーブルという場の成員のうちの）誰か、誰に向けたのかが明確である。

同じく前出の【断片 45】における D の発話に注目してみると、ビデオの画像と前後の発言の内容から、D の発言が向かう先は、テーブルの全成員に向けられているとみてとれる。B、および A が即座に応答している。体験的引用タイプ II・複数報告引用では、場の成員のうちの誰かというより、「宛名」が（テーブルという場の）全体に向けられている。

さらには【断片 46】における N の発話に注目してみると、N の発言は向かう先が曖昧で、テーブルの全員に向けられていると同時に、「ヨソ」のテーブルの成員も想定しつつある形跡がみられる。体験的引用タイプ III・半開放引用では、体験的引用タイプ II・複数報告引用と同じように、テーブル全体に「宛名」が向けられていると同時に、さっきまでいたテーブルを含んだ、曖昧化したテーブルに向けられているととることができる。宛名は極めて弱く、寛容さを体現している。

引用のみならずそれだけで発話を完結させない、開かれた半終止の体験的提供、「半開放引用」は、まさにこの宛名を曖昧化するはたらきをなしている。引用が引用元の権威を利用することもある序盤の引用構造に比して、この「半開放引用」では、引用でありながら宛名を曖昧化させることで権威の利用からも距離を取っているといえる。宛名

の曖昧化は、権威的な言葉となって接触を疎外するという序盤の「引用の構造」の傾向の弱まりを体現しているようにみてとれる。

主張も多い序盤に比して、席替えし自ら体験の提供を重ねることで、自身の発話と他者の発話の引用元としての出自を内容として曖昧化させるのみならず、曖昧化させていること自体を明示する。場からの引用という再選択は、「ここにいる誰かが一度は口にしたもの」としての担保をもつ。これは、宛名の「誰に向けられているか」のみならず、前述の「誰のものであるかということ」や「誰のためのものであるかということ」も曖昧化させている。

談話内の発言を引用しつつ応答すること、いい替えるなら「その集会にいる成員の言葉をうまく活用すること」が、談話を柔和にし対話を促進している形跡がみられた。

5.4 「引用のモザイク」と宛名の曖昧化に関する小括

研究2のここまですを小括する。ワールドカフェの他花受粉に着目し、体験提供発話における「引用」の形式が対話へどのような影響を与えるのかを分析した結果、その引用が積み重なることで、トピックは輻輳し〈引用のモザイク〉が構成されることがわかった。引用に引用が重なり、〈他者のことば〉と〈他者のことば〉が一つの発話の中に接続・再配置され、あるときは統合され、視点と文脈の層が増し交差するにつれて、対話は集合的展開を示した。

とりわけ重要なのは、「変形された引用」のなかでも、【体験的引用タイプⅢ・半開放引用】の現出である。引用を閉じない半開放引用は、話題をひとつに主調音化させず、次の応答を開く。前ラウンドでの文脈から現在の関心までを連続的につないだ発言とすることで、会話を対話に開放するはたらきをなしている。本研究で確認されたのは、半開放引用が連鎖の起点として機能し、提供→接続→高次化という応答の伸長を促すことである。いいかえれば、引用を引用で閉じないことが、発話の再結合・再文脈化を駆動する他花受粉の作動点になっている。引用を引用で完結させない、引用から生まれた関心や問いの発信は、続く応答をして新たな発想までを誘発していく。この構造にこそ、Bakhtin のいう「創造的理解」、あるいは「他花受粉的創発」のありようが内包されている可能性が高い。

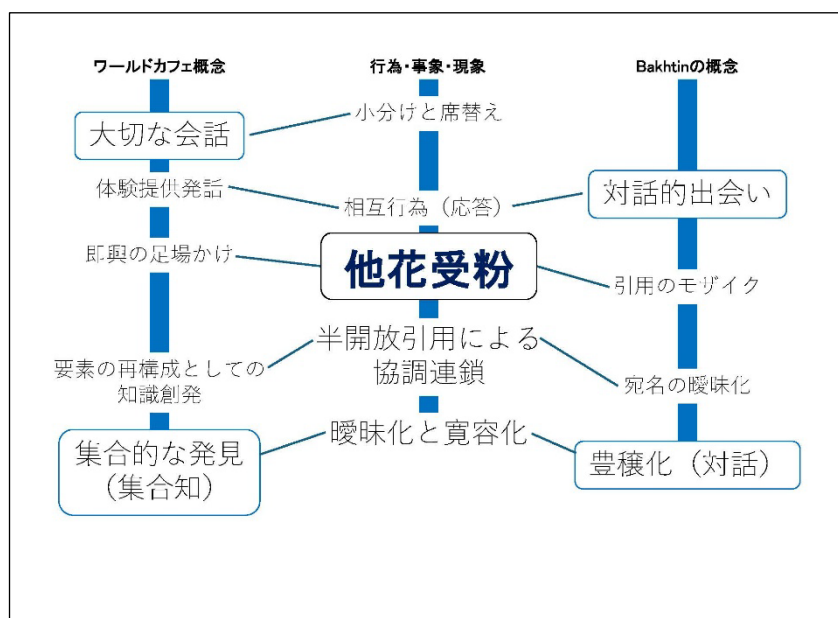
発話に含まれる「宛名」に関する検討からは次のことがいえる。「宛名」の成分は、他花受粉の進行とともに引用元の明示性が弱まり、誰のことばであったのか、誰に向けられた発話であったのかといった情報が抜け落ち、曖昧化していく傾向をもっていた。

ここでいう「宛名の曖昧化」、あるいは「宛名の消失」は、単なる欠落ではなく、中盤における「権威的な言葉」の成分を含む引用から終盤に向けて他者の語りを利用する自己の語りという構造を解体していく機能を果たしていたといえる。いうなれば、権威的引用→引用元の曖昧化→共有参照という再配列の過程を通じて、自己の語りと他者の語りの境界をゆるめる機能を果たす。結果として、評価の即時二項（主張—批判）がいったん離隔し、関連づけ・持ち寄り・高次化が連鎖する。

研究 2 では、引用の形式的変化、とりわけ「半開放引用」の出現と「宛名の曖昧化」が対話的な応答を促進し、対話の柔和化と集合性を喚起するプロセスであることがあきらかになった。他花受粉は、文脈を再構成する引用の連鎖をして、その引用に込められた意図を、「誰のものでもあり誰のためでもある」というものに変えていく過程でもあり、この意味においてはこれは「即興の足場かけ」と呼べる相互の行為によってもたらされるものであることも示唆された。これは、「半開放引用」や「宛名の曖昧化」が場全体をして知識創発の「足場」となるよう即興で立ち上げ直していく過程としても捉えられることを示唆している。

ここでの主要なタームをまとめるなら、図 18 のようになる。序論から第Ⅱ章までに提示した主要なタームのうち、前出の研究 1 に関連するものに追加した。

図 18
研究 2 のここまでの主要なターム



「対話的出会い」から他花受粉が進行していくとき、その相互行為自体が相互の「即

興の足場かけ」となりさらに他花受粉を喚起しそれは「引用のモザイク」を形成するに至る。半開放引用や宛名の曖昧化が協調的な連鎖をさらに増さしめ、要素の再構成が自明的になされてゆく。それはおそらく知識創発の苗床となるはずである。では、その知識創発は、結果「集合的な発見」に至るのか、もしくは、「創造的理解」を達成するのか、研究2の最後に、〈引用のモザイク〉と「宛名」の概念の続いて、「創造的理解」の概念を手がかりに、他花受粉という相互行為の帰結について検討する。

5.5 分析3：「創造的理解」と知識創発

ワールドカフェの「大切な会話」が対話であるのなら、その帰結は Bakhtin のいう「創造的理解」と強い連関をもつはずである。「対話的出会い」から他花受粉が進行して「引用のモザイク」を形成し、協調的な連鎖発話が要素の再構成を自明にし曖昧化と寛容さのなかで「集合的な発見」に近づいていく。それらの過程に「創造的理解」の証左はみられるのか。この視点から、これまでの分析結果としての他花受粉のメカニズムを読み替えていく。

「創造的理解」の証左とおぼしき談話の例をひもとくまえに、「創造的理解」に関する Bakhtin の記述を検討しておく。以下の2つの記述からそれを整理する。

〔記述1〕

創造的理解とは「つまり両者のあいだに新たな意味が生まれる」ことである（桑野，2020）。

〔記述2〕

「ひとつの意味は、もうひとつの、「他者の」意味と出会い、触れあうことにより、みずからの深みをあきらかにする。両者の間にいわば対話がはじまるのであり、対話がこれらの意味、これらの文化の閉鎖性と一面性を克服するのである。（中略）対話的出会いにさいしては、両者は溶け合うこともなければ混じり合うこともなく、それぞれがみずからの統一性と開かれた全一性を保っているのだが、たがいに豊穡化する」（桑野，2020, p.303）。

〔記述1〕，〔記述2〕の2つの記述は、「事象」として読み取り可能なものと「帰結」としてもたらされていると読み取り可能なものに再整理できる（表25）。

表 25

〔記述 1〕, 〔記述 2〕の再整理

〔対話的出会い〕		まとめ
事象 1 ひとつの意味が、もうひとつの、「他者の」意味と出会い、触れあったか	帰結 1 溶け合うこともなく混じり合うことなく、それぞれがみずから（統一性と開かれた全一性）を保ったままであったか	要素 1 それぞれがみずからを保ったままである「対話的出会い」で、「他者の」意味と出会い触れあう
〔豊穡化〕		まとめ
事象 2 みずからの深みをあきらかにできたか	帰結 2 豊穡化できたか	要素 2 みずからの深みをあきらかにし豊穡化する
〔創造的理解〕		まとめ
事象 3 両者のあいだに新たな意味が生まれたか	帰結 3 意味や文化の閉鎖性と一面性は克服できたか	要素 3 新たな意味が生まれる「創造的理解」が意味や文化の閉鎖性と一面性を克服する

再整理した記述の 1 つめは「ひとつの意味が、もうひとつの、「他者の」意味と出会い、触れあったか」である。2 つめは「みずからの深みをあきらかにできたか」である。3 つめは「両者のあいだに新たな意味が生まれたか」である。これらは「事象」として、談話のなかに相互が観察可能なもの、相互が発話で言明する必要があるものである。

これらに呼応して「帰結」として再整理可能なものもある。「帰結」は、観察できない内面的な要素、思弁的な要素を含むもので、おそらくは内受容感覚に基づくものである。その 1 つめ、「事象」の 1 つめに呼応する記述は「溶け合うこともなく混じり合うことなく、それぞれがみずから（統一性と開かれた全一性）を保ったままであったか」である。「事象」の 2 つめに呼応する記述は「豊穡化できたか」である。「事象」の 3 つめに呼応する記述は「意味や文化の閉鎖性と一面性は克服できたか」である。この 6 つをそれぞれ〔対話的出会い〕, 〔豊穡化〕, 〔創造的理解〕の観点から一文化すると、3 つの要素になる。

- 要素 1** それぞれがみずからを保ったままである「対話的出会い」で、「他者の」意味と出会い触れあうこと [対話的出会いの要素]

要素 2 みずからの深みをあきらかにし豊穡化する [豊穡化の要素]

要素 3 新たな意味が生まれ、意味や文化の閉鎖性と一面性を克服する [新たな意味の要素]

それぞれがみずからを保ったまま「他者の」意味と出会い触れあう「対話的出会い」が生成されることが第一の要素で、みずからの深みをあきらかにし豊穣化を自覚することが第二の要素で、その談話から新たな意味が生まれ、意味や文化の閉鎖性と一面性を克服することが第三の要素である。この「対話的出会いの要素」,「豊穣化の要素」,「新たな意味の要素」は、ワールドカフェのメカニズムの分析結果を用いてその解像度を上げることができる。

「対話的出会いの要素」,すなわちそれぞれがみずからを保ったまま「他者の」意味と出会い触れあう「対話的出会い」が生成されることは、ワールドカフェでは応答パターンの変化として立ち現れる。それは直接対峙的な「出会い」よりも、席替えをきっかけとする体験提供発話によって運ばれ、「誰に向けられているか」も「誰のためのものであるか」も「誰のものであるか」もはぐらかされた形での「出会い」である。ワールドカフェ前半では、参与者どうしが自身の主張・立場や自他の意見の違いに固執しやすい傾向で直接対峙している。このときには、直接話法的な引用や間接話法的な引用、およびそれに基づく即時的な評価や短絡的な結論が顕著にみられる。のテーブルの談話の体験を提供する引用が連鎖するにつれて次第に、他者の意見を尊重する協調的な応答に切り替わる。さらには終盤では、複数の意見を積極的に関連づけたり、達観したり俯瞰したりといった柔軟に高次化した応答が増す。

このワールドカフェの席替えにおける変化を代入するなら、「対話的出会い」にみる応答は、即時的短絡的な応答から、談話内の体験的な引用を経て、協調連鎖の応答が増え、複数の列挙される引用が半開放的に柔和な応答を喚起し、積極的に関連づけたり高次化したりする応答が増える、という進展があることがみてとれる。

「豊穣化の要素」,すなわちみずからの深みをあきらかにし豊穣化を自覚することは、ワールドカフェでは談話内の体験的な引用の変化として立ち現れる。それは、引用が引用を喚起し、参照元が曖昧化し、談話全体の寛容さが増した結果として、複数の列挙される引用が半開放的な発話となると、「他者のことばの能動的知覚の傾向」を表すものとしての〈他者の発話の伝達〉が次第に大きく変形されていく過程でもある。「権威的な言葉」から「自由な形式」へと変化していく過程である。単引用、報告引用、半開放引用と、より複雑で自由な引用が増え、それによってもたらされる、「誰に向けられているか」も「誰のためのものであるか」も「誰のものであるか」もみえない集合の知恵としての〈引用のモザイク〉が形成される。〈互いの言葉を用いあう〉そのモザイクは、参与者にいく度も〈伝達すべきことば〉の再選択の機会を提供する。その再選択に

よって、みずからの深みへの気づきをもたらされる。

例に挙げるならば、【断片 49】【断片 50】【断片 51】は、「みずからの深みへの気づき」を体現した発話の例である。

【断片 49】「みずからの深みへの気づき」1

-
- 1-2-2-217. N : まあでも、あのう、まあわたしは地元としてね、 テーブル2
あのうやっぱりそのう、コミュニケーション
の会なんじゃけどせっかくのね、だけど、まあ
そういうふうに、大朝の地域の人がね、思っ
てくれとるまあ今日のメンバーなんか見て
も、へえーと思うぐらい、感動したんだけど、
1-2-2-218. F : いちばん最悪なのは、お化け屋敷になる。
1-2-2-219. O : ああ、つぶすにつぶせない。どうするのって。
1-2-2-220. N : 考えてもらえるのはうれしい。あでも、温泉は
つぶしては、いけんと思うの、ほんとにいい、
温泉だから。
1-2-2-221. I : いけんと思うよ。
-

【断片 50】「みずからの深みへの気づき」2

-
- 1-3-4-011. K : いや、これはもうなんかいろいろ話して僕が、 テーブル3
思いついたんですけど、もうその、取り壊しも
含めて、温泉も、残しつつ、「屋台村」がおも
しろいいんじゃないかと。屋台。常設で屋台
を。そのう、仮にその温泉にひとつの、そのお
店があったとしても、まあ、それともうザラ
にあるもの。でも、屋台が常に常設であって温
泉があるところはないし、けっこうワイワイ
してたんで。で、まあ雇用も生まれるし、で、
人も外部からそこにまた屋台でやりたいとい
うプラスの人が寄って来てもおもしろい。
1-3-4-012. L : 屋台とかトレーラーハウスみたいなね、うんう
んうん。
1-3-4-013. K : フードトラックとか呼んできて。そういうのは
なんかその更地にしとったらいろいろ。
1-3-4-014. I : そう。毎日？ 毎日？
1-3-4-015. K : これ週末、週末ですね。
-

【断片 51】「みずからの深みへの気づき」3

-
- 1-4-4-059. O : なんかそういう、流れでまあ、 テーブル4
1-4-4-060. M : ドライブシアター、的な。キャンプシアターみ
たいな。て、いう、ところはまあ、とっかかり
で、人を呼ぶ、
1-4-4-061. N : 宿泊施設なんやから、そうよね、キャンプで。
キャンプでいけるんなら。ふうん。えー、
-

1-4-4-062. O: ま, という話で.

1-4-4-063. N: お金をかけてできることって, ということか.

【断片 49】の N や I においては, この「コミュニケーションの会」の「今日のメンバー」が「思ってくれ」はしたものの (1-2-2-217), 「温泉をつぶしてはいけない」という自論は変えたくないという「地元としてのわたし」が再認識されている (1-2-2-219, 1-2-2-220, 1-2-2-221). 【断片 50】の K は「おもしろい」と思うことを, 「いろいろ話して僕が思いついた」こととして発言している (1-3-4-011). 【断片 51】の N は, 一連の談話, 対話を経て, O, M との会話を締めくくるように「お金をかけてできることって, ということか」と発言している (1-4-4-063). 再認識的な自覚, 「いろいろ話して思いついた」と今思い至ったこと, 「ということか」という気づき, それらは〈引用のモザイク〉となった〈伝達すべき言葉〉の中からさらに再選択された言葉である.

[新たな意味の要素], すなわちその談話から新たな意味が生まれ, 意味や文化の閉鎖性と一面性を克服することは, ワールドカフェが全体として目的としていることと対照である. ワールドカフェはこの要素を, 集団の知性の出現の条件として「涵養」する. ワールドカフェは, 「談話から新たな意味が生まれ, 意味や文化の閉鎖性と一面性を克服すること」に向かうための条件として, 「他花受粉」を志向する. 他花受粉の概念にいうところの, 「異なる視点のつながりがもつ多様性と密度を意図的に強めること」による創発とは, 具体的には (表面的には), 「各テーブルでの会話から生まれたアイデアが相互につながり関連づけられて新しいアイデアを生み出していく」ことである. 新たな意味の生成と閉鎖性・一面性の克服という成果は, 「相互の関連づけ」がもたらす.

「相互の関連づけ」は, 「異なる視点の多様性と密度を意図的に強めること」によって志向される. 研究 2 において分析できた具体では, それは協調連鎖の発話の応酬の中で起きている. そしてそのためにまず, 多様性と密度が, 体験提供の引用発話によって, 1 つの発話の中で密度が高められる必要があったようにみてとれる. 複数の引用を列挙する発話, とりわけ半開放の体験引用が起点となって協調連鎖の発話が産出されている. それに触発される形で, テーブルでの発言の応酬, 活発化が起きている. この「相互の関連づけ」には 3 つのモデルが考えられる. ワールドカフェではその 3 つめが起きるとみてとれる. 1 つめのモデルは, カatalog 開陳のモデルで, これは, 「各テーブルでの会話から生まれたアイデア」が成員入れ替え後に新たなテーブルに開示され, 並べられることで「相互の関連づけ」がなされるであろうという【表面的なモデル】である. 2 つめのモデルは, 個人の内面のモデルで, 発話の分析にあるような複数の文脈でのアイデアがひとりの発話の中に込められているそのまま, 個人の内面で「相互の関連づけ」が

行われ結果が報告されるであろうという【個のモデル】である。3つめのモデルは「足場かけ」のモデルで、2つめの個のモデルのように「相互の関連づけ」が行われ結果が発言されるが、それが「半開放引用」であるときその発言は報告で終わらず、成員がまたその談話に組み込まれ、それが「足場」となって「集団」として「相互の関連づけ」が行われる【集合性のモデル】である。「相互の関連づけ」を行う主体がモデル1~3で異なっている。他花受粉による「相互の関連づけ」は、表面的にはモデル1と捉えられがちだが、精緻に談話をみていくなればそれは、モデル3のかたちとなっている。

例に挙げるならば、【断片52】【断片53】【断片54】は、「新しいアイデアを生み出していく」を体現した発話の例である。

【断片52】「新しいアイデアを生み出していく」1

-
- | | |
|---|-------|
| 1-1-3-195. D : 屋台, 屋台ね. | テーブル1 |
| 1-1-3-196. V : 屋台. <u>屋台やるんだったら</u> わしが骨組みをつくるけ. | |
| 1-1-3-197. D : 骨組みつくってくれるって. ハハハ. | |
| 1-1-3-198. K : えーマジすか. | |
| 1-1-3-199. V : 骨組みつくってあの, タイヤをつけて, 木のタイヤをハハハ. | |
| 1-1-3-200. D : いやもう屋台やってくださいよ! | |
| 1-1-3-201. V : いやああいうなんは, <u>ああいうなんはええと思</u>
<u>うね.</u> | |
| 1-1-3-202. N : うーんそうよ! <u>あれならねえあれが, いらん</u>
<u>もんね.</u> | |
| 1-1-3-203. D : うんうんうん. 屋台で, ラーメン屋とおでんとかしてなんかコップ酒とかなんか, ねえああいう昔ながらの, いいと思う. | |
| 1-1-3-204. V : だけ最初からだけん食堂とかなんとか考えずにね, ただ風呂入ってもらう段取りは, して, で今のような, あのう単純にもうラーメン, とかね, まもしかしたら, まあ, あの, おにぎりとか, 素うどんぐらいは, まあセットできますよーみたいな, まあああいうまああんまりとかくお金かけずにハハハ. | |
| 1-1-3-205. K : <u>ラーメンやとったのは</u> , カナダでやってたんですけど, | |
| 1-1-3-206. N : え? そうなん? | |
| 1-1-3-207. D : アハハハ. | |
| 1-1-3-208. K : まいろいろあって今, ここにおるんすけど. | |
-

【断片 53】「新しいアイデアを生み出していく」2

-
- 1-2-4-060. Y : そういうの移動販売, テーブル2
1-2-4-061. G : そういうの2〜3台並ぶと, だいたいもうイベントができると思う. 田原温泉のこの周りに, 3台か4台かありゃあ「あれ? なんかやっとなっちゃうん?」. ちょっとおしゃれな感じで, グランピング, テントでも立てて.
1-2-4-062. E : はあはあはあはあはあ.
1-2-4-063. G : それをねやりたいなあと思って.
1-2-4-064. E : キッチンカーはいいかもしれないすね.
1-2-4-065. G : 今まずごいねコロナになってキッチンカーブームになってて, あっちもこっちもキッチンカーキッチンカーゆうとるけど, までも, うちも, 車にかかわる, 仕事なんで.
-

【断片 54】「新しいアイデアを生み出していく」3

-
- 1-6-4-060. X : 見てて思うのはやっぱり, 地元…の, 連携みたいなものかな? テーブル6
ていうのは, だいぶ大切なあ, と.
1-6-4-061. W : これは大事よ.
1-6-4-062. X : 農家さん, 林家さん, 住民とかね.
1-6-4-063. W : ゼットイ大事やね.
1-6-4-064. X : やっぱりピンチは, チャンスなので, これが大切なのは, 危機感がものを生むと思う. いろいろ生まれてきて, 楽しそうな感じですよ.
1-6-4-065. W : とりあえず地元も本気になるけえ, そりゃ.
1-6-4-066. X : 川のこととかみんな, 協力的ですよ.
1-6-4-067. W : 協力協力, 協力するよ. しな.
-

【断片 52】の談話では, K の「屋台」という構想レベルのアイデアが V 「わしが骨組みをつくるけ」によって (1-1-3-196), あるいは, D や N の賛同によって実現可能なアイデアに昇華した感を得ている (1-1-3-200, 1-1-3-202). K も V も D も N も, このあとに席替えしたテーブルで, この新しいアイデアこそを強調して引用している. とくに V は, 閉じてしまった (むしろ温泉よりも) 食堂をなんとかしたいと思っていたこと, および最大の難関はそのための資金であると思っていたことへの対応策となった点を, 次のテーブルで強調している. 【断片 53】では, Y の「移動販売」(1-2-4-060), G のそれへの「グランピング, テント」併設というアイデアの定時を経て (1-2-4-061), E が言語化した「キッチンカー」が (1-2-4-064), G の結論となった (1-2-4-065). 地域のバス会社を経営する G にとっては「車にかかわる」アイデアは, 大きなテーマとなり得るものである. 【断片 54】では, 農家である X が「このピンチ, 危機感をチャンスに活かそう」, そのためには「地元の, 連携みたいなもの」が大切であるということに気

づいたことを受けて (1-6-4-060, 1-6-4-064), 自治会のWも「とりあえず地元も本気になるけえ」と宣言している (1-6-4-065). それは, 自治会活動のみならず「川のこととか」も含む, と大きな連携の話題に昇華している (1-6-4-066).

「手づくり屋台の週末屋台村」, 「バス会社によるグランピングやテント併設のキッチンカー運営」, 「農家林家に始まる小さなイベント創始の地元連携」, これらは「相互の関連づけ」によって, 閉鎖性・一面性が克服された「創造的理解」の一端であるといえる.

香取・大川(2011)のいう「各テーブルでの会話から生まれたアイデアが相互につながり関連づけられ」るのも, Wertsch のいう「他者の言葉に接触するアリーナ」も, Bakhtin のいう「両者のあいだ」という触れ合いも, それは, 対峙した者どうしより, 体験提供として引用される発話の中で複数化し, 発話者 1 人の中で創造性が強まりそれが場に提示されて「足場」となり, かつさらにその場の成員が参与することによって, 創発的なアイデアの合成が集合的に受容されている. 他花受粉が提供しているのはその〈引用される発話の中で複数化し, 発話者 1 人の中で創造性が強まり, 開示されたそれが足場となってさらに集合が受容していく〉足場かけの場であり, 成果を受容する寛容さの涵養の場である.

〈互いの言葉を用いあう〉談話から〈引用のモザイク〉が形成され, 「創造的理解」へと向かう諸要素には, 「対話集団内の体験的引用」ということがいづれにも欠かせない.

創発に関する研究で示唆されている, たとえば吉田・服部 (2002) のいう「外的手掛かりの利用」や, 植田・丹羽 (1996) のいう「協調活動が直接的に視点転換をもたらす」こと, 石井・三輪 (2001) のいう「話し合いが独創性の高いアイデアを産出する」ことはいずれも, 「互いの言葉を用いあう」談話から〈引用のモザイク〉が形成され, 「創造的理解」へと向かうことによって支持される. 「対話集団内」における知識の創発は, この「創造的理解」と強く連関している.

5.6 結 論

研究 2 では, ワールドカフェの他花受粉に着目し, 体験提供発話における「引用」の形式が対話へどのような影響を与えているかを分析した. その結果, 【体験的引用タイプⅢ・半開放引用】の出現と, 「宛名」の曖昧化 (明示的な低下) が確認された. さ

に、これらが前後して起こることで、創造的理解へ向かう応答の伸長が見られた。半開放引用は、引用を引用で完結させない引用である。その引用から生まれた関心や問いを含んで開き、続く応答をして新たな発想まで誘発していく引用である。引用の終端を強く確定せずに、前テーブルの談話要素と現テーブルの話題枠の双方に接続可能な余地を残す。そのため、応答は持ち寄り―受け取り―継ぎ足しの連鎖へ移行しやすく、主調音化を避けつつ次の発話を招き入れる。本分析では、半開放引用がしばしば連鎖の起点となり、提供→接続→高次化という応答の伸長を促すことが確かめられた。

「宛名」については、他花受粉の進行とともに「誰のことばであるか／誰に向けられているか」の特定性が緩み、共有参照へと移行する傾向が見られた。この「宛名の曖昧化」も「権威的な言葉」としての引用の側面を弱め、応答の許容性の高いものに関き、対話の柔和化と集合的な思考の促進に寄与していた。単なる欠落ではなく、権威的引用→引用元の曖昧化→共有参照という再配列を通じて、自己の語りと他者の語りの境界を一時的にゆるめる機能を果たす。その結果、主張―批判の即応的な二項系がいったん離隔され、関連づけ・持ち寄りが連鎖しやすくなる。

体験提供の増加、曖昧化という前置表現の推移、半開放引用のような引用からの開き、宛名の曖昧化が同一局面で共起し、これらが「即興の足場かけ」として機能する。すなわち、気づかぬうちに場全体で互いに参与可能な土台が立ち上がり、応答の許容域が広がる。引用に引用が重なり、〈他者のことば〉同士が接続・再配置されるにつれ、視点と文脈の層は増し、対話は集合的展開を示す。このような「引用のモザイク」は、操作的に観測可能なかたちで形成されていた。

以上を踏まえると、ワールドカフェにおける他花受粉とは、「体験提供発話」を契機とする「引用」の連鎖が、半開放引用と宛名の曖昧化を媒介として即興の足場かけを成立させ、そこでの応答的ふるまいが協調的な連鎖発話へと展開していく過程であると言える。その過程では、「小分けと席替え」によって、発話は局所的な文脈に根ざしつつも、成員の移動を媒介として〈他者のことば〉が運ばれ、話題や視点が別の文脈へと交配、再結合・再文脈化されていく。これらの動態が重なり合うとき、Bakhtin のいう「(両者のあいだに) 新たな意味が生まれる」が現前し、これこそが「創造的理解」として捉えられる。

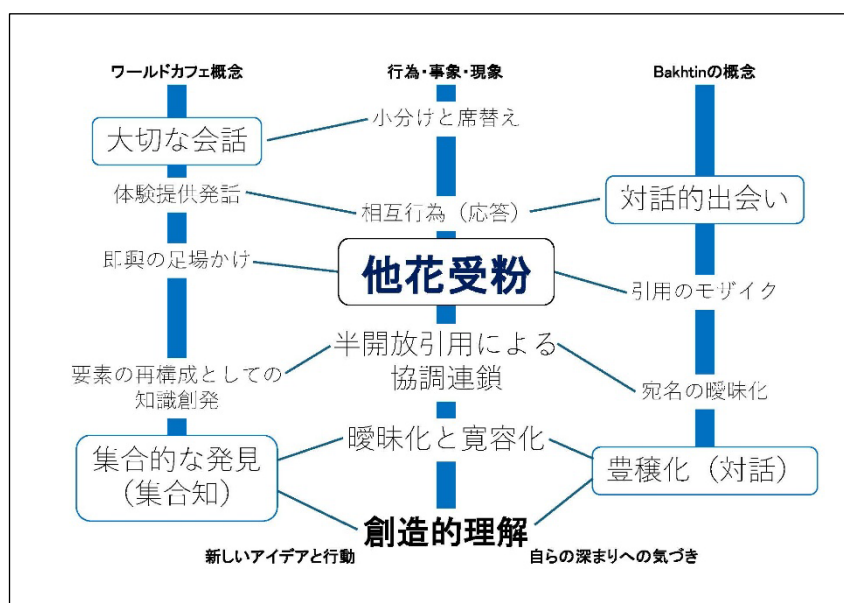
「創造的理解」は、[対話的出会いの要素]、[豊穡化の要素]、[新たな意味の要素]の3つの要素を順次獲得していきながら達成される。[対話的出会いの要素]は体験提供発話をもたらし、[豊穡化の要素]は場を「引用のモザイク」状態へと至らしめる。そして、半開放引用による協調連鎖から[新たな意味の要素]が生まれ出る。この3つ

の要素の順次獲得こそが、ワールドカフェにおける他花受粉の全容であり、そこでもたらされる意味のひとつひとつが知識創発の成果物である。

研究 1 および研究 2 の成果を、序論から第 II 章までに提示した主要概念に基づいて整理・図式化したものが、図 19 である。

図 19

主要なターム



ワールドカフェは、外形的な「小分けと席替え」にはじまり、「相互行為（応答）」が「他花受粉」となって、そこでの「半開放引用による協調連鎖」が「曖昧化と寛容化」を伴いやがて「創造的理解」へと至る連鎖的な営みである。

これらを Bakhtin の対話理論における概念からたどるなら、相互行為（応答）は「対話的出会い」を呼び、「他花受粉」から「引用のモザイク」が形成される。それは徐々に「宛名の曖昧化」につながり、「曖昧化と寛容化」から「豊穡化し」た「創造的理解」へと至るというプロセスが浮かび上がってくる。

これらをワールドカフェの諸概念からたどるなら、「大切な会話」を志向して「小分けと席替え」がしつらえられ、相互行為（応答）では「体験提供発話」が際立つようになる。その「他花受粉」は相互の「即興の足場かけ」となり、「半開放引用による協調連鎖」から「要素の再構成としての知識創発」への可能性が開かれる。最終的には、「曖昧化と寛容化」を基盤とする許容のもとで、「集合的な発見（集合知）」が受容され、それが「創造的理解」として達成されるプロセスが浮かび上がってくる。

「創造的理解」は対話的な意味においては、「自らの深まりへの気づき」であるし、ワールドカフェ的な意味においては「新しいアイデアと行動」を帰結点としている。

VI 総合考察

本研究の目的は、ワールドカフェにおける他花受粉のプロセスを知識創発へ至る過程として位置づけ、対話理論における引用概念を理論的な枠組みとしつつ、談話分析によりその実相を解明することであった。これに対応して研究設計を2層化した。研究1（マクロ視点）では、席替えを単位とした全体過程を対象に、ラウンド間での談話の変化と引用の出現・分布などを量的・過程的に把握した。研究2（ミクロ視点）では、引用および宛名の揺れ、創造的理解の動態に着目し、発話列の精密追跡によって再文脈化と意味の再解釈のプロセスを明らかにすることとした。

研究1は、席替え→体験提供→前置表現の推移という過程的メカニズムが、談話の再配置と応答の協調化を導くことを示した（分析1-5）。研究1における主要な発見は3つである。

第一に、席替えを契機として体験提供の発話が増加し、その前置表現が空間→時間→曖昧へと段階的に推移するのに呼応して、談話の配置（再結合・再文脈化）が進むことを示した（分析4・5）。この推移は、発話カテゴリの重心が【主張提示／役割強調】→【体験提供／協調連鎖／高次化】へとシフトしていく過程と整合し、応答の様式を即時批判中心から関連づけ・持ち寄り中心へ転じさせている（分析1・2）。

第二に、ラウンド間の過程把握から、途中ラウンド（第2・第3）での席替え経路に伴い、体験提供／情報訴求が局面ごとに更新されること、その更新が協調的応答への転化を下支えすることを確認した（分析3）。すなわち、前テーブルでのトピック（会話・語句・評価）の枠組みが現テーブルの話題枠に重なり、以後のやりとりの許容域を広げる。

第三に、発話—応答の構造変化として、序盤に優勢だった批判・短絡的結論が終盤では協調連鎖・高次化に置き換わり、系列としての応答の伸長（提供→接続→高次化）が観察された（分析2）。このときの鍵は体験提供であり、席替え直後に提供の起点が立ち上がることが、後続の連鎖を生んでいる（分析3-5）。

他花受粉は席替えによって生じる体験の提供と文脈の共有を契機として、それが発話の語用的特徴を変化させ、応答の様式を協調的・創発的に再構成するプロセスとして可視化された。他花受粉が会話の多様性と密度を高めアイデアの新しい組み合わせに至るには、発話の構成と語用の変化、さらには応答のありようが変容する事象を伴っていることもわかった。ワールドカフェでは、前半で自身の主張・立場や自他の意見の違いに

固執しやすい傾向にあったものが、後半では協調や高次化といった、他者の意見を尊重したり複数の意見を積極的に関連づけたりする柔軟な傾向がみられるようになるという参加者の変化が起きている。その変化は、席替えに伴って必要となる体験提供発話をひとつのきっかけとしている。

研究2では、体験提供発話における「引用」の形式が対話へどのような影響を与えるのかを分析した。結果、その引用の積み重なりがトピックを複層化させ〈引用のモザイク〉が構成されることがわかった。〈他者のことば〉と〈他者のことば〉が1つの発話の中に統合され、複数の視点と文脈をもったものとして再構成されていく。研究2における主要な発見は4つである。

第一に、引用が同一局面で共起し、とりわけ【体験的引用タイプⅢ・半開放引用】が連鎖の起点として機能することで、協調連鎖と高次化が伸長することを示した（分析1・5）。すなわち、半開放引用という引用を引用で閉じない提示が継ぎ足しの応答を招き入れ、場における再解釈を促し意味の再結合が生起する。

第二に、「宛名」の明示性が進行とともに共有参照へと緩やかに移行し、主張—批判の即時二項がいったん離隔されることで、関連づけ／持ち寄りが進みやすくなることを確認した（分析2）。これは単なる欠落ではなく、権威的引用→引用元の曖昧化→共有参照という再配列の結果として現れていた。

第三に、これらの動態が重なり合う局面では、体験提供の増加＋前置表現の包括化＋引用群の共起が連続的に立ち上がり、〈引用のモザイク〉が操作的に観測可能な形で構成される。その際、半開放引用×宛名の共有参照化の組み合わせが即興の足場かけとして働き、応答の許容域を広げる。

第四に、以上の連鎖により、対話的出会い→豊穡化→新たな意味の順に要素が獲得され、創造的理解へ到達する過程が観察された（分析3）。

引用の形式的変化、とりわけ「半開放引用」の出現と「宛名の曖昧化」が、対話的な応答を促進し談話の柔和化と集合性を喚起するプロセスの鍵である。他花受粉は、文脈を再構成する引用の連鎖をして、その引用に込められた意図を、「誰のものでもあり誰のためでもある」というものに変えていく過程であり、それは「即興の足場かけ」と呼べる相互の行為によってもたらされていることが示された。

研究1と研究2を総合するなら、次のことがいえる。ワールドカフェの各テーブルという局所的な文脈は、席替えによって他のテーブルへと運ばれ、異なる文脈同士が交差する場となる。そこでは、体験の提供として提示される発話展開パターンが鍵となって、体験の即時性や即興性への傾注が促進される。個としての主張や役割の強調は次第に弱

まり、「並列」から「全体」への統合的な変容が生じていく。他花受粉はこの、創発を引き起こす直前の“前段階”を組織化している。それは、「発話の交通（通い合い）」から、自己と他者が互いに変容可能な応答関係に入る「対話的出会い」の組織化ともなっている。この意味において、他花受粉は変容を促進する対話空間を構築し、その可能性を開く。

さらに付言すれば、研究1で観察された体験提供の「前置表現」の段階的推移（空間表現→時間表現→曖昧表現）のうち、研究2で定式化した【体験的引用タイプⅢ・半開放引用】の言語的な表出とあいまって生成されるのは、曖昧表現の体験提供である。すなわち、「みんな言ってた」といった出どころを強く確定しない前置きと、参照枠を開いたまま残置し、次の応答を許容・促進する半開放引用の出現は、共時的である。同一の機構の別の側面として、曖昧化され半開放されることが応答を許容・促進するはたらしめをなしている。

他花受粉は、「誰かの言葉を別の文脈で再構成する」引用の連鎖によって組織化される。入れ替わる成員という媒介者が〈他者の言葉〉としてアイデアや語りを運び、受粉を媒介し、運び込んだ先のテーブルの「多様性と密度」を高める。〈他者の言葉の伝達〉がここでは単なる情報の移送にとどまらず、かつ、その運び込まれたテーブルにおいては相即的な賛意や評価や解釈にとどまらず、トピック、視点、テーマや興味関心として文脈ごと運び込まれる「文脈の交差」をもたらす。元あった文脈は強く大きく揺さぶられ、会話のリフレーミングや再構成が喚起される。成員の入れ替えによって生じる文脈の交差や組み合わせの密度の高まり、そのすべてが他花受粉としてのワールドカフェの特徴を体現している。

成員入れ替えによって局所的な文脈が交差すること、およびそれともなつて発話と応答が構造的に変化するという他花受粉の現象としての見えが確認できたことであきらかになったことは、体験提供発話が文脈交差の鍵となっていることである。とくに「分散化された」「中枢の命令によらない」「並列的处理」というテーブルの小分けがもたらす性質から、成員の入れ替えによって、発話のカテゴリや応答パターンが段階的に変化し、柔軟で協調的な応答が増加すること、他テーブルでの体験が語られることで、この「体験の再配列」を通じて文脈が自由に交差すること、体験提供発話の前置表現に着目するなら、その前置表現が曖昧な表現へと変化することで、参加者が「全体のネットワーク」を認知することが明確になった。

この語用上の前置表現の変化は「発話の交通（通い合い）」を盛んにし、個人の主張が並行している状態から「全体のネットワーク」へ統合されることへの変容を促進するメカニズムとして機能している。ワールドカフェにおける他花受粉とは、発話の内容や

形式がラウンドを通して動的に変化し、対話的応答を媒介として「対話的出会い」へと至る準備段階を組織する営みである。ここにおいて、Bakhtin のいう「(両者のあいだに) 新たな意味が生まれる」という事態が現れる。これが「創造的理解」となる。

「創造的理解」は、[対話的出会いの要素]、[豊穰化の要素]、[新たな意味の要素]の3つの要素を順次獲得していきながら達成される。[対話的出会いの要素]は体験提供発話をもたらし、[豊穰化の要素]は「引用のモザイク」状態へと至らしめる。そして、半開放引用による協調連鎖から[新たな意味の要素]が生まれ出る。この3つの要素の順次獲得こそが、ワールドカフェにおける他花受粉の全容であり、そこでもたらされる意味のひとつひとつが知識創発の成果物である。創発的に意味や意思、アイデアが生成されるとき、それを受けとめる寛容さが必要となる。他花受粉がその寛容さを涵養し、「集合的な発見」へとつなげていくことが行われている。

本研究は、こうした一連の動態を、実際のワールドカフェの談話から相互行為的な分析を用いることで、これまでブラックボックスであったワールドカフェのメカニズム、とりわけ他花受粉の実相を構造的に可視化する試みであった。この新しいワールドカフェ研究が描き出したのは以下のようなメカニズムである。すなわち、ワールドカフェにおける知識創発とは、体験提供による「発話の再構成」と相即的な引用の「開かれた変形」が織りなすネットワークのなかで、参与者全員が媒介者となり、互いに「足場をかけあう」かたちで協働しながら達成される「集合的な発見」の過程である。

6.1 「生きた引用」としての半開放引用

本研究では、Bakhtin (1929, 桑野訳 1989) のいう「あらゆる発話は社会的な出来事である」、あるいは「いかなる発話も他者の言葉を半ば隠された形で含んでいる」(Bakhtin, 1981, 望月・鈴木訳 1990)との論述に依拠しつつも、ワールドカフェ研究に特化するため、Bakhtin (1929, 桑野訳 1989) の「他者のことばにおける声の引用」の3つのパターンに沿って「引用」を限定的なものに絞り込んで検討を行った。この限定性に基づくものではあるものの、結果としてあきらかになったことのひとつ、「半開放引用」は、対話における引用のあり方にひとつの示唆を与えている。静態的で明示的で規範的な直接話法的引用、間接話法的引用に比して、「変形された引用」は自由ではあるが不可視的であるという見立てにおいて、しかしその「変形された引用」の一部をなす半開放引用は別の様相を呈する。半開放引用は半ば可視的ながらも静態や規範から遊離する引用であるという点である。「変形され」ることで、文脈に「生きて」継続する引用であるというありさまは、〈他者のことばの伝達〉の議論において新しい示唆を提

供する。

半開放引用は、「さっきの」〈他者の言葉〉を今の対話に投入する「生きた引用」(living quotation)である。「生きた引用」は二つの意義をもつ。静態的な外部からもち込まれる引用、あるいは直接話法的引用や間接話法的引用は、「発話者のもの」で、発話者から「発話者以外の場にいる者」に向けられている。これは主張に類似している。その発言が正統であればあるほど位置づけは権威的になる。いわく、垣根を張り巡らし、改変も多義的な解釈も許されなくなる。その意味では、引用ではない他の発言も多かれ少なかれこの、「静態的な引用」と同じ作用をもつ。Bakhtin のいう「すべての発言は、ある意味で誰かの発言の引用である」ということに通じている。しかし、その対話の内部で参照される談話内の相即的な引用は、少し違う意義をもつことになる。

静態的な外部からもち込まれる引用に比して、ほんの「さっき」、「あっちのテーブル」で語られたものの引用である相即性があるゆえに、まだ垣根が張り巡らされていて、「発話者のもの」として、発話者から「発話者以外の場にいる者」に向けられた主張とはいえない新鮮さをもつ。特定の陣営感や応答に含まれる主張性を緩和する。談話内の引用が、発話者のものとのいえず誰に向けられているともいえない曖昧化した宛名の引用であるとき、そして誰もが同じように「さっき」、「あそこテーブル」で語られたものが参照可能であるとき、その対等性がもたらす宛名の曖昧化が、引用を「生きた」ものにしている。この曖昧化が体現する未確定さ、相即的で新鮮な引用であることが1つめの意義である。

意義のもう1つは、半開放の引用発話であることで、「さっき」、「あっちのテーブル」で語られたという過去の文脈と現在の文脈が時制を超えて直接接続されていることである。「さっき」、「あっちのテーブル」で語られたものが誰もが参照可能であるという対等性に加えて、過去の文脈と現在の文脈を行き来自由にすることで、さらにより談話への参加の可能性を開く。より生きた状態で参与者を談話に巻き込むことになる。

Bakhtin のいう「具体的な発話を通してのみ言語は交通と接触し、その生き生きとした力につらぬかれ、現実となる」とは、静態的な引用から生きた引用へ。自論展開的な主張上の引用から談話内の相即的な引用へ、という傾注をもって補遺されると主張したい。変形された引用は、自由な引用であり、その相互作用の集積こそ、躍動的な対話を生む。そして、自由に変形をくり返しもはや原型がわからなくなった状態こそ、創造的理解に直結する理解世界なのではないだろうか。

いっぽうその自由さを指摘する論説もある。やまだ(2008)は、「引用の自由度が増すと、テキストはどこまでが『他者』のもので、どこまでが『自己』のものか、見わけ

がつかなくなる。本来的に『ことば』というものは、『私のものではない借りもの』であるが、『自己』『他者』、オリジナルな著作を創る『作者』という概念は、さらに霧散し拡張していくだろう」と指摘している。自由な引用とは、それを相互に許容するエチケットがあってこそであるのかもしれない。その意味では、ワールドカフェは閉じた実験室である。「瞬間的な親近感」(immediate intimacy) ((Brown & Isaacs, 2005, 香取・川口訳 2007) がもたらす自由さ、合意形成を容易にするであろう自由さは、しかしそこから以降は自由にみあうだけのものを提示しあう次のステージがあるのであって、永久に拡張される自由であってはならないだろう。

引用に際してそれが変形され、また引用される。それが、成員の入れ替えによって幾何級数的に順列組み合わせを試行していく。テーブルごとに分散処理されたローカルな意味が大規模に統合され曖昧化した価値基準によって「なんとなく」集合的な発見に至る。それはある意味でワールドカフェとは、人間による即興の大規模言語モデルの様相を呈している。変形された引用はリアルタイムに意味を「再文脈化」しつつ、新しい組み合わせを統合していく。引用が変形されることで、知識が過去化せず、新しい文脈に再解釈されることで呼吸するように流動していく。生きた知のエコシステムとして集団は停滞せず、むしろこの観点からワールドカフェをみると、それは単なる創造的対話の技法ではなく、集団の知の死を防ぐメタ的な営みでもあるのではないかと考えられる。定着したがゆえに硬直化する知の劣化を防ぐ仕組みとして、生きるためではなく、むしろ「集団が死なないために機能する生体システム」として、生きた引用をもって、たえず血を循環させておくことに寄与するものにちがいない。

6.2 全員が媒介者である他花受粉的知識創発

世界で最初のワールドカフェ・セッション、「ホームステッド・カフェ」での参加者の呼びかけは実際はどうであったのだろうか。「移動する際に、元のテーブルの会話から生まれたアイデアの種をもっていき、つなぎ合わせましょう」と投げかけたというこの言葉がどれほど正確に記憶されているのか定かではないが、この言葉の字義通りにことが進む(進んだ)わけではなかったのかもしれない。この投げかけは、ナレッジ・ブローカーの論説に符合している。いわく、送り手は送り手として、受け手は受け手として、アイデアの種は知識の空隙を埋めるものとして、静態的なテーブルに、つまり被ナレッジ・ブローカーにアイデアの種が「もちこまれる」ことをいい表している。しかし本研究における実証データをみる限り、実際はそう穏やかではない。全員がナレッジ・

ブローカー（媒介者）となり行き交い、静態的なテーブルの者はむしろ少数派でアイデアの種がもちこまれる、というよりは、輻輳しつつ縦横無尽に飛び交い交差し、文脈はまるでサバイバルするように会話に揉まれ、消えゆくものとの生き残るものに分かれたれる。媒介者であるという役割すら「固定化した立場がいつの間にか消え」る他花受粉は、想像以上に自由である。階層構造や権限の構造、役割による関係性を構築するひまもなく、他花受粉は、るつぼとなってカオスとなって進行する。この極めて特異なカオスの創発の形態、すなわち「成員全員がお互いを媒介者としつつ、中心のない受粉によって偶発性が極めて高くなる」という創発モデルは、新しくかつ有効である。この意味で、他花受粉が「引き起こす」創発は独特である。

認知科学の創発研究では、外的手掛かりや協調活動に着目するものもある。吉田・服部（2002）は、創造的問題解決におけるメタ認知処理に関する研究で、「創造性パフォーマンスの高かった被験者は、（内的プロセスだけでなく）うまく外的手掛かりを利用している」ことが示唆されたとしている。植田・丹羽（1996）は、研究・開発現場における協調活動の研究で、「グループのメンバー個々人がもつ知的資源の単なる総和以上の効果がグループのレベルで創発する」とときには「協調活動が直接的に視点転換をもたらす」ことが重要であることを検証している。石井・三輪（2001）は、創造的問題解決における協調認知プロセスの研究で、「話し合いながら考えたほうが独創性の高いアイデアが産出される」ことが示唆されたとしている。

他花受粉は、成員全員を（ミツバチのように）飛び交わさせることで、組み合わせ試行を増やしめ、中心性を解体し、創発の可能性を最大化する。これは会話に特化した試行錯誤でもある。さらには、個はおろかテーブルという小集団に内的プロセスを閉じず、絶えず外的手掛かりを利用可能にしている。いや、半ば閉じ、ラウンドの進行によって半ば開いている。外的手掛かりと協調活動は、半ば閉じて半ば開いてその境界を自由化していく。「思考の補完としての話しあい」という枠組みでよいのかどうかは定かではないがそれも利用は強制もされずいつでも開かれている。さらには、半開放引用の発話は、随時組み合わせ試行の成果を再構成しつつもそれを終結させず開いたまま談話を継続させている。

この3点、成員入れ替えによって全員を媒介者として組み合わせ試行を増やしめること、個やテーブルという立場や境界を閉じずに外的手掛かりと協調活動を自由化していくこと、随時組み合わせ試行の成果を再構成しつつさらに変形する機会を並行してもつこと、これらの特徴とする知識創発の様相はいうなれば、「他花受粉的創発」と呼べるものである。踏み込んで述べるなら、他花受粉の結果、創発に至るのではなく、他花受

粉そのものが、組み合わせ試行による偶発の増加、外的手掛かり、再構成を容易にするという創発の要件をなしている。ミツバチ飛び交うカオスな創発が、他花受粉の実相である。

6.3 即興の足場かけと「瞬間的な親近感」

Brown & Isaacs (2005 香取・川口訳 2007)のいう「瞬間的な親近感と集合的没頭の喚起」による「生きた知識の出現」とは、この研究の成果とどう接続するのか。

集团的創造性 (collective creativity) を、たとえば Sawyer & DeZutter (2009)は、「社会的に共有された活動において、新しく価値のある何かが生み出されること」と定義している。Hargadon & Bechky (2006)は、メンバーどうしの動的な相互作用から生まれる「一時的な集合」(momentary collectives) から創造的解決策が得られることを示している。Sawyer & DeZutter (2009)は、分散認知論 (たとえば, Hutchins, 1995) にならい、「分散的創造性」という概念を提唱し、協働によるアイデア生成のメカニズム解明を試みた。その集団については moment-to-moment group (一刻一刻の集団) と表現している。O'Toole et al. (2023)は、アドホックな集団 (ad-hoc group) の有効性を指摘したうえで、一時的チーム (temporary team) やフラッシュチーム (flash team) が有利にはたらく条件は、長期的チーム (long-standing team) で一般に有益であるとされる“関係性の構築”に依拠せず、専門知と“アイデアのタスク”に焦点を維持すること (関係葛藤ではなく課題をめぐる対立を保つこと) が、革新性にとって重要であると論じている。

O'Toole et al. (2023)のいう一時的チームでこそ「瞬間的な親近感と集合的没頭」が喚起されるとしたら、まさにワールドカフェが提供しているのは、長期的チームにはない一時的で分散的な創造性である。時限的であるがゆえに“関係性”を構築するひまもなく、常に会話がリフレーミングされる。他花受粉は、小分けされたテーブル 1 つ 1 つが「一時的な集合」であり「一刻一刻の集団」であり「瞬間的な集団 (improvised group)」であることを活用して「集団の創造性」を発揮する。

富田・丸野 (2005) は協同問題解決の談話が [葛藤的発話] から [協調的発話] に展開していくことを理論化した。興味深いのは、ワールドカフェでいうならその小集団はテーブルの 1 つ 1 つかと思われるが、大きな流れとしてワールドカフェのセッション全体でこの [葛藤的発話] から [協調的発話] への展開が起きていることだ。ここでは小分けにされた成員が行き交う、とくに「帰還する」ことに大きな奏功がある。「瞬間的な集団」で談話を重ね、解体と再結成を体験した成員は、もはや陣営の境界が曖昧化

し、それは、意見の境界にも影響を与えられつつ、集団全体が小集団として「瞬間的な集団」に様変わりしていく。田坂（2025）は、「日常会話などでは達成が容易ではないことが、ワールドカフェ（の席替え）では達成しやすくしている」と述べる。最終ラウンドの体験提供の前置表現で、急に参加者が「みんな」という表現を用い出すのは、この証左である。まとめようという意図がなくとも「なんとなく」まとまりを「発見」してしまう。曖昧化がもたらす「寛容（さ）」は「集合的な発見」を容易にしている。瞬間的な集団というタームは、組織論が主論としてきた「よい組織はよい関係性によって成立する」ということへの対抗軸である。集団はその瞬間その瞬間が集団であり、「即興的に」行動・活動・実践している間こそが集団である状態であるとみなしていることに等しい。そこでは、関係性よりむしろ、そのときそのときの相互の「即興の足場かけ」が集団の本体だといえるのではないだろうか。ワールドカフェのこの集団における「瞬間的な集団」の側面を浮かび上がらせる。

6.4 「集合的な発見」とアコモデーション

Brown & Isaacs(2005 香取・川口訳 2007)がもう1つ、ワールドカフェでたびたび言及する「集合的な発見」というタームについても考察しておきたい。ワールドカフェのプログラムは「集合の知恵を視覚化して、行動の優先順位を特定する」ものであるというその「集合的な発見」とは何か。

「瞬間的な親近感」がもたらす集団的創造性が「集合的な発見」に接続しているのなら、合意形成という集合的達成についても示唆が得られよう。知識創発の視点からふりかえるなら、以下のような様相が考察される。成員の入れ替えが、そのテーブルが「瞬間的な親近感」から「瞬間的な集団」であることを意識させられ、また、入れ替えをきっかけとする体験提供発話が互いの「即興の足場」を形成し、ミツバチ飛び交うカオスな文脈交差で、外的手掛かりと協調活動が自由化される。そこでもたらされる引用の偶発性が、知識の再構成を容易にし、〈引用のモザイク〉はここでは「足場」として機能し、かつさらにアイデアの組み合わせ試行を喚起していく。引用が「談話内の体験的引用」、つまり「その場」引用であればあるほど、協調的で共有的な「創造的理解」へと近づいていく。この「創造的理解」は多分に合意形成的である。

話しあい是一个の集合的達成である。その困難さを合意形成学がひもといている（たとえば、Susskind, 1999 など）。なかでも猪原（2011）も「最低限の条件を満たす意思決定ルールが存在しないこと」が難しさであると指摘する。多様性が増すことによって

“よい話しあい”の志向がゆらいでしまい単一の正解の措定が難しくなる点を示唆する「話しあい学」の流れもある（水上ほか, 2008）. 何を「集合的に達成」するかに関しては一つの解法がある. 「意見の一致」を目指すコンセンサス（consensus）としての合意形成だけでなく, 「意見の共存・共生」を目指すアコモデーション（accommodation）の概念が提唱されている（たとえば, Checkland, 1999）. アコモデーションを, 猪原（2011）は, 「相互学習, 相互理解によって」探索される「異種の情報が融合し, 発想を固定化しない多様な価値観が併存する状態」（猪原, 2011）と定義している. 今田（2011）は, 「合意形成は社会的に編集された現実（エディトリアリティ）である」としている. 田坂（2019）は, 合意形成を, 「合意する自由に基づく創造性の発露である」と捉える「創造的合意形成」を提案している.

ワールドカフェは, 寛容さを涵養することによって, このアコモデーションを集合的に達成しているといえる. 「集合的に」発見したものが随時選択可能な手札として並べられている状態へ至ることこそ, アコモデーション概念から見たときの「集合的な発見」の様相なのではないだろうか. とくに「半開放」の引用発話は, 主張と主張をぶつけ合うものとは違った連鎖をそこにもたらしアコモデーションの鍵となっていると考えられる. であるとしたら, 話しあい, 合意形成において, 急がずいったん結論から遊離し, 「瞬間的な集団」としてアコモデーション状態となって, しかるのちに次段へ進むことが1つの解法にはなり得るはずである.

6.5 「田原温泉再生を考える会」のその後

新型コロナウイルス（COVID-19）の二度目の感染拡大を受けて, 年が明けて再度緊急事態宣言が発出された. これによって2021年2月に予定されていた「田原温泉再生を考える会」の第3回会合は中止となった. しかし, これまでの成果を活かしたいと, 予定の日程を活用して, 地域の集まりである「大朝地域活性化委員会」が開かれた. ここでの議題が「田原温泉休館にどう向き合うか」で, これは初めて, 地域が公式にこのテーマを取り上げた正式な会合となった. これまで, 町内会の単会, あるいは個人などからの町役場への非公式な要望, 申し入れのレベルであったものが, 初めて公式にこの問題が扱われたのである.

そこでの決議, 「田原温泉再生を考える会の成果を活かそう. 休館施設を活性化に活用した実績を積もう」は, ほどなくで行動に移された. 季節が変わった初夏に, NPO 法人の主催で, それに初めて地域の町内会が協力する形で, 「アクティブな温泉」が実行

された。休館施設の前庭と隣接するグランドゴルフ場を活用して、テント、飲食スタンド、音楽ステージ、薪で温泉湯を沸かすドラム缶風呂のデイキャンプイベントが開かれた。対立するばかりでなく、趣意は変えずとも協力をする「社会実験」という位置づけで、北広島町役場の協力もあって、地域と NPO 法人の初めての共同の場となった。

ワールドカフェという「集合の知恵を視覚化して、行動の優先順位を特定する」ことがあの日達成されていたともいえる。「集合的な発見」ではあったもののおそらくそれは合意形成と呼べるほどには明示的ではなかった。にもかかわらず達成された。この集合的達成はある意味で、SECI モデルをなぞっている。ワールドカフェによって表出化されたアイデアは連結化され、明示的ではなかったという意味においては内面化されたが、実際のイベントプランが立ってみると、みごとな共同化を達成している。このイベント実施まで含めた「場 (Ba)」が創生されている。ワールドカフェは「言語化」によってその初動をなした。

創発論の初期の担い手である Polanyi (1966 高橋訳 2003) が「行動」に触れている点は注目に値する。

(創発の所産たる) 進化論的革新の過程は、その過程がいずれは到達することになる、より高次段階の安定した意味への、到達可能性によって触発される。そうしたより高次の潜在的可能性によって引き起こされる緊張が、偶然の作用で、(中略) 行動へと解き放たれる」(Polanyi, 1966, 高橋訳, 2003, p.147)

ワールドカフェは、成員相互に談話の体験を提供する行為の連鎖のきっかけをもたらす。〈他者の言葉〉の引用に、引用が重なり、異なる視点のつながりの多様性と密度が増して「たがいに豊穡化する」。そのそれぞれの「創造的理解」をもって、「集合的な発見」に至り、「他花受粉」が完結する。その発話においては引用の参照元が曖昧化する／を曖昧化させることで、「寛容 (さ)」が涵養され、「集団の知性」の一端として、「発想を固定化しない多様な価値観が併存する」状態となる。そこで起きる協調的な会話から、行動の優先順位を「暗黙のうちに」特定することができるようになる。優先順位を特定された「発見」は、その行動化が容易となる。

「田原温泉再生を考える会」のワールドカフェにおいて得られた「発想を固定化しない多様な価値観の併存」と「行動の優先順位の特定」はそのまま、「大朝地域活性化委員会」へともち込まれていた。すなわち、ワールドカフェからデイキャンプイベントの「アクティブな温泉」社会実験へと至る一連の動きは、「田原温泉再生を考える会」から大朝地域活性化委員会へと引き継がれ、Polanyi のいう「偶然の作用で」、行動へと解

き放たれ」たのだろう。

6.6 ワールドカフェ研究への示唆

思弁論や当為論がなければ、ワールドカフェはメソッドとしてこれほどには普及しなかったろう。この点で先行研究に深く敬意を表する。それでもなお本研究の意義は、比喩として語られてきた「他花受粉」を、席替えを媒介とする体験提供・引用の共起、前置表現の推移、宛名の共有参照化という観測指標で捉え直し、相互行為のメカニズムとして構造的に可視化したところにある。主催者の意図にかかわらず、参加者によって独特のプロセスが展開されるという現場のブラックボックスに対して、実証に耐える操作的定義と測定可能な記述枠を与え、設計・実装の指針へと接続した点を、ここに強調しておきたい。

Aldred (2011)はその主催者の恣意を「安易なエンパワーメント理念の押しつけ」と批判したが、途中の営みとしては、参加者の体験提供のようすも半開放引用の発話も、そう理念的ではなく、善意のみに縛られているものでもなかった。文脈の交差は「たいせつな質問」すら薄めて、俯瞰的な志向、高次化、寛容さへと向かっていた。場をリードする中心人物によるのではなく「曖昧な」中で1つの「全体観」へと収れんされていた。ミクロには終盤にあっても「主張」は多く、けっして「善意の対話」という思想が支配的なわけではなかった。序盤では明示的な主張、終盤では「報告」的な引用が、〈他者の言葉〉の形式を借りて主張する様相に変わったに過ぎない発話も多くみられた。それでも場は寛容さを獲得していった。これは、「参加者のポジティブさ」にのみ支えられている運営とはいいいがたい。ポジティブにあらうと意図したわけではなく、席替えすることによって、否定までして反論したい相手がもはや別のテーブルに移動し、逆に別の参加者たちが多様な意見を高い密度で受け入れている様相に囲まれてしまっているのである。むしろワールドカフェを批判するなら、ポジティブでありたいと願っている参加者もそうでない参加者も、緻密な議論の相手を短い時間で失い、すべての論点において総論的になっていく「深掘りする機会が失われていくこと」にあるべきかもしれない。そして、それはおそらくワールドカフェはその目的では用いるべきではないという制限として挙げられるべき、メソッドとしての特質なのだろう。

本研究の成果が示しているのは、ワールドカフェの営みが、知識の帰属性が曖昧化してコモン化していく過程、常識化していく過程である。これは、ワールドカフェの会話は浅く広くなるという特質として挙げられるのかもしれない。その意味では、Aldred

(2011)のワールドカフェ批判とは逆に、主催者の実行責任についても曖昧化してしまい、ゆえに「会話が楽しく」なることに関心が移行してしまうという可能性も示唆されよう。であるなら、この主催者の意図にかかわらず、参加者がどのようにふるまうのかの本研究は、また別の意味で、主催者の主催活動に寄与するだろう。この意味では、Aldred (2011)のワールドカフェ批判にあった「問題を矮小化してしまう」点は、本研究はこれを支持していることになる。ワールドカフェは深まらないところが逆に参加者の好むところとなり、軽い積み上げはくり返されるものの、根深いものについては捨象される、といえるからである。

であるにせよ、わずか1編かもしれないが、Ropes & Douven (2020)のいう「逸話的な報告が多いわりには実証研究が乏しい」というワールドカフェ研究の概況には本研究は、その知見をもって一石を投じることができたのではないだろうか。

6.7 ワールドカフェ実践への示唆

本研究によって参加者のふるまいが確認できたのなら、それはまた運営側や実践者にも返されなければならない。田坂 (2016)は、ワールドカフェが「プログラムがシンプルであるがゆえに、そこに安住してしまう危うさと、あいまいな状況に対して、成果もあいまいでよしとする「易きに流れる」危うさに抗うことの難しさ」を内包していると指摘している。多様な、あるいは対立構造にあった参加者を同じ集会に集わせ、交流を旨とすることで「あいまいな」状況に飲み込ませ、「易きに流れ」、問題を矮小化させてしまうといった危うさがそこにはあるという田坂 (2016) の論述はAldred (2011)の批判にもあい通づる。

ワールドカフェは、Bakhtin (1929, 桑野訳 1989) のいう「具体的な発話を通してのみ言語は交通と接触し、その生き生きとした力につらぬかれ、現実となる」ということを体現する場であるし、また、Wertsch (1991, 田島他訳 2004) のいう「他人の言葉を複数の声なんらかの形で互いに接触するアリーナ」であり、Kristeva のいう「さまざまな引用のモザイク」(桑野, 2020) を組織化する場であろう。ここには「易きに流れる」ことへの処方箋はないだろうか。「易きに流れる」ことなく、多様な、あるいは対立構造にあった参加者をして、分断とならず創造的理解の立ち上がりを触媒することを、いま一度ワールドカフェは模索できないものか。つまりは、分断への処方箋はないものだろうか。

分極化 (polarization)、分断 (divide) というタームを用いながら、寺田 (2019) は

シヴィリティ (civility) を論じている。シヴィリティは「会話やふるまいの『礼儀正しさ』を意味する概念」であり、「意見対立する人々の間であっても守られるべき規範」とであると定義したうえで、「この規範に反する行為が社会を分断する」と述べている(寺田, 2019)。田中・浜屋(2019)は、意見の収斂である分極化が度をを超えてしまうと二派間の相互理解や集合知の形成が難しくなり、萎縮効果ともあいまって分極化がさらに進行すると述べている。塩原(2017)は、「意見を持つこと」自体が「偏る」ことであり、そこに帰属などの存在拘束性がある以上、そもそも創造的な対話の場は困難さを内包しているとしている。

しかし寺田(2019)は、シヴィリティの論議においては、「ある理解では社会の分断を克服するとみなされる行為が、他の理解からは社会の分断を促進する行為だとみなされる」こともあるので、「対話の継続をシヴィリティと捉える見解は傷つきやすい人々に対し危害に耐えることを強いるという批判が存在する」ことを指摘している。そして、「意見対立による社会の分断は解消すべき問題であり、対話と相互尊重の回路を開くことを目指すべきである」と考える人々は、自らが依拠する規範理解を明確化する」ことが期待されると結句している(寺田, 2019)。

分断がエコーチェンバー、あるいはフィルターバブル的に、「言語の交通」なしに「その生き生きとした力」を活用できなくなっていく「現実」からの解離の過程であるとするなら、ワールドカフェにみられるような「相即的な引用によって協調を喚起する半開放の文脈再接続、再選択」が「その生き生きとした力」で「言語の交通」を再生するのではないだろうか。そして、ワールドカフェが曖昧化によってもたらす寛容さはシヴィリティに通ずるのではないか。他花受粉によって分断を解消する、という新たなアルゴリズムを獲得できるなら、「楽しいだけ」「議論が深まらない」「合意形成に至らない」といったワールドカフェ課題に新たな光を射し込ませることができるだろう。

6.8 課題と展望

課題は多く残っている。本研究によって、ワールドカフェのメカニズムを解明する実証的な分析研究に道を開くことができたと思ふので、さらにそれを進展させるために、いくつかの課題を設定しておきたい。

コーディングに関して、その目的から、発話がどんなに長くても1つの発話を1つのカテゴリに分類した。しかし少なからぬケースにおいて、1つの発話が複数の機能をもつことが考えられる。続く応答から参加者がみなしたと思われる機能との特定とはした

が、発話の1つを1つの機能のみをもつものというカテゴリ化は多少合理的なものとしてみる見方によりすぎているところがある。実際には文意が率直に伝わらないケースもあり、不整合ながら会話は続くこともあり、これを微細にみていくとき、談話の展開はどのような見えとなるのか。本研究におけるコーディングから粒度を下げてさらに細かく分析していく志向を以後の研究課題であるとしておく。これに関連しては、さらにはコーディングのカテゴリ立てにもある。【情報訴求】は隣接対の両方ともを含むものとした。質疑と応答は明確に分けたほうがよかったかもしれない。また、【その他】の発話は、それぞれの談話の場面でなんらかの機能を有している可能性がある。「ワールドカフェ分析に特化した発話のコーディング、カテゴリ化の検討には継続して取り組みたい。

コーディングに関しては、調査フィールド2との差異も微細に分析したい。調査フィールド2を用いての検証では、調査フィールド1で明らかになった傾向が再現されたことにより、得られた知見の妥当性が補強されたが、差異についてはおおまかにしか検討していない。発話カテゴリや応答パターン、体験提供の語用表現、およびそれに続く応答関係、コーディング体系を差異や同程を浮かびあがらせる分析装置としてさらに精緻化できないものかという志向である。

ワールドカフェ自体もコンテキストに埋め込まれている。もし、メカニズム研究の後継があるとしたら、組織開発、創造、学習、合意形成などといった目的の別、それぞれの開催に至る歴史性、参加者の性向、それらを個別具体的にみていく、各論としてのコーディング開発や分析手法の開発があってもいい。その意味では、まだ本研究は、ワールドカフェ・メカニズム研究の端緒についたばかりである。6.6節で述べたワールドカフェの文脈依存性についても、主催者のもつ文脈と参加者の文脈の連関から考察する研究も、主催者、参加者、双方にとって急務なのかもしれない。

半開放引用とひとくくりにしたが、実際にはそれぞれのケースでもたらず機能が異なっている。断片および判定例に挙げた「冬はどうするっていう感じだったけど」(1-4-4-009)、「そこで先ほどあったようなこのいろんなアクティビティを繋げていけたらいんじゃないのか」(1-6-3-006)、「いうふうな話がいろいろと、あったので確かにそれはその通りだなあと」(1-3-4-002)、「なるほどなあいうて、そこは気づかんだっただけ」(1-3-4-005)、これらはそれぞれ文脈の中での機能が異なる。どのような機能を有するタイプがあるのか、あるいはそれが続く応答によってどう規定されていくのか、半開放引用の内実を細かく分析する研究も志向したい。

体験提供が中盤以降増えていく事象は、席替え以外にも「たいせつな質問」が影響し

ているとも考えられる。ファシリテーターがガイドする「たいせつな質問」も場の文脈をなすものだからである。「たいせつな質問」が与える影響について分析することも検討したい。

また、応答がかみあわず協調連鎖とならなかったケースについてはまだ分析を行っていない。対話がモノログ化して、場が膠着するような場面への着目は、これから取り組みたい。

対話がマルチモーダルであるのなら、ノンバーバルなものを含んでの分析も行いたい。とくにテーブルクロスの落書きには、相互行為への重要な機能がありそうである。

あるいは、場への参加性という意味で「学習」の概念との連関を分析したい。ひいては、研究の成果をワールドカフェのプログラム開発へ還元し、新たな「引用志向」のガイドを行うバリエーションプログラムをまとめる作業に取り組みたい。いずれにせよ、ワールドカフェ、およびワールドカフェ研究、ひいては創造性研究や創発研究など認知科学やアコモデーション論など合意形成学のさらなる進展に寄与できたらと思うものである。

文 献

- Acar, S., Nakamura, J., & Fujita, K. (2024). Patterns of creative process: Attention-based, divergent, and convergent modes in collaborative ideation. *Creativity Research Journal*, 36(1), 22–39. <https://doi.org/10.1080/10400419.2023.2287654>
- Aldred, R. (2011). From community participation to organizational therapy? World Café and Appreciative Inquiry as research methods. *Community Development Journal*, 46(1), 57–71. <https://doi.org/10.1093/cdj/bsp039>
- Al Yakin, A., Wafi, A., & Harianti, V. (2021). Utilizing the World Café method to inboost students' motivation and learning outcomes. *Cape Comorin: An International Multidisciplinary Double-Blind Peer-Reviewed Research Journal*, 3(2).
- Bakhtin, M. M. (1929). *Марксизм и Философия языка* Ленинград. (バフチン, M. M. 桑野 隆訳 (1989). マルクス主義と言語哲学：言語学に終える社会学的方法の基本的問題 未来社)
- Bakhtin, M. M. (1984). *Problems of Dostoevsky's poetics* (C. Emerson, Ed. & Trans.). University of Minnesota Press. (Original work published 1929) (バフチン, M. M. 桑野隆訳 (1989) ドストエフスキーの詩学：記号論的研究 せりか書房)
- Bakhtin, M. M. (1986). *Speech genres and other late essays* (V. W. McGee, Trans.; C. Emerson & M. Holquist, Eds.). University of Texas Press.
- Bakhtin, M. M. (1981). *The dialogic imagination: Four essays* (M. Holquist & C. Emerson, Trans.; M. Holquist, Ed.). University of Texas Press. (バフチン, M. M. 望月哲男・鈴木淳一訳 (1990) 言語の想像力：小説と対話の理論 ちくま学芸文庫)
- Banfield, A. (1982). *Unspeakable Sentences: Narration and Representation in the Language of Fiction*. Boston, MA: Routledge & Kegan Paul.
- Bohm, D. (1996). *On dialogue* (L. Nichol, Ed.). London: Routledge. (ボーム, D. (2007). 金井真弓 (訳). ダイアログ：対立から共生へ，議論から対話へ 英治出版)
- 朴 東燮・茂呂 雄二 (2007). バフチンの対話性概念による社会心理研究の拡張 実験社会心理学研究, 46 (2), 146-161.
- Brown, G., & Yule, G. (1983). *Discourse analysis*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Brown, J., & Isaacs, D. (1997). Conversation as a core business process. *The Systems Thinker*, 7(10), 1–5.
- Brown, J., Isaacs, D. (2005). *The World café: Shaping Our Futures through Conversations that Matter* Berrett-Koehler Publishers, Inc. (ブラウン, J., アイザックス, D. 香取一昭・川口大輔(訳)(2007). ワールド・カフェ：カフェの会話が未来を創る ヒューマンバリュー)
- Brown, J. (2015, October 25). ワールド・カフェ ハンドブック ワールド・カフェ 20 周年記念日本イベント：ワールド・カフェが開く社会・組織・コミュニティの未来 国際ファシリテーターズ協会日本支部
- Bulsara, C., McKenzie, A., & Haines, T. (2016). Using the World Café to engage older adults in falls prevention: A participatory approach to intervention design. *Health Promotion Journal of Australia*, 27(2), 124–130. <https://doi.org/10.1071/HE15078>
- Bumble, J., & Carter, E. W. (2020). Application of the World Café to disability issues: A systematic review. *Journal of Disability Policy Studies*, 32(3), 131–139. <https://doi.org/10.1177/1044207320902296>
- Bunker, B. B., & Alban, B. T. (1997). *Large group interventions: Engaging the whole system for rapid change*. San Francisco, CA: Jossey-Bass.
- Bushe, G. R., & Marshak, R. J. (2014). *Dialogic organization development: The theory and practice of transformational change*. Berrett-Koehler Publishers.
- Camacho, H. N., Rybels, S., Coppens, T., & Valderrama Pineda, A. (2020). World Café as a Participatory Approach to Facilitate the Implementation Process of Problem-Based Learning. *Journal of Problem Based Learning in Higher Education*, 8(1), 19–40. <https://doi.org/10.5278/ojs.jpblhe.v8i1.2660>
- Chang, W.-L., & Chen, S.-T. (2015). The impact of World Café on entrepreneurial strategic planning capability. *Journal of Business Research*, 68(6), 1283–1290. <https://doi.org/10.1016/j.jbusres.2014.11.020>
- Checkland, P. (1999). *Systems Thinking, Systems Practice: Includes a 30-year retrospective*. John Wiley and Sons.

- Clark, H. H., & Gerrig, R. J. (1990). Quotations as Demonstrations. *Language*, 66(4), 764-805.
<https://doi.org/10.2307/414729>
- 中央教育審議会 (2012). 新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて：生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ（答申）．文部科学省.
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm
- Emlet, C. A., & Moceri, J. T. (2012). The importance of social connectedness in building age-friendly communities. *Journal of Aging Research*, 2012, Article ID 173247, 1–9. <https://doi.org/10.1155/2012/173247>
- Estacio, E. V., & Karic, T. (2016). The World Café: An innovative method to facilitate reflections on internationalisation in higher education. *Journal of Further and Higher Education*, 40(6), 731–745.
<https://doi.org/10.1080/0309877X.2015.1014315>
- Fairclough, N. (1995). *Critical discourse analysis: The critical study of language*. London: Longman.
- Fallon, H., & Connaughton, L. (2016). Using a World Café to explore new spaces and new models for front line services: A case study from the Irish university library sector. *New Review of Academic Librarianship*, 22(1), 43–59. <https://doi.org/10.1080/13614533.2015.1126291>
- Fischer, G. (2000). Symmetry of ignorance, social creativity, and meta-design. *Knowledge-Based Systems*, 13(7–8), 527–537. [https://doi.org/10.1016/S0950-7051\(00\)00064-4](https://doi.org/10.1016/S0950-7051(00)00064-4)
- Fouché, C., & Light, G. (2011). An invitation to dialogue: Using the World Café in social work research. *Qualitative Social Work*, 10(1), 28–48. <https://doi.org/10.1177/1473325010376016>
- 藤本 学・大坊 郁夫 (2007a). 小集団コミュニケーションにおける話者の叙述パターン 社会心理学研究, 23(1), 23-32. <https://doi.org/10.14966/jssp.KJ00004663337>
- 藤本 学・大坊 郁夫 (2007b). 小集団による会話の展開に及ぼす会話者の発話行動傾向の影響 実験社会心理学研究, 47(1), 51-60. <https://doi.org/10.2130/jjesp.47.51>
- Gazzaniga, M. S. (2018). *The Consciousness Instinct: Unraveling the Mystery of How the Brain Makes the Mind*. Farrar, Straus and Giroux.
- Gee, J. P. (1999). *An introduction to discourse analysis: Theory and method*. London: Routledge.
- Goffman, E. (1967). *Interaction ritual: Essays on face-to-face behavior*. Garden City, NY: Doubleday.
- Hargadon, A. B., & Bechky, B. A. (2006). When collections of creatives become creative collectives: A field study of problem solving at work. *Organization Science*, 17(4), 484–500. <https://doi.org/10.1287/orsc.1060.0200>
- 畑中 謙吾・森田 康夫 (2015). PIにおける「ワールド・カフェ」方式の適用可能性に関する考察. 土木技術資料, 57(11), 26–30. <https://www.nilim.go.jp/lab/peg/img/file1520.pdf>
- 畑中 美穂 & 森田 直子 (2015). ワールド・カフェの実践から検討する質問によるマネジメント. 経営情報学会 全国研究発表大会要旨集, 2015s, 25–25. <https://cir.nii.ac.jp/crid/1390001205710517632>
- Hegselmann, R., & Krause, U. (2002). Opinion dynamics and bounded confidence: Models, analysis and simulation. *Journal of Artificial Societies and Social Simulation*, 5(3). <https://www.jasss.org/5/3/2.html>
- Holman, P., Devane, T., & Cady, S. (Eds.). (2007). *The Change Handbook: Group Methods for Shaping the Future* (2nd ed.). Berrett-Koehler Publishers.
- Hopper, P. J. (1987). *Emergent grammar*. *Berkeley Linguistics Society*, 13, 139–157.
- 洞口 治夫 (2009). 集合知の経営—日本企業の知識管理戦略. 文眞堂.
- Hutchins, E. (1995). *Cognition in the wild*. MIT Press.
- 今田 高俊 (2011). 社会理論における合意形成の位置づけ—社会統合から社会編集へ. 猪原健弘 (編著), 合意形成学 (pp. 17–36). 勁草書房
- 猪原 健弘 (2011). 社会選択論からのアプローチ. 猪原健弘 (編著), 合意形成学 (pp.17–36). 勁草書房.
- 石井 成郎・三輪 和久 (2001). 創造的問題解決における協調認知プロセス 認知科学, 8(2), 151-168.
<https://doi.org/10.11225/jcss.8.151>
- 片桐 恭弘・石崎 雅人・伝 康晴・高梨 克也・榎本 美香・岡田 将吾(2015). 会話コミュニケーションによる相互信頼感形成の共関心モデル 認知科学, 22(1), 97-109. <https://doi.org/10.11225/jcss.22.9>
- 香取一昭 (2015, October 25). ワールド・カフェが開く社会・組織・コミュニティの未来[Conference presentation]. ワールド・カフェ 20 周年記念日本イベント（主催：国際ファシリテーターズ協会日本支部）, 東京.
- 香取 一昭・大川 恒 (2011). ホールシステム・アプローチ：1000 人以上でもとことん話し合える方法 日本経済新聞出版
- 香取 一昭・大川 恒 (2017). ワールド・カフェをやろう 新版 日本経済新聞出版

- Kinney, D., & Kinney, W. (2024). Adapting the World Café method to an online format: Insights from novice qualitative researchers. *Journal of Participatory Research Methods*, 5(3), e122576.
- Kristeva, J. (1969) . Σημειωτική—Recherches pour une sémanalyse . Édition du Seuil (クリステヴァ, J. 原田 邦夫 (訳) (1983) . 記号の解体学—セメイオチケ 1 せりか書房)
- 桑野 隆 (2020). 増補バフチン：カーニヴァル・対話・笑い 平凡社
- Lenzo, A. (2015). The World Café Seven Design Principles. ワールド・カフェ 20 周年記念日本イベント：ワールド・カフェが開く社会・組織・コミュニティの未来 ワールド・カフェ マスタークラス クオリア
- Löhr, K., Weinhardt, M., & Sieber, S. (2020). The “World Café” as a participatory method for collecting qualitative data. *International Journal of Qualitative Methods*, 19, 1–13. <https://doi.org/10.1177/1609406920916976>
- Long, J. C., Cunningham, F. C., & Braithwaite, J. (2013). Bridges, brokers and boundary spanners in collaborative networks: A systematic review. *BMC Health Services Research*, 13, Article 158. <https://doi.org/10.1186/1472-6963-13-158>
- Lorenzetti, L., Vetter, S., & Kirwin, J. (2016). Using the World Café to enhance student learning in social work education. *Social Work Education*, 35(5), 529–540. <https://doi.org/10.1080/02615479.2016.1184666>
- Lorenzetti, L., Bélanger, C., & Pitre, N. (2016). World Café: A participatory method to foster transformative learning in social work education. *Social Work Education*, 35(4), 414–428.
- Lopalco, P. L., Gabellone, V., Nuccetelli, F., Gabrielli, E., & Ascagnino, L. (2025). The World Café as a tool for evaluating the level of acceptance of SARS-CoV-2 screening in school settings, Puglia Region, Italy, 2023. *Health Expectations*, 28(2), e1–e11. <https://doi.org/10.1111/hex.70137>
- MacFarlane, A., Galvin, R., O’Sullivan, M., McInerney, C., & Burke, D. (2017). Participatory methods for research prioritization in primary care: An analysis of the World Café approach in Ireland and the USA. *Family Practice*, 34(3), 278–284. <https://doi.org/10.1093/fampra/cmw104>
- McAndrew, S., Warne, T., Fallon, D., & Moran, P. (2012). Young, gifted, and caring: A project narrative of young carers, their mental health, and getting them involved in education, research and practice. *International Journal of Mental Health Nursing*, 21(1), 12–19. <https://doi.org/10.1111/j.1447-0349.2011.00762.x>
- McGrath, C., Kennedy, C., King, A., & O’Donnell, C. A. (2023). World Cafés as a participatory approach to understanding research agendas in primary care with underserved communities: Reflections, challenges and lessons learned. *Research Involvement and Engagement*, 9(1), 68.
- Miles, M. B., & Huberman, A. M. (1994). *Qualitative data analysis: An expanded sourcebook* (2nd ed.). Sage Publications.
- 水上悦雄・森本郁代・鈴木佳奈・大塚裕子・竹内和広・東新順一・奥村学 (2008). 話し合いにおけるコミュニケーションプロセスの評価法について. 言語処理学会第 14 回年次大会発表論文集, PA1-9, 181–184.
- 三宅 美博 (1994). 創発と知の構造. *人工知能*, 9(1), 6–13.
- 溝上 瑛梨 (2016). 自由間接話法と語りのフレーム. *言語科学論集*, 22, 107–127. [京都大学リポジトリ](https://doi.org/10.1111/j.1447-0349.2011.00762.x)
- Malone, T. W., Laubacher, R., & Dellarocas, C. (2009). The collective intelligence genome. *MIT Sloan Management Review*, 51(3), 21–31
- Mezirow, J. (1997). Transformative Learning: Theory to Practice. *New Directions for Adult and Continuing Education*, 74, 5–12.
- Moen, T. (2006). *Reflections on the narrative research approach*. *International Journal of Qualitative Methods*, 5(4), 56–69. <https://doi.org/10.1177/160940690600500405>
- 森 伸吉 (2015). 今日の課題を含む授業における授業形態による効果の違いと意識変容についての考察 — ワールドカフェ方式を中心に据えた授業の効果測定 —. *東京学芸大学附属学校研究紀要*, 46, 24–29. https://u-gakugei.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=36111&item_no=1&attribute_id=21&file_no=1
- 内閣府. (2012). 男女共同参画推進のためのワールド・カフェ実践手引書 (改訂版). 文部科学省. https://www.mext.go.jp/a_menu/ikusei/kyoudou/detail/1367502.htm
- 中西 昭人・高階 利徳 (2017). ワールド・カフェによる症例検討の有用性とその評価. *医療薬学*, 43(2), 111–119. <https://doi.org/10.5649/jjphcs.43.111>
- 根本 啓一・高橋 正道・林 直樹・堀田 竜士 (2012). ワールドカフェ型のダイアログにおけるターンテイキング構造と参加者の理解度の関係性の分析. *電子情報通信学会技術研究報告*, 112(35), 113–120.

- Nonaka, I., Byosiore, P., Borucki, C. C., & Konno, N. (1994). Organizational knowledge creation theory: A first comprehensive test. *International Business Review*, 3(4), 337–351. [https://doi.org/10.1016/0969-5931\(94\)90027-2](https://doi.org/10.1016/0969-5931(94)90027-2)
- Nonaka, I., & Takeuchi, H. (1994). *A dynamic theory of organizational knowledge creation*. *Organization Science*, 5(1), 14–37. <https://doi.org/10.1287/orsc.5.1.14>
- Nonaka, I., & Takeuchi, H. (1996). *The knowledge-creating company: How Japanese companies create the dynamics of innovation*. Oxford University Press.
- 野中郁次郎・今野浩一郎 (1998). *知識創造の経営：ナレッジ・マネジメントの理論と実践*. 日本経済新聞社.
- O'Connor, M., & Cotel-Gibbons, L. (2017). World Café: A proactive approach to working with mentors. *Nursing Management*, 24(2), 26-29. <https://doi.org/10.7748/nm.2017.e1553>
- 尾之上 高哉・石橋 由紀子・岡村 章司・小林 祐子・宇野 宏幸 (2014). 教員研修へのワールドカフェ導入の効果の検討 日本教育工学会論文誌, 38(Suppl.), 141-144. <https://doi.org/10.15077/jjet.KJ00009846877>
- O'Toole, J., Ciuchta, M. P., Neville, F., & Lahiri, A. (2023). Transactive memory systems, temporary teams, and conflict: Innovativeness during a hackathon. *Journal of Management*, 49(5), 1633–1661. <https://doi.org/10.1177/01492063221102397>
- Owen, H. (1997). *Open space technology: A user's guide*. San Francisco, CA: Berrett-Koehler Publishers.
- Paulus, P. B., & Nijstad, B. A. (Eds.). (2003). *Group creativity: Innovation through collaboration*. Oxford University Press. <https://doi.org/10.1093/acprof:oso/9780195147308.001.0001>
- Pađen, L., Pajnič, M., Vettorazzi, R., Pérez-Perdomo, A., Stefaniak, M., Claes, N., Franco, H., Vandervoort, A., & Ravljen, M. (2023). “Learning a way of thinking”: World Café on clinical reasoning in nursing and midwifery education and practice across five European Union countries. *Healthcare*, 11(22), 2969. <https://doi.org/10.3390/healthcare11222969>
- Pinto-Pinho, T., et al. (2023). The World Café method and spaces dedicated to active teaching and learning: A dynamic combo that motivates students for biosciences learning. [Conference paper / institutional report, University of Aveiro].
- Pignataro, G., et al. (2025). The World Café as a Tool for Evaluating the Level of Acceptance of SARS-CoV-2 Screening in School Settings, *Puglia Region*, Italy, 2023. *Health Expectations*. <https://pubmed.ncbi.nlm.nih.gov/39905740/>
- Polanyi, M. (1966). *The Tacit Dimension* (ポランニー, M. 高橋勇夫 (訳) (2003). 暗黙知の次元 筑摩書房)
- Polanyi M. (2007). *The Tacit Dimension* (ポランニー, M. 慶伊 富長 (訳) (2007). 創造的想像力 増補版 ハーベスト社)
- Prewitt, V. (2011). Working in the café: Lessons in group dialogue. *The Learning Organization*, 18(3), 189–202. <https://doi.org/10.1108/09696471111123252>
- Rapley, T. J. (2017). *Doing conversation, discourse and document analysis* (2nd ed.). SAGE Publications.
- Recchia, V., Dodaro, A., De Marco, E., & Zizza, A. (2022). A critical look to community wisdom: Applying the World Café method to health promotion and prevention. *International Journal of Health Planning and Management*, 37(Suppl S1), 220–242.
- Restall, G., Ripat, J., & Stern, M. (2016). A collaborative approach to identifying priorities for HIV rehabilitation: Engaging stakeholders through the World Café method. *AIDS Care*, 28(6), 726–730. <https://doi.org/10.1080/09540121.2015.1114985>
- Ropes, D., & Douven, W. (2020). The World Café: Anecdotal enthusiasm versus empirical evidence. *Journal of Organizational Learning and Development*, 8(1), 15–29.
- Ropes, D., & Douven, W. (2020). The World Café method: A review of its use and effectiveness in organizational learning. *Journal of Organizational Learning and Development*, 6(1), 23–39.
- Sacks, H., Schegloff, E. A., & Jefferson, G. (1974). A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, 50(4), 696–735. <https://doi.org/10.2307/412243> (サックス, H.・シェグロフ, E. A.・ジェファソン, G. 西阪仰 (訳) サフト, S. (翻訳協力) (2010). 会話分析基本論集：順番交替と修復の組織 世界思想社)
- Sams, M. R. (2007). *Quoting practices in everyday conversation: A pragmatic and sociolinguistic perspective*. *Journal of Pragmatics*, 39(6), 1019–1040. <https://doi.org/10.1016/j.pragma.2006.10.005>
- Sawyer, R. K. (2003). *Group creativity: Music, theater, collaboration*. Lawrence Erlbaum Associates.

- Sawyer, R. K. (2007). *Group genius: The creative power of collaboration*. Basic Books.
- Sawyer, R. K., & DeZutter, S. (2009). Distributed creativity: How collective creations emerge from collaboration. *Psychology of Aesthetics, Creativity, and the Arts*, 3(2), 81–92. <https://doi.org/10.1037/a0013282>
- Sawyer, R. K., & DeZutter, S. (2009). Distributed creativity: How collective creations emerge from collaboration. *The Journal of Aesthetic Education*, 43(3), 42–63. <https://doi.org/10.1353/jae.0.0040>
- Schegloff, E. A., & Sacks, H. (1973). Opening up closings. *Semiotica*, 8(4), 289–327. <https://doi.org/10.1515/semi.1973.8.4.289>
- Schmid, W. (2024). Ambiguity in free indirect discourse: Attribution, voice, and interpretive challenges. *Narrative Theory and Literary Analysis*, 29(1), 17–34.
- Senge, P. M. (1990). *The fifth discipline: The art and practice of the learning organization*. New York, NY: Doubleday/Currency.
- 塩原 良和 (2017). 分断と対話の社会学：グローバル社会を生きるための想像力. 慶應義塾大学出版会.
- Silva, S., & Guenther, E. (2018). Setting the research agenda for measuring sustainability performance: Systematic application of the world café method. *Sustainability Accounting, Management and Policy Journal*, 9 (4) , 455–469. <https://doi.org/10.1108/SAMPJ-06-2017-0060>
- Smith, L. B., & Thelen, E. (2003). Development as a dynamic system. *Trends in Cognitive Sciences*, 7(8), 343–348. [https://doi.org/10.1016/S1364-6613\(03\)00156-6](https://doi.org/10.1016/S1364-6613(03)00156-6)
- 孫 大輔・菊地 真実・中山 和弘 (2015). カフェ型ヘルスコミュニケーション「みんくるカフェ」における医療系専門職と市民・患者の学び 日本ヘルスコミュニケーション学会雑誌, 5(1), 37–45.
- Stacey, R. D. (2001). *Complex responsive processes in organizations: Learning and knowledge creation*. London: Routledge.
- Susskind, L.E. (1999). *The Consensus Building Handbook: A Comprehensive Guide to Reaching Agreement*. Jossey-Bass.
- 鈴木宏昭 (2003). 認知の創発的性質：生成性，冗長性，局所相互作用，開放性 人工知能学会誌, 18(3), 376–384.
- 鈴木 宏昭 (2023). 私たちはどう学んでいるのか 創発からみる認知の変化 筑摩書房
- Swales, J. M. (1990). *Genre Analysis: English in Academic and Research Settings*. Cambridge University Press.
- 武居 寛史 (2017). エージェント・ベース・モデルによる討議と合意形成に関する分析. 年報政治学, 68(2), 318–335. https://www.jstage.jst.go.jp/article/nenpouseijigaku/68/2/68_2_318/pdf/-char/ja
- 田中 辰雄・浜屋 敏. (2019). ネットは社会を分断しない. 角川新書.
- Tannen, D. (2007). *Talking voices: Repetition, dialogue, and imagery in conversational discourse* (2nd ed.). Cambridge University Press. (Original work published 1989)
- 田坂 逸朗 (2016). ワールドカフェのハーベストに関する研究 広島修大論集, 57(1), 73-95.
- 田坂 逸朗 (2019). 創造的合意形成のファシリテーション—エリアマネジメントの現場から— 日本地域政策研究, 22, 84-85
- 田坂 逸朗 (2020). ワールドカフェの“席替え”が対話過程に与える影響に関する研究 青山学院大学大学院社会情報学研究科修士論文(未公開)
- 田坂 逸朗 (2022). ワールドカフェの対話過程における“席替え”の影響に関する研究 日本認知科学会第39 回大会発表論文集, 74–79.
- 田坂 逸朗 (2023). Bakhtin の対話理論における引用概念の実証的研究への援用 青山社会情報研究, 15, 21-35.
- 田坂 逸朗 (2025). ワールドカフェにおける“席替え”を介した対話過程の変容 認知科学, 32(2), 212-230.
- 立川 和美 (2014). 文章と談話における引用表現—随筆と雑談・相談を例として. 流通経済大学論集, 49(1), 31–47
- 寺田 晋 (2019). シヴィリティと社会の分断. 現代社会学研究, 32, 21–31. <https://doi.org/10.7129/hokkaidoshakai.32.21>
- Thelen, E., & Smith, L. B. (1994). *A dynamic systems approach to the development of cognition and action*. MIT Press.
- The World Café Community Foundation (2025). The World Café. <https://theworldcafe.com/> (2025 年 5 月 1 日

閲覧)

- Todorov, T. (1981). *MIKHAIL BAKHTINE LE PRINCIPE DIALOGIQUE*. Édition du Seuil (トドロフ, T. 大谷尚文 (訳) (2001). ミハイル・バフチン 対話の原理 法政大学出版局)
- 富田 英司・丸野 俊一 (2005). 曖昧な構造の協同問題解決における思考進展過程の探索的研究 認知科学, 12(2), 89-105. <https://doi.org/10.11225/jcss.12.89>
- 遠山 紗矢香・白水 始 (2018). 協調的問題解決能力をいかに評価するか：協調問題解決過程の対話データを用いた横断分析 認知科学, 24(4), 494-517. <https://doi.org/10.11225/jcss.24.494>
- 植田 一博・丹羽 清 (1996). 研究・開発現場における協調活動の分析－「三人寄れば文殊の知恵」は本当か？ 認知科学, 3(4), 103-118. https://doi.org/10.11225/jcss.3.4_102
- van Dijk, T. A. (2019). *Discourse and context: A sociocognitive approach*. Cambridge University Press.
- Wertsch, J. V. (1985). *Culture, communication, and cognition: Vygotskian perspectives*. Cambridge University Press.
- Wertsch, J. V. (1985). *Vygotsky and the social formation of mind*. Harvard University Press.
- Wertsch, J. V. (1991). *Voices of the mind: A sociocultural approach to mediated action*. Harvard University Press. (ワーチ, J. 田島信元・佐藤公治・茂呂雄二・上村佳世子(訳). (2004). 心の声 福村出版)
- Wertsch, J. V. (1998). *Mind as action*. Oxford University Press. (ワーチ, J. V. 佐藤公治・田島信元・黒須俊夫・石橋由美・上村佳世子(訳). (2002). 行為としての心 北大路書房)
- Woodman, R. W., Sawyer, J. E., & Griffin, R. W. (1993). Toward a theory of organizational creativity. *Academy of Management Review*, 18(2), 293-321. <https://doi.org/10.5465/amr.1993.3997517>
- Yankeelov, P. A., Faul, A. C., D'Ambrosio, J. G., Gordon, B. A., & McGeeney, T. J. (2019). World Cafés Create Healthier Communities for Rural, Older Adults Living With Diabetes. *Health Promotion Practice*, 20(2), 223-230. <https://doi.org/10.1177/1524839918760558>
- やまだようこ (2008). 多声テキスト間の生成的対話とネットワークモデル 「対話的モデル生成法」の理論的基礎 質的心理学研究, 7(1), 21-42.
- 吉田 章宏・服部 環 (2002). 創造的な学びを支える外的手がかりの活用に関する研究. *教育心理学研究*, 50(3), 285-294. https://doi.org/10.5926/jjep1953.50.3_285
- ザトラウスキー, P. (1993). 日本語の談話の構造分析：勧誘のストラテジーの考察 仁田 義雄・田窪 行則・野田 尚史・益岡 隆志・森山 卓郎(編) 日本語研究叢書 5 くろしお出版

